松山市文化財調査報告書26

桑原地区の遺跡

樽味立添・樽味高木・樽味四反地
桑原西稲葉1・2次・桑原田中
経石山古墳・枝松3次

――本文編――

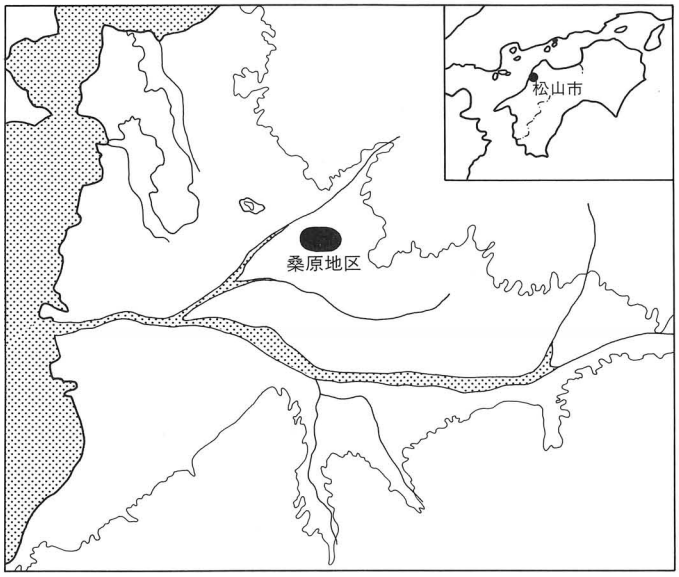
1992
㈶松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書26

桑原地区の遺跡

樽味立添・樽味高木・樽味四反地
桑原西稲葉1・2次・桑原田中
経石山古墳・枝松3次

――本文編――



1992

(財)松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

樽味立添遺跡出土の『貨泉』

序

平成３年10月１日財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、埋蔵文化財発掘調査の迅速化と円滑化を図るため発足しました。

この報告書は、その財団法人となって第一弾となるものです。

ここ桑原地区の遺跡は、松山平野東部にあり、西流する石手川左岸の沖積扇状台地上に位置し、近年実施された発掘調査結果によると、縄文時代から奈良時代、さらには中世にまたがる幾つもの関連遺構のあることが確認されています。

今回報告する遺跡のなかで特筆すべきものとして、古墳期前期の一括遺物資料が得られた樽味高木遺跡、前方後円墳として知られる経石山古墳周溝を検出し墳墓の規模に新事実を記すことのできた同古墳１次調査、中四国初となる「貨泉」を出土した樽味立添遺跡等、古代桑原地区の様子を彷彿させる遺構・遺物が数多く発見され貴重な成果を得ることができました。

このように内容の充実した報告書を刊行できますのも、事業者及び地権関係者の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力のたまものであります。また、調査指導をいただいた愛媛大学下條信行教授の外、ご協力いただきました関係各位の皆様に対し厚くお礼申し上げる次第です。本報告書が広く文化財の保護、学術研究、さらには教育文化の向上の一助になれば幸甚です。

平成４年３月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 田 中 誠 一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが昭和63年～平成２年に樽味２丁目58番地、樽味４丁目204番地１・２、桑原１丁目981番地１・２、982番地１・２、桑原２丁目971番地２、桑原６丁目499番地１、桑原４丁目10番地１、枝松３丁目310番地1で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構・遺物の実測・製図は、調査担当者の責任のもと、水口あをいを中心に愛媛大学の学生他の援助を受けた。

3．遺構は呼称を略号で記述する場合がある。竪穴式住居址：ＳＢ、溝：ＳＤ、土壙：SK、自然流路：ＳＲ、柵列：ＳＡ、柱穴：ＳＰ、掘立柱建物：掘立、性格不明：ＳＸである。

4．遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

5．本書に使用した方位はすべて磁北である。

6．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

7．本書の執筆は、松村淳（第８章）、田城武志・高尾和長・真木潔（第７章）、田城武志・大森一成（第９章）、山之内志郎（第２章）、梅木謙一・宮内慎一（第１，３，４，５，６，10，12章）が分担し行った。浄書は、高橋恒が行った。

8．写真図版では、遺構写真の作成、遺物写真の撮影・作成を調査担当者の指示のもと大西朋子が行った。

9．自然科学的分析は、早田　勉氏（古環境研究所）の協力と寄稿をまた、考察として重松佳久氏（松山市教育委員会文化教育課）から寄稿を頂いた。記して感謝申し上げます。

10．編集は、調査担当者が協議の上、梅木謙一が行った。校正においては、田城武志・宮内慎一・水口あをいの協力を得た。

本 文 目 次

第１章　はじめに……(田城武志・梅木謙一)…… 1

1　調査に至る経過　2　組織

第２章　立地と環境 ……(山之内志郎)…… 4

1　地理的環境　2　歴史的環境

第３章　樽味立添遺跡の調査……(梅木謙一・宮内慎一)…… 15

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第４章　樽味高木遺跡の調査……(梅木謙一・宮内慎一)…… 79

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第５章　樽味四反地遺跡の調査 ……(梅木謙一・山之内志郎)‥ 105

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第６章　桑原西稲葉遺跡(１次)の調査……(梅木謙一・宮内慎一)… 121

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第７章　桑原西稲葉遺跡(２次)の調査……(田城武志・高尾和長)… 135

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第８章　桑原田中遺跡の調査……(松村　淳)…… 153

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第９章　経石山古墳の調査 ……(田城武志・大森一成)… 211

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第10章　枝松遺跡(３次)の調査 ……(宮内慎一)…… 227

1　調査の経過　2　層位　3　調査の概要　4　小結

第11章　松山市桑原地区におけるテフラ分析調査…(早田　勉)…… 236

第12章　石手水系に於ける旧石器文化……(重松佳久)…… 239

第13章　桑原地区の調査成果と課題 ……(梅木謙一)…… 243

挿図目次

第１図　松山周辺の地形分類（縮尺１／50000）…… 5
第２図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺１／50000）…… 7
第３図　桑原地区の遺跡分布図（縮尺１／15000）…… 9
樽味立添遺跡
第４図　調査区位置図（縮尺１／2500）……18
第５図　基本層位図（縮尺１／20）……19
第６図　調査地区割図（縮尺１／400）……20
第７図　遺構配置図（縮尺１／100）……21
第８図　ＳＢ13測量図（縮尺１／60）……23
第９図　ＳＢ13出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）……24
第10図　ＳＢ13出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）……25
第11図　ＳＢ４測量図（縮尺１／60）……27
第12図　ＳＢ４出土遺物実測図（縮尺１／４）
第13図　ＳＢ１測量図（縮尺１／60）……28
第14図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺１／３）……29
第15図　ＳＢ３測量図（縮尺１／60）……30
第16図　ＳＢ３出土遺物実測図（縮尺１／４）
第17図　ＳＢ７・12測量図（縮尺１／60）……31
第18図　ＳＢ７出土遺物実測図（縮尺１／４）……32
第19図　ＳＢ６測量図（縮尺１／60）……34
第20図　ＳＢ６出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）……35
第21図　ＳＢ６出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）……36
第22図　ＳＢ８測量図（縮尺１／60）……37
第23図　ＳＢ９測量図（縮尺１／60）……38
第24図　ＳＢ９出土遺物実測図（縮尺１／４）……39
第25図　ＳＢ５測量図（縮尺１／60）……40
第26図　ＳＢ５出土遺物実測図（縮尺１／４）……41
第27図　ＳＢ10出土遺物実測図（縮尺１／４）……42
第28図　ＳＢ11測量図（縮尺１／60）……43
第29図　ＳＢ11出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）……44
第30図　ＳＢ11出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）……45

第31図　ＳＢ２測量図（縮尺１／60）……46
第32図　掘立１～４測量図（縮尺１／80）……47
第33図　掘立５～８測量図（縮尺１／80）……48
第34図　掘立９・10測量図（縮尺１／80）……49
第35図　掘立11～14測量図（縮尺１／80）……50
第36図　掘立15～17測量図（縮尺１／80）……51
第37図　掘立18測量図（縮尺１／80）……52
第38図　ＳＫ出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……53
第39図　ＳＫ出土遺物実測図(2)（縮尺１／４）……54
第40図　ＳＸ２出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……55
第41図　ＳＸ２出土遺物実測図(2)（縮尺１／４）……56
第42図　ＳＸ３・４出土遺物実測図（縮尺１／４）……57
第43図　貨泉実測図（縮尺１／１）
第44図　包含層出土遺物実測図(1)（縮尺１／４，１／２）……58
第45図　包含層出土遺物実測図(2)（縮尺１／４）……59

樽味高木遺跡

第46図　遺構配置図（縮尺１/100）……83
第47図　調査区位置図（縮尺１／1000）……85
第48図　基本層位図（縮尺１／20）
第49図　ＳＢ６測量図（縮尺１／60）……86
第50図　ＳＢ６出土遺物実測図（縮尺１／４）……87
第51図　ＳＢ５測量図（縮尺１／60）……88
第52図　ＳＢ５出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……89
第53図　ＳＢ５出土遺物実測図(2)（縮尺１／４）……90
第54図　ＳＢ５埋土・ＳＫ５上面出土遺物実測図（縮尺１／４）……91
第55図　ＳＫ５測量図（縮尺１／60）……93
第56図　ＳＫ５出土遺物実測図（縮尺１／４）……94
第57図　ＳＫ５埋土・ＳＫ５関連出土遺物実測図（縮尺１／４）……95
第58図　ＳＫ７出土遺物実測図（縮尺１／４）……96

樽味四反地遺跡

第59図　西壁土層図（縮尺１／40）……109
第60図　遺構配置図（縮尺１／400）……111
第61図　ＳＤ１測量図・ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺１／40，１／３）……112
第62図　ＳＤ３測量図・ＳＤ３出土遺物実測図（縮尺１／40，１／３）……113

第63図　旧河川・包含層出土遺物実測図（縮尺１／３，１／４）……114
第64図　第Ⅲ層・落ち込み出土遺物実測図（縮尺２／３）……115
第65図　第Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺２／３）……116
桑原西稲葉遺跡１次調査
第66図　調査地位置図（縮尺１／2000）……123
第67図　基本層位図（縮尺１／20）……124
第68図　遺構配置図（縮尺１／300）……125
第69図　掘立柱建物測量図（縮尺１／80）……127
第70図　出土遺物実測図 (1)（縮尺１／４）……129
第71図　出土遺物実測図 (2)（縮尺１／４）……130
桑原西稲葉遺跡２次調査
第72図　調査地位置図（縮尺１／2500）……138
第73図　調査地測量図（縮尺１／2000）……139
第74図　基本層位図（縮尺１／20）……140
第75図　調査地区割図（縮尺１／200）……141
第76図　遺構配置図（縮尺１／200）……142
第77図　ＳＫ１測量図（縮尺１／40）……143
第78図　ＳＫ１遺物出土測量図（縮尺１／20）……144
第79図　ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺１／４）……145
第80図　出土遺物実測図（縮尺１／４）……147
第81図　１・２次調査地形測量図（縮尺１／600）……148
桑原田中遺跡
第82図　桑原田中遺跡周辺の主要遺跡分布図（縮尺１／5000）……158
第83図　調査地区割図（縮尺１／200）……159
第84図　南壁(Ｗ－Ｅ)層位図（縮尺１／80）……161
第85図　西壁(Ｎ－Ｓ)層位図（縮尺１／80）
第86図　Ｄ列(Ｎ－Ｓ)層位図（縮尺１／80）……163
第87図　Ｅ列(Ｎ－Ｓ)層位図（縮尺１／80）
第88図　遺構配置図（縮尺１／150）……167
第89図　土壙配置図（縮尺１／200）……168
第90図　溝状遺構配置図（縮尺１／150）……169
第91図　掘立柱建物配置図（縮尺１／75）……170
第92図　ＳＫ１測量図（縮尺１／20）……171
第93図　ＳＫ１遺物出土測量図（縮尺１／20）……172

第94図　ＳＫ２測量図（縮尺１／30）……173
第95図　ＳＫ３測量図（縮尺１／30）……174
第96図　ＳＤ１～４測量図（縮尺１／100）……175
第97図　ＳＤ７～９測量図（縮尺１／100）……176
第98図　ＳＤ５・６・柱穴群測量図（縮尺１／100）……177
第99図　ＳＢ１測量図（縮尺１／100）……179
第100図　ＳＢ２測量図（縮尺１／100）
第101図　ＳＫ１出土遺物実測図 (1)　（縮尺１／４）……181
第102図　ＳＫ１出土遺物実測図 (2)　（縮尺１／４）……182
第103図　ＳＫ１出土遺物実測図 (3)　（縮尺１／４）……183
第104図　ＳＫ１出土遺物実測図 (4)　（縮尺１／４）……184
第105図　ＳＫ１出土遺物実測図 (5)　（縮尺１／４）……185
第106図　ＳＫ１出土遺物実測図 (6)　（縮尺１／４）……186
第107図　ＳＫ１出土遺物実測図 (7)　（縮尺１／４）……187
第108図　ＳＫ１出土遺物実測図 (8)　（縮尺１／４）……189
第109図　ＳＫ２・３出土遺物実測図（縮尺１／４）
第110図　ＳＤ２・３・５・包含層出土遺物実測図（縮尺１／４）……191
第111図　ＳＤ２・５・６・７・９出土遺物実測図（縮尺１／４）……192
第112図　ＳＤ２・３・５・６・９・包含層出土遺物実測図（縮尺１／４）……193
第113図　ＳＤ３・５・８・包含層出土遺物実測図（縮尺１／４）……194
第114図　ＳＤ２・ＳＸ２出土遺物実測図（縮尺１／４）……195
第115図　ＳＤ２・３・包含層出土遺物実測図（縮尺１／４）……196
第116図　包含層出土遺物実測図（縮尺１／３）
第117図　ＳＤ５・包含層出土遺物実測図（縮尺１／３）……197
第118図　ＳＤ３・５・ＳＸ２・包含層出土遺物実測図（縮尺１／３，１／６）……199
第119図　ＳＤ５・包含層出土遺物実測図（縮尺１／４）……200

経石山古墳

第120図　調査地位置図 (1)　（縮尺１／2500）……214
第121図　調査地位置図 (2)　（縮尺１／400）……215
第122図　基本層位図（縮尺１／20）……216
第123図　層序図（縮尺１／40）……217
第124図　遺構配置図（縮尺１／1500）……218
第125図　ＳＡ１測量図（縮尺１／60）……219
第126図　地形測量図（縮尺１／1500）

第127図　出土遺物実測図 (1)　(縮尺１／４)……221
第128図　出土遺物実測図 (2)　(縮尺１／４)……222
第129図　出土遺物実測図 (3)　(縮尺１／２)……223
枝松遺跡３次調査
第130図　調査地位置図（縮尺１／5000)……229
第131図　南壁土層図（縮尺１／40)……230
第132図　調査地測量図（縮尺１／800）……231
第133図　遺構配置図（縮尺１／100)
第134図　ＳＢ１測量図（縮尺１／60)……232
第135図　出土遺物実測図（縮尺１／４)……233
第12章
第136図　石手川扇状地及び周辺の地形分類図と遺跡立地（縮尺１／15000）……241

表　目　次

表１．調査地一覧……1
表２．桑原地区の試掘一覧……11
表３．桑原地区の発掘調査一覧……12
樽味立添遺跡
表４．竪穴式住居址一覧……63
表５．竪穴式住居址の炉一覧
表６．溝一覧
表７．土壙一覧……64
表８．掘立柱建物址一覧
表９．ＳＢ13出土遺物観察表（土製品）……65
表10．ＳＢ４出土遺物観察表（土製品）……66
表11．ＳＢ３出土遺物観察表（土製品）
表12．ＳＢ７出土遺物観察表（土製品）
表13．ＳＢ６出土遺物観察表（土製品）……67
表14．ＳＢ９出土遺物観察表（土製品）……68
表15．ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）……69
表16．ＳＢ10出土遺物観察表（土製品）

表17．ＳＢ11出土遺物観察表（土製品）……69
表18．ＳＫ出土遺物観察表（土製品）……72
表19．ＳＸ２出土遺物観察表（土製品）……73
表20．ＳＸ３出土遺物観察表（土製品）……74
表21．ＳＸ４出土遺物観察表（土製品）
表22．包含層出土遺物観察表（土製品）……75
表23．包含層出土遺物観察表（石製品）……76
表24．包含層出土遺物観察表（土製品）
樽味高木遺跡
表25．竪穴式住居址一覧……98
表26．溝一覧
表27．土壙一覧
表28．ＳＢ６出土遺物観察表（土製品）……99
表29．ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）
表30．ＳＢ５埋土出土遺物観察表（土製品）……100
表31．ＳＫ５上面出土遺物観察表（土製品）……101
表32．ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）……102
表33．ＳＫ５埋土出土遺物観察表（土製品）
表34．ＳＫ５関連出土遺物観察表（土製品）……103
表35．ＳＫ７出土遺物観察表（土製品）
樽味四反地遺跡
表36．溝一覧……118
表37．自然流路一覧
表38．土壙一覧
表39．旧河川・包含層出土遺物観察表（土製品）……119
表40．Ⅲ層・落ち込み出土遺物観察表（石製品）……120
桑原西稲葉遺跡１次
表41．溝一覧……132
表42．土壙一覧
表43．掘立柱建物址一覧
表44．出土遺物観察表（土製品）……133
桑原西稲葉遺跡２次
表45．溝一覧……150
表46．土壙一覧

表47．ＳＸ（不明遺構）一覧……150
表48．ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）……151
表49．包含層出土遺物観察表（土製品）
桑原田中遺跡
表50．溝一覧……203
表51．土壙一覧
表52．ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）……204
表53．ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）……206
表54．ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）
表55．ＳＤ２・３・５・包含層出土遺物観察表（土製品）
表56．ＳＤ２・５・６・７・９出土遺物観察表（土製品）……207
表57．ＳＤ３・５・６・８・９・包含層出土遺物観察表（土製品）……208
表58．ＳＤ２・３・ＳＸ２・包含層出土遺物観察表（土製品）……209
表59．包含層出土遺物観察表（土製品）
表60．ＳＤ５・包含層出土遺物観察表（石製品）……210
表61．ＳＤ３・５・ＳＸ２・包含層出土遺物観察表（土製品）
経石山古墳
表62．出土遺物観察表（土製品）……225
表63．出土遺物観察表（鉄製品）……226
枝松遺跡３次
表64．ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）……235
表65．ＳＢ１出土遺物観察表（石製品）
表66．包含層出土遺物観察表（土製品）
第12章
表67．石手川水系旧石器時代遺跡一覧……241

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

昭和61年～平成２年に、松山市樽味町、桑原町、枝松町内において７ヶ所の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが申請された樽味２丁目58番地、樽味４丁目266－1、樽味４丁目204－1、204－4は松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「81樽味遺物包含地」内に、桑原１丁目981－1・2、982－1・2、桑原２丁目971番２は「157桑原遺物包含地」内に、桑原６丁目499－1、枝松３丁目310－1は「83枝松遺物包含地」内に、桑原４丁目410－1は「84経石山古墳」内に当たり、周知の遺跡として知られている。各包含地内では、これまで弥生時代～古墳時代までの集落関連遺構が確認されており、特に経石山古墳は愛媛県指定の遺跡であり、重要な遺跡地帯として近年注目されてきた地域である。

文化教育課では、確認願いが申請された７地点について埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、昭和62年～平成２年に順次試掘調査を実施した。

試掘の結果、申請の７地点では、遺物包含層及び遺構が検出され、弥生時代～古墳時代の集落関連遺跡があることを確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者は発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、弥生時代及び古墳時代の樽味町～桑原町にかけての集落構造解明と経石山古墳の範囲確認を主目的とし、文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、各申請者の協力のもと昭和63年～平成２年の間に実施した。

以下、各調査地の遺跡名、所在等を略記する。

●表１　調査地一覧

遺跡名	所在	面積(㎡)	期間
樽味立添遺跡	松山市樽味２丁目58番地	1,691	昭和63年６月22日～同年10月15日
樽味高木遺跡	松山市樽味４丁目266番地１	430	昭和64年１月４日～平成元年２月27日
樽味四反地遺跡	松山市樽味４丁目204番地１～４	1,500	昭和63年４月１日～同年６月21日
桑原西稲葉遺跡(１次)	松山市桑原２丁目１他	2,300	平成元年４月25日～同年９月30日
桑原西稲葉遺跡(２次)	松山市桑原２丁目971番地２	1,143	平成２年７月14日～同年９月17日
桑原田中遺跡	松山市桑原６丁目499番地１	1,252	昭和63年９月19日～同年11月12日
経石山古墳	松山市桑原４丁目410番地１	567	平成２年10月17日～同年12月19日
枝松遺跡（３次）	松山市枝松３丁目310番地１	348	平成元年10月５日～同年10月28日

なお、昭和63年４月～平成３年９月30日の間は松山市教育委員会文化教育課が主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成３年10月１日以降は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり室内調査及び刊行事業を実施した。〔梅木〕

2．調査組織

〔昭和63年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会　教育長　平井　亀雄
参　事　松原　重勝
教育次長　井手　治己
教育次長　古本　克

調査総括／松山市教育委員会　文化教育課　課　長　渡部　忠平
第二係長　菅野　治之
主任　西尾　幸則
主事　重松　佳久

〔平成元年度調査組織〕

（平成元年４月１日～平成元年10月30日）

調査主体／松山市教育委員会　教育長　平井　亀雄
参　事　井手　治己
教育次長　古本　克
教育次長　井上　量公

調査総括／松山市教育委員会　文化教育課　課　長　渡部　忠平
第二係長　西　伸二
調査係長　西尾　幸則
主事　重松　佳久
主事　栗田　正芳

（平成元年10月31日～平成２年３月31日）

調査主体／松山市教育委員会　教育長　平井　亀雄
参　事　井手　治己
教育次長　古本　克
教育次長　井上　量公

調査総括／松山市教育委員会　文化教育課　課　長　渡部　忠平
松山市立埋蔵文化財センター　所　長　森脇　將
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳

〔平成２年度調査組織〕

調査主体／松山市教育委員会　教育長　池田　尚郷

調 査 組 織

参　　事　古本　　克
教育次長　井上　量公
教育次長　一色　正士
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課　課　　長　渡部　忠平
松山市立埋蔵文化財センター　所　　長　森脇　　將
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳

〔平成３年度調査組織〕

（平成３年４月１日～同年９月30日）

調査主体／松山市教育委員会　教 育 長　池田　尚郷
参　　事　古本　　克（～５月19日）
参　　事　池田　秀雄（５月20日～）
教育次長　西森　寛彦
教育次長　一色　正士（～５月19日）
教育次長　渡部　泰輔（５月20日～）
教育次長　日野　正寛（５月20日～）
調査総括／松山市教育委員会　文化教育課　課　　長　渡部　忠平（～５月19日）
課　　長　岩本　一夫（５月20日～）
松山市立埋蔵文化財センター　所　　長　和田祐三郎
次　　長　田所　延行
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳

〔平成３年度刊行組織〕

（平成３年10月１日～）

刊行主体／財団法人松山市生涯学習振興財団　理 事 長　田中　誠一
事務局長　池田　秀雄
埋蔵文化財センター　所　　長　和田祐三郎
次　　長　田所　延行
調査係長　西尾　幸則
調査主任　田城　武志
調査主事　栗田　正芳（文化教育課職員）

〔田城〕

第２章　立地と環境

１．地理的環境

松山市桑原地区は、松山平野のやや東より、標高40m前後の地域に位置する。石手川は高縄山に源を発し、平野を南西方向へ向け横断しながらやがて小野川と合流し、重信川に流れ込み、やがて伊予灘へ注ぐ。その県下最大の松山平野は、北を高縄山、南を石鎚山系に挟まれ、大小の河川が流れ込む丘陵端部には扇状地を形成している。石手川においてもまた、溝辺町周辺から川の進行方向に向け、大規模な扇状地が形成されている。

当遺跡群が所在する桑原地区とは、現在の愛媛大学農学部を中心として、樽味１～４丁目・桑原１～２丁目・東野１丁目周辺の三角地帯である。石手川はこの地区の北東から南西へ向けて流れているが、以前は流路が不安定で、上流から肥沃な土壌を運搬していたと考えられる。その河川の氾濫を幾度も受けながら、やがてその堆積物によって扇状地を形成し、安定した地盤を築いていた。当地区において最も古い遺構・遺物としては、樽味遺跡（愛媛大学農学部）の弥生時代前期前半の溝ＳＤ４と、それにともなって出土した土器があげられる。それらから、その周辺地域での弥生時代前期前半における集落の存在が指摘されている〔宮本 1989－１〕。

地質学的には、前述した通り、この地区一帯は扇状地堆積物で形成されている。しかし、その堆積作用の時期にも２つあり、洪積世における時期の堆積と、現世におけるそれである。後者の扇状地は、上流側において前者のそれを開析しながら、やがて下流側でその上に埋没させながら発達していると指摘されている〔平井 1989〕。

２．歴史的環境

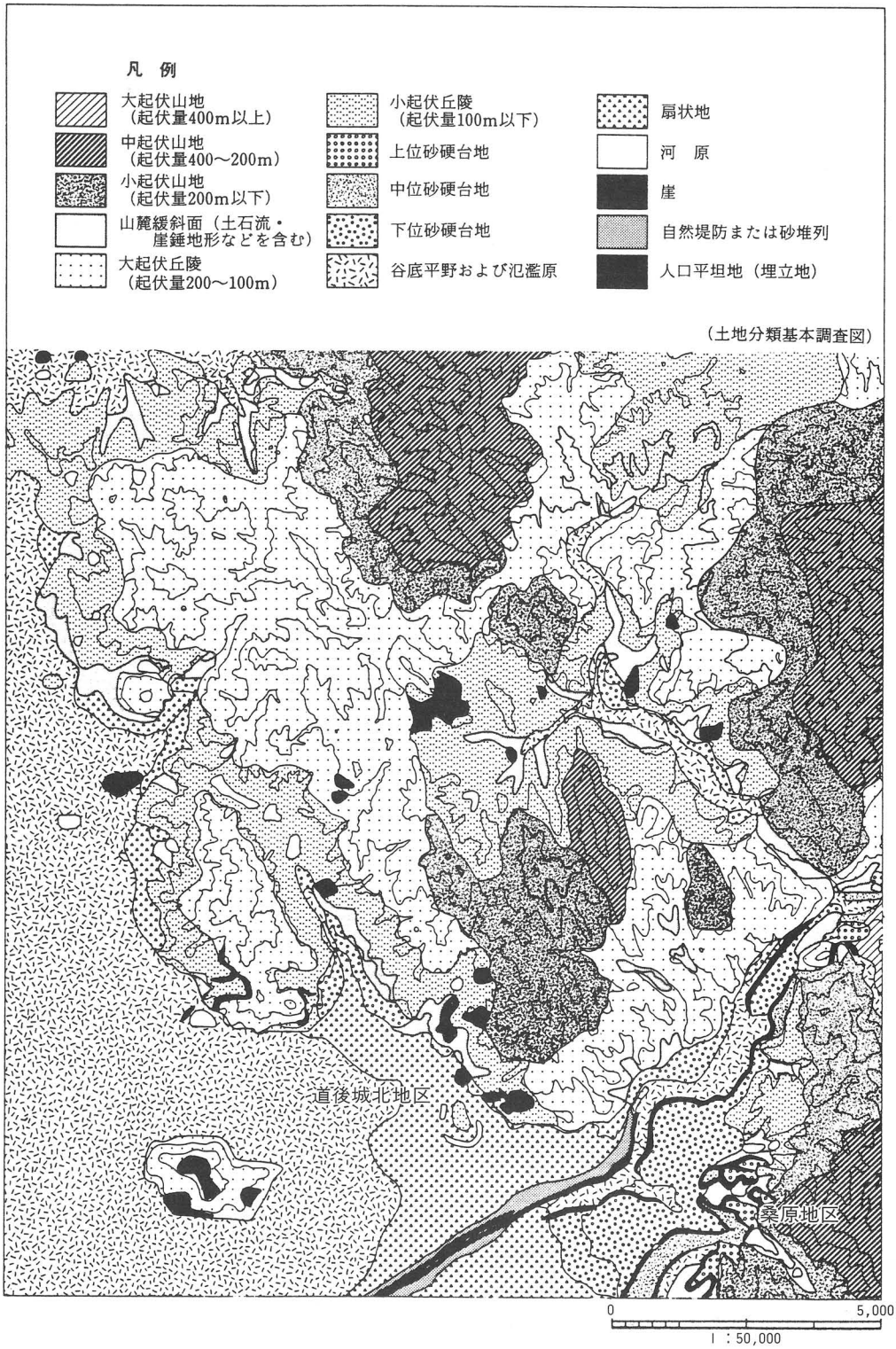
当地区は、松山市が埋蔵文化財包蔵地に指定している『81樽味遺物包含地』『157桑原遺物包含地』を含んでいる。そのためこれまで当地区内で発掘調査された、主な遺跡についてその概要をまとめてみた。

旧石器時代

まず旧石器時代の遺跡は今までのところ確認されていない。ただし樽味遺跡・樽味四反地遺跡において、ポケット状に堆積したＡＴ火山灰土を確認している。共に部分的な堆積がみられるのみであり、調査区全域に広がる安定した堆積ではないとみられる。

縄文時代

次に縄文から弥生にかけての遺構は、樽味遺跡において弥生時代前期前半の溝ＳＤ４と、それに続く時期の土壙ＳＫ５が確認されている。それによると平野北部や道後城北遺跡で確認されている縄文時代晩期からの系譜を追うことができる〔宮本 1989ａ〕。



第1図　松山周辺の地形分類

弥生時代

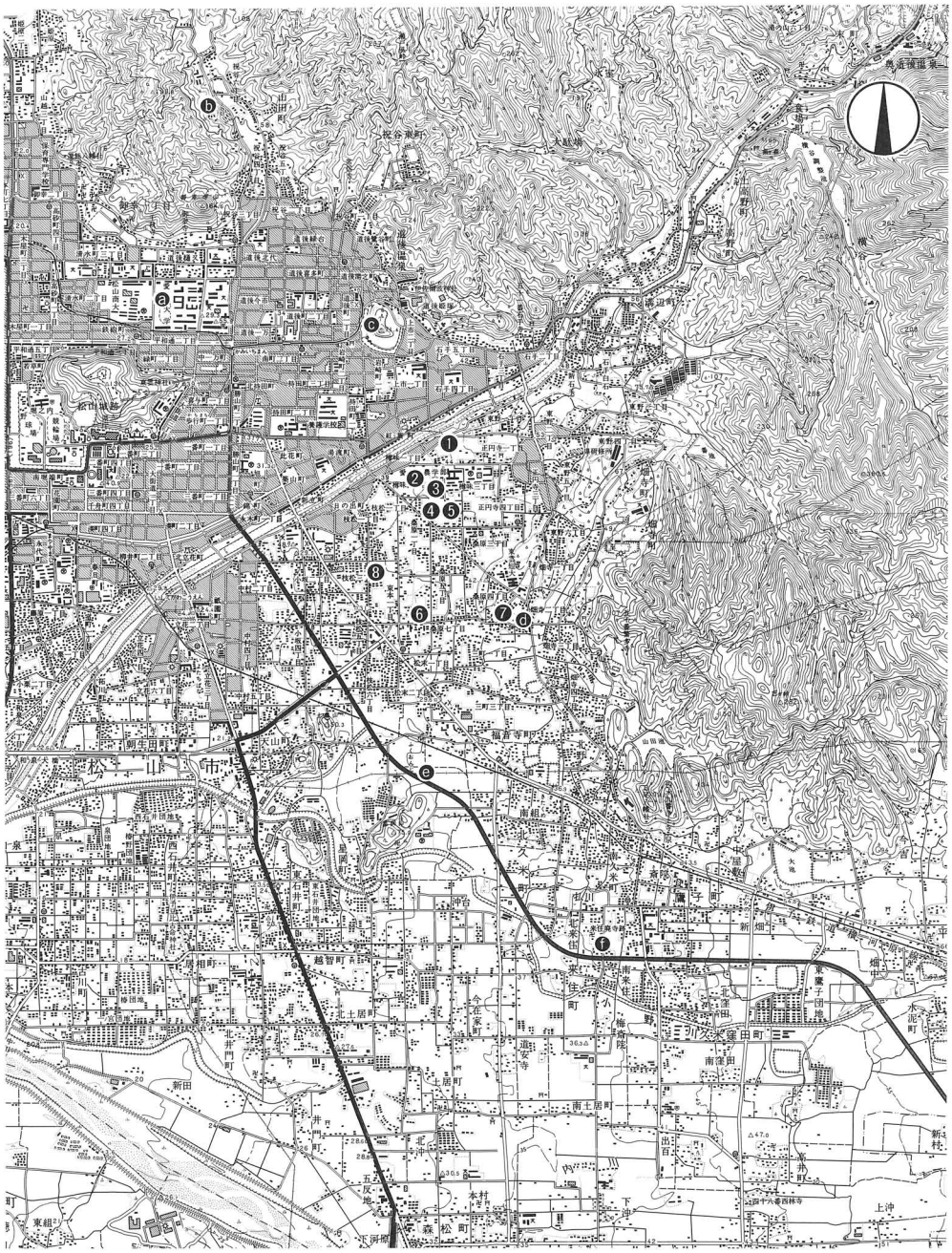
弥生時代は、桑原高井・東本遺跡をはじめとして、樽味四反地・樽味高木・樽味立添・桑原田中・桑原稲葉・西稲葉などの遺跡が近年精力的に調査され、これまで明確ではなかったこの時代の環境や、集落形態などが徐々に解明されつつある〔梅木　1989〕。まず桑原高井遺跡では、竪穴住居跡５棟、土壙状遺構、溝状遺構などが検出されている。竪穴住居跡の平面形態は、円形と方形があり、特にＳＢ２はベッド状遺構を備えた多角形であった〔森　1986〕。東本遺跡は、これまで３度にわたる調査が実施されている。第１次調査区では、竪穴住居跡の一部と溝状遺構が検出されたのみであるが、第２次調査区において竪穴住居跡２棟、土壙状遺構、掘立柱建物、溝状遺構等が検出されている。特に竪穴住居跡には、円形と隅丸方形の２種類がみられ、いずれにも「Ｔ」字状の炉跡が備えつけられている〔森　1986〕。桑原稲葉遺跡では、円形と方形の竪穴住居跡がそれぞれ１棟ずつ検出されており、方形竪穴住居跡からは、後期終末の壺・甕・高坏・椀が出土している〔岡田他　1990〕。

古墳時代

この地区には、２基の前方後円墳の存在が知られている。その一つの経石山古墳は、全長約48.5ｍの前方後円墳で、現在５世紀末の年代をあてている〔森　1986〕。また三島神社古墳は経石山古墳の東方約300ｍに存在していたが、昭和46年に宅地造成により発掘調査が実施された。その報告によると、初期畿内型の横穴式石室を内部主体に持つ全長約45ｍの前方後円墳であった。近年の研究により、墳丘規模や石室形態の上で奈良県の市尾墓山古墳との類似点が指摘されている。その出土遺物などから６世紀初めに比定する考え方が有力である〔森　1986、高取町教育委員会　1984、1984年度文部省科学研究費奨励研究Ａ　1985〕。東野お茶屋台古墳群は、発掘調査時には内部主体がすでに削平されていたが、３基の古墳の周溝からは５世紀後半の須恵器が出土している〔森　1986〕。また竹ヶ谷古墳群においても同様に、５世紀後半の須恵器や直刀が周溝内から出土している。その他にも、東野周辺には古墳群が存在するとみられるが、詳細は不明である〔西尾　1986〕。集落跡関係では、桑原本郷遺跡において５世紀後半の竪穴住居跡１棟と掘立柱建物１棟が検出されている〔栗田　1987〕。

古代・中世

樽味遺跡のＳＤ１・２から14世紀後半、ＳＤ３・ＳＫ１から15世紀の資料的に価値の高い土師器が出土している。その中でもＳＤ１は、集落の境界の溝として位置づけられている。これらから、この遺跡付近も河野氏の支配範囲に入っていたのではないかと考えられる〔宮本　1989ｂ〕。



第２図　松山平野の主要遺跡分布図　（S＝1：50,000）

〔文献〕

池田　学・松村　淳・宮崎泰好　1989「桑原田中遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一　1989「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

岡田敏彦　1990「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

栗田茂敏　1987「桑原本郷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会

高取町教育委員会　1984『市尾墓山古墳』1984年度文部省科学研究費奨励研究A

1985「横穴式石室構造の地域別比較研究 ―中・四国編―」

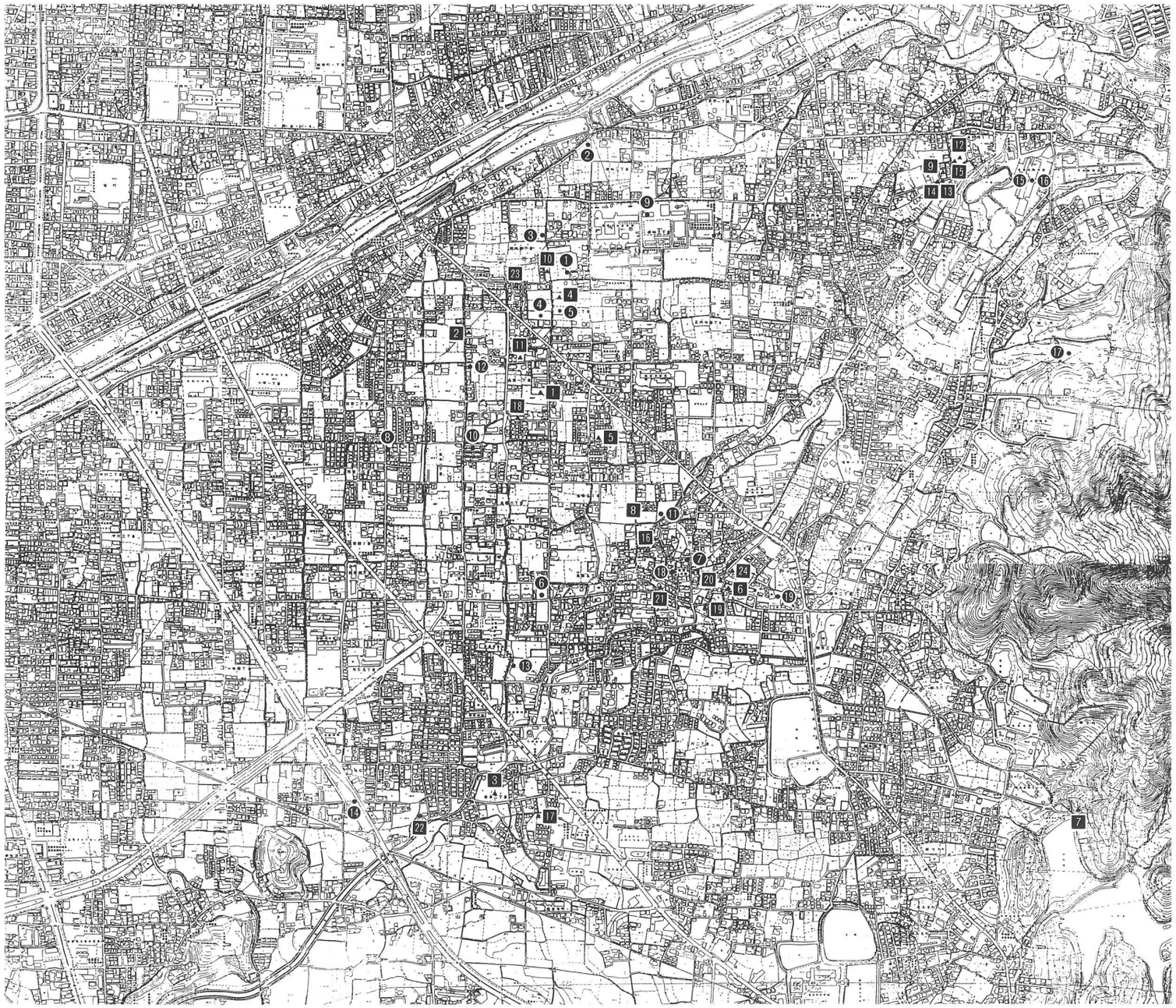
西尾幸則　1986「畑寺竹ケ谷古墳群」『愛媛県史　資料編考古』愛媛県史編纂委員会

平井幸弘　1989「鷹子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

宮本一夫　1989 a「道後平野における弥生時代開始期の動向」

1989 b「道後平野の中世土器編年―13～15世紀を中心に―」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

森　光晴　1986「桑原高井遺跡」「東本遺跡」「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」「三島神社古墳」『愛媛県史　資料編　考古』



（注）❶～⓳は本格調査地　1 ～ 24 は試掘調査地

第３図　桑原地区の遺跡分布図　　（S＝１：15,000）

桑原地区の遺跡一覧（資料調査・表作成：宮内慎一　高橋　恒）

―凡　例―

(1) 一覧表に使用した資料は、1990年12月時点のものである。

(2) 試掘調査については、松山市教育委員会が実施したものに限った。

(3) 試掘調査・本格調査の面積は申請（対象）面積である。

(4) 遺構・遺物欄では一部を略号で記入した。
遺構欄＝竪穴：竪穴式住居址、周溝：周溝状遺構、掘立：掘立柱建物址、柱：柱穴址
遺物欄＝縄：縄文土器、弥：弥生土器、土：土師器、須：須恵器。

(5) 実施及び期間は調査の開始時の年・月を示す。

(6) 主体欄の略記は以下である。県教委：愛媛県教育委員会、県埋文：㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター、市教委：松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

(7) 番号欄のナンバーは、「第３図　桑原地区の遺跡分布」中のものを指す。

●表２　桑原地区の試掘一覧

番号	所　在　地	面積(㎡)	標高(ｍ)	包含層	遺　構	遺　物	実　施	主　体	備　考
1	桑原1丁目809－4～6	660	36,5				'87.11	市教委	
2	桑原1丁目1010－1	400	36,0		柱	土師	'87.11	〃	
3	松末2丁目79－4～6	954	26,0		柱		'88.5	〃	
4	桑原2丁目966	638	38,0				'88.7	〃	
5	桑原2丁目865	326	37,0		溝		'88.7	〃	
6	桑原4丁目12－2～4	549	38,9				'88.9	〃	
7	畑寺町乙15－13	5,863	(70,0)			須恵	'88.10	〃	
8	桑原4丁目649－1	612	37,8	○	柱	土師	'88.10	〃	
9	東野5丁目甲711－1，2	1,153	57,3			須恵	'88.12	〃	
10	樽味4丁目207	700	39,3	○	柱	土師・須恵	'88.12	〃	
11	桑原1丁目993－5	657	37,7	○	柱	土師	'89.1	〃	
12	東野4丁目甲580－3	265	61,0				'89.2	〃	
13	東野5丁目711－9	8	56,0				'89.3	〃	
14	東野5丁目719－6	185	55,0	○			'89.3	〃	
15	東野4丁目569－3	231	58,5		落ち込み		'89.5	〃	
16	桑原4丁目624－1	199	38,2				'89.9	〃	
17	松末2丁目13－2，5	472	28,0				'89.12	〃	
18	桑原1丁目800－12	522	36,3	○	溝・柱	土師・須恵	'90.4	〃	
19	桑原7丁目7－6，6－4	158	38,0	○	溝	弥生	'90.5	〃	
20	桑原4丁目11－1	366	34,0	○	溝	土師・須恵	'90.5	〃	
21	桑原4丁目427－3	1,195	36,0	○		土師	'90.6	〃	
22	松末2丁目125－14	201	25,0				'90.6	〃	
23	桑原1丁目988－5	156	38,5	○		弥生	'90.6	〃	
24	桑原4丁目14－1	697	35,0				'90.12	〃	

●表 3　桑原地区の発掘調査一覧

番号	遺　跡　名	所　在　地	時 代	遺　構
1	樽味四反地遺跡	樽味 4 丁目204番 1 ～ 4	弥～古	河川・溝・土壙・柱
2	樽味立添遺跡	樽味 2 丁目58	弥～古	掘立・竪穴・溝・土壙・柱
3	樽味高木遺跡	樽味 4 丁目266－1	弥～古	掘立・竪穴・溝・土壙・柱
4	桑原西稲葉遺跡 1 次調査	桑原 1 丁目981－1他	弥～古	掘立・柵・溝・土壙・柱
5	桑原西稲葉遺跡 2 次調査	桑原 2 丁目971－2	弥～古	溝・土壙・柱
6	桑原田中遺跡	桑原 6 丁目499－1	弥～古	河川・溝・柱
7	経石山古墳 1 次調査	桑原 4 丁目410－1	弥～古	溝・周溝・柱
8	枝松遺跡 3 次調査	枝松 3 丁目310－1	弥～古	竪穴・柱
9	樽味遺跡(愛媛大学構内)	樽味 3 丁目 5 番	弥～古	自然流路・溝・土壙・柱
10	桑原稲葉遺跡	桑原 6 丁目722番	弥～古	竪穴・溝・土壙・柱
11	桑原本郷遺跡	桑原 4 丁目 7	古墳	掘立・竪穴・溝・柱
12	桑原高井遺跡	桑原町782番地	弥～古	竪穴・溝・土壙・土壙墓
13	東本遺跡	東本町98番地	弥～古	掘立・竪穴・土壙・柱
14	枝松遺跡	枝松 5 丁目・ 6 丁目	弥～古	掘立・竪穴・溝・土壙・柱
15	東野お茶屋台古墳群 1 ～ 3 次	東野 5 丁目甲898－48	古墳	円墳・方墳・溝・周溝・土壙墓
16	〃　　4 次	東野 5 丁目甲898	古墳	円墳・方墳
17	畑寺竹ヶ谷古墳群	畑寺町丙238－28	古墳	円墳・周溝・土壙
18	経石山古墳	桑原 4 丁目2－13	古墳	前方後円墳
19	三島神社古墳	畑寺町269番地	古墳	前方後円墳・周溝・配石遺構

遺　　物	面積(㎡)	期　間	主体	備　考	番号
弥・土・須・陶器・石庖丁	1,500	1988. 4	市教委	⑤	1
弥・土・須・石庖丁・勾玉	1,700	1988. 6	〃	⑤	2
弥・土・須・石庖丁・石鏃・種子・骨	430	1989. 1	〃	⑤	3
弥・土・須	2,300	1990. 3	〃	⑥	4
弥・土・須	1,143	1990. 7	〃	⑥	5
縄・弥・土	1,252	1988. 9	〃	⑤	6
弥・土・須・鉄斧・鉄鏃・石斧	567	1990. 10	〃	⑥	7
弥・土・須・石庖丁	348	1989. 10	〃		8
縄・弥・土・須・磁器・瓦・石鏃	684	1987. 1	愛媛大	⑦	9
弥・土・瓦・土錘・台石・砥石	1,433	1988. 12	県教委	⑨	10
土・須・臼玉	320	1986. 9	市教委	④	11
縄・弥・土	1,500	1975. 12	〃	①・③・⑧	12
弥・土	600	1978. 4	〃	①・③・⑧	13
弥・土・須	1,200	1975. 3	〃		14
弥・須・磁器・埴輪・硯	50,000	1975	〃	①・②・③	15
弥・須・鉄剣・埴輪		1978	県教委	①・②・③	16
弥・須・直刀・石鎌・石庖丁	6,400	1983	市教委	②・③	17
	2,000			①・③	18
縄・弥・土・須・管玉・臼玉・ガラス玉・埴輪・鉄器	380	1971. 4	市教委	①・③	19

〔参考文献〕

①『松山市史料集　第１巻　考古編』松山市 1980

②『松山市史料集　第２巻　考古編Ⅱ』松山市 1986

③『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県 1986

④『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市 1987

⑤『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市 1989

⑥『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市 1991

⑦『鷹ノ子・樽味遺跡の調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989

⑧『桑原高井遺跡』松山市文化財調査報告書14　松山市 1980

⑨『桑原稲葉遺跡』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター 1990

第３章

樽味立添遺跡（タルミタチゾエ）

1．調査の経過

(1)調査に至る経緯

1987（昭和62）年12月、浅川主水・曙設計より松山市樽味２丁目58番地における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『81樽味遺物包含地』内にある。周辺地域では、以前より調査が実施されており、当地一帯は周知の遺跡として知られている。同包含地内では、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫　1990〕、樽味四反地遺跡（第５章）〔梅木謙一　1989〕などの調査が行われており、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落が存在していたことが明らかになりつつある。

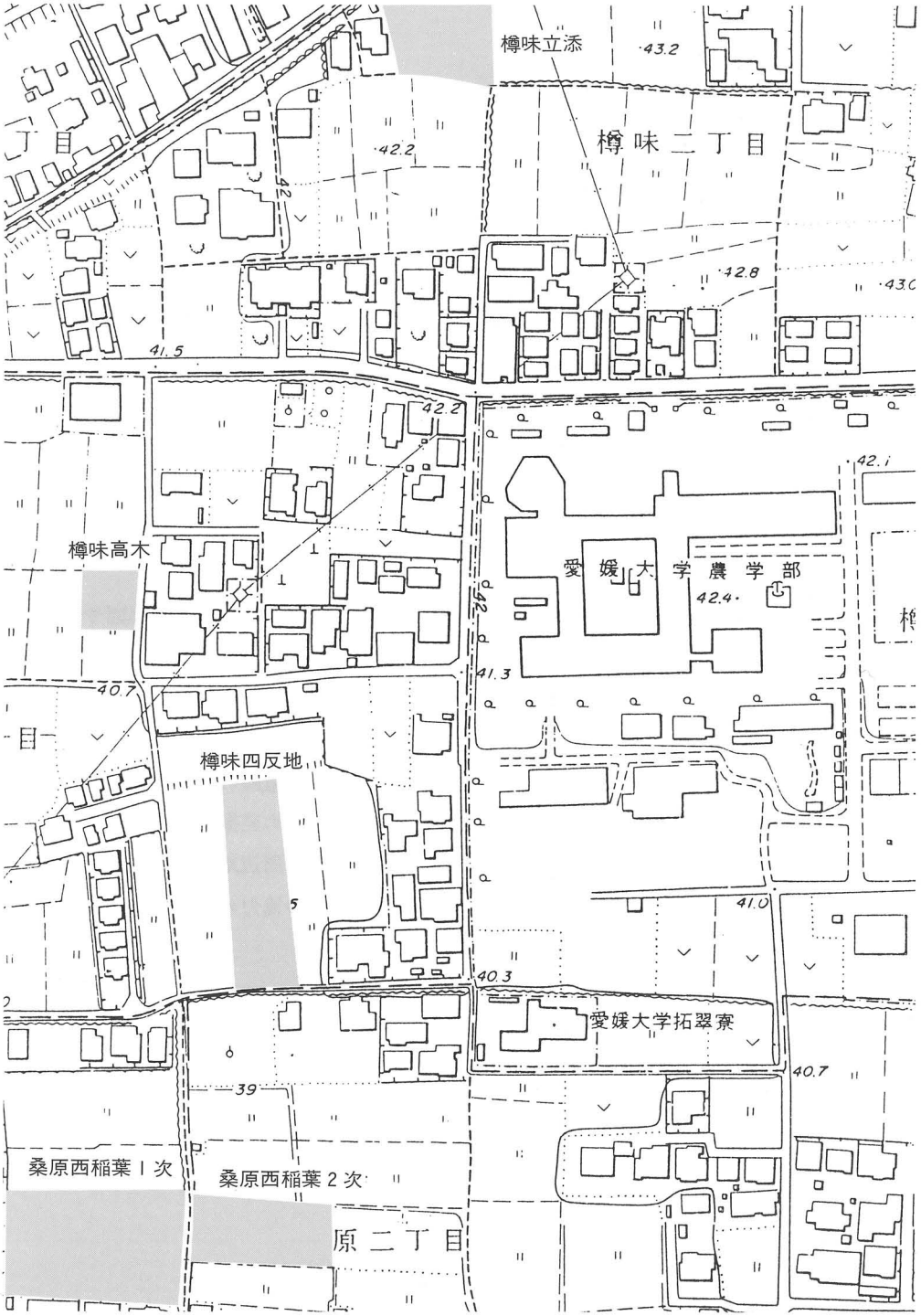
周辺には、北は文京遺跡などを含む道後城北遺跡群〔西田栄他　1976・古代学　1988・梅木　1991〕、南は白鳳期創建とされる来住廃寺跡〔小笠原好彦　1979〕、来住遺跡、久米高畑遺跡〔西尾・池田　1989・1991〕などを含む久米地区で、弥生時代から中世まで継続した大集落が存在する。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1988（昭和63）年２月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と落ち込みを検出し、当該地に弥生時代から中世に至る遺構が存在することが明らかになった。

この結果を受け、文化教育課・浅川主水氏・曙設計三者は、遺跡の取扱いについての協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、浅川主水・曙設計両者の協力のもと、1988（昭和63）年６月26日開始した。

(2)調査組織

調査地　　松山市樽味２丁目58番
遺跡名　　樽味立添遺跡
調査期間　　野外調査　1988（昭和63）年６月26日～同年10月15日
調査面積　　1,691㎡
調査委託　　浅川主水
調査担当　　調 査 員　梅木　謙一
　　調査員補　宮内　慎一　山之内志郎
調査協力　　曙設計　三好同二　㈱ 鹿島商会
調査作業員　山本　富明、吉田　智広、古屋　明寿、谷久　広之、中能　　隆、宮脇　和人、



第４図　調査区位置図　　（S＝１：2,500）

岡田　浩明、工藤　賢稔、扶川　　博、森田　真司、安永　浩二、田板　嘉則、近松　正宏、仙波　豊子、福山　暁子、矢野　敦子、河本美代子、今井セツ子、山下満佐子、飛田　佳子、松岡　忠仁、北野　功人、寺岡　豊彦、立花　　斉、中野　　剛、渡部孝二郎、森田　利恵、松本美知子、越智美代子、渡部美代子、黒田　令子、山本　好枝

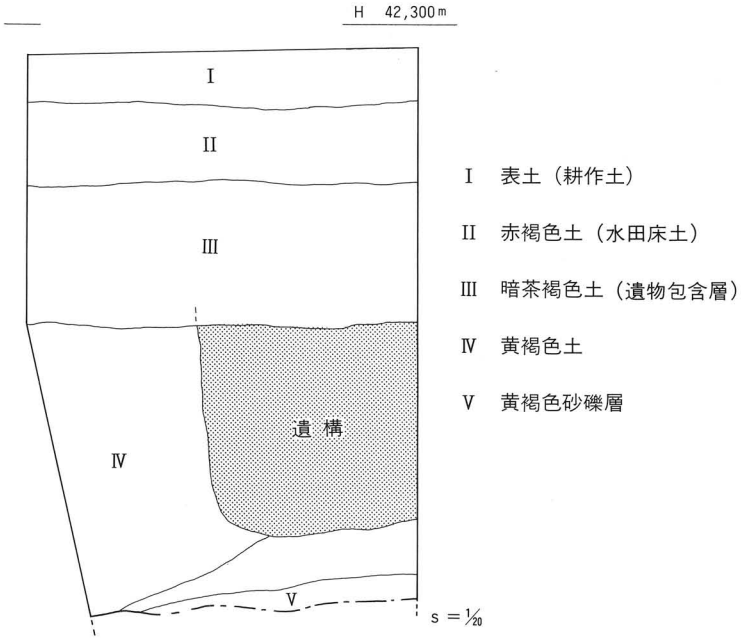
2．層位（第5図）

本遺跡は、石手川中流域南岸の微高地上、標高42.6ｍに立地する。

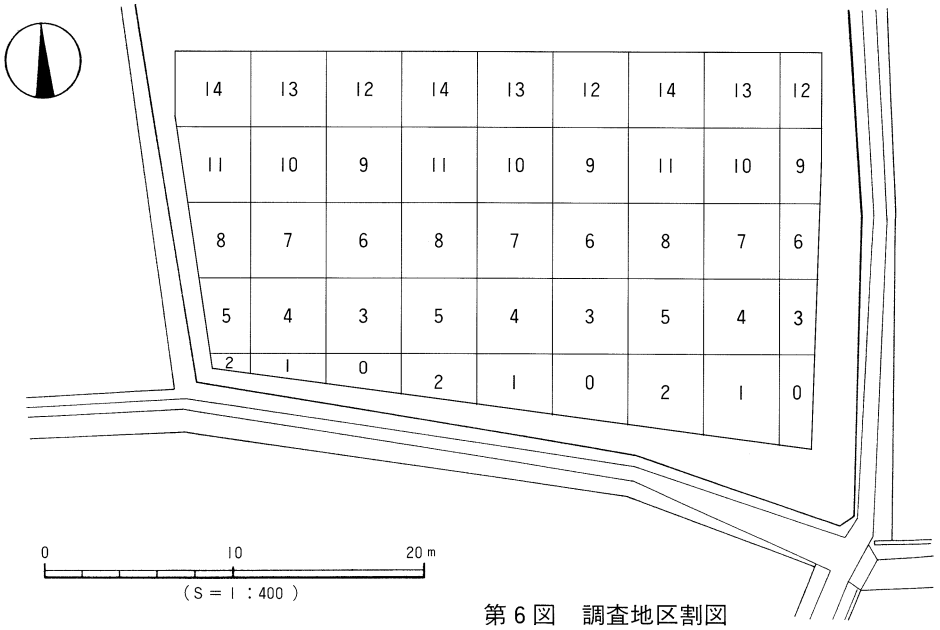
基本層位は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層赤褐色土（水田床土）、第Ⅲ層暗茶褐色土、第Ⅳ層黄褐色土、第Ⅴ層黄褐色砂礫層である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～40cmの厚さである。第Ⅲ層暗茶褐色土は遺物包含層であり、調査区北から南へ緩傾斜堆積をなす。厚さは10～60cmを測り、弥生土器・土師器・須恵器を包含する。第Ⅳ層黄褐色土は無遺物層で、地山と呼ばれるものである。第Ⅴ層砂礫層は石手川上流域の変成岩を含んでいる。地山面(第Ⅳ層上面)はその標高を測量すると北から南へ漸次低くなっている。

遺構は、第Ⅲ層中及び第Ⅳ層上面での検出である。

第Ⅲ層中では、竪穴住居址１棟（ＳＢ１）、土壙１基（ＳＫ13)、第Ⅳ層上面では、掘立柱建物18棟、竪穴住居址11棟、土壙14基、溝状遺構３条、柱穴302基(掘立柱建物柱穴を含む)他である。ただし、第Ⅳ層上面での検出遺構は、遺構の深さなどから判断すると、本来は第



第５図　基本層位図



第６図　調査地区割図

Ⅲ層以上から掘りこまれた可能性が高い。

遺物は、第Ⅲ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器(前期～後期)、土師器（５～６Ｃ初)、須恵器（５Ｃ末～６Ｃ)、石器（石庖丁２点他)、勾玉１点、貨幣１点等がある。

注目されるものは、第Ⅲ層出土の『貨泉』の完形品１点である。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。呼称名は、第６図に示す。

３．調査の概要（遺構と遺物）

(1)竪穴式住居址

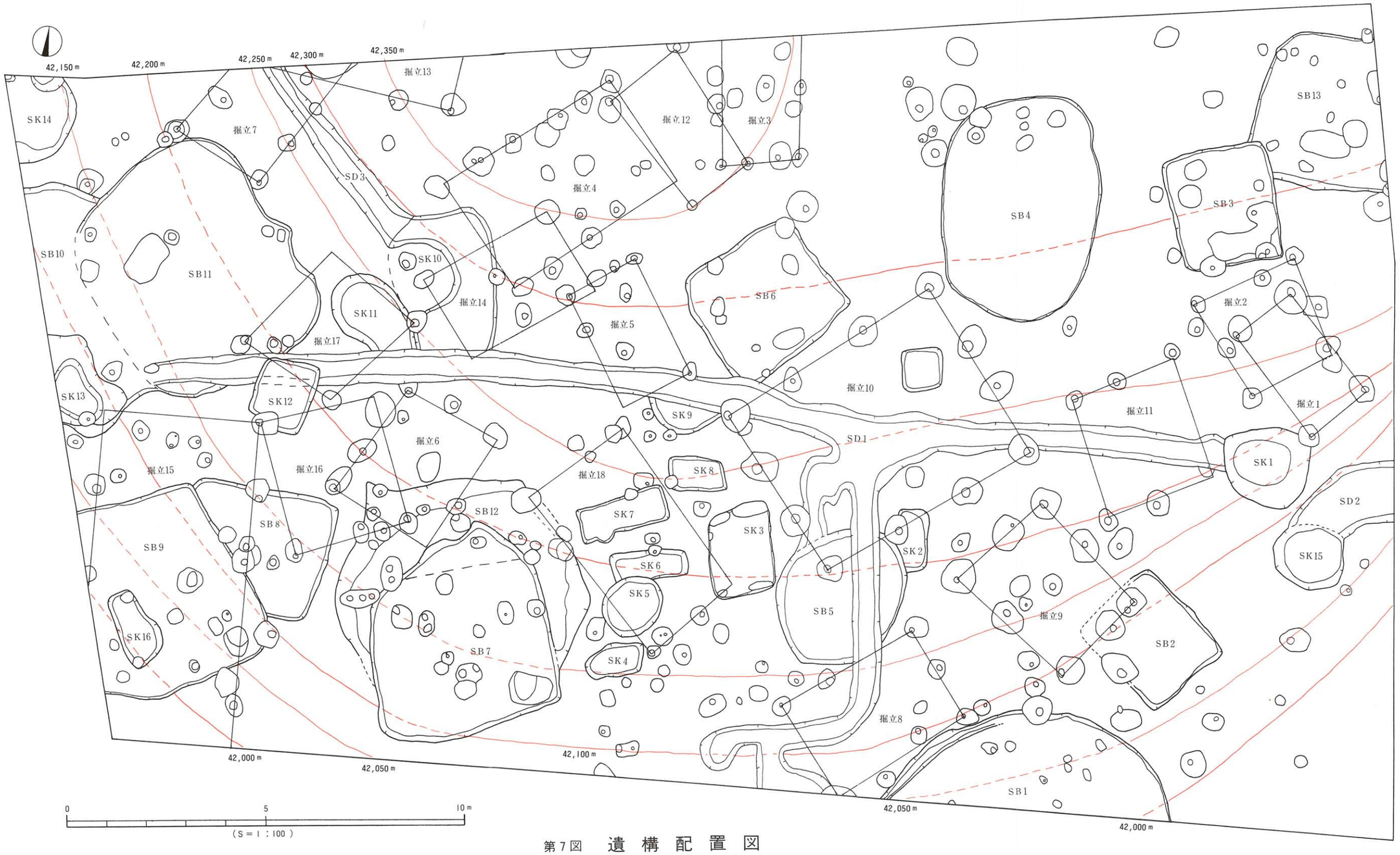
本調査区において確認された住居址は13棟である。第Ⅲ層中にてＳＢ１を、他はいずれも第Ⅳ層上面での検出である。住居址は近現代の造成工事により、壁高が10cmをみたないものがある。平面形は円形～楕円形（３棟)、方形（10棟）の２種類がある。

弥生時代～古墳時代前期

ＳＢ13号住居址（第８図)

調査区北東隅Ａ12区に位置する。住居址南西隅はＳＢ３号住居址に切られ、東壁は調査区外へ続く。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存南北幅3.9ｍ、東西幅3.6ｍ、壁高は32cmを測る。覆土は茶褐色シルト一層である。

主柱穴はＳＰ－267・273の２本を検出したが、柱穴の出土状況から他に２本あるものと考えられ主柱穴は４本であった可能性が高い。柱穴は円～楕円形で径20～35cm、深さ15～20cm、


42,150 m
42,200 m
42,250 m
42,300 m
42,350 m
42,000 m
42,050 m
42,100 m
42,050 m
42,000 m
SK14
掘立7
掘立13
SD3
掘立12
掘立3
掘立4
SB4
SB13
SB3
SB10
SB11
SK10
SK11
掘立14
掘立5
SB6
掘立2
掘立17
SK13
SK12
掘立10
掘立11
掘立1
SK9
SD1
掘立6
掘立15
掘立16
掘立18
SK8
SK1
SD2
SB12
SK7
SK3
SB8
SB9
SK6
SK2
SK15
SK5
SB5
掘立9
SK16
SB7
SK4
SB2
掘立8
SB1
0
5
10 m
(S＝1：100)

第7図　遺構配置図

柱穴間は2.6～2.9ｍを測る。

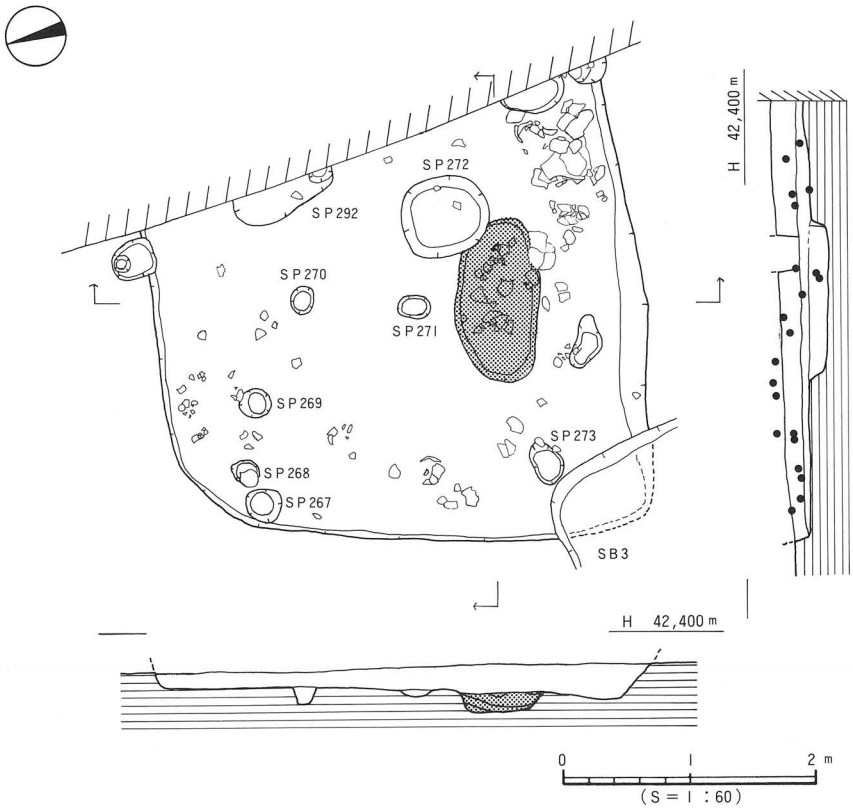
炉は住居址南側の柱穴間にある。平面形は長楕円形である。規模は長径130cm、短径70cm、断面は皿状をなし、深さ40cmを測る。炉内には焼土及び炭を確認している。

床面は比較的硬く、北から南に向けて緩傾斜をなす(比高差８cm)。床面にて主柱穴以外に大小８基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うかどうかはわからない。

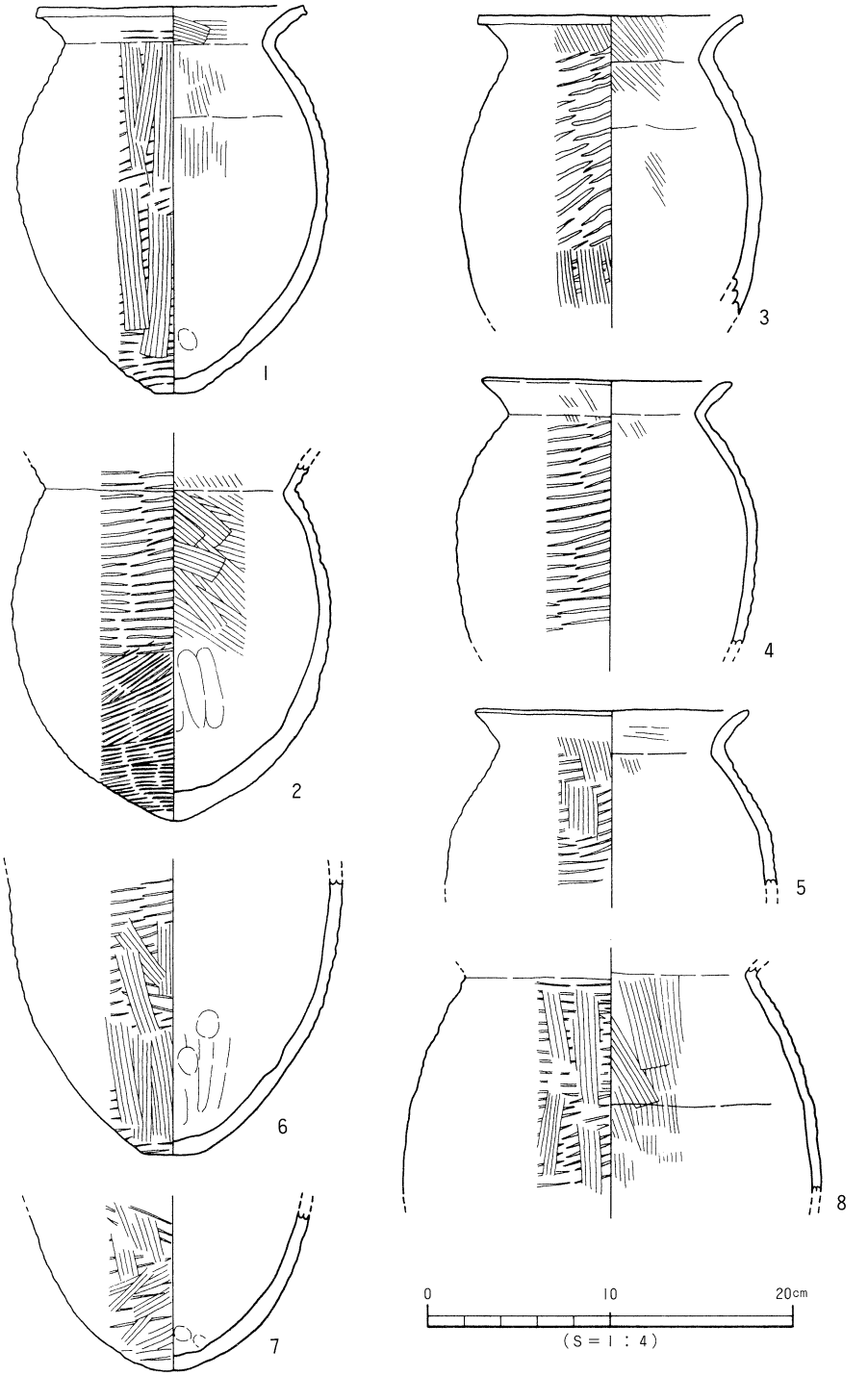
遺物は、南壁と西壁付近に集中して出土した。西壁では複合口縁の大型壺（11）が、炉址内からは甑形土器（14）が出土した。またＳＰ268では甕形土器(１)の胴下半が柱穴に入った状況で出土した。いずれの土器も完形に近いものであり一括性の高いものである。

出土遺物（第９図・第10図）

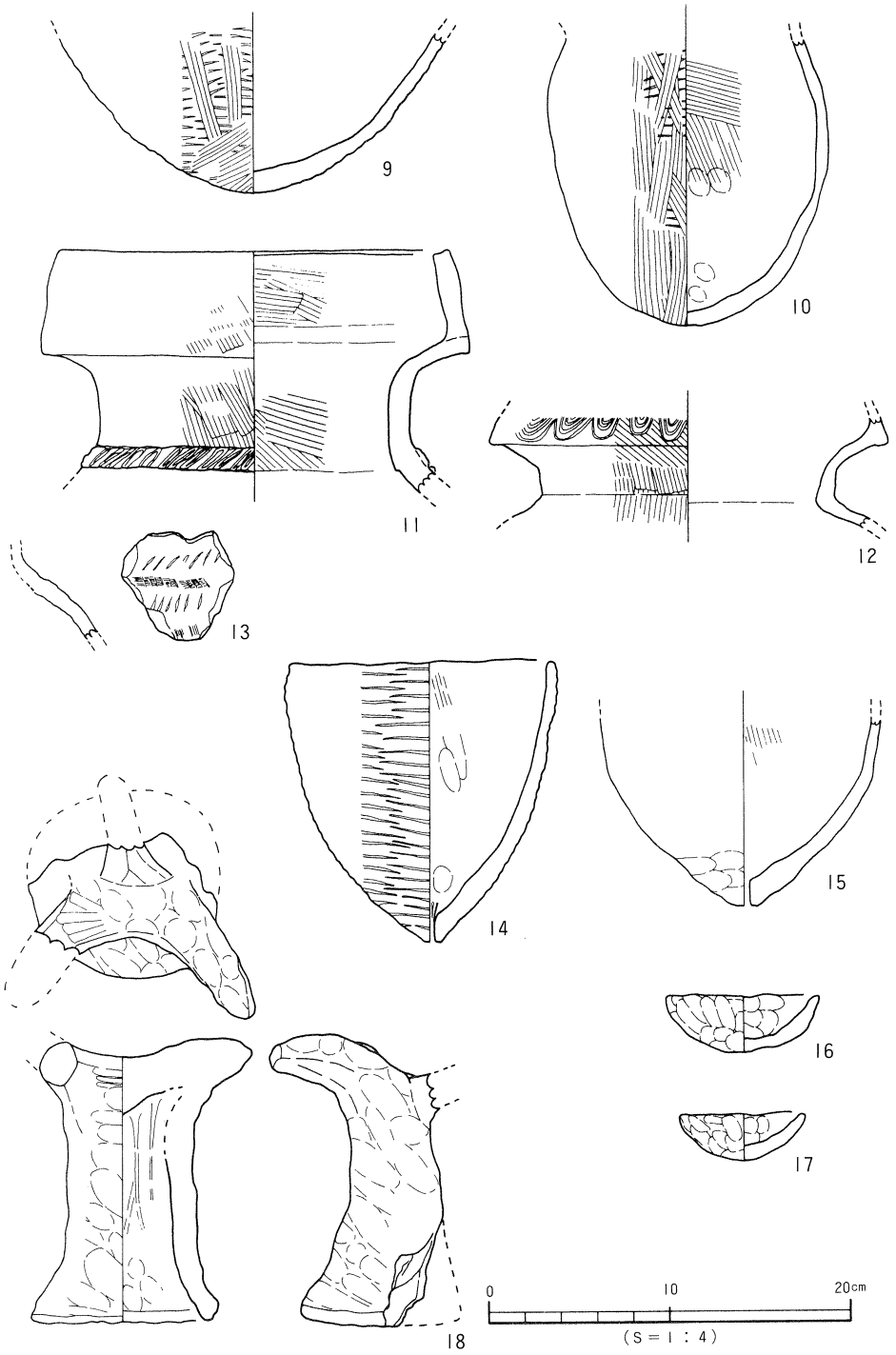
甕形土器（１～９）　く字状口縁をもち、小さい平底ないし丸底の底部を持ち、長胴であり、胴下半にふくらみをもつことが形態上の特徴である。成形・調整では、叩き技法を使用し、胴下半部を刷毛目調整することを特徴とする。内面は、刷毛目、ナデにより仕上げる。ただし、器壁は一般的に厚く、表面観察では削り技法の跡を全く看取できない。削り技法を全く使用しなかったとは判断しがたい。



第８図　　ＳＢ13 測 量 図



第9図　SB13 出土遺物実測図 (1)



第10図　ＳＢ13 出土遺物実測図 (2)

１・２では口縁部外面に叩き痕を残しており、叩きの後に口縁部を折り曲げたことが知れる。口頸部と胴部形態により三分類される。

A類（１）　　頸部は締り、胴部が張るものである。

B類（２）　　頸部の締りは弱く、胴下半部が大きくふくらむものである。

C類（３～５）　頸部は締り、胴部の張りは弱く、長胴のものである。

また、口縁端部の形態では、１・３は「コ」字状に、４・５は先細りとなる。

底部形態は、丸みのある小さい平底（１・６）と丸底(９・10)、丸みをもって突出する底部の三形態がある。完形品が希少のため口頸部、胴部、底部の関係は明確ではない。

壺形土器（11～13）11・12はいずれも複合口縁壺である。11は直立する短い頸部に、内傾斜の弱い口縁部をもつ。頸部には帯状の凸帯を貼り、凸帯上を「ノ」の字状に刻む。12は外傾する短い頸部に、短く外反し、短く内傾する口縁部をもつ。複合口縁部には波状文（櫛４本）を施す。13は肩部の小片である。無軸の羽状文状の刻目を施す。

甑形土器（14・15）14・15は尖底に、直口口縁をもつ甑形土器である。底部穿孔は焼成前である。外面は叩き痕、内面は刷毛目痕を顕著に残す。

椀形土製品（16・17）手捏ねで、小型品である。内外面に指頭痕を顕著に残す。

支脚形土器(18)受部は２本の突起によりつくられる。背部に突起１本をもつ(一部欠損)。体部下半は外開きし、体部には指頭痕を顕著に残す。

時期：出土遺物は、一括性の高い遺物であり、本住居址の廃棄時期が知れる良好な資料である。よって、本住居址の廃棄時期は古墳時代初頭に比定する。

ＳＢ４号住居址（第11図）

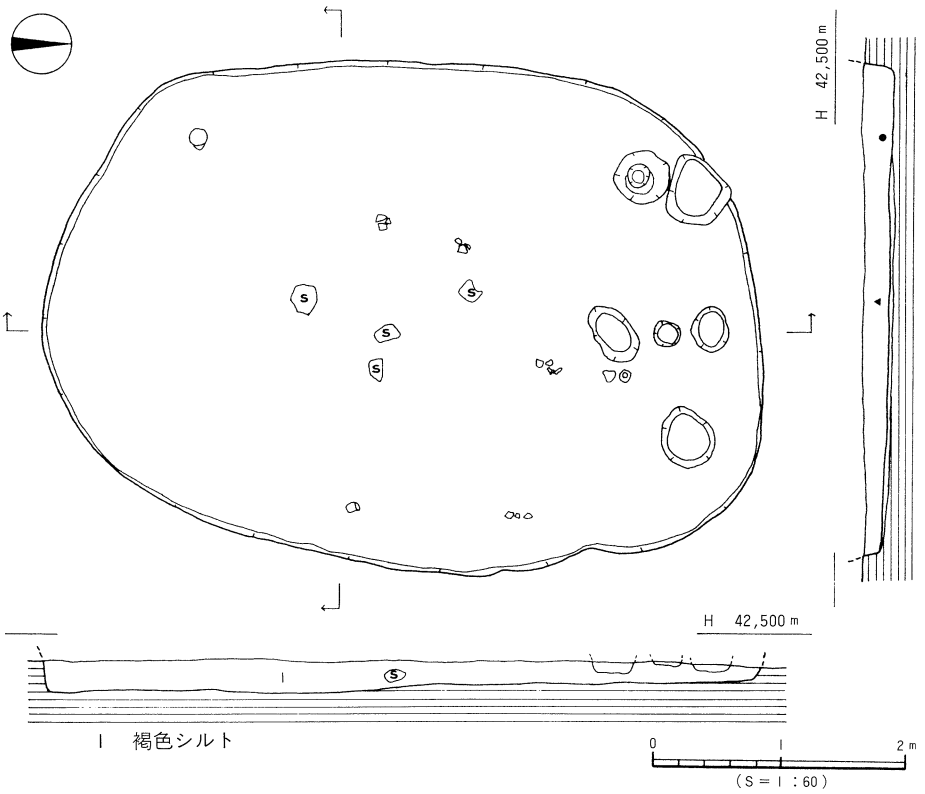
調査区北東部Ａ14区に位置する。平面形は楕円形で、規模は南北5.6ｍ、東西4ｍ、壁高は20cmを測る。埋土は褐色シルト一層である。床面はやや軟質で、北から南にかけて緩傾斜をなす(比高差５cm)。住居址床面にて６基の柱穴を検出した。柱穴埋土はいづれも茶褐色シルトである。主柱穴及び炉等は未検出である。

遺物は、床面よりわずかに浮いた状況で出土した。出土量は少ないものの、第11図の土器はいずれも完形に近いものである。

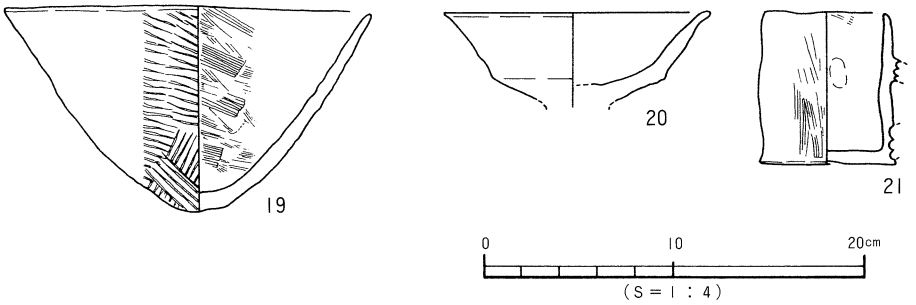
出土遺物（第12図）

19は、丸底で外面に叩き痕を顕著に残す鉢形土器である。20は、屈曲部に稜をもち、口縁部が外反する高坏形土器坏部である。やや小型であるが、坏部は深い。21は、ジョッキ形土製品である。大きな平底に直立する体部をもつ。把手は欠損する。

時期：19は完形であり、20・21も一部を欠損するものの流れ込み品とは考え難い。いずれも古墳時代初頭に時期比定されるものである。本住居址の廃棄・埋没時期は出土遺物より古墳時代初頭と考える。



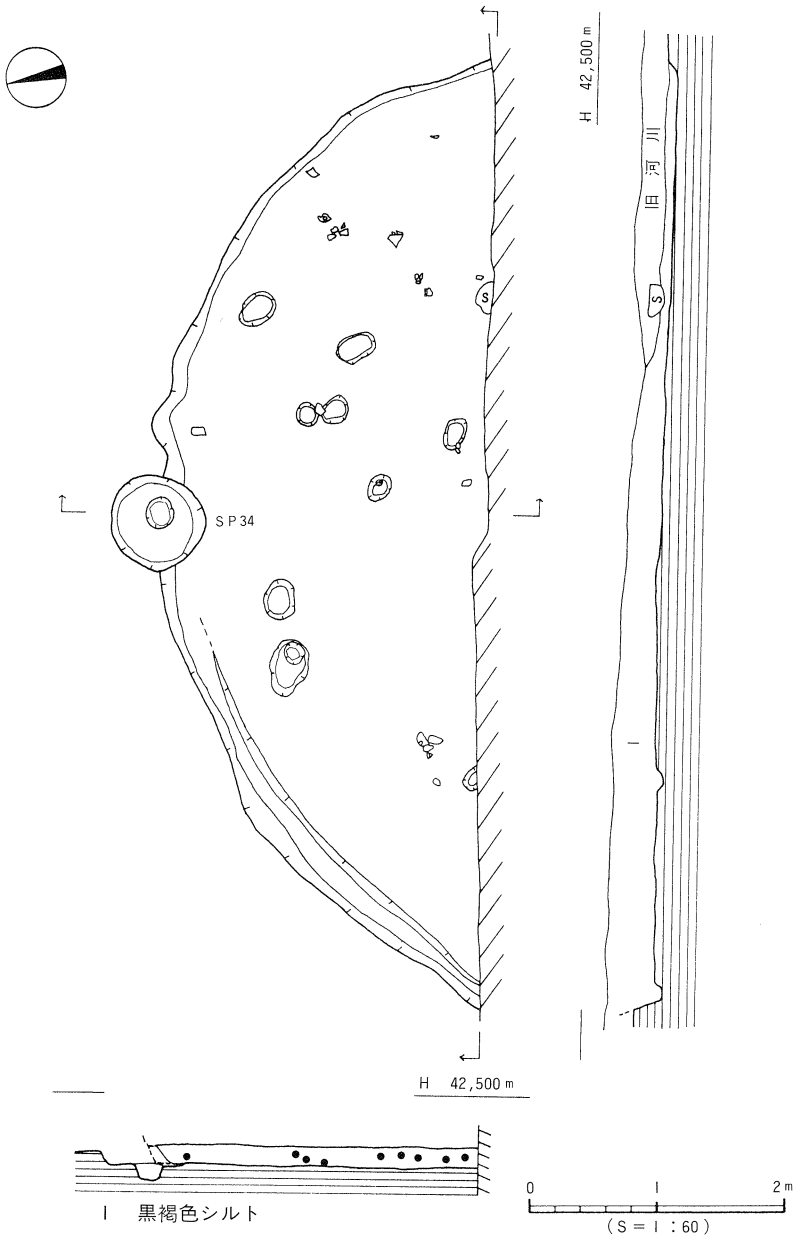
第11図　SB 4 測 量 図



第12図　SB 4 出土遺物実測図

ＳＢＩ号住居址（第13図）

調査区南東隅Ａ２区に位置する。住居址南半部は調査区外へ続く。平面形は円～楕円形を呈すると考えられ、規模（検出値）は南北幅2.5ｍ、東西7.5ｍ、壁高は15cmを測る。第Ⅲ層中で検出し、掘り方最終面は第Ⅴ層砂礫層におよんでいる。埋土は黒褐色シルト一層である。



第13図　ＳＢＩ測量図

床面はほぼ平坦で比較的硬い。住居址西半部には、幅25cm、深さ８cm、断面Ｕ字状の壁体溝が巡っている。床面にて９基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。主柱穴及び炉等は未検出である。

遺物の出土状況は、埋土中に須恵器・土師器・弥生土器の小片が数点出土したが、いずれも後世の流れ込みによる遺物とみられる。

出土遺物（第14図）

図化しえるものは１点である。扁平の擬宝珠状のつまみをもつ須恵器の坏蓋である。天井部は広く扁平である。奈良時代初頭に時期比定される。

時期：本住居址出土の遺物は、時期決定に有効な資料でない。あえて時期を求めるならば住居形態が円形で、規模が７ｍ以上であることより弥生中期後半～古墳時代初頭の間に構築されたものと考えられる〔梅木謙一　1991〕。

第14図　ＳＢ１　出土遺物実測図

古墳時代中期

ＳＢ３号住居址（第15図）

調査区北東部Ａ10区に位置する。北東コーナーは13号住居址を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北３ｍ、東西2.6ｍ、壁高は20cmを測る。覆土は暗褐色シルト一層である。主柱穴はＳＰ－296・297・298・300が想定される。ＳＰ300は、壁体に沿って半円形に柱穴が掘削される。ＳＰ－296・298・300を主柱穴とすると、配置、規模、埋土、柱穴間距離より壁体を切るＳＰ297も、本住居址の主柱穴になるものと考えた。柱穴は円形で、径25～60cm、深さ20～25cm、柱穴間は150～180cmを測る。床面は硬く西から東に向けて緩傾斜をなす（比高差５cm）。

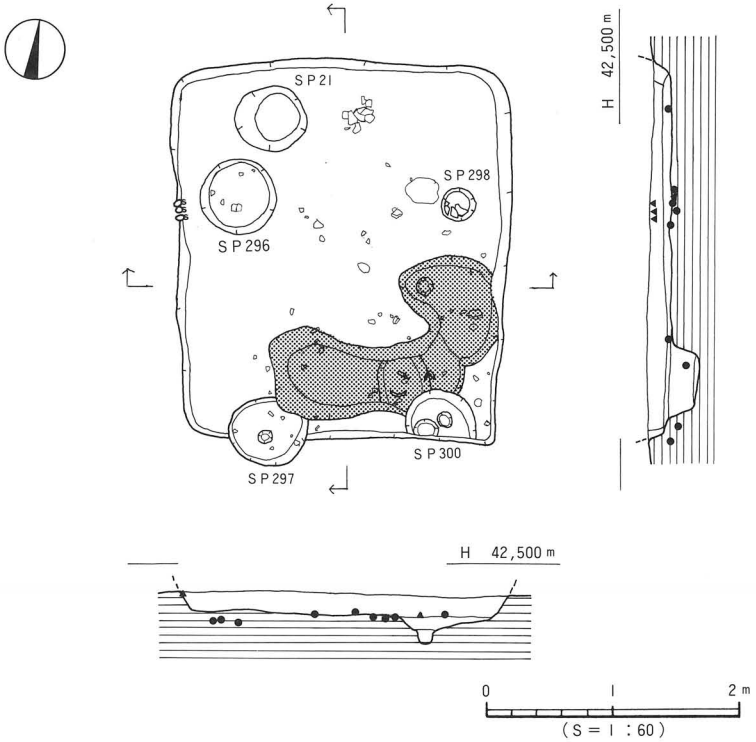
炉は、住居址南壁付近に位置する。平面形は「Ｌ」字状で、長径120cm、短径60cm、断面は皿状で深さ20cmを測る。炉内は、北及び南側中央部が円形に凹む。炉内には焼土及び炭を確認しており、特に、南半部にて炭が多く検出された。北側床面にて柱穴ＳＰ21を検出したが、本住居址に伴うかどうかはわからない。

遺物は、床面上には少なく、床面より20cm前後の高さの埋土中より土師器片が出土した。

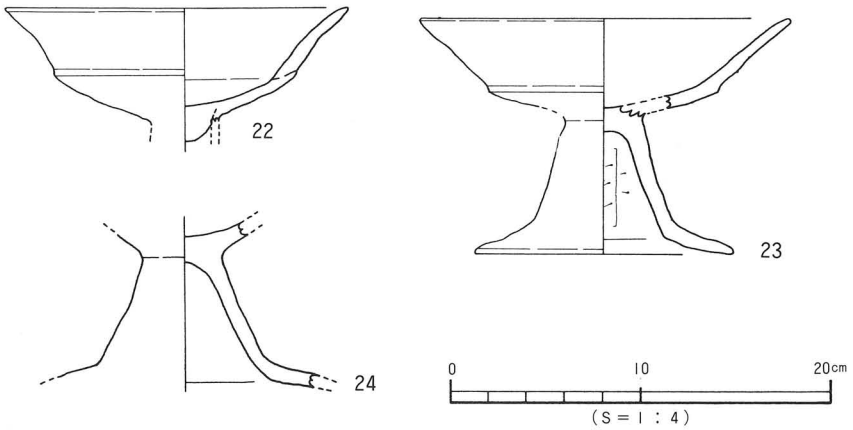
出土遺物（第16図）

図化できたものは土師器の高坏形土器３点である。坏部は屈曲部に稜（22）と段（23）をもち、口縁部はわずかに外反する。22の底部は充塡技法である。脚部(23・24)はやや太く、柱裾部境の内面に稜をもつ。

時期：埋土中の出土ではあるが、高坏形土器23は完形に近く、かつ共伴する高坏形土器の形態にも大きな時期差は認められない。よって、本住居址の埋没時期は古墳時代中期と考えておく。



第15図　SB3 測量図



第16図　SB3 出土遺物実測図

ＳＢ12号住居址（第17図）

調査区中央やや南西Ｃ６～Ｂ８区に位置する。住居址南側はＳＢ７に切られる。また、6・16・18号掘立柱建物に切られる。平面形は隅丸多角形（五ないし六角形か）になるものと思われる。規模は北西－南東６ｍ、北東－南西６ｍ、壁高20cmを測る。壁高はゆるやかに傾斜する。床面は第Ｖ層の礫が露出し、凹凸が著しい。住居内に多数のピットを検出したが、本住居址に伴うかは不明である。主柱穴は特定できなかった。

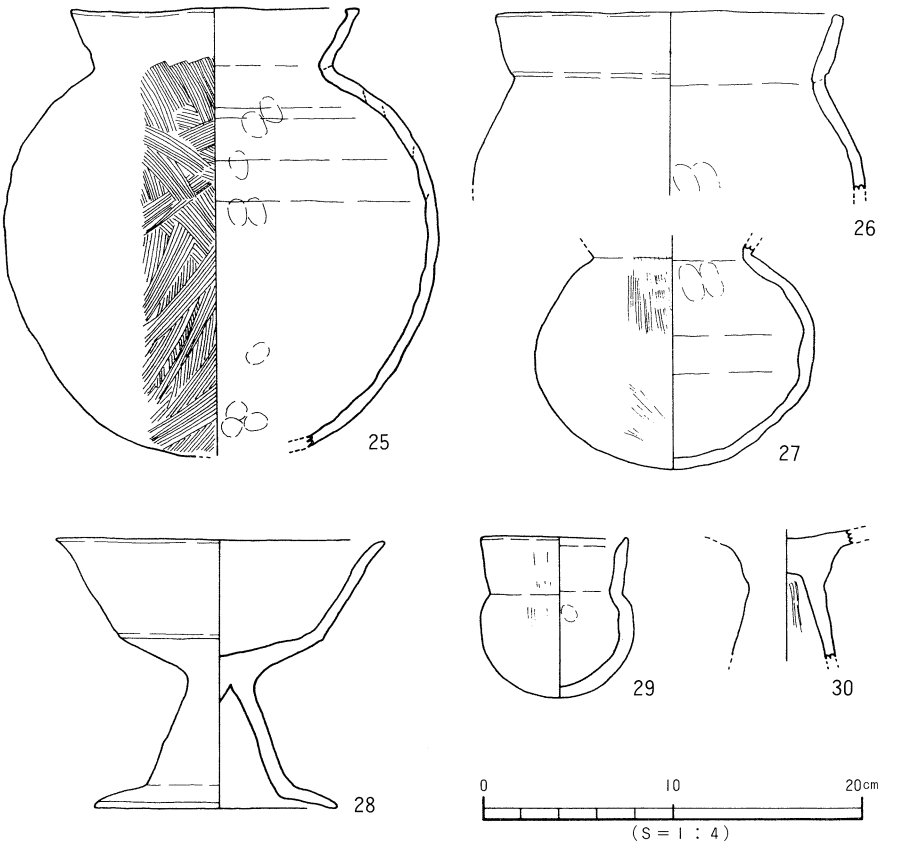
第17図　ＳＢ７・ＳＢ12 測 量 図

遺物は、埋土中に土師器片等が検出されたが、流れ込みの可能性が高いものである。

時期：ＳＢ７号他に切られていることより、下限を古墳時代中期に認定できよう。

ＳＢ７号住居址（第17図）

調査区中央やや南西Ｃ５区に位置する。ＳＢ12を切り、６・16・18号掘立柱建物に切られる。北壁は検出できなかった。また、北側の三角形の突出部は本住居の施設か、ＳＢ12のものなのかは判断できなかった。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、南北3.6ｍ、東西4.6ｍ、壁高は22cmを測る。埋土は暗茶褐色シルトで多数の礫を含む。主柱穴はＳＰ①・②・③の３本を検出した。柱穴はやや楕円形を呈し、径40～60cmを測る。柱穴間は、約２ｍを測る。ただし、南西部に１本すえられ、本来は４本であった可能性は高い。床面は第Ⅴ層の礫が露出しており、凹凸が著しい。床面では多数のピットを検出したが、本遺構に伴うものかは判断できなかった。



第18図　ＳＢ７　出土遺物実測図

遺物は、ＳＰ③中より壺形土器（第18図27）が出土した他、ＳＰ②の北側で甕形土器（第18図25）がおしつぶれた状態で出土した。遺物は多いものの、小片は埋土中の出土であり流れ込みの可能性が高いものばかりである。

出土遺物（第18図）

甕形土器（25・26）　25は口縁端部を肥厚し、端面がわずかに内傾するものである。外面は刷毛目、内面は粘土接合痕と指頭痕を残す。26は頸部の締りが弱いものである。口縁部はやや内湾するが、端面は肥厚せず、かつやや外傾する。

壺形土器（27・29）　27は扁平球の体部を呈する。成形・調整は25の甕形土器に似る。29は小型壺で、口径は体部最大径に延ばない。口縁端面は強く内傾する。

高坏形土器（28・30）　28は坏部を一部欠く。坏部は深く、屈曲部は丸みのある稜をもつ。脚柱部は三角錐を呈し、裾部はゆるやかに傾斜する。柱裾部境内面には明瞭な稜をもたない。坏底部は充塡技法である。30は組み合せ技法で、坏脚部境の外面に粘土を貼り付ける。

時期：甕形土器の長胴化、小型丸底壺の口径の縮少より、出土遺物は中期前半に比定されよう。掲載の遺物は、床面及び主柱穴にて出土したものであり、本住居の廃棄・埋没時期は古墳時代中期前半と考える。

ＳＢ６号住居址（第19図）

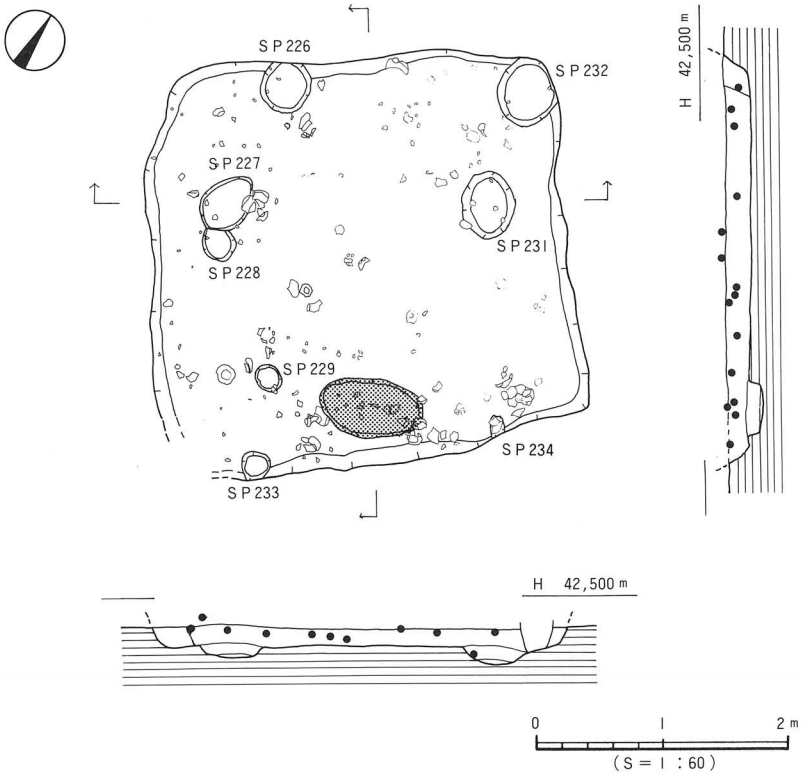
調査区中央部Ｂ10区に位置する。平面形は隅丸方形で、南東隅はＳＤ１に切られている。規模は、北西－南東で3.3ｍ、北東－南西で3.2ｍ、壁高は15cmを測る。埋土は暗褐色シルト一層で、拳大の礫が多量に含まれる。主柱穴はＳＰ－227・231・233・234の４本である。柱穴は円形～楕円形で、径10～50cm、深さ15～20cm、柱穴間は、170～200cmを測る。床面は比較的硬く、北から南に向けて緩傾斜をなす（比高差４cm）。また、掘り方最終面は、第Ⅳ層の礫が露出しており凹凸が著しい。調査時の土層観察等で、部分的に貼り床が行われていたことを確認した。炉は、住居址南壁中央部に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径80cm、短径50cm、断面は皿状を呈し、深さ10cmを測る。炉内にて焼土及び炭を確認している。床面にて４基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。

遺物は、完形品を含む土師器片を多数検出した。特に高坏形土器の出土は多く、壁体や柱穴、炉の周囲で完形品や完形品にちかい欠損品が出土した。高坏形土器の量に比べ、甕形土器、壺形土器等の出土量はきわめて少量であった。

出土遺物（第20図・第21図）

甕形土器（31・32・36）　短く外反し、頸部内面に明瞭な稜をもたないものである。口縁上部は、31は内湾し、32は外反する。口縁端部は共に外傾する。36は、球状の体部で、内面は頸部下端以下を削り調整を行う。

壺形土器（33～35・37）　33・34は口縁上部がわずかに内湾する。いずれも小片である。



第19図　SB6 測量図

35は肩部が張り、内面に削り痕を顕著に残す。頸部内面の稜は不明瞭。37は小型品の底部片である。やや器壁が薄い。

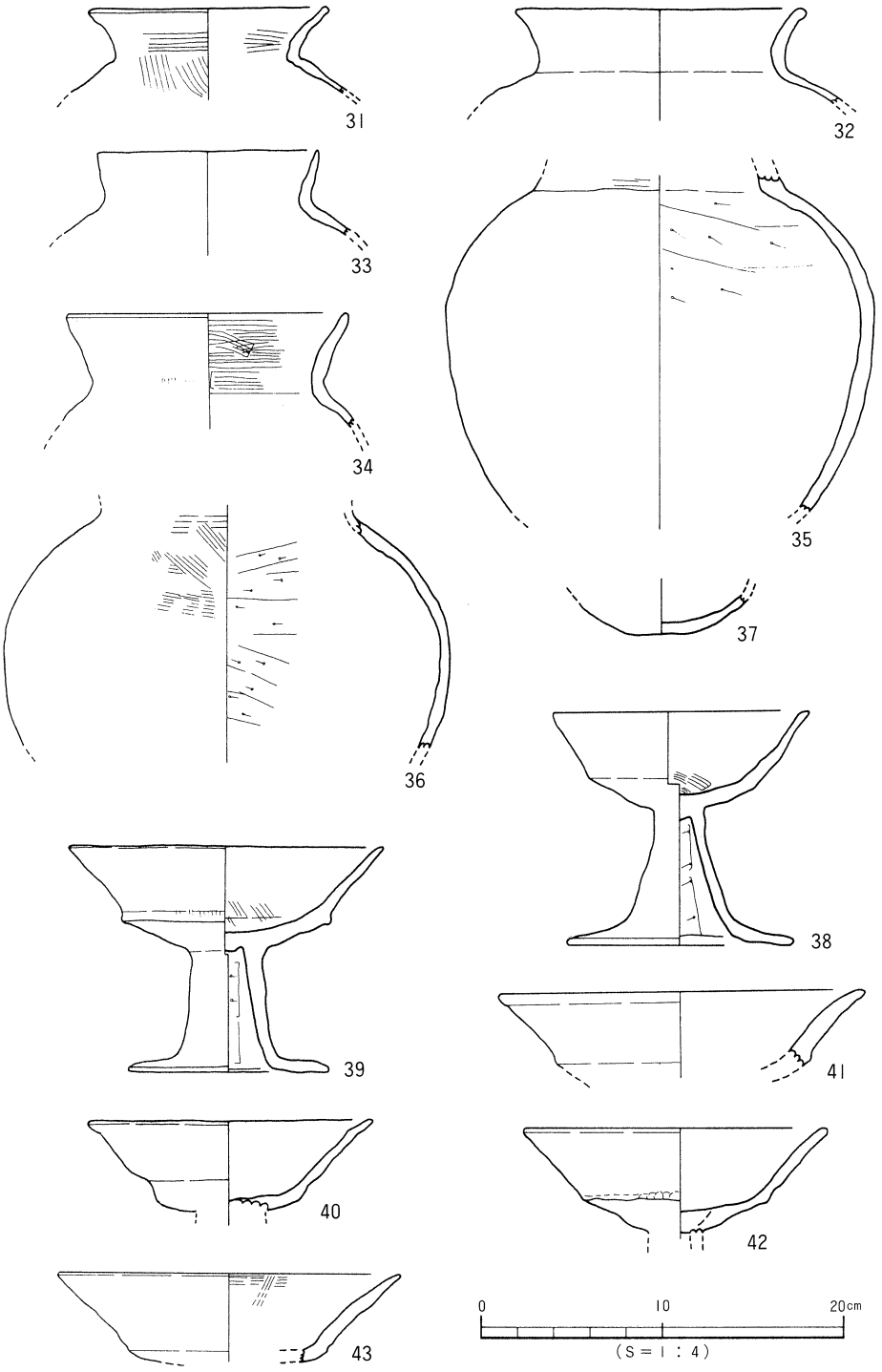
高坏形土器（38～52）　坏部の形状により三分類できる。

A類（38）　口径に比べ、坏が深いものである。屈曲部の稜も不明瞭で、椀状を呈する。

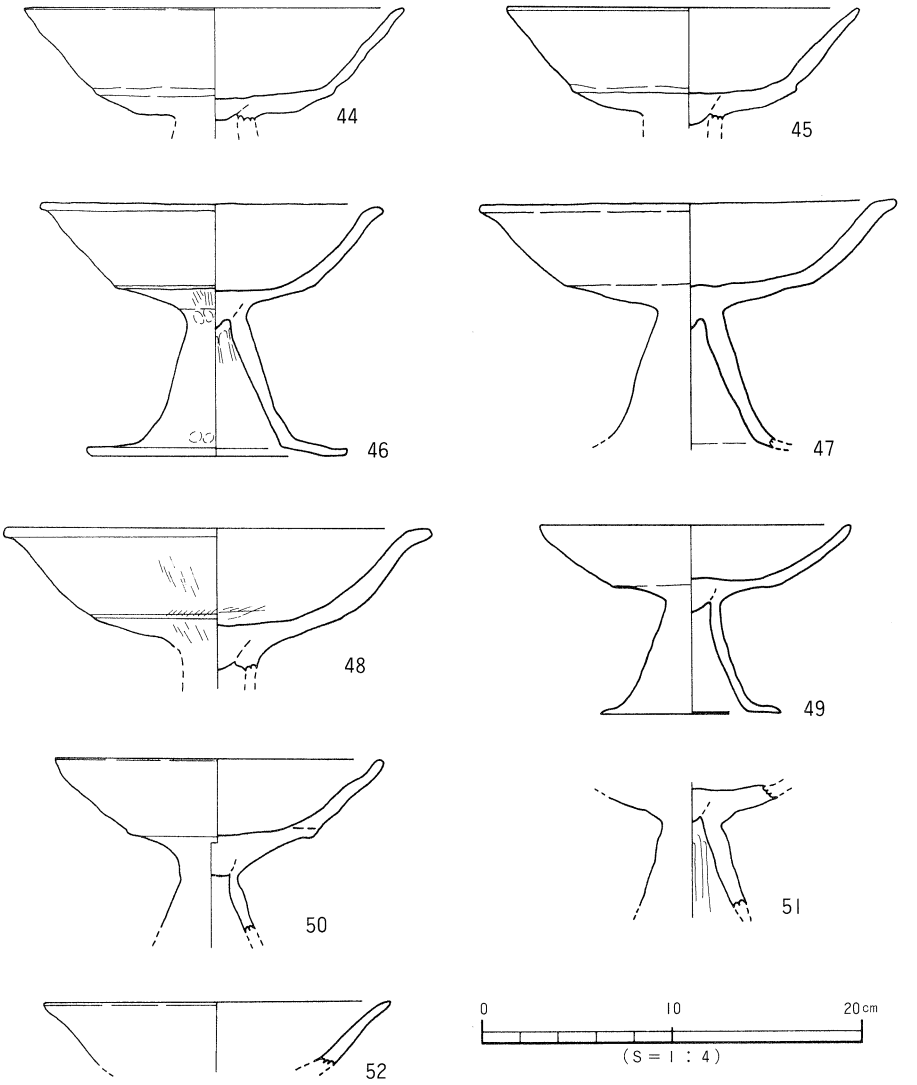
B類（39～48）　口径が大きく、屈曲部に段ないし稜をもつもの。

C類（49・50・52）　口径が大きく、屈曲部に段、稜をもたないもの。ただし、接合下部に段をもつ。

A類である38は口縁端部がわずかに外反し、端面は内傾する。B類は、法量により大中小に分けられる。口径15～17cmの小型品（39・40・42）は屈曲部に段をもつ傾向にある。屈曲部の仕上げにより段は丸みを呈することが多い。坏部は口縁部が外反するが、口縁上部はナデによりわずかに内湾する。口径17～20cmの中型品（44・45）は坏底部内面が平坦となり、段が弱い。口縁上部はわずかに内湾する。口径20cm以上の大型品（47・48）は口縁端が水平にわずかに曲げられる。端部は丸みのある三角形を呈する。C類は口径17～20cmの中型品である。口縁上部は内湾する。



第20図　SB 6 出土遺物実測図 (1)



第21図　ＳＢ６出土遺物実測図 (2)

坏部は口縁部が外反するが、ナデによりわずかに内湾することを共通とする。

坏底部は充塡技法を用いるものが多数をしめる (39・44・45・46・48他)。

脚部は裾部が大きく開き、内面の柱裾部境に稜をもつ。柱内面は削り痕を残す傾向にある。

時期：出土遺物は良好な状況であり、よって、本住居址の廃棄時期は古墳時代中期に比定されよう。

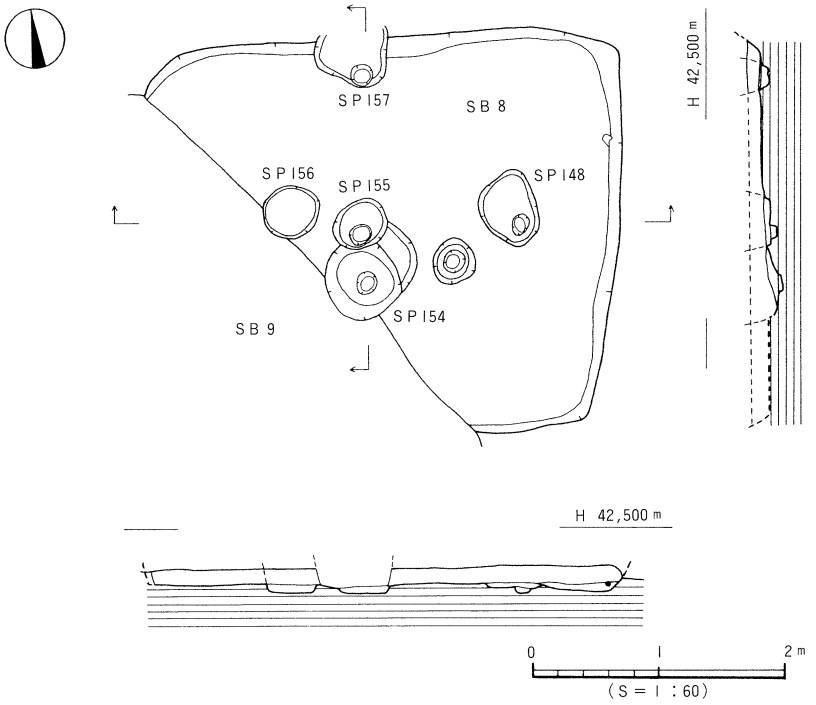
古墳時代後期

ＳＢ８号住居址（第22図）

調査区南西部Ｃ７区に位置する。住居址西半部はＳＢ９号住居址に切られている。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存南北幅3.7ｍ、東西幅3.2ｍ、壁高10cmを測る。覆土は暗褐色シルト一層である。床面は硬く、わずかに北から南に向けて傾斜している（比高差４cm）。床面にて６基の柱穴を検出した。ＳＰ－154と、北壁中央部を切った状態の柱穴ＳＰ－157は共に15号掘立柱建物柱穴である他にＳＰ－148は16号掘立柱建物柱穴である。他の柱穴は本住居址に伴うかどうかは不明である。

遺物は、埋土より土師器・須恵器の少片が出土した。

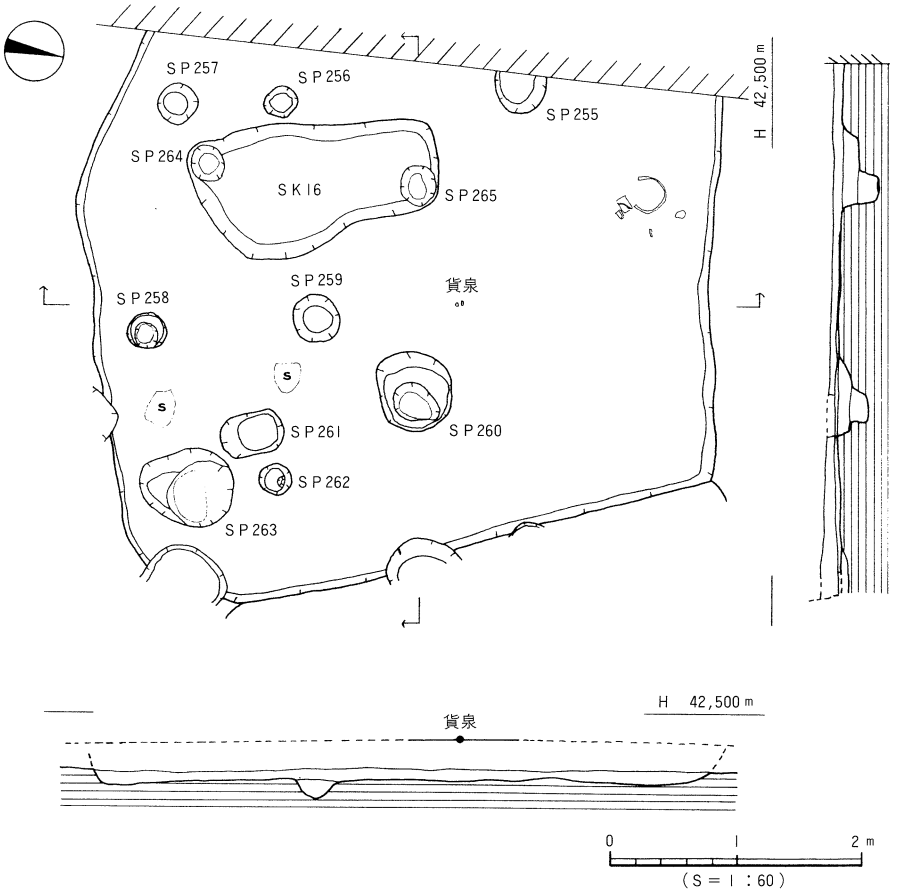
時期　本住居址を切る15・16号掘立柱建物は時期の特定ができないものである。本住居址出土遺物は、時期特定に有効な資料ではない。ただし、ＳＢ９号は古墳時代中期後半以降のものであり、切り合い関係より、本住居址の下限を古墳時代後期後半に考えることができる。



第22図　ＳＢ８ 測 量 図

ＳＢ９号住居址（第23図）

調査区南西隅Ｃ５区に位置する。東壁はＳＢ８号住居址を切り、西壁は調査区外へ続く。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存南北幅4.8ｍ、東西幅4.5ｍ、壁高は最深部で８cmを測る。覆土は暗褐色シルトである。床面は硬く踏みしめられており、住居址中央部がやや高くなっている。断面土層の観察と、遺物の出土状況等から、本住居址は暗褐色シルトを貼りつけた貼り床構造の可能性がある。また、住居址南西部にて長方形状土壙（ＳＫ16）を検出した。規模は南北２ｍ、東西１ｍでやや南側が幅広になっている。断面は皿状を呈し、深さ15cmを測る。本土壙の北東隅及び南西隅の床面にて各々、柱穴１基を確認した。本土壙の覆土は、住居址と同様であるため、本土壙は本住居址の施設であると考えられる。しかしながらその性格は不明である。



第23図　ＳＢ９ 測 量 図

住居址床面にて９基の柱穴を検出した。ＳＰ－255・263は15号掘立柱建物柱穴である。他の柱穴は本住居址に伴うかどうかは不明である。また、本住居址ほぼ中央部の第Ⅲ層（本住居址埋土を覆う）より『貨泉』が検出されている。

遺物は、第24図53は床面出土、他は埋土より出土したものである。

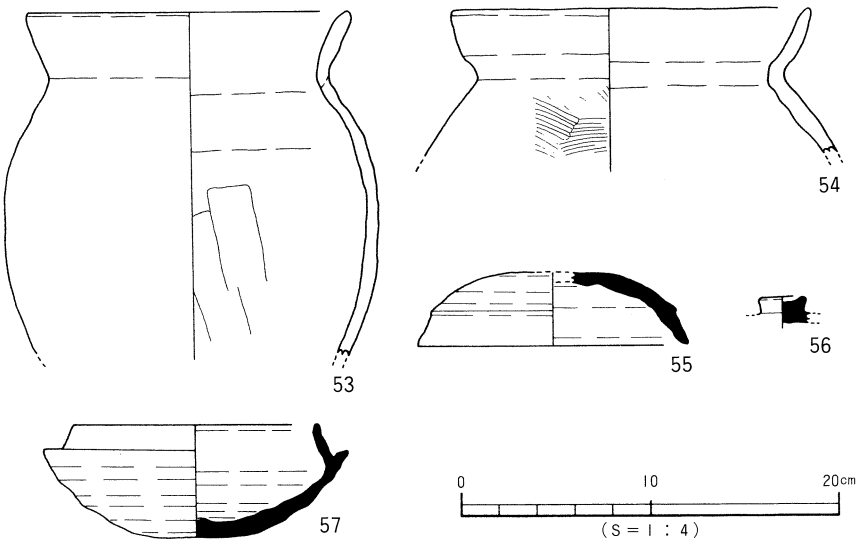
出土遺物（第24図）

53は床面直上で胴下半を欠くもので、他は埋土ないし埋土上部の包含層出土品となる。

土師器　53・54は長胴を呈する甕形土器である。53は口縁端部が外反し、端部は丸みを持つ。54は口縁部は内湾し、端面は丸みをもつ。

須恵器（55～57）　55・56は坏蓋片である。55は外傾する口縁部をもつ。56はくびれて立ち上がり、天井部が凹む珠を持つ。57は器高の高い坏身である。立ち上がりは内傾する。

時期：床面出土の長胴の甕形土器53が時期特定に有効な資料である。その特徴より古墳時代後期６世紀前葉に比定されるものであろう。よって、本住居址の廃棄・埋没時期も６Ｃ前葉と考える。



第24図　ＳＢ９出土遺物実測図

ＳＢ５号住居址（第25図）

調査区中央やや南東Ｂ３区に位置する。ＳＫ２（弥生後期後葉）を切り、ＳＤ１（古墳時代中期以降）、10号掘立柱建物（古墳時代後期以降）に切られる。平面形は円形で、規模は南北3.6ｍ、東西３ｍ、壁高10cmを測る。埋土は暗茶褐色シルト一層である。本遺構に伴う施設は未検出である。

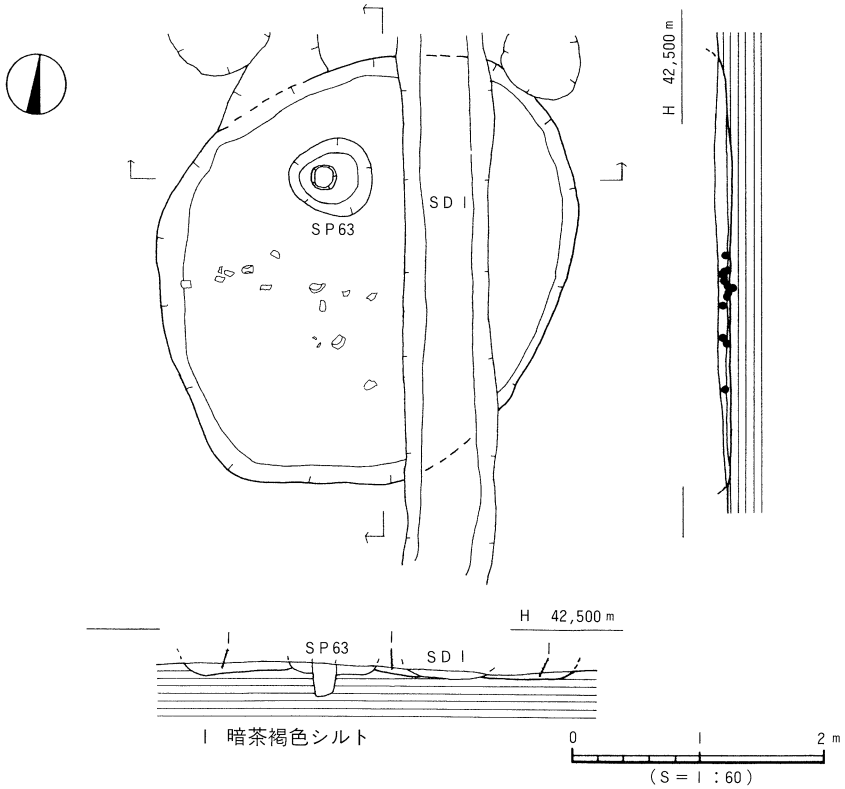
遺物は、床面より浮離した状況で出土した。埋土と本遺構を覆う包含層土壌とは判別しがたく、ＳＢ５に確実に伴うと考えられる遺物の特定はできなかった。

出土遺物（第26図）

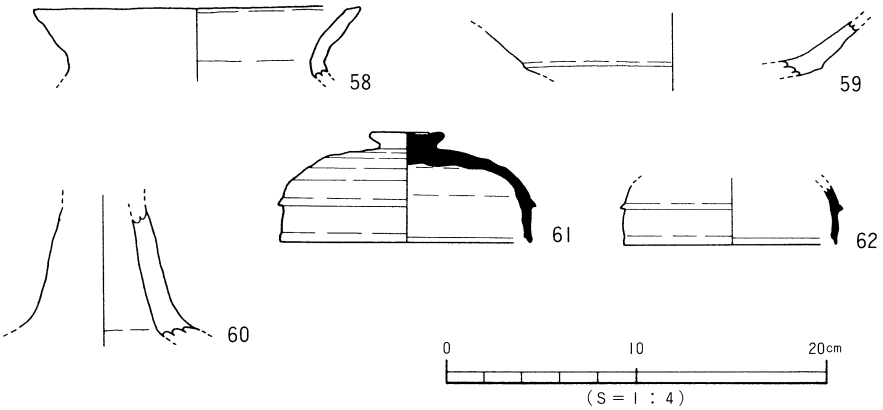
土師器　58は甕形土器片である。口縁端は内傾する。59は高坏形土器坏部片である。屈曲部にわずかに段をもつ。60は高坏形土器脚部である。柱内面はヘラ削り痕、内面の柱裾部境に稜をもつ。

須恵器　61は口縁部が直立ぎみに垂下し、大きめの鈕をもつ。鈕上部中央は、わずかに突出する。62は丸みのある形状をもつ。口縁部は内湾して垂下する。小片である。

時期：時期特定に有効な資料はない。ただし、切り合い関係より弥生時代後期後葉～古墳時代後期の間のものであることが知れる。



第25図　ＳＢ５ 測 量 図



第26図　ＳＢ５出土遺物実測図

ＳＢ10号住居址（第７図）

調査区Ｃ11区に位置する。ＳＢ11に切られる。平面形は隅丸方形状、ないし隅丸多角形になると考えるが、特定はできなかった。規模は北西－南東6.2ｍ、北東－南西2.1ｍ、壁高８cmを測る。ＳＫ13は本住居址の床面で検出したが伴うものであるかは不明である。さらに、床面にてピットを３基検出したが本住居に伴うかは不明である。

遺物は、床面より浮離し、埋土中に破片として出土した。

出土遺物（第27図）

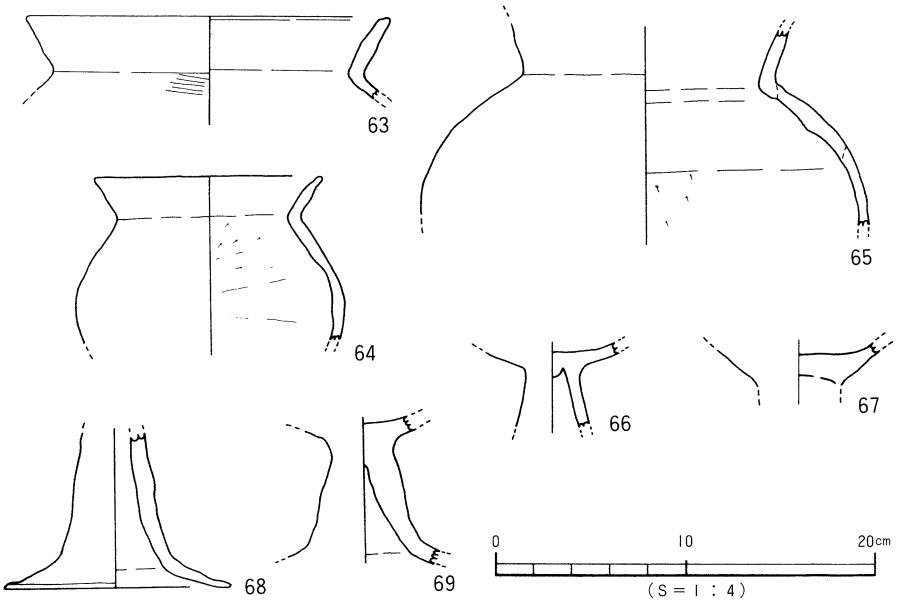
63は甕形土器小片である。口縁端面は内傾する。64は小型の甕形土器になるものと思われる。頸部内面に弱い稜をもつ。65は壺形土器である。内面は粘土帯接合痕をのこす。66～69は高坏形土器である。66・67は充塡技法を使用する。68・69は裾部が長く、内面の柱裾部境に稜をもつ。

時期：出土遺物は、いずれも埋土中でかつ破片であるため、本住居址の廃棄・埋没時期を特定するだけの好資料ではない。切り合い関係他より古墳時代中期に時期比定される可能性があることを提示するにとどめる。

ＳＢ11号住居址（第28図）

調査区北西部Ｃ13区に位置する。住居址南壁隅は溝ＳＤ３に切られ、西壁はＳＢ10号住居址と重複する。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存幅北西－南東で6.1ｍ、北東－南西で4.8ｍ、壁高は10cmを測る。埋土は暗褐色シルト一層である。

床面は比較的硬く、住居址中央部がやや高くなっており、壁体に向かって緩やかに傾斜している。炉は住居址中央やや北西よりに位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長径1.3ｍ、



第27図　ＳＢ10出土遺物実測図

短径0.7ｍ、断面は皿状をなし、深さ15cmを測る。床面にて９基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものかは不明である。

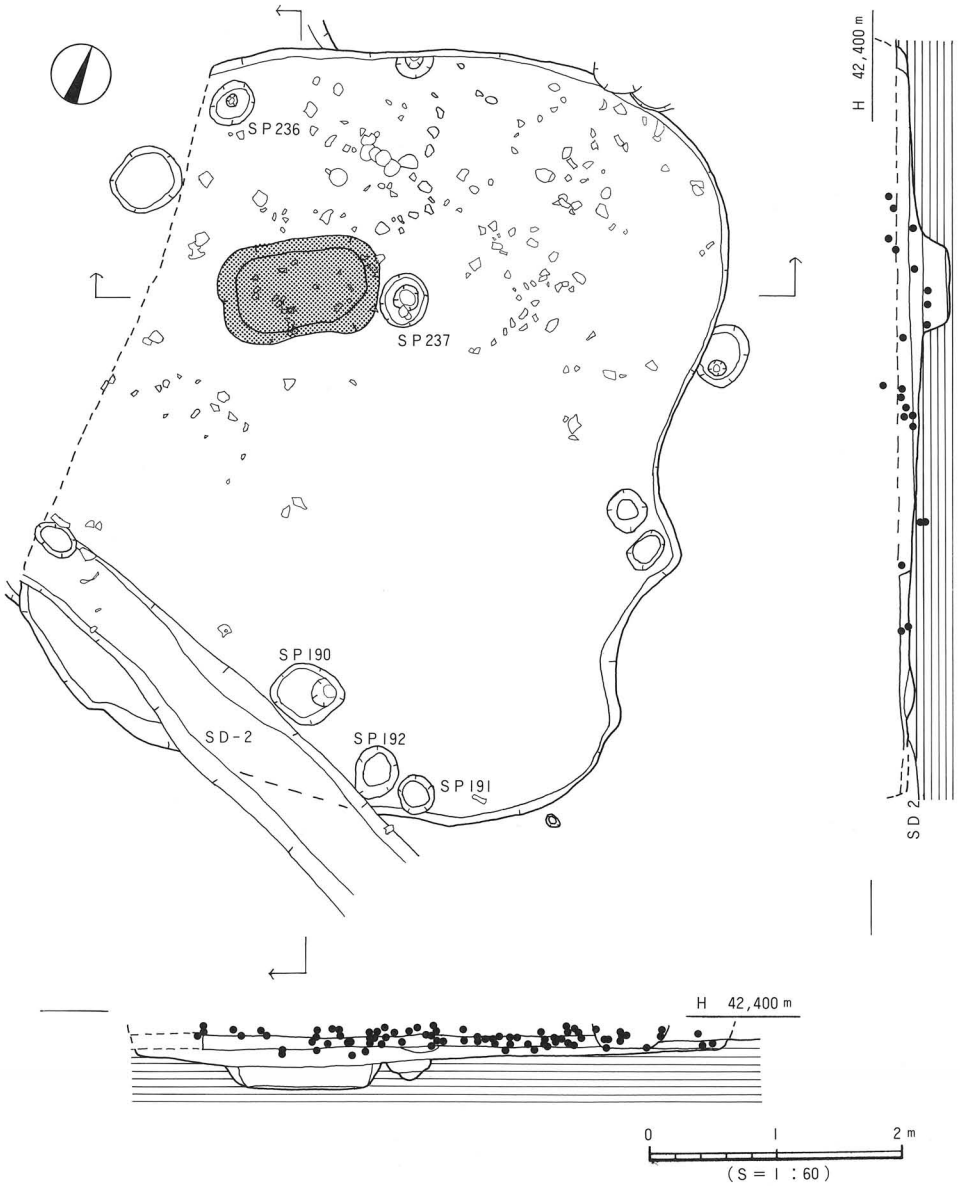
遺物は、床面直上よりのものは小量かつ小片で、大多数が床面より10数cm以上浮離した状況で出土した。特に、北半部で須恵器の坏身（完形に近いもの数点）と坏蓋片を検出した。

出土遺物（第29図・第30図）

土師器（70～80）　いずれも小片である。甕形土器（70～76）は口縁部がいずれも内湾して立ち上がる。70・71は端面をナデにより面（凹む）取りし、内傾させる。72～74は端面に丸みをもたせる。70・74は口縁上部を直立ぎみに立ち上がらせることを特徴とする。75・76はやや長い口縁部をもつ。口縁部はわずかに内湾させるものの、直線ぎみに外傾させたちあがる。77は高坏形土器の坏部である。接合部に段及び稜はなく、丸みのある形態をとる。坏底部は充塡技法を用いる。78は高坏形土器の脚部片である。柱内面の削り痕は著しく、長く内湾する裾部をもつ。

須恵器（79～108）　出土数は50点を越える。

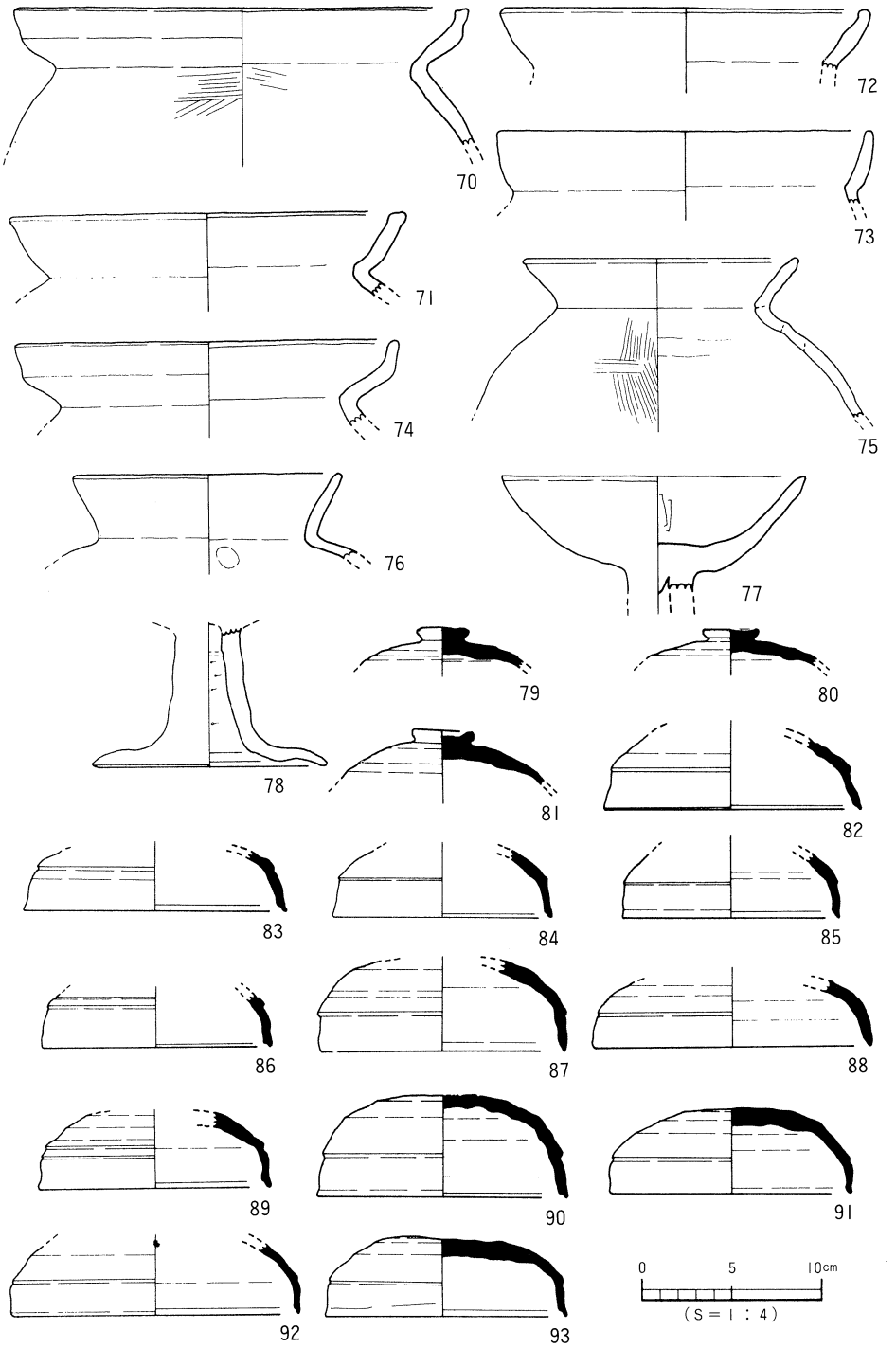
坏蓋（79～93）　小片であることが多い。79～81は珠をもつ坏蓋である。いずれも扁平で、80は中央がわずかに突出、81は凹み、79は擬宝珠状となる。82～93は珠をもたない坏蓋である。いずれも稜が退化し、丸みをおび完全に退化したものもある(88～89)。口縁部は傾斜するものがほとんどである。口縁部形態は中位が丸くふくらみをもち、口縁端部が外方に小さ



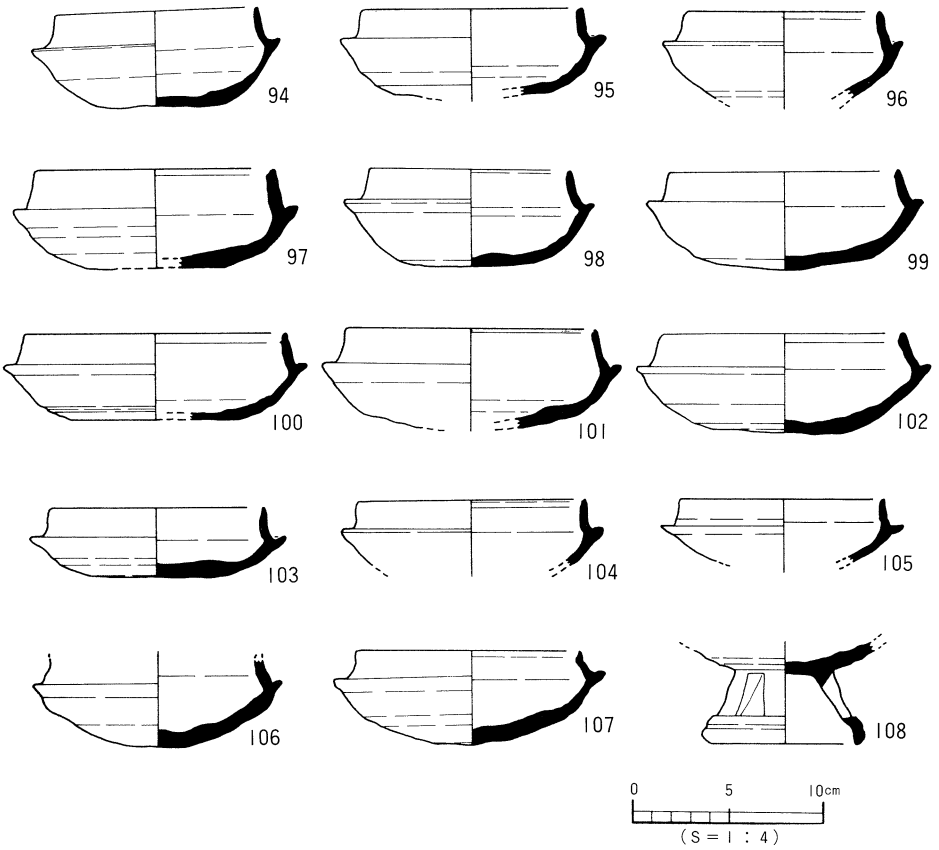
第28図　SB11 測量図

く突出するものが多くみられる(89・91他)。天井部はやや高く、丸みをもつものが多い。口縁端面は凹みないし段をもつものが多い（88は例外)。

坏身（94～107）　坏身は底部が丸みを帯びて、たちあがりが内傾ないし内傾ののち直立するものが大多数である。95・107は例外で、内湾して直立ぎみに立ち上がる。口縁端面は凹みないし段をもつ。94・103・105の端面は丸みをもつ。受部は外方に立ち上がる。105は垂直となる。



第29図　SB11出土遺物実測図（1）



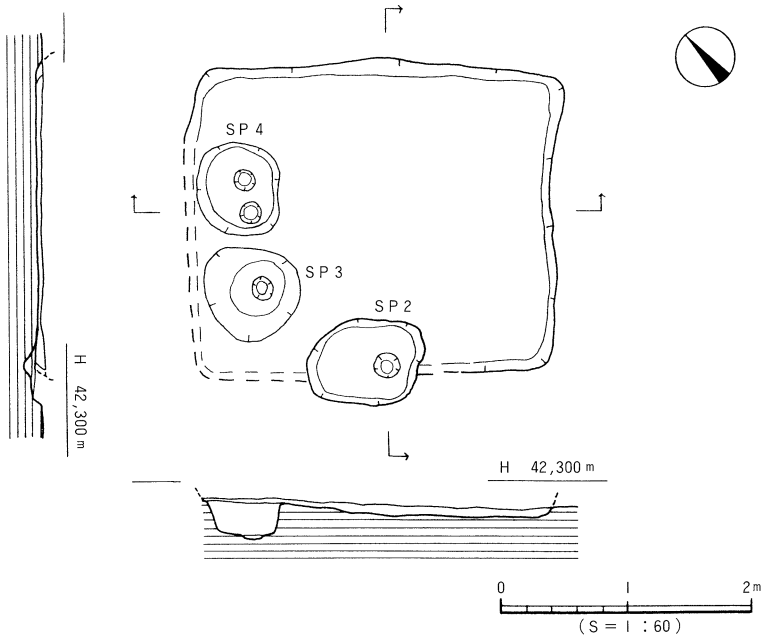
第30図　ＳＢ11出土遺物実測図 (2)

高坏（108）　108は有蓋高坏である。長方形のスカシ窓を三方に配す。脚端は内湾して直立する。外面上部に凹みをもつ。

時期：出土遺物は、埋土が10数cm堆積した後に混入したものである。よって廃棄時に伴う資料ではなく本住居址の時期特定には有効な資料とはいえない。ただし、下限を求めるならば６Ｃ前半には既に本住居址は廃棄・埋没していたものと考えられる。

ＳＢ２号住居址（第31図）

調査区南東部Ａ５区に位置する。検出面（第Ⅳ層上面）より床面までは最深部で６cmを測り、北西壁コーナーは床面が露出した状態であった。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存長北西－南東で2.9m、北東－南西で2.5mを測る。壁高は南東隅で６cmを測る。埋土は黒褐色シルト一層である。床面は比較的硬く、西から東にかけて緩傾斜をなす（比高差13cm)。主柱穴は未検出でありＳＰ－２・４は９号掘立柱建物の柱穴である。



第31図　ＳＢ２測量図

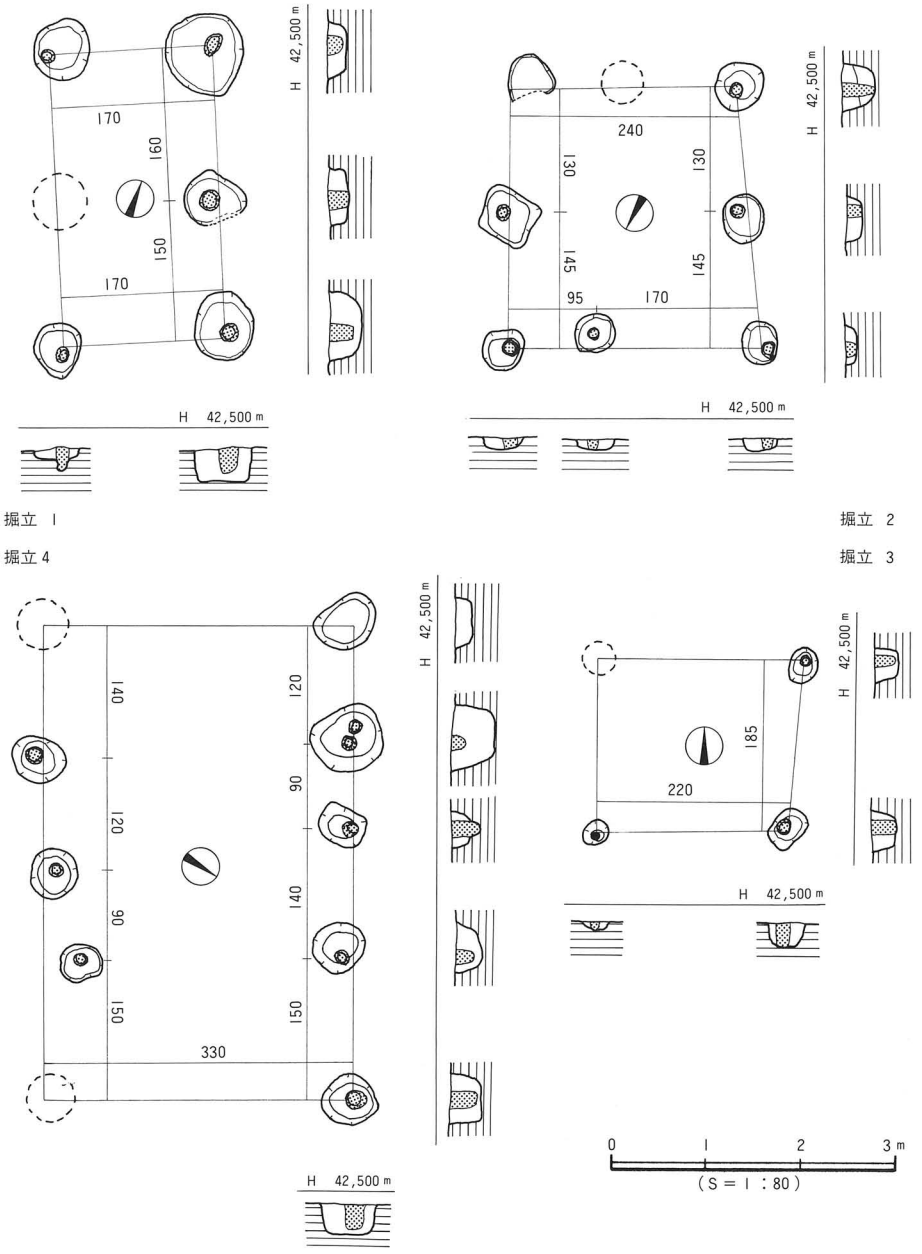
遺物の出土状況は、埋土中に弥生土器・土師器の小片が数点出土している。

時期：出土遺物は流れ込みのものであり、時期決定に有効な資料ではない。本住居を切る９号掘立柱建物址は時期を特定できない(古墳時代後期以降)。よって本住居址の構築時期は特定できない。

(2)掘立柱建物址（第32～37図）

本調査において確認された掘立柱建物址は18棟である。建物の柱穴からは、時期を特定するような資料の出土はない。方位・埋土等により少なくとも４グループに分類できる。第Ⅰ類は南北棟で覆土が褐色シルトの１号・３号・11号掘立柱建物址、第Ⅱ類は南北棟ではあるが、覆土が暗褐色～黒褐色シルトの２号・９号・12号・13号・16号・18号掘立柱建物址、第Ⅲ類は東西棟で覆土が褐色シルトの14号掘立柱建物址、第Ⅳ類は東西棟ではあるが、覆土が暗褐色～黒褐色シルトの４号・５号・６号・７号・８号・10号・15号・17号掘立柱建物址である。全般に、東西棟建物は調査区西寄りに、南北棟建物は調査区東寄りに多くみられた。これらのことから、掘立柱建物の造成時期には幅があることをうかがわせる。造成時期は、いずれの建物も竪穴式住居、土壙等の遺構を切っており、本遺跡中最も新しい時期の構築物であることが知れる。竪穴式住居址は遅くとも６世紀前葉には、埋没していたと想定でき、よって建物群は６世紀前葉以降に構築されていたものと考える。

各建物に関する詳細は表８に記す。



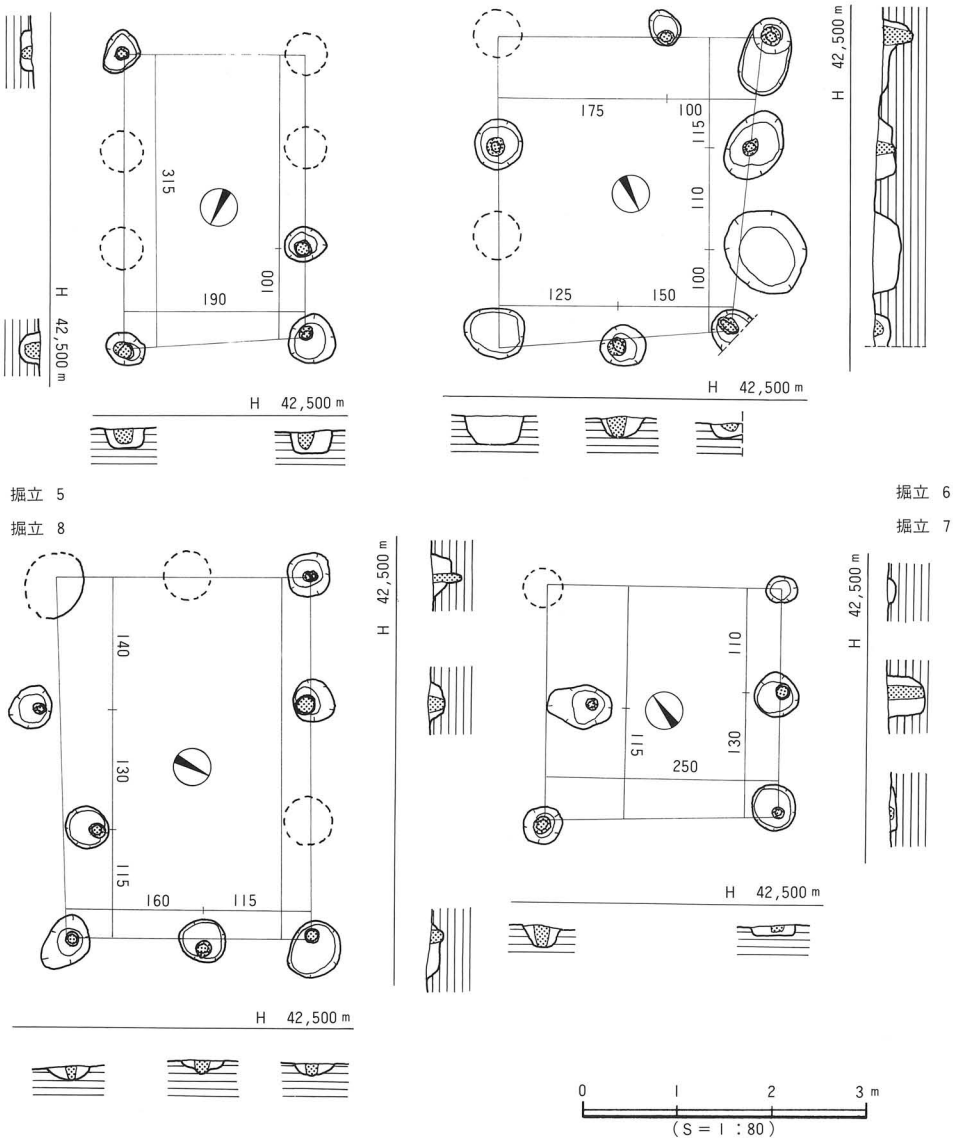
掘立 1

掘立 2

掘立 4

掘立 3

第32図　掘立 1 ～ 4 測 量 図



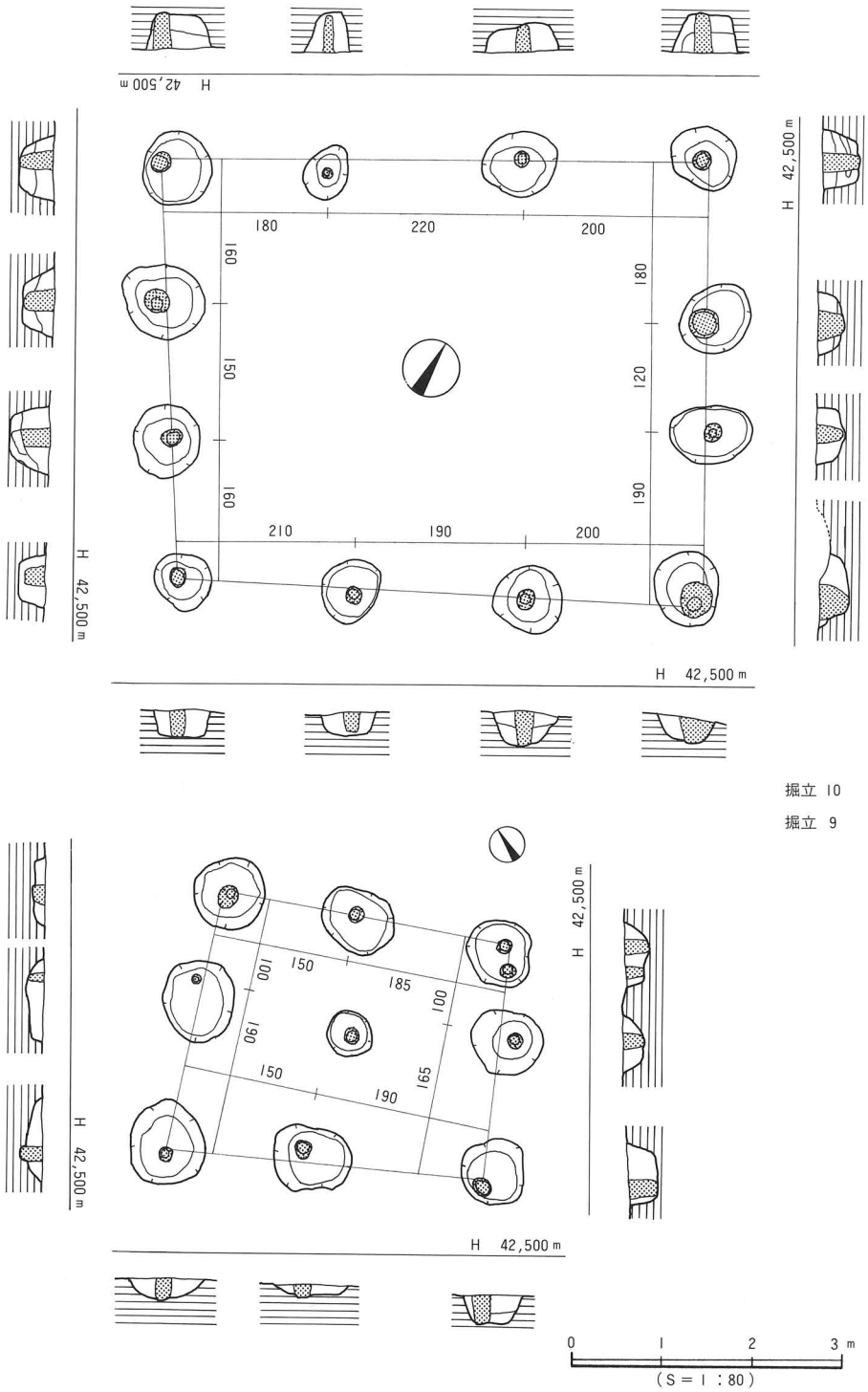
掘立 5

掘立 8

掘立 6

掘立 7

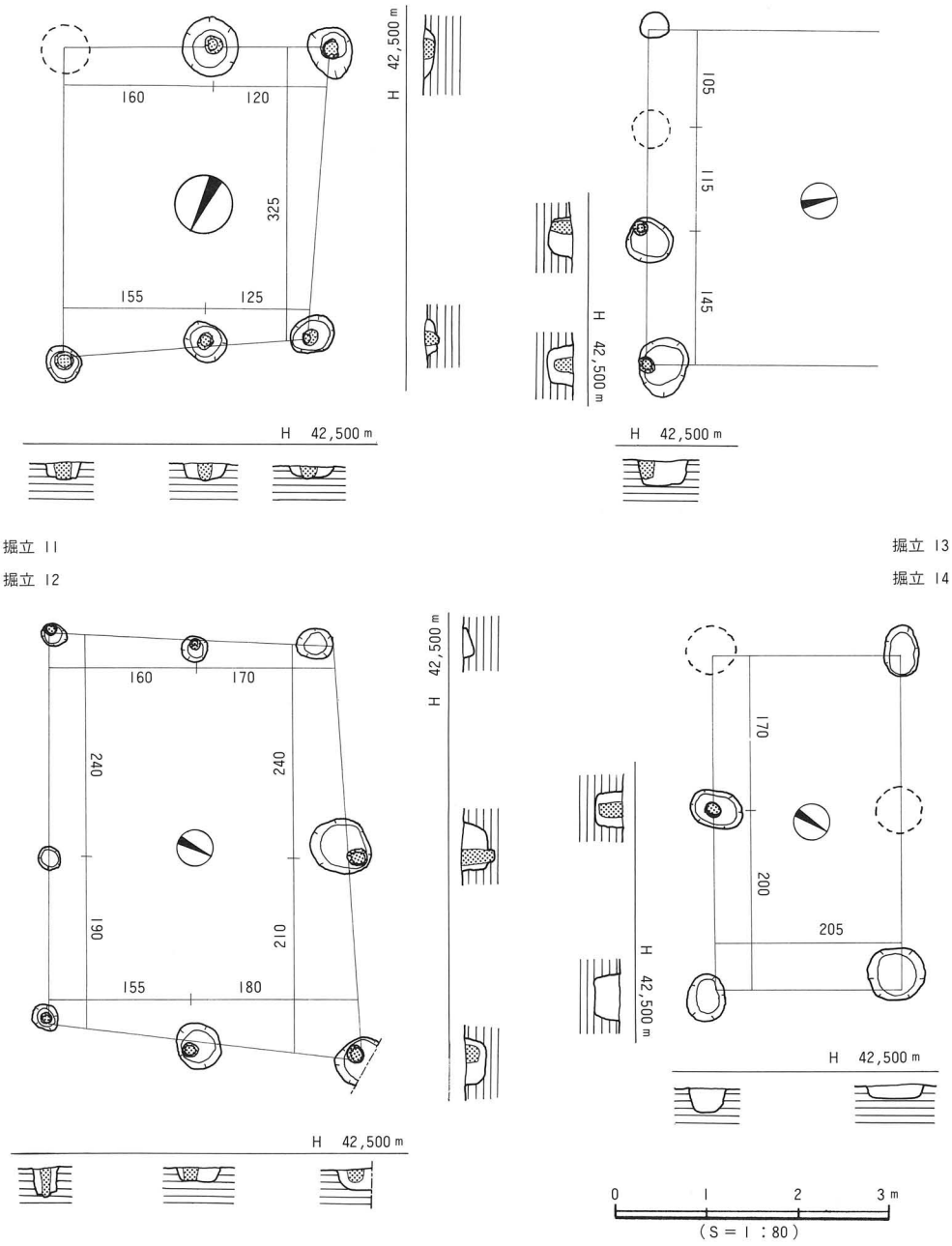
第33図　掘立5～8 測量図



掘立 10

掘立 9

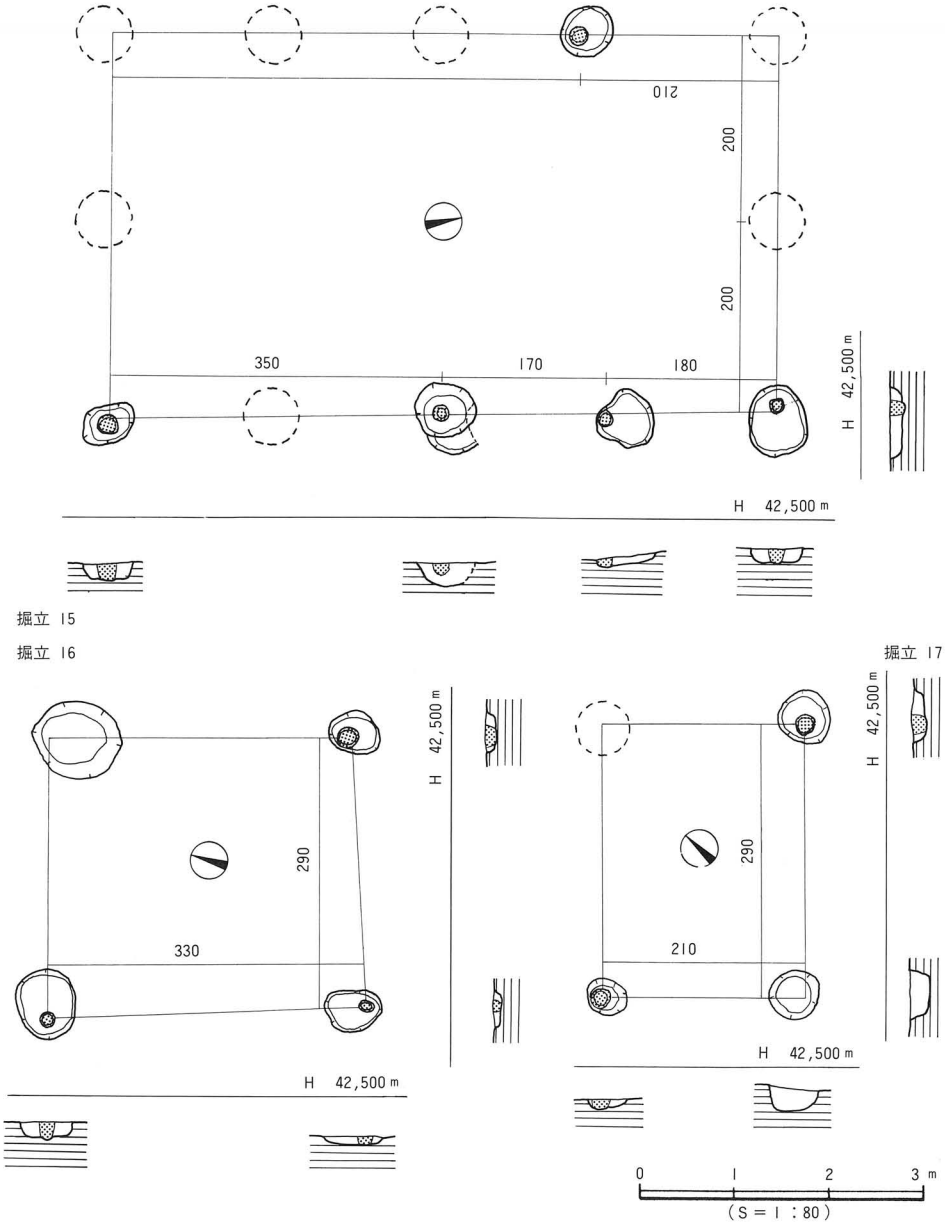
第34図　掘立9・10 測 量 図



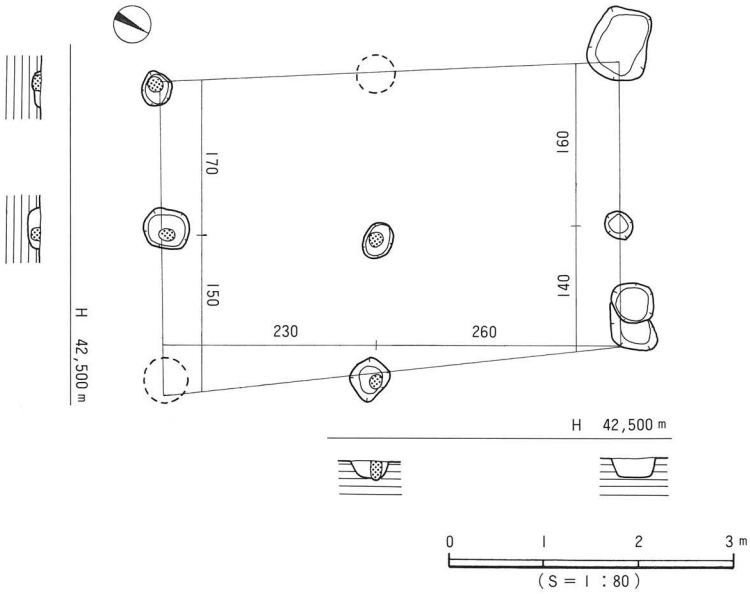
掘立 11
掘立 12

掘立 13
掘立 14

第35図　掘立11～14 測 量 図



第36図　掘立15～17 測 量 図



第37図　掘立18 測 量 図

(3)土壙（表７）

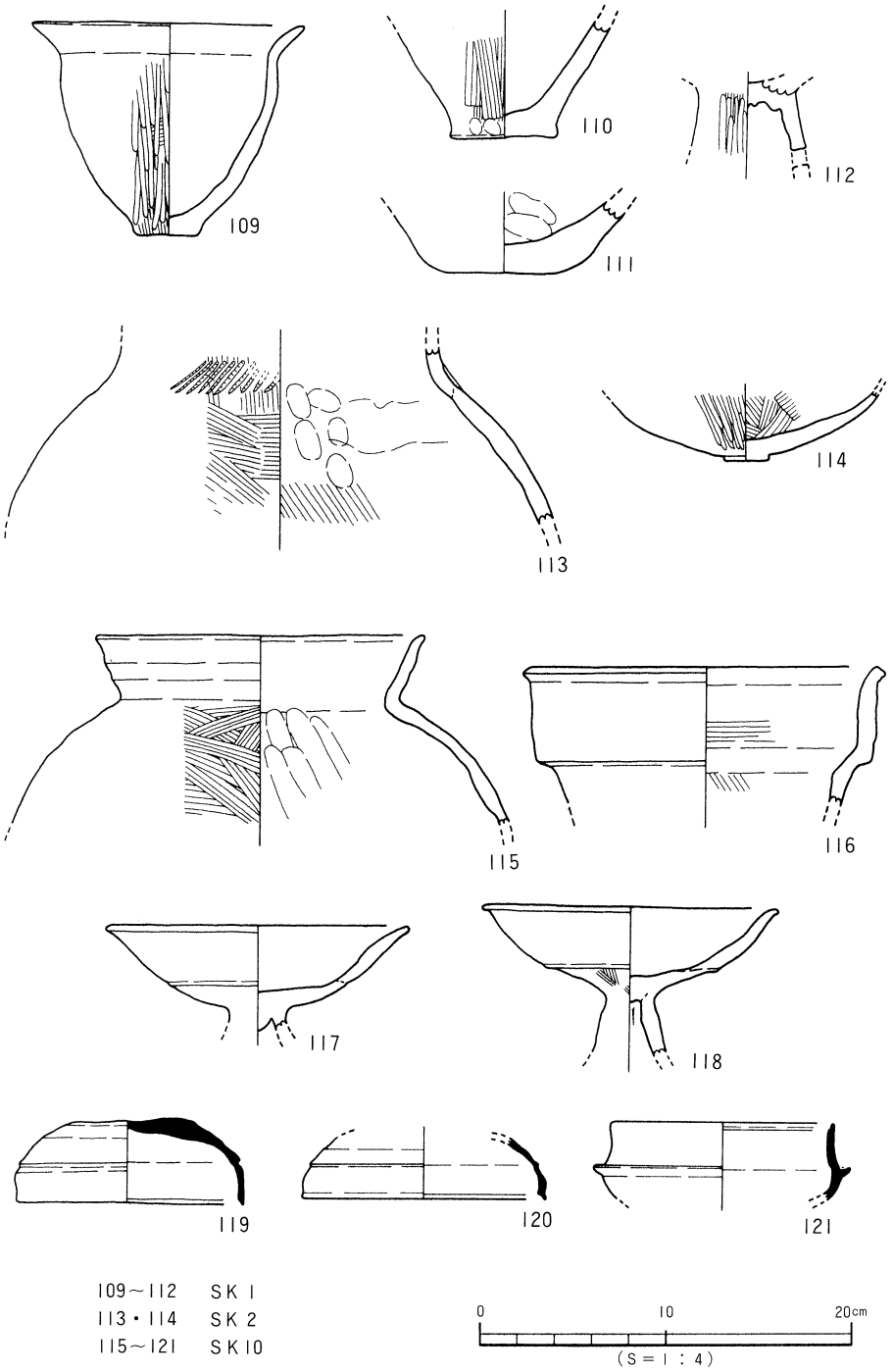
本調査において確認された土壙は16基である。第Ⅲ層中にて土壙ＳＫ13を、他の土壙はいずれも第Ⅳ層上面での検出である。土壙ＳＫ16はＳＢ９号住居址内に伴うものである。平面形で３種類に分類でき、ＳＫ１・５・９・10・11・13・14・15は円形、ＳＫ２・４・６・７・８は長方形、ＳＫ３・12は方形である。時期を知り得るものは少ないが、出土遺物を第38・39図に掲載した。出土遺物より、ＳＫ１・２・12は弥生時代後期後半、ＳＫ10・11は古墳時代中期以降のものであろう。ＳＫ13は判断しがたい。

各土壙に関する詳細は表７に記す。

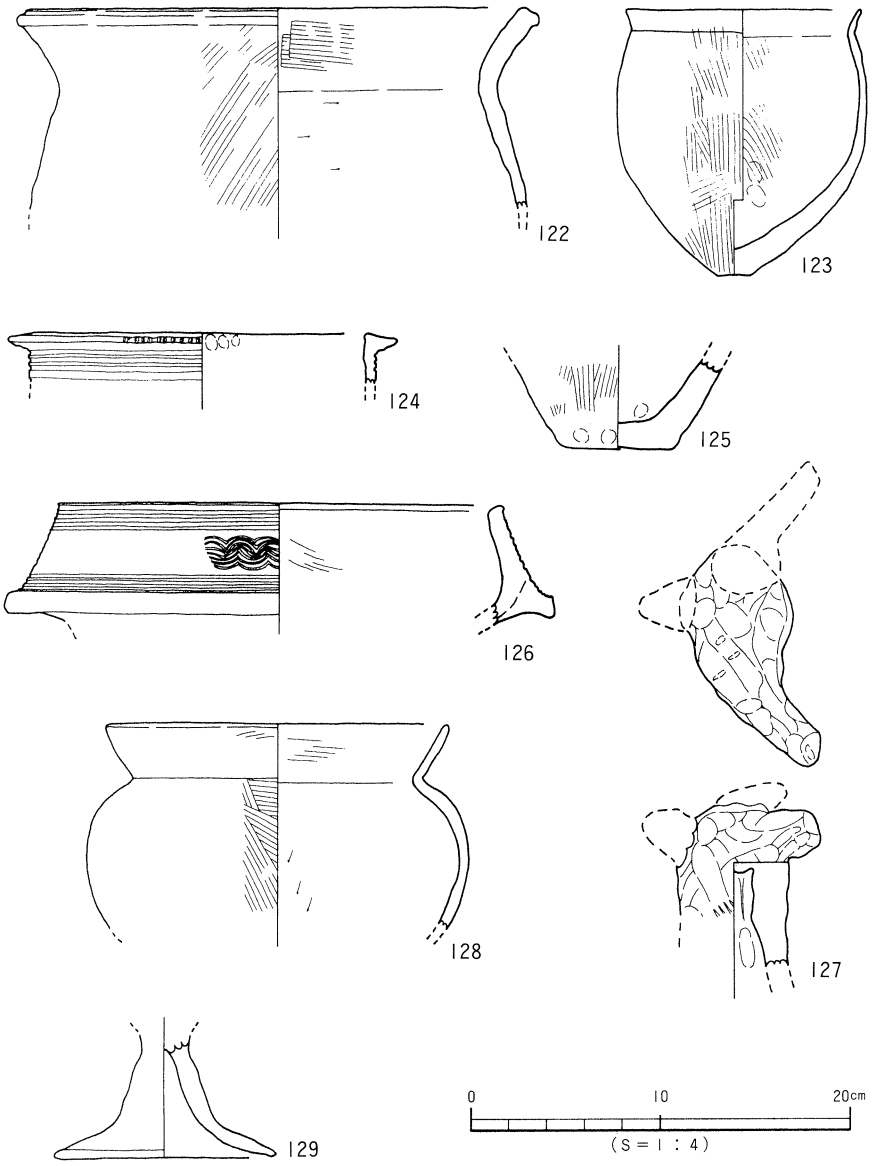
(4)溝状遺構（表６）

本調査において確認された溝状遺構は３条である。いずれも第Ⅳ層上面での検出である。調査区中央部を東西に流れる溝ＳＤ１は、溝ＳＤ３を切り東端はＳＫ１と重複する（切り合い判断できず）。西端はＳＢ11号住居址を切り、西端隅は消失している。南端にて２つに分かれ、分かれた西側では50cm大の石が敷かれていたが、その目的はわからない。時期は、竪穴式住居址、土壙を切るが掘立柱建物に切られることや埋土中ではあるが須恵器を含むことより６世紀以降に掘削されたものであろう。

各溝に関する詳細は表６に記す。



第38図　ＳＫ出土遺物実測図（1）

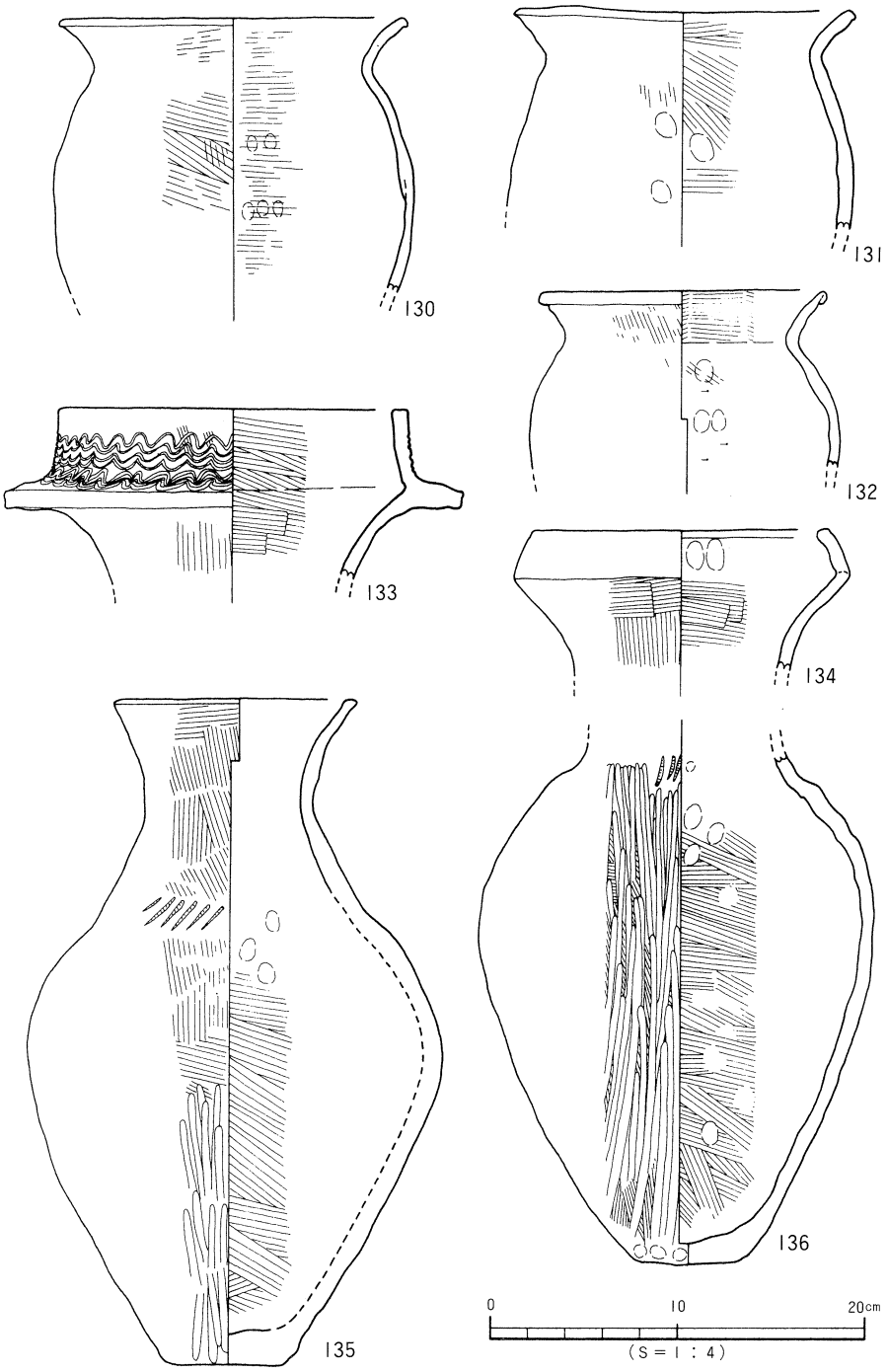


122　SK11　　123　SK12
124～127　SK13

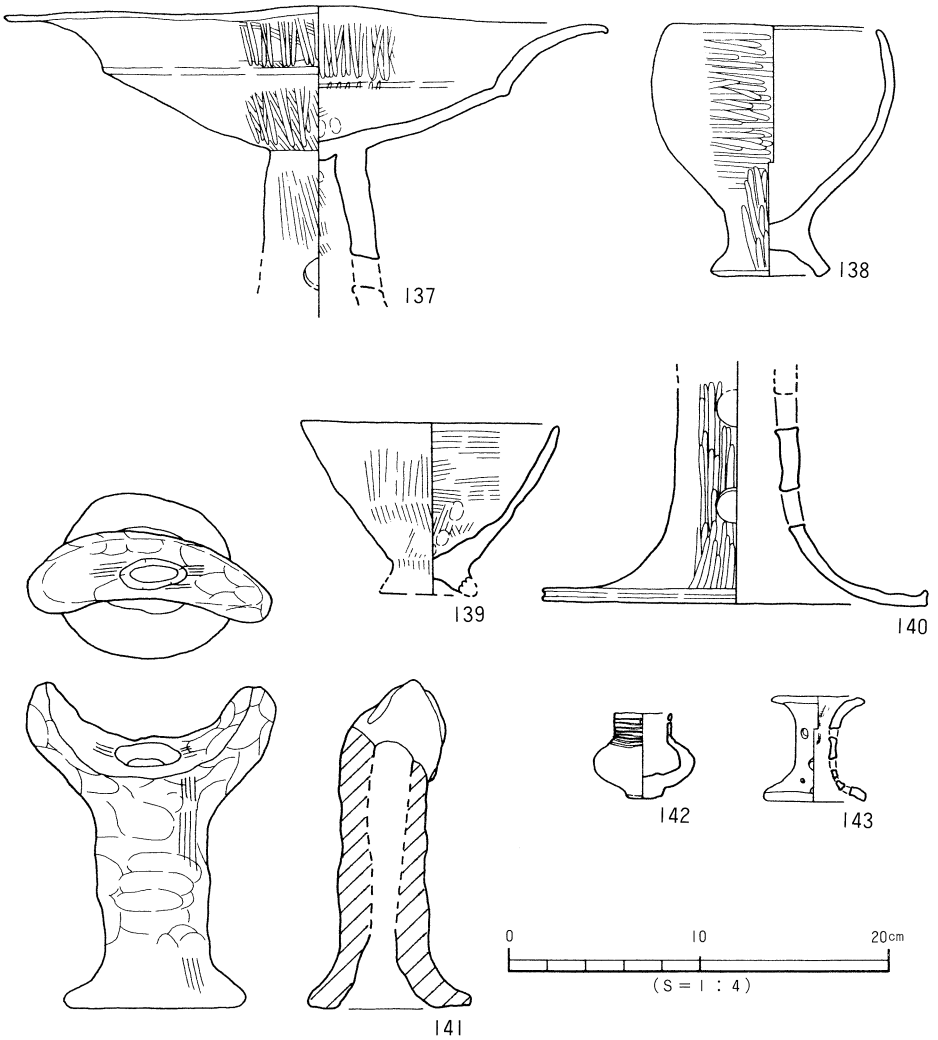
第39図　ＳＫ出土遺物実測図 (2)

(5)その他の遺構と遺物

本調査区において確認された柱穴は302基（掘立柱建物柱穴を含む）である。いずれも、第Ⅳ層上面での検出である。柱穴内からの遺物の出土はあまりみられない。他に、土器溜りを確認した。Ａ６区（ＳＸ１）・Ｂ４区（ＳＸ２・３）である。

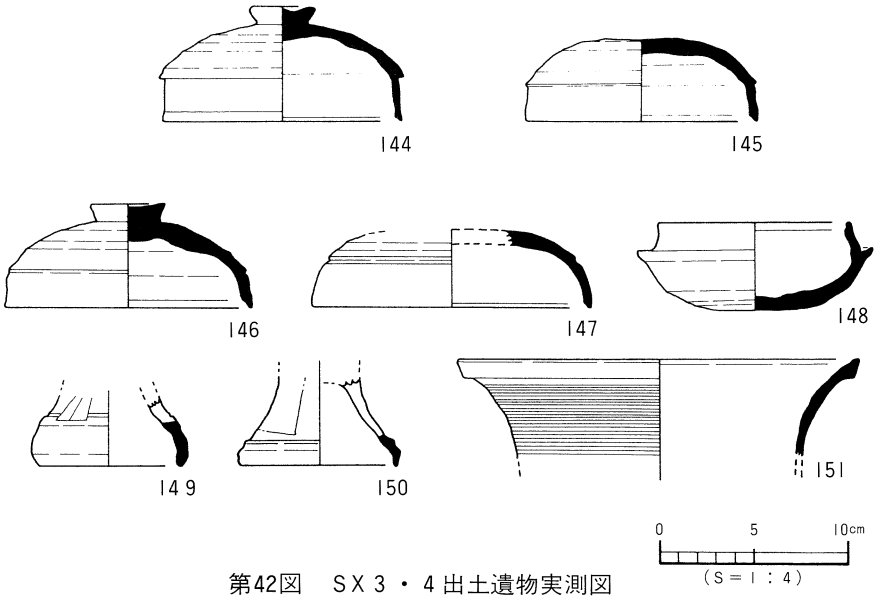


第40図　SX 2 出土遺物実測図 (1)

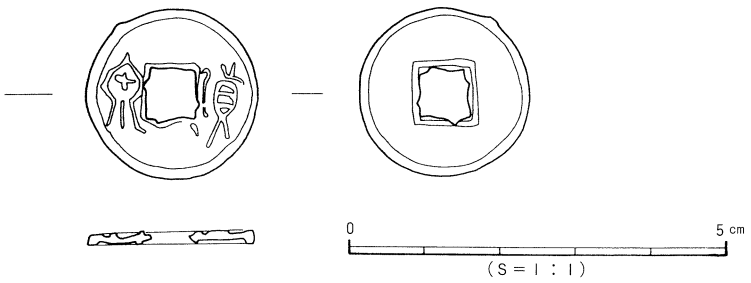


第41図　ＳＸ２出土遺物実測図 (2)

ＳＸ２ 調査区南側中央Ｂ４区に位置する。明確な掘り方は検出できなかった。50×100cmの範囲で土器が多量に検出された。出土遺物は、甕形土器・壺形土器・高坏形土器・器台形土器・支脚形土器・鉢形土器で一括品として資料性が高い。130・131は甕形土器である。肩部の張りが弱く、口縁部はゆるやかに折り曲がる。133～136は壺形土器である。133・134は複合口縁壺で、133は櫛状工具（４本歯）による波状文が２段に施される。135は内傾する頸部に外傾して開く口縁部をもつ。頸部下端には、板状工具の木口による「ノ」の字状文が押圧される(一部分にのみ施文)。136は長胴を呈するもので、頸部下端には135と同様な施文を施す。137は高坏形土器、138・139は鉢形土器である。140は器台形土器の脚部で端面には一



第42図　ＳＸ３・４出土遺物実測図



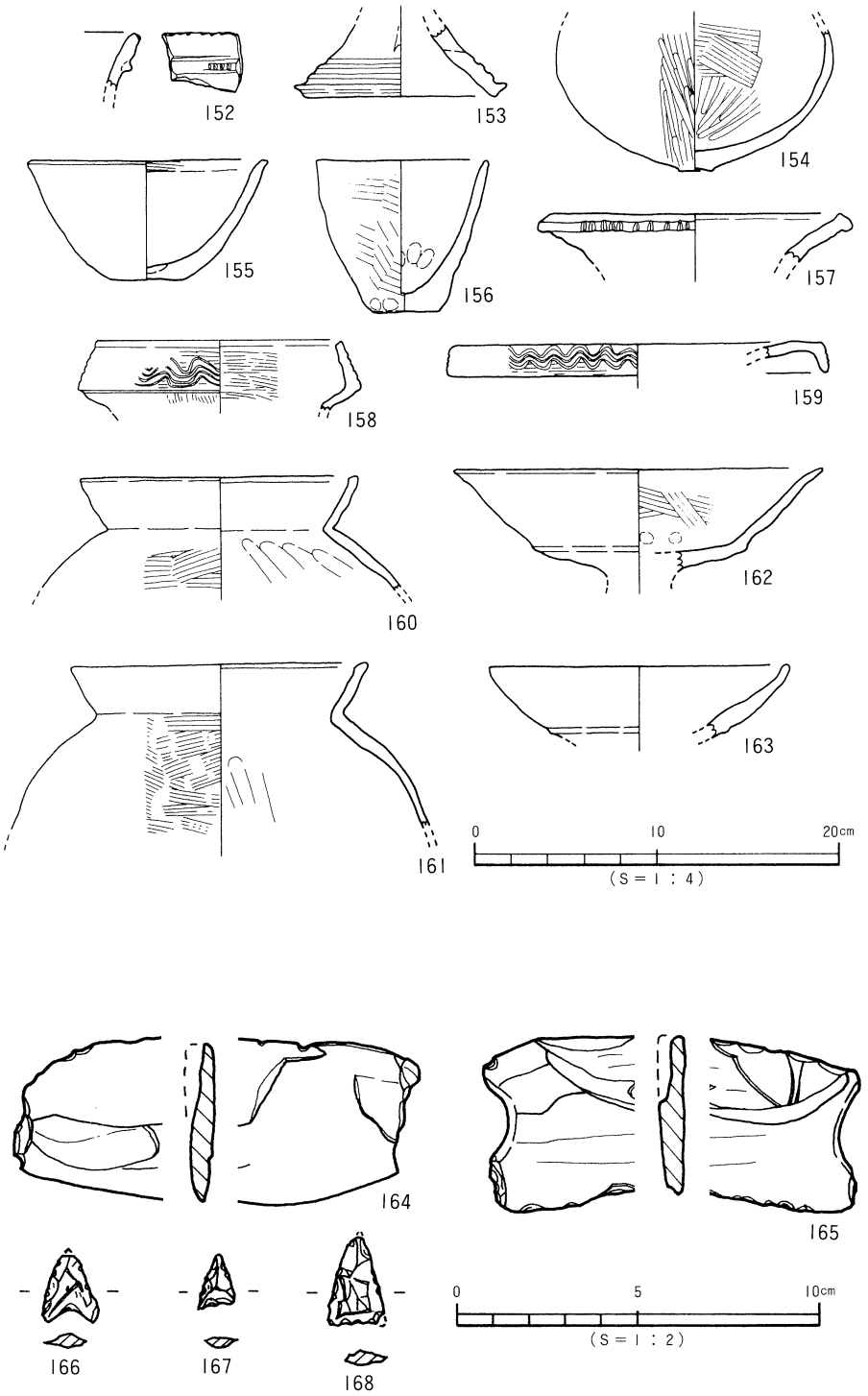
第43図　貨泉実測図

条の沈線文を施す。141は支脚形土器で、受部中央に貫通する孔をもつ。142･143はミニチュア土器で、142には沈線文と円孔が施される。時期は、弥生時代後期後葉である。

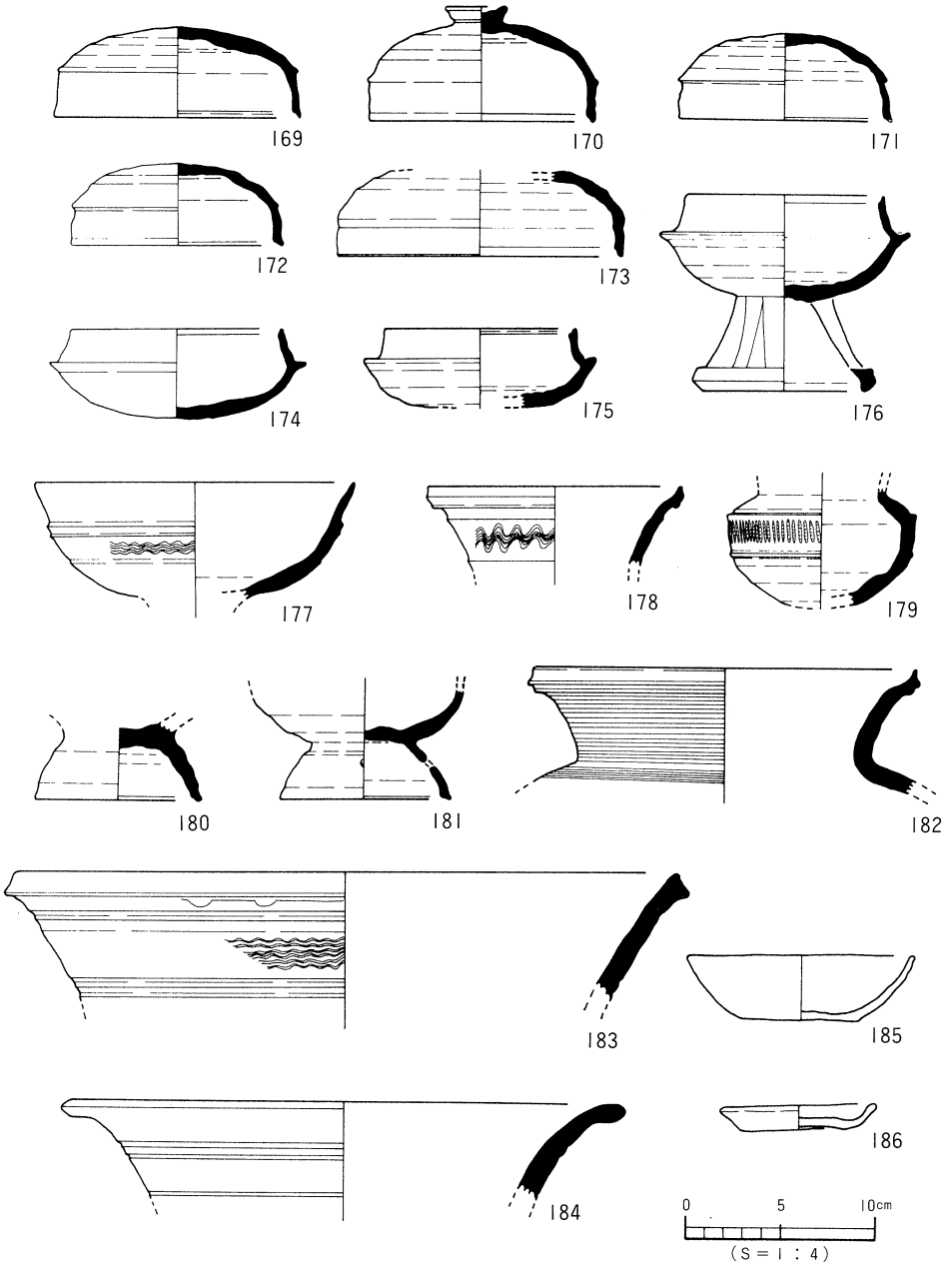
貨泉（巻頭図版１　第43図）

出土状況　ＳＢ９を覆う包含層である基本層位第Ⅲ層中より出土した。第Ⅲ層には弥生～古墳時代までの遺物が混在しており、単純な文化土壌ではない。よって、貨泉の特定な時期比定は難しい。

遺物　完存。直径2.2cm、重さ1.9ｇ、方孔は0.7～0.75cmを計る。方孔には、四方に方形を呈するように欠損部分が看取される。



第44図　包含層出土遺物実測図（1）



第45図　包含層出土遺物実測図 (2)

4．小結

(1)弥生時代

遺構　確実に弥生時代に時期比定できるのは、ＳＫ１・ＳＫ２とＳＸ１・２・３である。いずれも後期後葉のものである。ＳＫ１・２は性格は不明で、ＳＸ２は出土状況より土器の一括廃棄が行われたことが知れる。ＳＸ１・３は人為的行為の産物であるかは不明であった。また、推論の域をでないが平面形や規模よりＳＢ１・ＳＢ12は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の間に築造された可能性を考えている。弥生時代遺構はＳＢ１・12を加え、本調査地のなかでやや低い場所である南半部に散見される。このことは、当地の南及び東に後期の集落が展開されることを示唆するものであろう。

遺物　後期後葉以降の遺物が多数を占め、前期・中期後葉の遺物が数点小片として出土している。後期後葉の遺物も、ＳＫ１・ＳＸ１・２・３より出土したものが大半で、包含層出土品は少量である。このうち、ＳＸ２からは多くの土器が良好な状況で出土した。

ＳＸ２からは、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・支脚形土器が出土し、後期後葉の器種構成を知りえる好資料（一括資料）である（第40・41図）。甕形土器は、「く」字状に長く折り曲げられた口縁部と、肩部の張りは弱く長胴の体部をもつ。壺形土器は、長頸壺と複合口縁壺がある。長頸壺は内傾する頸部と口頸部、頸胴部の境が不明瞭であることを特徴とする。複合口縁壺は中型品と大型品がある。中型品は、複合口縁接合部に稜をもち、内湾して無文の複合口縁部をもつ。大型品は、接合部をやや下方へタガ状に突出させ、複合口縁部は弓状にそりながら立ち上がる。外面には波状文を施す。高坏形土器は、坏部の外反が大きく、柱部に円孔をもつ。器台形土器は、円筒形の柱部に円孔を穿つ。鉢形土器は小型品で、上げ底で坏部が内湾するものと外傾して立ち上がるものの二種類がある。支脚形土器は、受部が「Ｕ」字状を呈し、上方に伸びる二本の突起をもつ。各器種とも梅木が提示する編年試案のⅡ－２、すなわち後期後葉に属するものである〔梅木謙一　1991〕。

(2)古墳時代

本調査検出の遺構及び出土遺物の主体をなす。

前期　ＳＢ13・４は松山平野でも数少ない前期の竪穴式住居址であり、かつＳＢ13は初頭の土器様相が知れるものとして貴重な資料である。

ＳＢ13からは、甕形土器・壺形土器・甑形土器・椀形土器が出土した。甕形土器は、丸底ないし小さい平底、尖底を呈する底部に、長胴及び特に胴下半部にふくらみをもつ胴部と、「く」字状の口縁部をもつ。叩き技法が使用され、下半部は叩き後刷毛目調整を行う。壺形土器は、複合口縁壺があり短頸で、複合口縁部の内傾が弱い(直立化傾向が強い)。甑形土器は、尖底に焼成前の小円孔が穿たれる。器表外面に叩き痕を残す。焼成前に穿孔する甑形土器の本格的制作の時期は宮前川遺跡出土例を含め、松山平野では古墳時代初頭には始められ

ていたことが判る〔野口・大滝他　1986〕。椀形土器は小型品で手捏ね品である。これ等の土器群は、その特徴より古墳時代でも初頭に時期比定されるものと考える。

中期　注目されるのはＳＢ６である。遺物は、壁体に近い地点で同心円状に出土した。高坏形土器の出土数は多く、特に維存状況の良好な坏部が四方より出土した。甕形土器・壺形土器は小量でかつ、破片での出土であり、高坏形土器と好対照の出土状況を示す。この出土状況の差は興味深い事象である。土器相は、甕形土器は口縁端部の内傾と肥厚はない。壺形土器は、口径が胴径より小さく、頸部がやや短くなる。高坏形土器は、坏部形態により口径が小さく坏部が深いもの、屈曲部に段をもち、口径が大きいもの。屈曲部に段をもたず、口径が大きいものである。古墳時代中期後半の土器様相が知れるものとして好資料となるものである。

後期以降　時期特定はできないものの、掘立柱建物址は全て古墳時代後期以降のものであろう。９・10号建物は、掘り方・柱痕とも明確に検出できた。９号建物は総柱となり、倉庫的な施設となるものである。柱穴の規模や掘立柱建物の密集度は、廃寺や官衛関連遺構が検出された来住･久米地域や、同地の北東部にある福音寺町の遺跡に次ぐ検出数であり(註２)、古墳時代後期以降の平野内での当地の歴史的役割(位置)を考える必要があるかと思われる。

遺物は、５世紀末～６世紀前半の須恵器が出土している。須恵器の集落内出土数としては、松山平野でも多い方であり、掘立柱建物址数の多さとも同調しており興味深い資料である。

(3)『貨泉』の出土

包含層中の出土であるが、『貨泉』が良好な維存状況で出土した。包含層は、40cmにおよぶ堆積を測り、弥生～中世の遺物が混在するも、分層は不可能であったことより、時期特定ができなかった。発掘調査出土品としては四国では初例であり、その点においては貴重な資料である。時期を特定できないものの、『貨泉』を入手できた集落が当地域に存在していたことは間違いなく、当地を含めたこの地域の重要性は認めなければならないだろう。

(4)竪穴式住居址の概要

13棟の竪穴式住居址を検出した。時期を特定できる資料が少ない。弥生時代として断定できるものはない。古墳時代に比定されるものは、前期ＳＢ４・13、中期ＳＢ３・６・７・９である。他の住居址については時期特定が推論の域をでないため論述をさける。

古墳時代の住居址　本調査地検出の古墳時代竪穴式住居址は全て四角形プランをとることが判る。（ＳＢ４は、南側壁が孤を描き突出するものの、四角形プランに属するものと考える)。主柱穴数は、四本柱（四本柱と推定されるものを含む）であるものがＳＢ13・３・６・７、不明なものがＳＢ４・９である。ＳＢ３の主柱穴は、南壁部に接する位置と壁面を切って立柱させる。平野内では、文京遺跡10次調査ＳＢ２・４（弥生後期）に類例がある〔愛媛大学　1991〕。炉は、ＳＢ13・３・６で検出され、主柱穴間に配置される。この他住居址に土壙をもつものにＳＢ７・９がある。以上のことより、ＳＢ13・３・６・７は形態・規模・施

設等において平野内検出の古墳時代竪穴式住居址と同じ様相を示し〔梅木謙一　1991〕、ＳＢ４・９はやや異相であるといえる。

この他に注目されるものでは、ＳＢ12の形態と、幾つかの住居址にみられた凹凸の著しい床面、主柱穴壙の未検出住居の存在である。

ＳＢ12は、一辺６ｍ前後の多角形（六角形を推定）を呈するものと考えられる。多角形住居址は、平野内では桑原高井遺跡ＳＢ２（弥生末～古墳時代初頭）に類例がある〔森光晴 1980〕。桑原高井遺跡ＳＢ２では高床部を設置している。今回の調査では断定できなかったが、ＳＢ７北壁（消失）とＳＢ12北壁との間にＳＢ12を切るＬ字状の構築物がある。桑原高井遺跡検出例より本例がＳＢ12の高床部であった可能性を考えている。

ＳＢ３・６・７・10・11・12の掘り方最終面は、下部層である第Ⅴ層の礫が露出し凹凸が著しい。ＳＢ９は全面貼り床（改築時における床の貼りかえの可能性もあり）で、ＳＢ６では貼り床にしたと思われる部分を検出している。ＳＢ３・７・10・11・12は貼り床であったかは判断できなかった。松山大学構内遺跡２次調査〔梅木　1991〕の竪穴式住居址では、掘り方最終面に露出する礫上に完形に近い土器が検出された例もあり、竪穴式住居址の床面使用法について課題を提示するものである。

以上、簡単に調査の報告を行った。貨泉の出土は、本遺跡だけでなく、松山平野の原始・古代を考える上には、時期特定はできなかったが貴重な資料になるものと考える。竪穴式住居址と記述したもののなかで、ＳＢ２・５は規模が小さい。居住は可能ではあるが、大型のものとは、役割に差異があるものと考えるがどうだろうか。また、掘立柱建物址の柱穴の特定と判断については、調査の度に悩ませられる。今回は、規模・埋土・距離等から判断し、報告においては、現場で判断したものを全て掲載した。ただし、図化すると違和感がある建物もある。　（梅木）

〔文献〕

梅木謙一　1989「樽味四反地遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一　1991『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会

梅木謙一・宮内慎一　1991「道後今市６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会

大滝雅嗣・野口光比古　1986『宮前川遺跡』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

古代学協会四国支部　1988『道後城北遺跡をめぐって』シンポジューム資料

西田　栄・森　光晴・大山正風　1976『文京遺跡』愛媛大学・松山市教育委員会

宮本一夫　1989『樽味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室

森　光晴　1986『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会

遺構・遺物一覧（遺構一覧：宮内慎一、遺物観察表：梅木謙一・水口あをい）

(1)　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3)　遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定地

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。　例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表４　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土壙	炉	カマド	周壁溝	備　考
13	古墳初頭	隅丸方形	3.9×3.6×0.32	2(2)			○			ＳＢ３に切られる
4	古墳初頭	楕円形	5.6×4.0×0.20	6						
1	弥生中～古墳初	円形	7.5×2.5×0.15						溝	
3	古墳中期	隅丸方形	3.0×2.6×0.20	4			○			ＳＢ13を切る
12	古墳中期	隅丸多角形	6.0×6.0×0.20							ＳＢ７に切られる
7	古墳中期	隅丸方形	4.6×3.6×0.22	3(1)						ＳＢ12を切る
6	古墳中期	隅丸方形	3.3×3.2×0.15	4			○			ＳＤ１に切られる
8	古墳後期	隅丸方形	3.7×3.2×0.10							ＳＢ９に切られる
9	古墳後期	隅丸方形	4.8×4.5×0.08			○				ＳＢ８を切る
5	弥生後～古墳後	円形	3.6×3.0×0.10							ＳＫ２を切る
10	古墳中期	隅丸方形	6.2×2.1×0.08			○				ＳＢ11に切られる
11	古墳後期	隅丸方形	6.1×4.8×0.10				○			ＳＢ10と重複
2	時期不明	隅丸方形	2.9×2.5×0.06							

表５　竪穴式住居址の炉・カマド一覧

竪穴(SB)	時　期	炉	カマド	位　置	平面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	備　考
13	古墳初頭	○		遺構中央南寄り	長楕円形	1.3×0.7×0.40	焼土・炭
3	古墳中期	○		南壁中央	Ｌ字状	1.2×0.6×0.20	焼土・炭
6	古墳中期	○		南壁中央	楕円形	0.8×0.5×0.10	焼土・炭
11	古墳後期	○		遺構中央やや北西寄り	隅丸方形	1.3×0.7×0.15	

表６　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土(シルト)	出土遺物	備　考	時　期
1	Ａ７～Ｃ７	舟底状	27.0×0.6×0.30	黒褐色	須恵器	ＳＤ３を切る	古墳後期以降
2	Ａ３	舟底状	2.0×1.2×0.20	黒褐色			古墳後期以前
3	Ｃ６～Ｃ13	皿　状	9.0×0.8×0.10	暗褐色		ＳＤ１に切られる	古墳後期以前

●表 7　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土(シルト)	出土遺物	備考	時期
1	A 6	円形	舟底状	1.9×1.9×0.55	暗茶褐色	弥生		弥生後期後葉
2	B 6	長方形	皿状	1.8×0.8×0.08	暗茶褐色	弥生	SB 5に切られる	弥生後期後葉
3	B 7	方形	皿状	2.2×1.6×0.15	暗茶褐色			
4	B 4	長方形	皿状	2.2×1.3×0.10	暗茶褐色			
5	B 5	円形	皿状	1.8×1.3×0.07	暗茶褐色		SK 6を切る	
6	B 4	長方形	逆梯状	2.2×0.8×0.20	暗茶褐色		SK 5に切られる	
7	B 8	長方形	皿状	2.3×0.9×0.06	暗茶褐色			
8	B 7	長方形	舟底状	1.5×0.8×0.15	暗茶褐色			
9	B 7	円形	皿状	1.8×0.7×0.12	暗茶褐色		SD 1に切られる	
10	C 9	円形	皿状	2.0×1.6×0.10	黒褐色	土師・須恵		古墳中期以降
11	C 6	円形	凹レンズ状	1.9×1.7×0.08	暗茶褐色	土師・須恵	SD 1に切られる	古墳中期以後
12	C 7	方形	皿状	1.7×1.6×0.10	暗茶褐色	弥生	SD 1に切られる	弥生後期後葉
13	C 8	円形	逆台形状	2.4×1.7×0.40	黒褐色	弥生	SB10床面検出	
14	C14	円形	逆台形状	2.0×1.5×0.35	暗褐色			
15	A 3	円形	皿状	1.7×1.7×0.30	黒褐色			
16	C 5	長方形	皿状	2.0×1.0×0.15	暗茶褐色		SB 9号内	

●表 8　掘立柱建物址一覧

建物番号	規模(間)	桁行		梁行		床面積(m²)	時期	備考
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	2×1	310 (10.3)	5・5.3	170 (5.7)	5.7	5.27	古墳後期以降	
2	2×2	275 (9.2)	4.3・4.9	265 (8.8)	5.7・3.1	7.29	古墳後期以降	
3	1×1	220 (7.3)	7.3	185 (6.2)	6.2	4.07	古墳後期以降	
4	4×1	500 (16.7)	4.7・4・3・5	330 (11)	11	16.50	古墳後期以降	
5	4×1	320 (10.7)	3.3	190 (6.3)	6.3	6.08	古墳後期以降	
6	3×2	325 (10.8)	3.3・3.7・3.8	275 (9.2)	4.2・5	8.94	古墳後期以降	
7	1×2	250 (8.3)	8.3	240 (8)	4.3・3.7	6.00	古墳後期以降	SB 6を切る
8	3×2	385 (12.8)	4.7・4・4.1	275 (9.2)	5.3・3.9	10.58	古墳後期以降	
9	2×2	335 (11.2)	5・6.1	265 (8.8)	5.5・3.3	8.88	古墳後期以降	総柱
10	3×3	600 (20)	6.7・6.3・7	490 (16.3)	6.3・4・6	29.40	古墳後期以降	SB 5を切る
11	1×2	325 (10.8)	10.8	280 (9.3)	4.2・5.1	9.10	古墳後期以降	
12	2×2	450 (15)	7・8	335 (11.2)	6・5.2	15.07	古墳後期以降	
13	3×α	355 (11.8)	3.5・3.8・4.5				古墳後期以降	
14	2×1	370 (12.3)	5.7・6.6	205 (6.8)	6.8	7.58	古墳後期以降	
15	4×2	700 (23.4)	6・5.7・6・5.7	400 (13.3)	6.7・6.6	28.00	古墳後期以降	
16	1×1	330 (11)	11	290 (9.7)	9.7	11.38	古墳後期以降	SB 6を切る
17	1×1	290 (9.7)	9.7	215 (7.2)	7.2	6.24	古墳後期以降	
18	2×2	490 (16.3)	7.7・8.6	320 (10.7)	5.3・5.4	15.68	古墳後期以降	SB 6を切る

●表9　ＳＢ13出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(14.5) 器高21.1 底径 2.2	丸みのある小さい平底。叩きの後口縁部を折り曲げる。口頸部境に稜。	口—タタキ→ヨコナデ 胴—タタキ(右上り)→タテハケ(6～7本/1cm)	口—ハケ→ヨコナデ 胴上—ハケ→ナデ 胴下—ナデ	石・長(1～5) 金 ◎	煤	22
2	甕	頸径13.6	丸い小さい底。胴下半にふくらみをもつ。口頸部境に稜。	口—タタキ(10～11本/5cm) 胴下—タタキ 胴下—細かいタタキ(20-21本/5cm)	口—ハケ 胴上—ハケ(7～8本/1cm) 胴下—ナデ上げ	石・長(1～5) ○	黒斑 煤	22
3	甕	口径(14.2)	頸部内面に稜をもつ。口縁部は叩き後折り曲げる。	口—ハケ(7～8本/1cm) 胴—タタキ 胴下—タタキ→ハケ	口—ハケ(7本/1cm) 胴—ハケ(一部ナデ)	石・長(1～3) ○	黒斑	23
4	甕	口径13.6	口縁端部は先細り、大きめの叩き痕。口頸部境はゆるやかな稜。	口—ハケ→ヨコナデ 胴—タタキ(右上り)(10～11本/5cm)	胴—ハケ→ナデ	砂粒 ◎	黒斑	23
5	甕	口径(15.0)	口縁端部は先細り、叩き後刷毛目調整をし口縁部を折り曲げる。	口—ハケ→ヨコナデ 胴—タタキ(9本/5cm)→タテハケ(7本/1cm)	口—ハケ→ヨコナデ 胴—ハケ→ナデ	石・長(1～4) ◎		23
6	甕	底径 (2.8)	丸みのある小さい平底。底部内面は凹み、平につくる。器壁厚い。	胴—タタキ(9～10本/5cm)→タテハケ 底—ハケ	胴上—ナデ 胴下ナデ上げ	石・長(1～6) ○	黒斑 煤	22
7	甕	残高 8.8	小さい丸底。器壁は厚い。	タタキ→ ハケ(6～7本/1cm)	ナデ	砂粒 ○		
8	甕	頸径(14.2)	肩部の張りが弱い。肩部内面に接合痕を残す。	タタキ(13～14本/5cm)→ ハケ(8～9本/1cm)	ハケ(8～9本/1cm)	砂粒 ◎	煤	
9	甕	残高 8.5	大きな丸底。器壁は厚い。	タタキ(12～13本/5cm)→ ハケ(7～8本/1cm)	ハケ(7～8本/1cm)→ ナデ上げ	砂粒 ◎		23
10	甕	残高 15.8	丸底。底部内面は凹み、やや平になる。胴部下半にくびれ部をもつ。	タタキ→ タテハケ(8～9本/1cm)	胴上—ハケ 胴下—ナデ	砂粒 ◎	煤	22
11	壺	口径 22	内湾する口縁部。頸部に帯状の凸帯をもつ。凸帯上は板状工具による刻目。	口端—ヨコナデ 口—ハケ→ヨコナデ 頸—ハケ(5本/1cm)	口—ハケ 頸上—ハケ→ナデ 頸下—ハケ(5本/1cm)	石・長(1～5) ○		22
12	壺	頸径(16)	短い頸部をもつ。口縁外面に4条の櫛描き波状文を施す。	口—ハケ→施文 頸—ハケ(8本/1cm)	ナデ	砂粒(石・長1-2) ◎		23
13	壺	残高 6.1	小片。内面剝離。 板状工具による施文。	頸—ハケ→ナデ	粗いヘラケズリ	石(1～3) ◎		23
14	甑	口径 14.4 器高 15.3	体部下半で急激にすぼまる。底部に焼成前の小円孔(5㎜)を穿つ。	タタキ	ナデ(一部ハケ)	石・長(1～6) ◎	黒斑	22
15	甑	残高 10.3	底部が突出する。底部に焼成前の小円孔(5㎜)を穿つ。	マメツ底部指頭圧痕顕著	胴中—マメツ(ハケあり) 胴下—ナデ	石・長(1～3) ○		23
16	椀	口径 8 器高 3.2	手捏ね品。外面を指頭痕を顕著に残す。	指頭圧痕顕著	指頭圧痕顕著	石(1～3) ○		

ＳＢ13出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
17	椀	口径 6.8 器高 2.5	口縁端部は外方に拡張。	指頭圧痕顕著	指頭圧痕顕著	砂粒 ◎		22
18	支脚	器高 15.9 底径 10.0	中空。突起は「U」字状に2ヶと背部に1ヶ施す。	指頭圧痕顕著	シボリ痕 ナデ	石・長(1～4) ◎	黒斑	22

●表10 ＳＢ４出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
19	鉢	口径 18.8 器高 10.3 底径 2.0	小さい丸底。器壁は薄い。叩き技法顕著。	タタキ(13～15本/5cm)	ハケ(7～10本/1cm)	密 ◎	黒斑	24
20	高坏	口径(13.9)	組み合せ式。脚部さし込み。坏底部に擬口縁。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ◎	黒斑	24
21	ジョッキ型	口径 6.3 器高 8.0 底径 9.0	円柱状の体部。大きな平底。把手はタテにつく。	タテハケ(6本/1cm)	口—ハケ→ヨコナデ 胴—ヨコナデ 底—ナデ	砂粒 ◎		24

●表11 ＳＢ３出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
22	高坏	口径 18	⅓残存。口縁部外反。充塡技法。屈曲部はわずかに稜あり。	ヨコナデ	口—ヨコナデ 底—ナデ	密 ◎	黒斑	24
23	高坏	口径(19.6) 底径 13.4	坏部⅔欠。口縁部外反。屈曲部に段をもつ。	坏—ヨコナデ 柱—ナデ 裾—ヨコナデ	坏—ヨコナデ 柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	砂粒 ◎		24
24	高坏	残高 8.5	脚柱部完存。やや太めの柱をもつ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		24

●表12 ＳＢ７出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
25	甕	口径 15.4	内湾する口縁部。口縁端面は内側に肥厚し、内傾する。	口—ヨコナデ 胴—ていねいなハケ(10本/1cm)	口—ヨコナデ 胴—指頭圧痕顕著	石・長(1～4) ◎		25
26	甕	口径 18	直立ぎみに立ち上げる口縁部。口縁端面は、一部で内傾する。	口—ヨコナデ 胴—磨滅の為不明	口—ヨコナデ 胴—ナデ上げ	石・長(1～3) ◎		25
27	壺	残高 11.8	球形の胴部は、胴中位に最大径をもつ。内面には指頭痕接合痕が顕著。	胴上—ハケ 胴下—ハケ→板ナデ	胴上—ナデ上げ 胴下—ナデ	石・長(1～3) ◎		25

ＳＢ7 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
28	高坏	口径 17 器高 14.2 底径 12.6	口縁端はわずかに内湾する。屈曲部は丸みのある稜をもつ。	口—ハケ→ヨコナデ 裾—ヨコナデ 底—ヨコナデ 柱—ナデ	口—ヨコナデ 裾—ハケ→ヨコナデ 底—ハケ→ヨコナデ 柱—ケズリ	密 ◎		25
29	小型 丸底壺	口径 7.6 器高 8.4 底径 1.0	口径と最大胴径がほぼ同値。口縁端部は斜めに面を取る。	口—ハケ→ヨコナデ 胴—ハケ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	密 ◎	黒斑	25
30	高坏	残高 6.8	坏部と脚部を接合した後接合部に粘土帯を貼りつける。	磨滅の為不明	ナデ	密 ◎		25

●表13　ＳＢ6 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
31	甕	口径(12.7)	口縁上部はわずかに内湾する。口縁端部は「コ」字状。	口—ハケ→ヨコナデ 胴—ハケ(6本/1cm)	口—ハケ 胴—ナデ	密 ◎		26
32	甕	口径(15.0)	口縁上部が大きく外反する。口縁端部は丸い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ◎		
33	壺	口径(12.0)	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は先細りする。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎		
34	壺	口径(15.2)	口縁上部がわずかに内湾し外反する。頸部以下をヘラ削りする。	口—タテハケ→ヨコナデ	口—ヨコナデ(6本/1cm) 胴—ヘラケズリ	砂粒 ◎		26
35	壺	残高 18.9	肩部の張る体部は、全体的に丸い。頸胴部境に接合痕を看守。器壁厚い。	頸—ハケ 胴—ナデ	頸—ヨコナデ 胴上—ヘラケズリ 胴下—ナデ	密 ◎		
36	壺	残高 13.1	丸く張る肩部。器壁は削るが、やや厚いものである。	ハケ(8本/1cm)→ナデ	ヘラケズリ	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	
37	壺	残高 2.2	丸底の底部、器壁はやや薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ◎		
38	高坏	口径(13.7) 器高 13.0 底径 12.2	坏部は口径に対し深い体部をもつ。屈曲部の稜はあまい。	坏—磨滅の為不明 柱—ナデ 裾—ヨコナデ	底—ハケ(6本/1cm) 柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	砂粒 ◎		26
39	高坏	口径(17.2) 器高 12.4 底径 11.0	坏部と脚裾部をわずかに欠く。屈曲部は明瞭に段をもつ。	口—ハケ(10本/1cm)→ヨコナデ 裾—ヨコナデ 底—ヨコナデ 柱—ナデ	坏—ハケ(6~7本/1cm)→ヨコナデ 柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	密 ◎		26
40	高坏	口径 15.3	屈曲部には接合時の段を残す。口縁上部は外反する。	ヨコナデ	磨滅の為不明	砂粒(1～3) ○		26
41	高坏	口径(19.3)	坏部小片。屈曲部に段をもつ。口縁端部は丸く、器壁を厚くする。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
42	高坏	口径 16.2	坏部完存。充填技法。屈曲部の上下に指頭痕がわずかに残る。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒(1～2) ◎		26

ＳＢ6 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
43	高坏	口径 18.7	¼の残存。屈曲部は擬口縁を看守。口縁上部がわずかに外反する。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	砂粒 ◎		
44	高坏	口径(19.5)	口縁部を¾欠く。屈曲部の段に丸みをもつ。口縁部わずかに外反。	口—磨滅の為不明 底—ヨコナデ	口—ヨコナデ 底—ナデ	砂粒 ◎		
45	高坏	口径(18.1)	屈曲部の段の上部に指頭痕がわずかに残る。口縁部外反。	口—回転ヨコナデ 底—ナデ	口—回転ヨコナデ 底—ナデ	密 ◎		27
46	高坏	口径 17.8 底径(13.2) 器高 13.3	屈曲部はわずかに段をもつ。口縁端部は外反する。	口—ヨコナデ 底—ハケ(10本/1cm) 柱—ナデ	口—ヨコナデ 柱—ナデ 裾—ヨコナデ	石・長(1～2) ◎		27
47	高坏	口径 21.6	脚端部を欠く。充塡技法。屈曲部には、かすかに段がある。	口—ハケ→ヨコナデ 底—ヨコナデ 柱—ナデ	口—ヨコナデ 柱—ヘラケズリ	砂粒(1～2) ◎	黒斑	27
48	高坏	口径(22.0)	坏部完存。充塡技法。屈曲部はかすかに段を残す。	ハケ→ヨコナデ	口—ヨコナデ 底—ハケ→ナデ	砂粒 ◎	黒斑	27
49	高坏	口径 16.1 器高 10.0 底径 9.4	坏部の⅔を欠く。口縁部は内湾して立ち上がる。充塡技法。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ○		27
50	高坏	口径(17.0)	口縁部は内湾して立ち上がる。充塡技法。屈曲部はかすかに稜をもつ。	口—ヨコナデ 底—ナデ 柱—ナデ	口—ヨコナデ 底—ナデ 柱—ヘラケズリ	砂粒(1～3) 金 ◎	黒斑	27
51	高坏	残高 6.4	充塡技法。坏部擬口縁を看守る。	底—ヨコナデ 柱—ナデ	底—ナデ 柱—カキ取り	密 ◎		
52	高坏	口径(18.1)	⅛残存。屈曲部は擬口縁を看守する。口縁部は外反する。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎		

●表14 ＳＢ9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
53	甕	口径 16.7	外傾する長い口縁部の口頸部内面はゆるやかな稜をもつ。口縁端部は丸い。	口—ヨコナデ 胴—磨滅の為不明	口—ヨコナデ 胴上—ヘラケズリ→ヨコナデ 胴下—ヘラケズリ	石・長(1～2) ◎		
54	甕	口径 23.6	⅔残存。内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸い。	口—ヨコナデ 胴—ハケ(5～6本/1cm)	口—ヨコナデ 頸—ハケ→ナデ 胴—ケズリ→ナデ	石・長(1～5) ◎		
55	坏蓋	口径(14.0)	内傾する口縁部。口唇部は丸く細くなる。やや異形。	口—回転ヨコナデ 天—½回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	砂粒 △		
56	坏蓋	残高 1.5	大きく凹むつまみ	回転ヨコナデ		密 ◎		
57	坏身	口径 12.8 器高 5.9 底径 3.8	⅔残存。内傾する口縁部。口唇部はわずかに内傾して凹む面をもつ。	口—回転ヨコナデ 底—½回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	砂粒 ◎		

●表15　ＳＢ５出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
58	甕	口径(16.8)	⅛残存。内湾する口縁部。口縁端面は内側にわずかに肥厚し、外傾する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 △		
59	高坏	残高　2.8	⅛残存。屈曲部に段をもつ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎		
60	高坏	残高　6.8	¼残存。23の脚部か。器壁厚い。内面の柱一裾境に稜をもつ。	磨滅の為不明	ナデ	密 ◎		
61	蓋	口径 13.2 器高　5.8	口縁部は⅓を欠く。口唇部は大きく凹む。	つまみ—ヨコナデ 天—⅓回転ヘラケズリ 口—ヨコナデ	回転ヨコナデ	密(石・長1～2) ◎		
62	坏蓋	口径(10.0)	小片。口縁部は内湾して立ち上がる。口唇部は大きく凹む。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	密 ◎		

●表16　ＳＢ10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
63	甕	口径(19.0)	½残存。わずかに内湾する口縁部。口縁端面は内傾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎		
64	甕	口径(11.8)	⅓残存。外傾、外反する口縁部。口縁端部は先細りする。	口—ヨコナデ 肩—ヨコナデ 胴—ハケ	口—磨滅の為不明 胴—ヘラケズリ	石・長(1～3) △		
65	甕	頸径(13.1)	⅓残存。体部内面は荒いケズリ。器壁が厚い。	口—ヨコナデ 肩—板ナデ 胴—ハケ→板ナデ	口—ヨコナデ 肩—ヨコナデ 胴—ケズリ	石・長(1～4) ◎		
66	高坏	残高　4.5	組み合せ式。充填技法。器壁が薄い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎		
67	高坏	残高　2.4	組み合せ式。 擬口縁を看守。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎		
68	高坏	底径 11.9	組み合せ式。脚柱中位がふくらむ。裾部が長い。	柱—ナデ 裾—ヨコナデ	柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	石・長 ◎		
69	高坏	残高　7.7	組み合せ式。器壁が厚い。	わずかにハケあり	ナデ	砂粒 ◎		

●表17　ＳＢ11出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
70	甕	口径(24.7)	内湾する口縁部。口縁部上部に屈曲部をもつ。口縁端部は内傾する。	口—ヨコナデ 胴—ハケ(5～6本/1cm)	口—ヨコナデ 胴—ハケ	石・長(1～3) ○		28

ＳＢ11出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
71	甕	口径(21.8)	内湾する口縁部。口縁端部はやや内傾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ○		28
72	甕	口径(20.0)	内湾する口縁部。口縁端部は内側に突出する。端面は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ○		28
73	甕	口径(20.4)	内湾する口縁部。口縁端面は丸みをもつ。	(口端)—ヨコナデ (口)—磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～2) ◎		28
74	甕	口径(20.8)	内湾する口縁部。口縁部上部に屈曲部をもつ。口縁端面は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎		28
75	甕	口径(14.6)	外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。内面は接合痕顕著。	(口)—ヨコナデ (胴)—ハケ(6本/1cm)	(口)—ヨコナデ (胴)—ナデ	石・長(1～3) ◎		28
76	甕	口径(12.4)	外反する口縁部。口縁端は丸く仕上げる。小片。	ヨコナデ	(口)—ヨコナデ (頸)—ナデ	砂粒 金 ◎		
77	高坏	口径(16.8)	屈曲部の稜及び段は消滅。口縁端部はわずかに外反する。	ナデ	ナデ	密金 ◎		29
78	高坏	底径 13.0	長く内湾する裾部をもつ。組み合わせ式。	ヨコナデ	(柱)—ヘラケズリ (裾)—ヨコナデ	密 ◎		29
79	蓋	残高 2.3	大きく扁平な擬宝珠状つまみ。ヘラケズリ痕。小片。	(つまみ)—ヨコナデ (天)—回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		29
80	蓋	残高 2.0	天井部外面ヘラケズリ痕顕著。扁平な擬宝珠状つまみ。小片。	(つまみ)—ヨコナデ (天)—回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		29
81	蓋	残高 2.9	大きく凹むつまみ。浅い天井部。小片。	(つまみ)—ヨコナデ (天)—回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		29
82	蓋	口径(14.2)	口縁部先端はやや外反する。口縁端部は、やや凹面で内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ○		
83	蓋	口径(14.2)	内湾して、外傾する口縁部。口縁端部は浅い凹面で内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
84	坏蓋	口径(12.2)	内湾して、垂下する口縁部。口縁端部は浅い凹み。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
85	坏蓋	口径(11.4)	内湾して垂下する口縁部。口縁端部はわずかに凹面で内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎		
86	坏蓋	口径(12.5)	内湾して、外傾する口縁部。口縁端部は凹面で内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ○		
87	坏蓋	口径(13.2)	¼残存。焼成不良。内湾して垂下する口縁部。口縁端部は平らで内傾。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒(石・6) △		

ＳＢ11出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
88	坏蓋	口径(15.2)	外傾する口縁部。口縁端部は丸い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 △		
89	坏蓋	口径(12.6)	⅓の残存。口縁端部は平坦で、内側は傾斜し小さい段をもつ。2本の凹線。	㊤—⅔回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密(石・1) ◎		
90	坏蓋	口径 14.0 器高 5.6	大きく高い天井部。丸みをもって垂下しわずかに外反する口縁部。⅙残存。	㊤—⅓回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎		29
91	坏蓋	口径 13.2 器高 4.7	¾の残存。丸みをもって垂下し、端部は外反する。端面は平坦で外傾。	㊤—½回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ○		29
92	坏蓋	口径(15.8)	垂下して、やや外反する口縁部。口縁端部は、わずかに凹面で内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
93	坏蓋	口径 13.2 器高 4.5	¾の残存。垂下して、端部が外反する口縁部。端部は凹面で内傾する。	㊤—½回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎		29
94	坏身	口径(10.5)	内傾するたちあがり。端部は平坦、受部は上外方。⅔残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		30
95	坏身	口径(11.4)	内傾するたちあがり。端部は平坦。受部は大きく上外方。	㊐—ヨコナデ ㊡—⅔回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		30
96	坏身	口径(10.0)	外反して内傾するたちあがり。端部は平坦。受部は上外方。	㊐—ヨコナデ ㊡—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		30
97	坏身	口径(12.6) 器高 5.2	直線的に内傾するたちあがり。端部は段を有し内傾。受部は上外方。	㊐—ヨコナデ ㊡—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 △		
98	坏身	口径 10.5 器高 5.1	内傾し外反するたちあがり。口縁端は丸いが、内側部に段を有する所あり。	㊐—ヨコナデ ㊡—ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		
99	坏身	口径 11.9 器高 5.1	内傾し、やや外反するたちあがり。口縁端部は丸い。	㊐—ヨコナデ ㊡—マメツ	㊐—ヨコナデ ㊡—マメツ	密 ○		30
100	坏身	口径(13.6)	内傾するたちあがり。端部は段を有し、内傾。受部は上外方。⅓残存。	㊐—ヨコナデ ㊡—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	砂粒 ◎		30
101	坏身	口径(13.1)	内湾して内傾するたちあがり。端部は平坦で内傾。受部は上外方。¼残存。	㊐—ヨコナデ ㊡—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		
102	坏身	口径 12.6 器高 5.2	内傾し、直線ぎみにたちあがる。受部はやや上外方。	㊐—ヨコナデ ㊡—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ○		30
103	坏身	口径(11.1) 器高 3.7	内傾するたちあがり。端部は先細りで丸い。受部は上外方。⅙残存。	㊐—ヨコナデ ㊡—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	砂粒 △		
104	坏身	口径(11.8)	直立ぎみのたちあがり。端部はわずかに段を有し内傾。受部は上外方。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		

ＳＢ11出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
105	坏身	口径(10.6)	外反し、直立ぎみのたちあがり。端部は丸い。受部は上外方。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
106	坏身	残高 4.6	内傾するたちあがり。受部は上外方。¼残存。	口—ヨコナデ 底—⅔回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		
107	坏身	口径 11.7 器高 5.0	ひずみ品。内傾し、直立するたちあがり。たちあがりは短い。	口—ヨコナデ 底—ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ○		30
108	高坏	底径 7.4	有段の脚端部。1条の凹線。短冊状の透し3ヶ。	坏—ヨコナデ 脚—ヨコナデ→スカシ	ヨコナデ	砂粒 ○		30

●表18 ＳＫ出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
109	鉢	口径(14.4) 器高 11.3 底径 3.2	突出する小さい平底。ゆるやかに外反する。やや長い口縁部。	ハケ→ヘラミガキ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	砂粒 ◎		
110	甕	底径 5.8	突出し、やや凹む平底。	胴—ハケ(9本/1cm) 底—ナデ	ナデ	石・長(1～5) ◎		
111	壺	底径 6.3	やや突出する丸みのある平底。大型壺の底部か。	磨滅の為調整不明	ナデ	石・長(1～3) ◎		
112	高坏	残高 3.7	組み合わせ式。柱内面上部はカキ取り痕を顕著に残す。	ハケ→ヘラミガキ	ヘラケズリ	密 ◎		
113	壺	残高 9.0	肩部の張りが弱い。 頸胴部境に板状工具による「ノ」字状の刻目。	肩—タテハケ→施文 胴—ハケ(5～6本/1cm)	胴上—ナデ(指頭圧痕顕著) 胴—ハケ(5～6本/1cm)	石・長(1～3) ○		
114	壺	底径 2.5	突出するボタン状の小さい平底。細頸長頸壺の底部か。	ヘラミガキ	ハケ(8本/1cm)	石・長(1～4) ◎	黒斑	
115	甕	口径(17.6)	内湾し、口縁上部はわずかに外反する。口縁端部は肥厚せず、内傾。	口—ヨコナデ 胴—ハケ(8本/1cm)	口—ヨコナデ 胴—ナデ上げ	石・長(1～3) ○		
116	壺	口径(19.4)	外傾する頸部に、直立する口縁部がつく。口縁端部は外反する。	口端—ヨコナデ 口—ヨコナデ 頸—ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石・長(1～3) ◎	煤	
117	高坏	口径(15.8)	外傾、外反する口縁部。屈曲部にわずかに稜をもつ。充塡技法。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎		
118	高坏	口径(15.4)	内湾外傾し、外反する口縁部。口縁端部は丸く肥厚。充塡技法。	口—ヨコナデ 底—ハケ 柱—磨滅の為不明	口—ヨコナデ 底—ハケ→ナデ	砂粒 ◎		
119	坏蓋	口径(12.9) 器高 4.5	内湾して垂下する口縁部。端部は凹面で内傾。	口—ヨコナデ 天—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 △		

ＳＫ出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
120	坏蓋	口径(13.0)	内湾して垂下する口縁部。端部は外傾し、端面は凹面で内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
121	坏身	口径(11.8)	直立ぎみの長いたちあがり。端部は段を有し内傾。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
122	甕	口径(26.0)	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はナデ凹み外方に小さく突出。	(口端)—ヨコナデ (胴)—ハケ(6本/1cm)	(口)—ハケ(6本/1cm)→ヨコナデ (胴)—磨滅の為不明	石・長(1～8) ウンモ ○		
123	鉢	口径(15.6) 器高 14.0 底径 (2.1)	外傾する口縁部。端部は先細りする。器壁が薄い。	(口)—ヨコナデ (胴)—ハケ(6本/1cm)	(口)—ヨコナデ (胴)—ハケ(6～7本/1cm)	石・長(1～2) ○	黒斑	
124	甕	口径(17.1)	粘土紐を貼り付け口縁部をつくる。口縁端部へラ刻み。へラ沈線4条。小片。	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	石・長(1～2) ウンモ ◎		
125	甕	底径 (5.6)	平底の底部。	ハケ(6本/1cm)	ナデ	密(砂) ◎	黒斑	
126	壺	口径(23.2)	櫛描波状文と直線文。櫛は７本。小片。	(口端)—ヨコナデ 磨滅の為施文前の調整不明	ヨコナデ	砂粒(1～3) ◎		
127	支脚	残高 8.6	受部に２本の突起。後面に小さい突起１本。	タタキ ナデ(指頭圧痕顕著)	ナデ上げ	砂粒(1～4) ◎	黒斑	
128	甕	口径(17.7)	わずかに内湾する口縁部。口縁端部は丸い。肩部が強く張る。	ハケ	(口)—ハケ→ナデ (胴)—へラケズリ	石・長(1～4) ○		
129	高坏	底径 11.3	短い柱に長い裾部。柱—裾部境に明瞭な稜をもたない。	(柱)—板ナデ (裾)—ヨコナデ	ナデ	石・長(1～2) ◎		

●表19　ＳＸ２出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
130	甕	口径 17.8	ゆるやかに曲がる「く」字状口縁。肩部内面に接合痕を顕著に残す。	ハケ(8本/1cm)→ナデ	ハケ(8本/1cm)→ナデ	石・長(1～5) ◎	黒斑	31
131	甕	口径(19.0)	ゆるやかに曲がる「く」字状口縁。肩部の張りが弱い。	(口)—ヨコナデ (胴)—磨滅の為不明	ハケ(8本/1cm)	石・長(1～3) ○		31
132	甕	口径(14.8)	肩部がやや張る。口縁端部は小さく下方に突出する。	ハケ(9本/1cm)	(口)—ハケ(10本/1cm) (頸)—ケズリ	石・長(1～4) ○		
133	壺	口径(18.6)	口縁部外面に波状文を二段に施す。櫛は４条。	(口)—ヨコナデ→ハケ→施文 (頸)—ハケ(13本/1cm)	(口)—ハケ(5本/1cm) (頸)—ハケ(13本/1cm)	砂粒 金ウンモ ◎		31

ＳＸ２出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
134	壺	口径(15.4)	「く」字状の複合口縁。口縁端部は丸みのある「コ」字状。	㊐—ヨコナデ ㊍—ハケ(10～13本/1cm)	㊐—ヨコナデ ㊍—ハケ(10本/1cm)	石・長(1～3) ◎		31
135	壺	口径 12.4 器高 35.3 底径 6.0	口頸部境がしぼまる。口縁、頸部、胴部の境が不明瞭。板状の圧痕。	㊐—ハケ ㊍—ハケ→施文 ㊏—ヘラミガキ	㊐—ヨコナデ ㊍—ナデ上げ ㊏—ハケ(4本/1cm)	石・長(1～3) ◎	黒斑	31
136	壺	底径 5.8	長胴で、肩部が張る。底部は丸みのある平底。肩部に板状の圧痕文。	㊍—ヨコナデ→施文 ㊏—ハケ(7本/1cm)→ヘラミガキ	ハケ(10本/1cm)	石・長(1～6) 黒ウンモ ◎	黒斑	31
137	高坏	口径 31.4	大きく外反する坏部口縁。端部は小さく下方に垂れる。充塡技法。円孔。	㊐—ハケ→ヘラミガキ ㊀—ハケ→ヘラミガキ ㊋—ハケ	㊐—ハケ→ヘラミガキ ㊀—ハケ→ヘラミガキ ㊋—ナデ	密 ◎	黒斑	32
138	台付鉢	口径 11.0 器高 6.2 底径 13.4	内湾する口縁部。調整はヘラにより丁寧に仕上げられる。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	石・長(1～4) 金 ◎	黒斑	32
139	台付鉢	口径 13.4	口縁端はわずかに内湾する。	㊏上—ハケ(4本/1cm) ㊏下—ハケ(10本/1cm)	㊐—ハケ(4本/1cm)→ヨコナデ ㊏—ハケ(14本/1cm)	石・長(1～4) ◎	黒斑	32
140	高坏	底径(20.2)	柱部の円孔は４ヶで２段。脚端部は、上方にわずかにナデによる拡張。	㊌—ヘラミガキ ㊋—ヨコナデ	㊌—ナデ ㊋—ヨコナデ	密 ◎		32
141	支脚	底径 8.8 器高 17.2	受部は突起が２本つく。受部～底部まで貫通する孔をもつ。	ハケ(指頭圧痕顕著)	ナデ	砂粒 ◎	黒斑	32
142	壺 ミニチュア	口径 3.0 器高 4.5 底径 1.9	突出するボタン状の底部。櫛描き(４条)の直線文２組。小円孔２ヶ。	㊐—ナデ→施文 ㊏—ナデ 指頭圧痕顕著	ナデ 指頭圧痕顕著	密 ◎	黒斑	
143	器台 ミニチュア	口径 5.4 器高 5.3 底径 5.0	脚径が口径を凌ぐ。小円孔が４ヶ４組穿たれる。	ナデ 指頭圧痕顕著	ナデ 指頭圧痕顕著	密 ◎		

●表20 ＳＸ３出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
144	蓋	口径(12.5) 器高 6.1	中央がやや突出する大きなつまみ。垂下して外反する口縁端部。	㊅—回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
145	坏蓋	口径(12.1) 器高 4.4	垂下する口縁部。口縁端部は、丸みのある段をもつ。	㊅—回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		

●表21 ＳＸ４出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
146	蓋	口径 12.7 器高 5.6	口縁部の稜は、丸みをもつ。他のものに比べ重量が重い。	㊅—回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密(石) ◎		

ＳＸ４出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
147	坏蓋	口径(15.4)	口縁部丸い。段は丸みをもち、下部は凹む。	㊅—回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1) ◎		
148	坏身	口径(10.1) 器高 4.6	内傾し、直立するたちあがり。口縁端部は、段をもつ。	㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
149	高坏	底径 (8.1)	透しを２ケ看取。裾端部は丸みをもってたちあがる。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
150	高坏	底径 (8.1)	裾部は、段をもち、端部は内傾してたちあがる。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
151	甕	口径(20.8)	口縁部は三角形を呈する。端部は丸い。	㊐—ヨコナデ ㊖—櫛描(9本/1cm)		密 ◎		

●表22 包含層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
152	甕	残高 3.1	口縁端面と凸帯文上に刻目を施す。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) ◎		34
153	高坏	底径(10.4)	脚端面は大きく凹む。三条の凹線文と２ヶの矢羽根透し。小片。	㊟—ヘラミガキ ㊢—ヨコナデ	ナデ上げ	石・長(1～2) ◎		
154	壺	底径 1.9	小さく突出するボタン状の平底。器壁はやや薄く仕上げが丁寧。	ヘラミガキ	ハケ ヘラミガキ	石・長(1～2) ○		
155	鉢	口径(12.8) 器高 6.6 底径 4.0	平底。わずかに外傾する口縁部。口縁端はやや細くなる。	㊍—ハケ→ナデ ㊎—ナデ	㊐—ハケ ㊍—ナデ	砂粒 ◎	黒斑	
156	鉢	口径 9.3 器高 8.4 底径 3.7	やや大きな平底。直口口縁。外面に叩き痕を顕著に残す。	㊍—叩き→ナデ ㊎—ナデ	ナデ上げ	石・長(1～2) ◎	黒斑	34
157	壺	口径 15.6	口縁端部はナデによりわずかに拡張される。端部下端は太い刻目。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) 銀 ◎		
158	壺	口径(13.2)	櫛描き波状文(４本)。口縁端部は外方に拡張。小片。	㊐—ハケ→施文 ㊖—ハケ(6本/1cm)	ハケ	砂粒 金 ◎		
159	壺	口径(19.9)	下方に大きく垂下する口縁部口縁外面に櫛描きの波状文(３条)。小片。	ハケ→施文	ハケ→ヘラミガキ	密 ◎		
160	甕	口径(15.2)	内湾する口縁部。端面は内側に肥厚し、やや内傾する。小片。	㊐—ヨコナデ ㊍—ハケ(11本/1cm)	㊐—ヨコナデ ㊍—ケズリ→ナデ	砂粒 ○		
161	甕	口径(16.4)	内湾する口縁部。端面は内側に肥厚し、やや内傾する。	㊐—ヨコナデ ㊍—ハケ(11本/1cm)	㊐—ヨコナデ ㊍—ケズリ→ナデ	石・長(1～3・5) ○		

包含層出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
162	高坏	口径(20.0)	外傾し、外反する口縁部。端部は先細りする。屈曲部に丸みのある段をもつ。	ヨコナデ	㊐—ハケ(5本/1cm)→ナデ ㊡—ナデ	砂粒 ◎		
163	高坏	口径(16.4)	内湾してたちあがる口縁部。口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	密 ◎		

●表23 包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
164	石庖丁	ほぼ完形	緑泥片岩	10.0	4.4	0.56	37.8		34
165	石庖丁	ほぼ完形	結晶片岩(雲母片岩)	8.2	4.3	0.7	39.8		34
166	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	1.8	1.5	0.4	0.7		
167	石鏃	完形	サヌカイト	1.5	1.0	0.3	0.3		
168	石鏃	完形	サヌカイト	2.4	1.6	0.4	1.3		

●表24 包含層出土遺物観察表 土製品 (3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
169	坏蓋	口径 12.8 器高 4.8	内湾して垂下する口縁部。端部は凹面を有し内傾。小片。	㊤—½回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
170	蓋	口径 11.7 器高 6.0	凹みをもつつまみ。垂下する口縁部。端面は、ゆるやかな段をもつ。	㊤—ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		33
171	坏蓋	口径 11.0 器高 4.5	内湾して垂下する口縁部。口縁端部は凹面をなす。	㊤—½回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		33
172	蓋	口径 11.0 器高 4.4	内湾し、外反する口縁部。天井部は丸みをもつ。	㊤—ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) ◎		
173	坏蓋	口径(15.0)	内湾する口縁部。端部は丸い所と平坦な所がある。小片。	㊤—⅔回転ヘラケズリ ㊐—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
174	坏身	口径 11.0 器高 4.7	内傾するたちあがり。端面は凹む。	㊐—ヨコナデ ㊡—回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		
175	坏身	口径(10.0)	たちあがりはわずかに外反する。端部は段を有し、内傾。受部は上外方。小片。	㊐—ヨコナデ ㊡—½回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎		

包含層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
176	高坏	口径(13.0) 器高 9.0 底径 10.0	脚部に短冊形の透し3ヶ。坏部のたち上りは、外反して長い。坏部½欠。	(口)—ヨコナデ (底)—⅓回転ヘラケズリ (脚)—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		33
177	高坏	口径(16.8)	1条の凸帯、凸帯下はナデ凹み。6条の波状文。浅い凹線1条½残存。		ヨコナデ	密 ◎		33
178	甕	口径(17.3)	口縁上部は内湾してたちあがる。波状文6条。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		33
179	甕	残高 6.2	8条の櫛による刺突文。刺突文帯の上下に凹線文。⅔残存。	(肩)—ヨコナデ (胴)—ヨコナデ→施文 (底)—ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎	自然釉	33
180	脚	底径 (8.7)	内湾する脚部。端部は、わずかに外反。端面は、凹面で内傾。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	自然釉	
181	高坏	底径 9.2	内湾する脚部。端部は外反する。端面は平坦で内傾。小円孔3ヶ。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	自然釉	33
182	甕	口径(20.0)	外反する頸部に、内湾する口縁部。端部は段をもつ。頸部カキメ痕。⅙残。	(口端)—ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒(1～2) ◎		33
183	甕	口径(34.5)	口縁端部は断面三角形。櫛描波状文(12本)。波状文帯上下に凹線2本。	(口端)—ヨコナデ (頸)—ヨコナデ→施文	ヨコナデ	密 ◎	釉薬	
184	甕	口径(29.2)	大きく外反する口縁部。端部は丸みをもつ。頸部に3条の凹線。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
185	坏	口径(11.7) 器高 3.5 底径 6.2	回転ヘラ切り。やや深い坏部が端部は先細り。坏部1/10残存。	(胴)—ヨコナデ (底)—ナデ	剝離の為不明	密 ◎		
186	皿	口径 (7.9) 器高 1.3 底径 (5.1)	小皿。凹みの著しい底部。マメツのため切り離し法は不明。	磨滅の為不明	ヨコナデ	密 ◎		

第 4 章

樽味高木遺跡（タルミタカギ）

１．調査の経過

⑴調査に至る経緯

1988（昭和63）年６月、森　儀三郎氏より、松山市樽味４丁目266－1における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『81樽味遺物包含地』内にあたり､以前より周辺地域で多くの調査が行われ周知の遺跡として知られている。同包含地内では、弥生時代中期～古墳時代にかけての樽味四反地遺跡〔梅木謙一　1989〕、樽味立添遺跡〔梅木謙一　1989〕、弥生時代前期から中世までの生活関連遺構と遺物を検出している樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫 1990〕などが確認されている。当該地周辺には、弥生時代の拠点的集落である文京遺跡〔西田栄他　1976〕、道後今市遺跡〔岡田敏彦他　1985〕、弥生時代から古墳時代の小坂釜の口遺跡〔岸・長井・大山　1973〕、東野お茶屋台古墳群〔森光晴　1986〕、経石山古墳〔森光晴　1986〕（前方後円墳）が知られている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1988（昭和63）年８月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と落ち込みを検出し、当該地に弥生時代～中世の集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・森　儀三郎氏・鹿島商会三者は、遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代から中世までの当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、森　儀三郎氏・鹿島商会の協力のもと1989（平成元）年１月４日に開始した。

⑵調査組織

調 査 地　松山市樽味４丁目266番１

遺 跡 名　樽味高木遺跡

調査期間　野外調査　1989（平成元）年１月４日～同年２月27日

調査面積　430.23㎡

調査委託　森　儀三郎

調査担当　梅木　謙一　　宮内　慎一

調査協力　鹿島商会

作 業 員　谷久　広之、森田　真司、古屋　明寿、吉田　智広、工藤　賢稔、扶川　　博、亀山　健一、安永　浩二、田中　英樹、古山　智也、月原　　敏、仙波　豊子、福山　暁子、河本美代子、今井セツ子、森田　利恵、松本美知子、越智美代子、渡部美代子、山本　好枝、森田　晶子、栗林　千恵、藤沢　真美、他

2．層位（第48図）

本遺跡は、石手川左岸の洪積世扇状地上、標高40.5ｍに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層表土(耕作土)、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層黒褐色土、第Ⅳ層明褐色土、第Ⅴ層暗褐色砂礫層である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は30～35cmの厚さを測る。第Ⅲ層黒褐色土は調査区ほぼ全域でみられ、厚さは50～60cmの堆積で弥生土器・土師器・須恵器を包含する。第Ⅳ層明褐色土は無遺物層であり、地山と呼ばれるものである。第Ⅴ層暗褐色砂礫層は拳大の円礫を含んでいる。地山面（第Ⅳ層）はその標高を測量すると、調査区北東部が高く南西部に向けて漸次低くなっている。

遺構は第Ⅲ層中及び第Ⅳ層上面での検出である。

第Ⅲ層中からは、竪穴住居址２棟（ＳＢ１・ＳＢ４）を、第Ⅳ層上面では、竪穴住居址７棟、土壙７基、溝状遺構２条、柱穴270基（掘立柱建物柱穴を含む）他である。

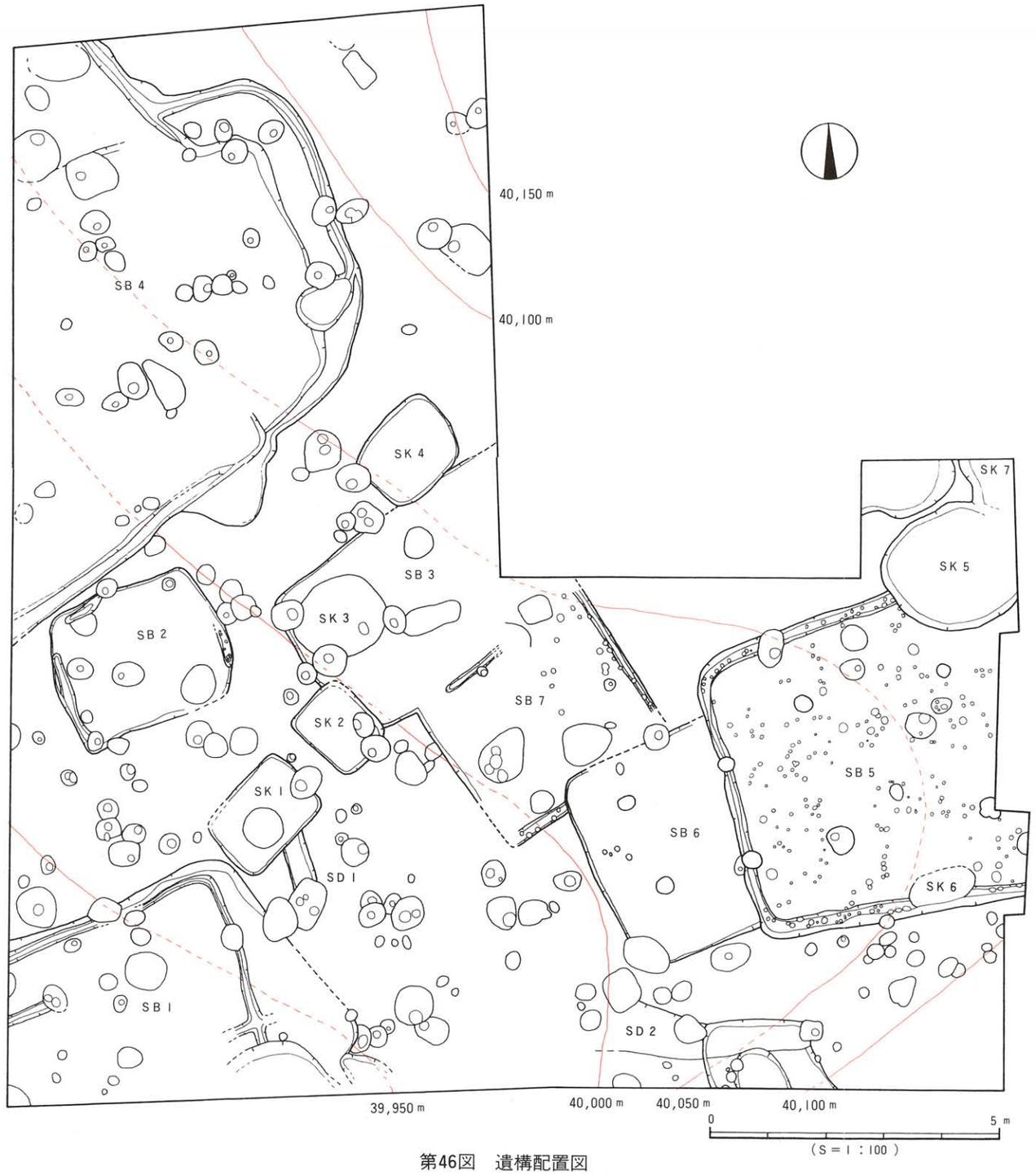
遺物は、第Ⅲ層及び遺構内からの出土であり、弥生土器(中期～後期)、土師器（古墳時代中期他)、須恵器、石器(石庖丁２点、石鏃１点他)、植物種子１点、動物骨２点他である。

なお調査にあたり、調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。４ｍグリットは北から南へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅとし、西から東へ１・２・３・４・５としてＡ１・Ａ２……Ｅ５といったグリット名を符した。廃土置場の都合上、Ａ・Ｂ両区とＣ３・Ｄ３・Ｅ３の一部までを西区、Ｃ３・Ｄ３・Ｅ３区の一部とＣ４・５区、Ｄ４・５区、Ｅ４・５区を東区として分区して調査を行った。

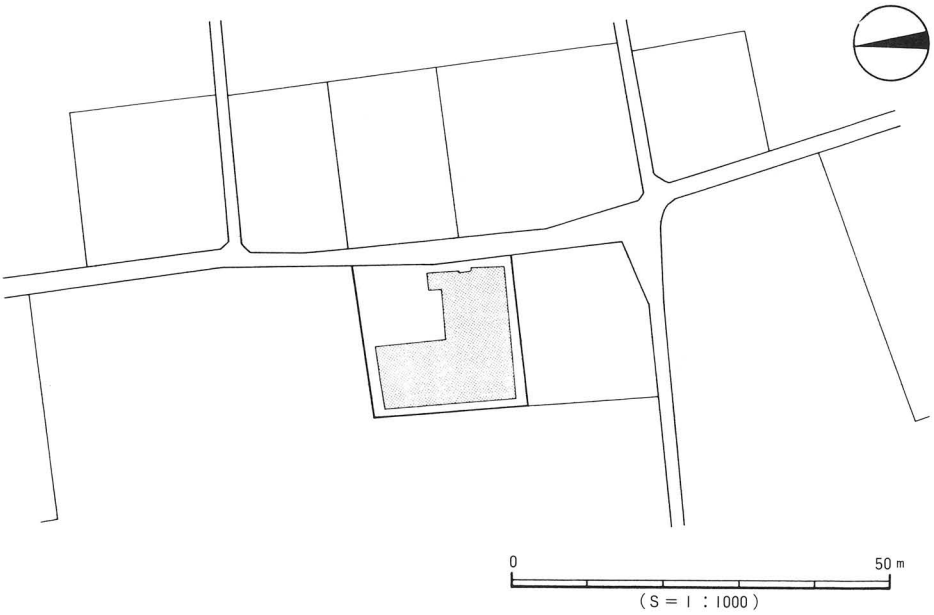
3．調査の概要（遺構と遺物）

(1)竪穴式住居址

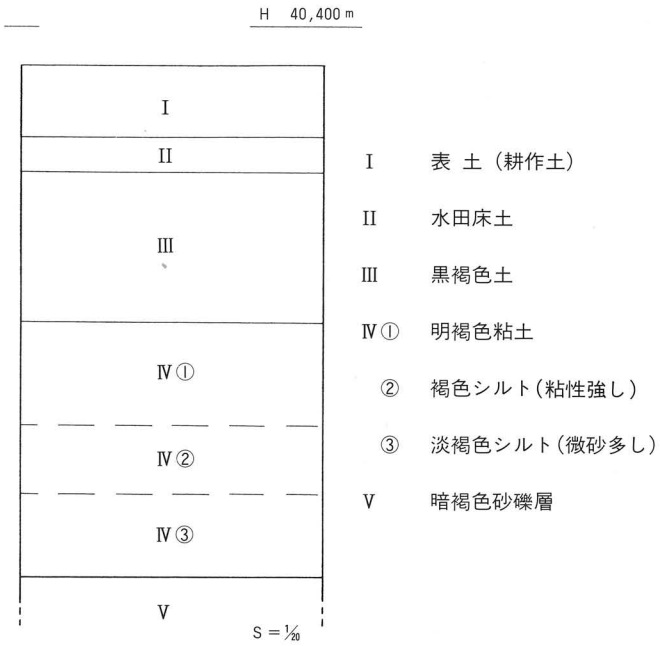
本調査において確認された住居址は７棟である。第Ⅲ層上面にてＳＢ１・ＳＢ４を、他の住居址は第Ⅳ層上面での検出である。住居址のなかには近現代の造成工事により壁高が10cmにみたないものもある。平面形はいずれも方形～長方形であり、ＳＢ３・ＳＢ６を除き、すべてに壁体溝がみられる。ＳＢ４においては、住居址が重複しており、少なくとも４棟の切り合いが認められる。特筆すべきは、古墳時代中期の資料がまとまって出土したＳＢ５と、他にＳＢ６があげられる。


40,150 m
40,100 m
SB 4
SK 4
SB 3
SK 3
SB 2
SK 2
SK 1
SD 1
SB 7
SB 6
SB 5
SK 5
SK 7
SK 6
SB 1
SD 2
39,950 m
40,000 m
40,050 m
40,100 m
0
5 m
(S = 1 : 100)

第46図　遺構配置図



第47図　調査区位置図



第48図　基本層位図

ＳＢ６号住居址（第49図）

調査区南東部Ｄ４区に位置する。東壁はＳＢ５号住居址に切られ、北壁はＳＢ７号住居址を切っている。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は現存南北幅3.5ｍ、東西幅2.5ｍ、壁高７㎝を測る。覆土は暗褐色シルト一層である。

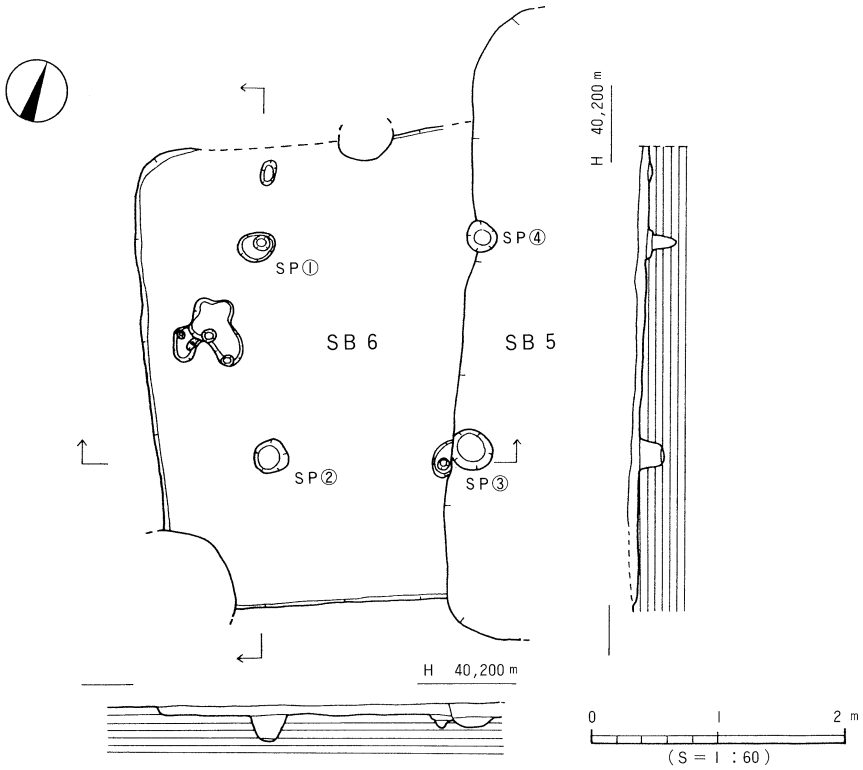
主柱穴はＳＰ－①・②・③・④の４本であり、東側の２本はＳＢ５号住居址に切られている。柱穴は円～楕円形を呈し、径20～30㎝、深さ18～22㎝、柱穴間は140～170㎝を測る、床面は硬く、西から東に向けて緩傾斜している。炉、壁体溝等の内部施設は未検出である。

遺物は、土師器片が床面より出土している。

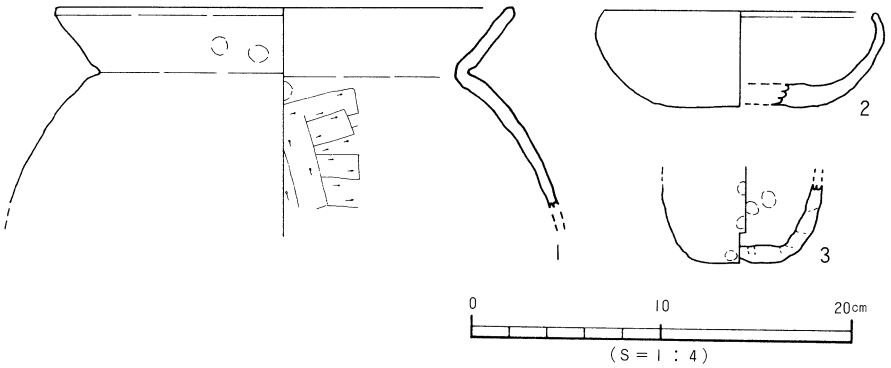
出土遺物（第50図）

１は甕形土器である。内面をヘラ削りし、頸部内面に弱い稜をもつ。口縁部は外傾するがわずかに内傾する。口縁端部は丸みをもつ。２は椀形土器の破片である。内湾する口縁部は、端部が丸い。３は手捏ね品である。やや大きめの平底をもつ。

時期：甕形土器と椀形土器より古墳時代中期と考える。



第49図　ＳＢ６ 測 量 図



第50図　ＳＢ６出土遺物実測図

ＳＢ５号住居址（第51図）

調査区東隅Ｃ４～Ｄ５区に位置する。西壁はＳＢ６号住居址を切り、東壁は調査区外へ続く。北東隅は土壙ＳＫ５と重複するが、その切り合い関係は明確にはしえなかった。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は現存南北幅5.4ｍ、東西4.9ｍ、壁高15cmを測る。覆土は黒褐色シルト一層である。床面は比較的硬く平坦である。壁体に沿って幅15cm、深さ５cm、断面Ｕ字状の溝が廻り、溝内にて径８～15cm、深さ３～10cmの小ピットが不規則な間隔で並ぶ。

主柱穴はＳＰ－①・②・③・④の４本である。柱穴は円～楕円形を呈し、径22～30cm、深さ22～50cm、柱穴間は220～250cmを測る。この他、床面にて多数の小ピットを検出したが、その性格は不明である。また、南壁中央部にて楕円形土壙ＳＫ６を検出した。規模は長径1.1ｍ、短径0.5ｍ（推定）、断面形は皿状を呈し、深さ20cmを測る。覆土は住居址のものと同様であり、本土壙は、本住居址の施設である可能性が高い。

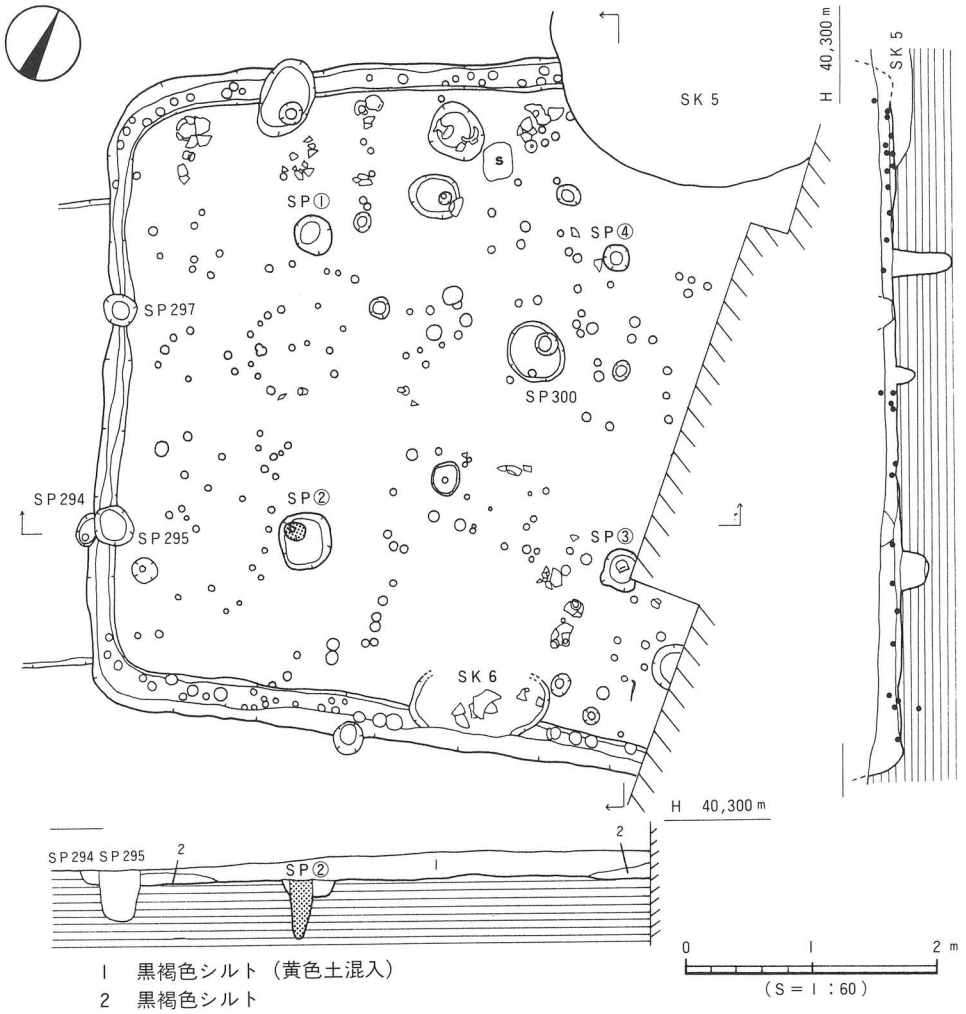
遺物は、床面上より完形品を含め多量に出土した。特に、北壁部と南東部のＳＫ６とその周辺からの遺物は良好な状況で出土した。ただし、北東部のＳＫ５の地点で本住居址床面と同レベルのもの（38～46）は、ＳＫ５との切り合いが判断できなかったため、本住居址に伴うものであるかは若干の疑問もあるため、資料操作にあたっては注意を要する遺物群である。

出土遺物（第52～54図）

床面直上の遺物、埋土中遺物、ＳＫ５上面出土の遺物に分けて解説する。

床面直上遺物（４～28）

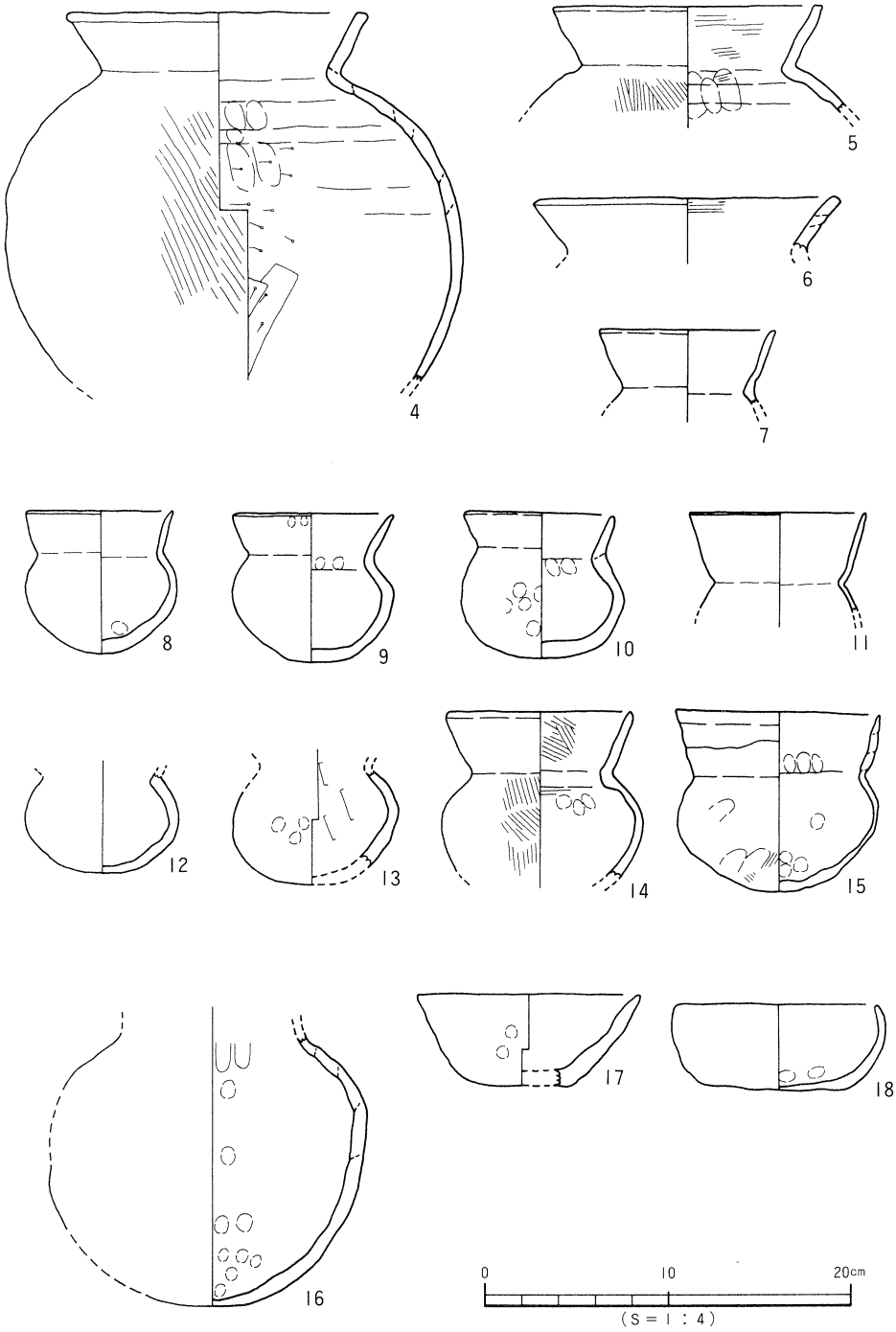
甕形土器（４～６）　肩部がやや張る球形の胴部に、短く外傾する口縁部をもつ。４・５は口縁上部がわずかに内湾し、６は外反する。口縁端部内傾及び著しい肥厚はしない。内面は頸部屈曲部下端以下をヘラ削りする。頸部内面は弱い稜をもつ。



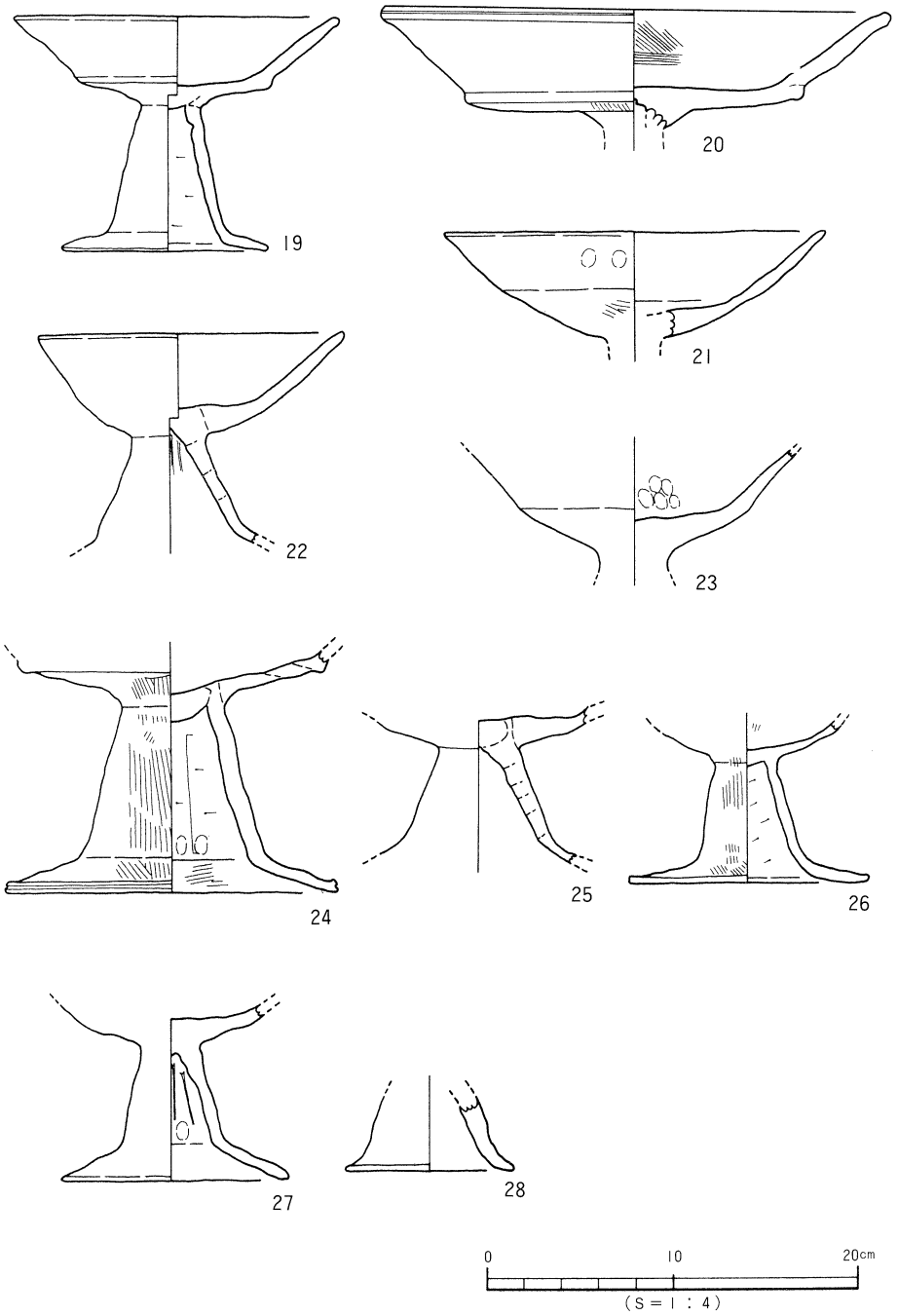
第51図　SB5 測量図

壺形土器（7～16）　小型品は、胴下半部が締まるものと(8)、胴部がふくらみをもつもの（9・10・11・13・15）がある。口径は、胴部最下径に近い値をとる。中型品は、肩部が、わずかに張る球形状の体部をもつ16がある。

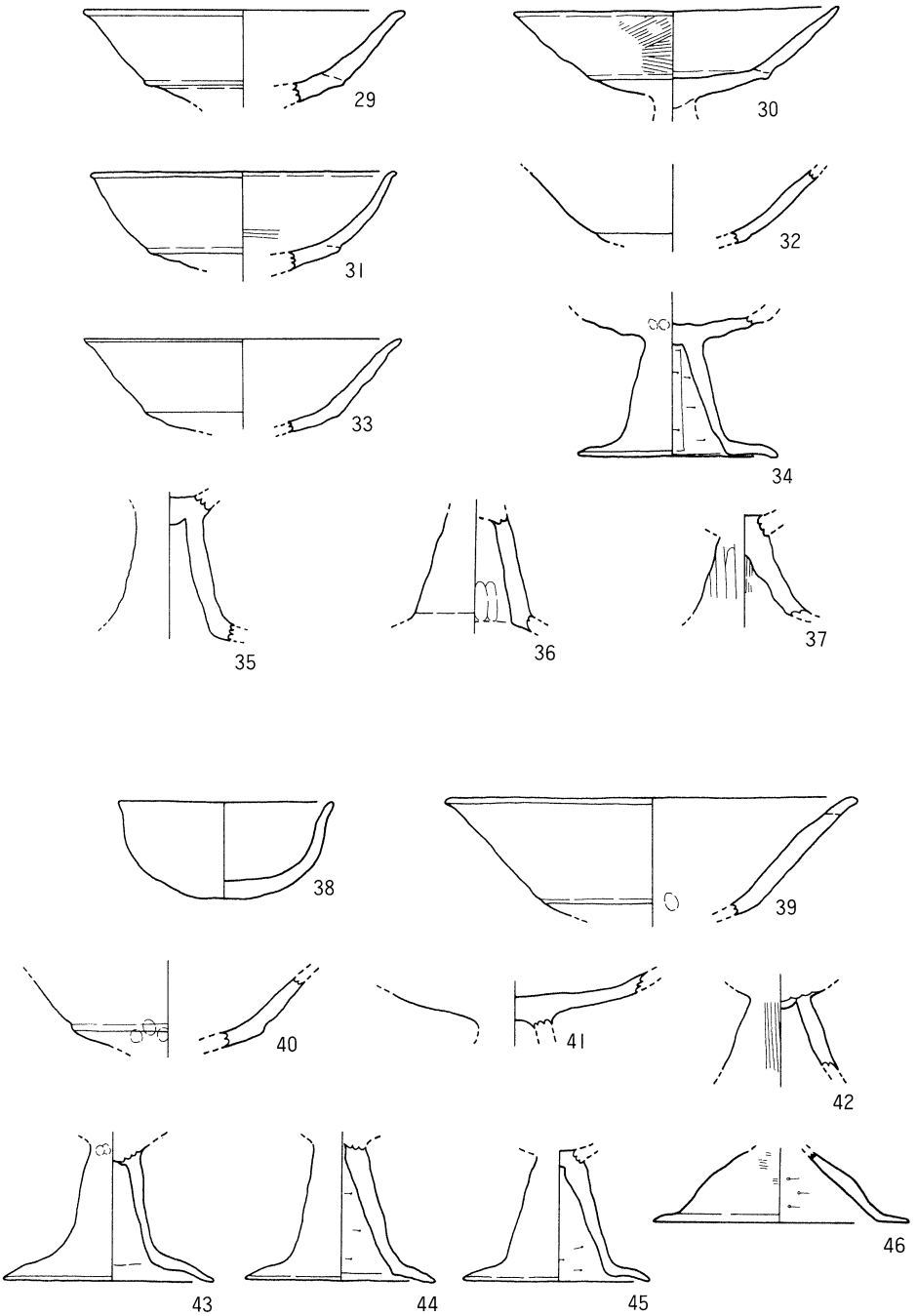
鉢・椀形土器（17・18）　17は鉢形土器小型品である。外傾して立ち上がり、口縁部は先細りする。18は椀形土器である。内湾して立ち上がる体部と口縁部をもつ。底部外面に葉脈の痕が残る。



第52図　SB 5 出土遺物実測図 (1)



第53図　ＳＢ５出土遺物実測図 (2)



29～37　SB 5
38～46　SK 5

第54図　SB 5 埋土・SK 5 上面出土遺物実測図

高坏形土器（19～28）　坏部は、底部と体部の接合部（以下、接合部と記す）の形状により三分類できる。A：接合部が段となるもの19・20　B：接合部で屈曲するもの21・22　C：坏底部よりゆるやかに外傾外反して立ち上がるもの23である。口縁上端部内面は、ナデによりわずかに内湾する。坏底部には充塡技法が使用されるものがある19・20・24。

脚部は、低脚で柱部が三角錐を呈する。裾部は長い。裾部は外反して開くもの24・26と内湾して開くもの27がある。28は小型品の小片である。三角形を呈する柱部に、短く外反する裾部がつく。

埋土出土遺物（29～37）

高坏形土器（29～37）　坏部は、接合部が有段の29～32、接合部が稜の33がある。29・31・33は口縁端部が外反し、30は外傾する。坏底部は充塡技法が30・35にみられる。脚部は、三角錐を呈し、大きく開く裾部をもつ。内面の柱裾部境に稜をもつ。

ＳＫ５上面出土遺物（38～46）

椀形土器（38）　38は丸底の小さい底部に、わずかに外反する口縁部をもつ。

高坏形土器（39～46）　坏部は、接合部に丸みのある段をもつ40。39はＳK5(53)と同一個体の可能性がある。脚部は、細身の三角錐を呈し、内湾して開く裾部をもつ。内面の柱部と裾部境には稜をもち、柱部内面はヨコヘラ削りである。42は充塡技法である。44は柱天井部が貫通している。46は扁平な三角錐を呈する柱部に、短く開く裾部をもつ。

時期：出土遺物は、全体的に古墳時代中期の範囲に入るものである。出土状況より、特に、床面出土品は、本住居址の廃棄時に伴う可能性が高い。よって、本住居址の時期は、古墳時代中期（中葉か）と考える。

(2)溝状遺構（表26）

本調査において確認された溝は２条である。両者とも第Ⅳ層上面での検出である。各溝に関する詳細は表26に記す。

(3)土壙（表27）

本調査において確認された土壙は７基である。ＳＫ１・２・４・５は第Ⅳ層上面での検出であり、ＳＫ３はＳＢ３内、ＳＫ６はＳＢ５内に伴うものである。ＳＫ１・２・４は覆土は異なるが、ほぼ同規模の長方形状土壙である。特筆すべき土壙はＳＢ５号住居址と重複するＳＫ５である。

土壙ＳＫ５（第55図）

調査区北東隅Ｃ５区に位置する。南半部はＳＢ５号住居址と重複するが、その切り合い関係は判断しえなかった。平面形は円形を呈するものと考えられ、規模は径1.1ｍ、深さ10cmを測る。断面形はＵ字状を呈している。床面は硬く、ほぼ平坦である。覆土は黒褐色シルト一

層である。

遺物は、出土地点より二群に分かれる。床面直上ないし床面付近で出土したものと、埋土中であるがＳＢ５の床面レベルに近い地点で出土したものである。後者のなかの53は、ＳＢ５第54図39と同一個体の可能性があるものである。

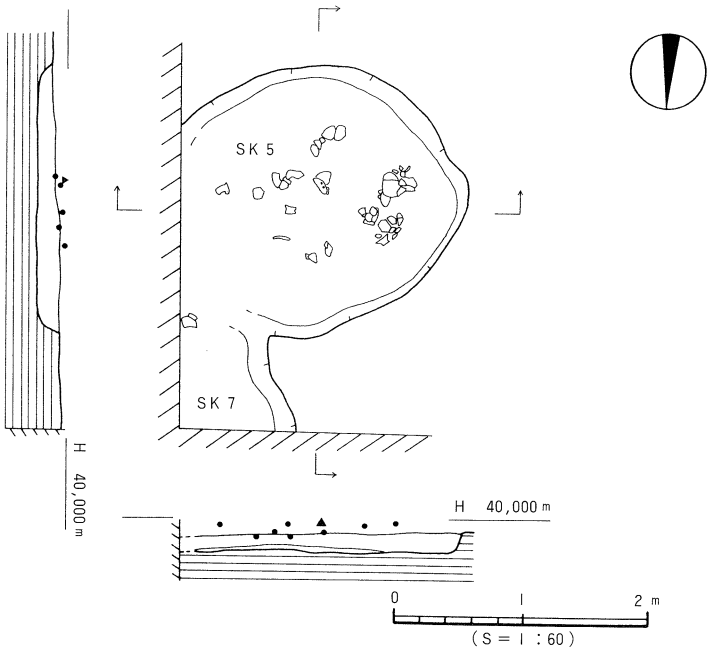
出土遺物（第56・57図）

床面直上ないし床面付面付近出土遺物（47～52）

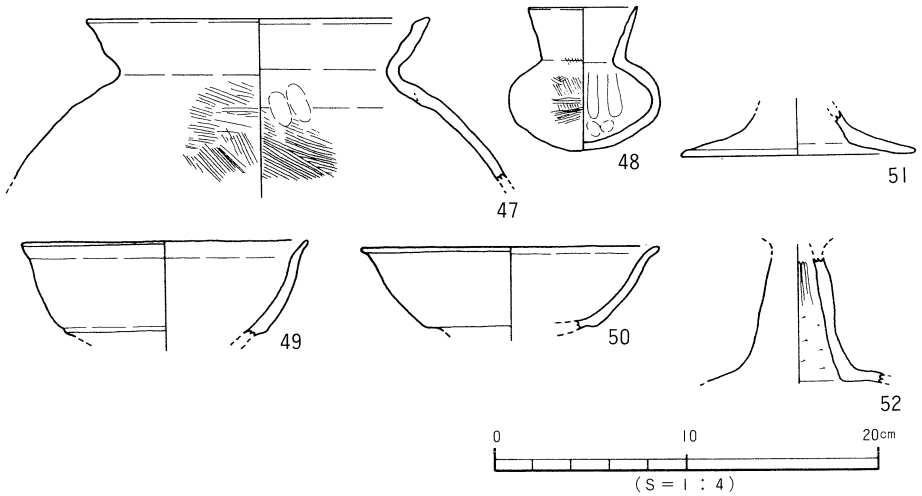
甕形土器（47）　47は肩の張りが弱く、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内傾する。内面は、削りの後ナデと刷毛目調整である。外面は雑な刷毛目調整である。

壺形土器（48）　48は小型品である。扁平な体部に外傾して長く伸びる口縁部をもつ。

高坏形土器（49～52）　49は床面直上のもので、50～52はやや浮離した地点の出土である。坏部は丸みをもって内湾して立ち上がる体部に外反する口頸部をもつ。49・50は接合部に段をもつ。52は脚部片である。細く締まる柱部に、水平近く曲がる内湾する裾部をもつ。



第55図　ＳＫ５ 測 量 図



第56図　ＳＫ５出土遺物実測図

埋土上部出土遺物（53～62）

甕形土器（53～57）　53･54は大型品である。内湾する口縁部と内傾する口縁端部をもつ。53は内面に指頭痕を、54は刷毛目を残す。55はやや器壁が薄く、内面にケズリ痕を顕著に残す。56・57は中型品である。胴部が長胴となるものである。口縁端部は丸みのある「コ」字状に仕上げる。

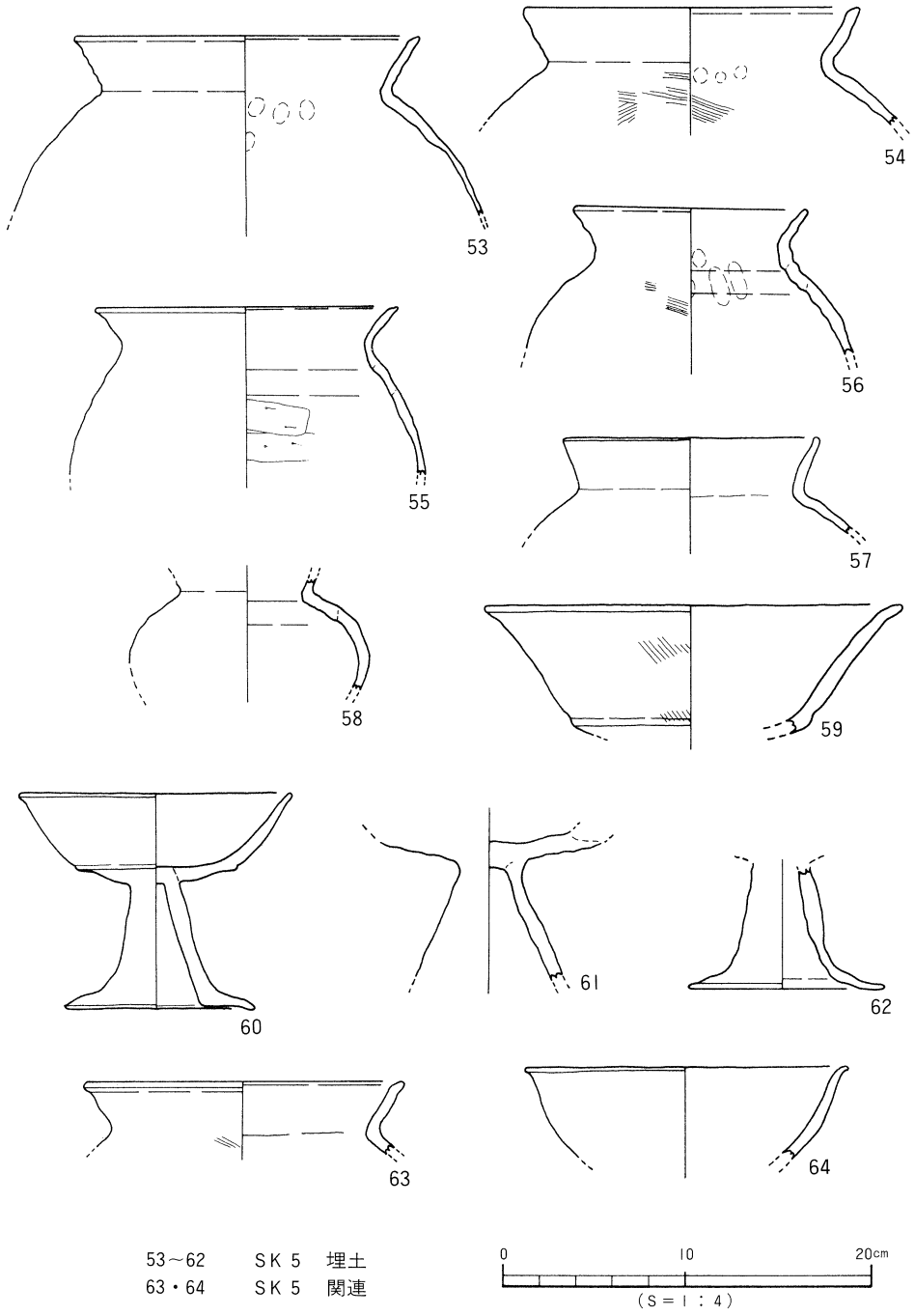
壺形土器（58）　58は小型品である。扁平な体部は、内面にナデ痕を残す。

高坏形土器（59～62）　59は大型品の破片である。屈曲部に丸みのある段をもち、外反する口縁部をもつ。60は一部を欠くが、完形に近いものである。屈曲部に段をもち、内湾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。61・62は脚部片である。

ＳＫ５関連遺物（63・64）

63は埋土から出土した甕形土器片である。内湾して立ち上がる口縁部は、端面が内傾する。64は、ＳＫ５とＳＫ７の境で出土した高坏形土器片である。三角錐を呈した柱部に、短く内湾して開く裾部をもつ。

時期：床面出土の遺物と埋土中出土の遺物に、大きな時期差はないと考える。出土遺物は５世紀中～後葉に比定されるものであり、本遺構の廃棄・埋没時期も５世紀中～後葉に考えておく。



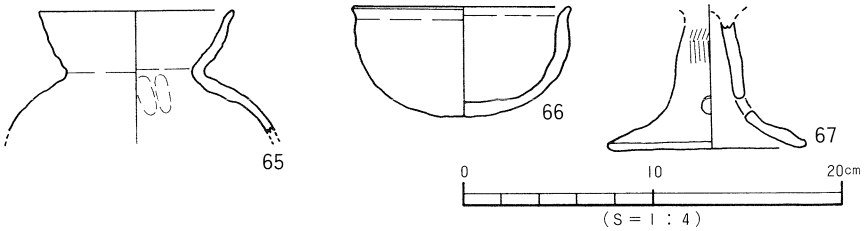
第57図　SK 5埋土・SK 5関連出土遺物実測図

土壙ＳＫ７（第58図）

遺物は、床面上より完形に近いものが３点出土した。

出土遺物（65～67）　65は壺形土器である。内湾して立ち上がる頸部に、外反する口縁部をもつ。肩部は張り、内面はケズリと指頭痕を残す。66は椀形土器である。内湾して直立ぎみに立ち上がる体部に、外反する口縁部がつく。67は内湾する細い柱部に、外反する長い裾部をもつ。円孔を３ケ所に穿つ。本遺跡出土の土師器の高坏形土器では唯一の円孔を穿つ高坏脚部である。

時期：出土遺物が床面上で、完形に近いことより、出土遺物の特徴より５世紀後半に廃棄・埋没したものと考える。



第58図　ＳＫ７出土遺物実測図

(4)その他の遺構と遺物

本調査において確認された柱穴は270基である。いずれも第Ⅳ層上面での検出である。柱穴中からの遺物の出土はあまりみられない。他に調査区南東隅にて不定形土壙（ＳＸ１）を検出した。規模は、現存南東幅1.2ｍ、東西幅２ｍ、深さ25cmを測る。内部は２段掘りになっており、覆土は粘性の強い褐色シルト一層である。遺物の出土はまったくなく、時期やその性格は不明。

４．小結

(1)弥生時代

弥生時代と特定できる遺構はない。出土遺物は少量で中期中葉、後期後葉の破片が包含層と遺構埋土より出土した。これ等の資料は、当地周辺に同時期の生活関連遺構が存在していたことを示唆する資料である。

(2)古墳時代

竪穴式住居址は全て古墳時代の築造と考えられた。確実に時期を特定できたのは、ＳＢ２・３・５で中期のものである。他は、前期の遺物の出土はないため、中期以降の可能性が高い。

竪穴式住居址を概観すると、平面形は四角形プランで、主柱穴はＳＢ５・６では四本柱、他は柱穴が未検出であった。壁体溝は、ＳＢ１・２・５・７で検出された。このうちＳＢ２・５・７は溝中に小ピットが検出された。さらにＳＢ５では、床面に無数の小ピットが検出された。壁体内側を巡る小ピットは、松山大学構内遺跡２次調査〔梅木謙一　1991〕、道後今市遺跡６次調査〔梅木・宮内　1991〕等、松山平野の竪穴式住居址に散見できる構築物である。

出土遺物として注目されるのは、ＳＢ５・ＳＫ５出土の土器群である。

ＳＢ５では、小型丸底壺は口径が体部径と等しいかやや小さくなる形態をとる。高坏形土器は直線的に外傾し、坏屈曲部に明瞭な稜をもち、脚部は短く三角錐形を呈するものがある。

ＳＫ５は、小型壺は長頸で、口径が体部径より小さいものである。高坏形土器は、丸みをもって内湾して立ち上がり、小さく折り曲げる口縁部をもつ形態をとる。

ＳＢ５とＳＫ５出土品を比較するとＳＢ５がＳＫ５よりも型式学的に古いことが知れる。

ＳＢ５・ＳＫ５出土品は一括性が高い資料であり、松山平野の土師器研究の好資料になるものである。

以上、簡単に調査の報告を行った。ＳＢ５・ＳＫ５は調査時に何度も切り合い関係を検索したが判断できなかった。また、ＳＢ４も幾つかの切り合いないし改築が行われていた可能性を部分的に確認したものの、その全様を把握することができなかった。

周囲にある樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、桑原西稲葉遺跡との関連は第13章にて行うが、本調査とも共通することは、弥生時代遺物は出土するが遺構が未検出であることがあげられる。いずれの遺跡とも弥生土器は少量・小片の出土状況にあることより、東方域である畑寺・東野の山麓～樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）地域に弥生時代集落が存在していた可能性が高いと考えている。同地域は、近年宅地開発が激化してきた土地でもあり、充分な調査が必要とされるだろう。

〔文献〕

梅木謙一　1989「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一　1991『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会

梅木謙一・宮内慎一　1991「道後今市６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会

岡田敏彦・中島博文・小林一郎・若谷倫郎　1985『道後今市遺跡』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター編

岸　郁男・長井数秋・大山正風　1973『釜ノ口遺跡』松山市教育委員会

西田　栄・森　光晴・大山正風　1976『文京遺跡』愛媛大学・松山市教育委員会

宮本一夫　1989『樽味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学

森　光晴　1986「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂室

遺構・遺物一覧 （遺構一覧：宮内慎一、遺物観察表：梅木謙一・水口あをい）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。　例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表25　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備考
					高床	土壙	炉	カマド		
7	古墳中期	隅丸方形	3.5×2.9×0.05						○	ＳＢ３・６に切られる
6	古墳中期	隅丸方形	3.5×2.5×0.07	4						ＳＢ５に切られＳＢ７を切る
5	古墳中期	隅丸方形	5.4×4.9×0.15	4		○			○	ＳＢ６を切る ＳＫ５と重複
2	古墳中期	隅丸方形	2.9×2.3×0.10						○	
3	古墳中期	隅丸長方形	4.7×2.9×0.05			○				ＳＢ７を切る
1	古墳後期	隅丸方形	4.0×3.7×0.15						溝	
4	不明	不明							溝	

●表26　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	Ｄ２	皿状	0.80×0.40×0.10	褐色シルト			不明
2	Ｅ３～Ｅ４	皿状	1.50×0.80×0.13	褐色シルト			不明

●表27　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土(シルト)	出土遺物	備考	時期
1	Ｄ２	隅丸長方形	皿状	1.7×1.3×0.45	暗褐色			不明
2	Ｄ２	隅丸長方形	皿状	1.4×1.0×0.15	暗褐色			不明
3	Ｃ２	円形	擂鉢状	1.3×1.3×0.25	暗褐色		ＳＢ３内	不明
4	Ｃ２	隅丸長方形	皿状	1.7×1.3×0.20	茶褐色			不明
5	Ｃ５	円形	⊔字状	1.1×1.1×0.10	黒褐色	土師	ＳＢ５と重複	古墳中期
6	Ｄ５	楕円形	皿状	1.1×0.5×0.20	黒褐色	土師	ＳＢ５内	古墳前期
7	Ｃ５	円形	皿状	0.4×0.4×0.20	黒褐色	土師	ＳＫ５と重複	古墳中期

●表28　ＳＢ６出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(24.1)	わずかに内湾する口縁部。端部は丸みのある「コ」字状。	口—ヨコナデ 胴—磨滅の為不明	口—ヨコナデ 胴—ヘラケズリ	石・長(1～5) 銀ウンモ ○		
2	鉢	口径(14.2) 器高　5.0 底径　(8.4)	内湾する口縁部。端部は丸い。丸みのある平底。½の残存。	ナデ	ナデ	石・長(1～3) ◎		
3	鉢	底径　4.6	平底。粘土紐の巻き上げによる成形。巻き上げ痕顕著。	指頭圧痕顕著	指頭圧痕顕著	石・長(1～3) ◎	黒斑	

●表29　ＳＢ５出土遺物観察表 土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
4	甕	口径(15.4)	強く張る肩部。口縁部はわずかに内湾。端部は外方にわずかに突出する。	口—ヨコナデ 胴—ハケ	口—ヨコナデ 胴上—ケズリ→ナデ 胴下—ケズリ	砂粒(1～2) 金 ◎		44
5	甕	口径(14.4)	内湾してたちあがる口縁部。端部は丸く、一部やや面をもち内傾。¼残存。	口—ヨコナデ 胴—ハケ(6本/1cm)	口—ヨコハケ→ヨコナデ 胴—ナデ	石・長(1～3) 金 ◎		44
6	甕	口径(15.6)	内湾して、外反する口縁部。端部は一部内側に肥厚する。小片。	ヨコナデ	ハケ	石・長(1～3) 金 ◎		
7	小型 丸底壺	口径　(9.5)	口縁部はわずかに外反する。端部は丸い。外面に接合痕を残す。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
8	小型 丸底壺	口径　7.8 器高　7.9	肩部が強く張り、底部は尖底状になる。口縁部はやや内湾し、端部は先細り。	口—ヨコナデ 胴—磨滅の為不明	ヨコナデ	石・長(1～4) ○		44
9	小型 丸底壺	口径　8.8 器高　8.2	完形。口縁部は内湾し外反する。端部は先細り。	口—ヨコナデ 胴—磨滅の為不明	口—ヨコナデ 胴上—ヨコナデ 胴下—板ナデ	石・長(1～3) ◎		44
10	小型 丸底壺	口径　7.95 器高　8.0	完形。胴下半部が張る。内湾する口縁部。端部は丸い。器壁厚い。	口—ヨコナデ 胴—磨滅の為不明	口—ヨコナデ	砂粒(1～2) 黒ウンモ ◎	黒斑	44
11	小型 丸底壺	口径　9.6	内湾する長い口縁部。端部は先細り。器壁薄い。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
12	小型 丸底壺	残高　5.5	胴最大径以下ヘラ削り。削り後未調整。器壁厚い。	胴上—ナデ 胴下—ケズリ→ナデ	ナデ	密 ◎		
13	小型 丸底壺	残高　6.0	肩部が強く張る。器壁厚い。内面に木口痕。	胴上—ヨコナデ 胴下—ナデ	板ナデ	密 ◎		44
14	小型 丸底壺	口径　9.6	肩部が強く張る。口縁部は長く内湾する。端部は丸い。器壁厚い。	口—ヨコナデ 胴—ハケ	口—ハケ 胴—ナデ	密 ◎		45
15	小型 丸底壺	口径 10.9 器高 10.8	肩部は強く張り、胴下半はすぼまる。口縁部は長く内湾。端部は先細り。	口—ヨコナデ 胴—板ナデ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	密 ◎	黒斑	45

ＳＢ５出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
16	壺	残高 15.0	肩部が張り、底部はやや広めの丸底。内面は指頭痕が全面に残る。	磨滅の為不明	ナデ	密 ◎		45
17	鉢	口径 10.0 器高 5.1 底径 (4.3)	口縁部はわずかに外傾する。端部は平坦な部分と丸い部分がある。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) ◎	黒斑	45
18	鉢	口径 10.8 器高 4.8 底径 6.0	内湾する口縁部。端部は丸い。底部は広い平底で木葉の痕がつく。	口—ヨコナデ 胴—ナデ 底—葉脈痕顕著	口—ヨコナデ 胴—ナデ	密 金 ◎	黒斑	45
19	高坏	口径 16.9 器高 12.8 底径 10.7	完形で坏屈曲部は段をもつ。口縁部はわずかに内湾。裾部壁厚い。	口—ヨコナデ 他は磨滅の為不明	口—ヨコナデ 柱—ヘラケズリ 他は磨滅の為不明	石・長(1～5) ◎		46
20	高坏	口径 26.9	坏屈曲部は段をもつ。口縁部わずかに外反。端部丸みのあるコ字状。	口—ハケ→ヨコナデ 底—ハケ(5本/1cm)	口—ハケ 底—ナデ	石・長 ○	黒斑	46
21	高坏	口径(20.2)	坏屈曲部は強くナデられ凹みとなる。口縁部わずかに外反。⅓残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) 金 ◎		46
22	高坏	口径(16.0)	坏屈曲部は段をもたない。口縁部外傾し、内湾。端部丸い。柱は太い。	磨滅の為不明	坏—磨滅の為不明 柱—ナデ	石・長(1～2) ◎	黒斑	46
23	高坏	残高 6.7	坏底—体部の接合部より下位に屈曲部をもつ。接合部は、やや凹む。	口—ヨコナデ 底—ナデ	口—ヨコナデ 底—ナデ	石・長(1～2) 金 ◎		
24	高坏	底径 17.6	大型品。坏底部は広く、擬口縁を看守。柱部は太く裾部は短い。充塡。	底—ハケ(9本/1cm) 柱—ハケ(9本/1cm)	柱—ヘラケズリ 裾—ハケ(9本/1cm)	石・長(1～5) 金 ◎		46
25	高坏	残高 8.5	指し込み技法。充塡柱部は粘土紐のまき上げ。坏—裾部境不明。	磨滅の為不明	ナデ	石・長(1～2) 金 ◎		
26	高坏	底径(12.8)	坏底部やや丸い。柱部はふくらみ、やや長い裾部をもつ。充塡。	底—磨滅の為不明 柱—ハケ(6本/1cm)	底—ナデ 柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	石・長(1～3) 金 ○		
27	高坏	底径 12.0	坏底部は丸い。裾部は非常に長く内湾する。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		46
28	高坏	底径 (8.8)	脚台の可能性もある。短く、厚い裾部。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) 金 ○		

●表30 ＳＢ５埋土出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
29	高坏	口径(15.4)	坏屈曲部に段。内湾して外反する口縁部。端部は丸く細い。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 金 ○		
30	高坏	口径 17.2	坏屈曲部は指頭痕が残り段をもつ。口縁部はやや内湾する。端部先細り。	口—ハケ(9本/1cm) 底—磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ○	黒斑	47
31	高坏	口径(15.3)	坏屈曲部は、わずかに段となる。口縁部は外反する。口縁端部は丸く細る。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		47

ＳＢ５埋土出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
32	高坏	残高 4.0		磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～2) ◎		
33	高坏	口径(16.9)	坏屈曲部は稜となる。口縁部は外反する。端部は先細り。一部欠。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		47
34	高坏	底径 10.7	59の坏部が同一個体か。組み合わせ技法。裾部は内湾する。	磨滅の為不明	柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	密 ○		47
35	高坏	残高 7.7	組み合わせ技法。柱—裾境の内面に稜をもつ。器壁は厚い。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) 金 ◎		
36	高坏	残高 6.4	三角錐状の柱部。柱—裾境の内面に稜あり。シボリ痕。指し込み技法。	ナデ	ナデ	密 ◎	黒斑	
37	高坏	残高 5.5	指し込み技法。なだらかに傾斜する柱部。小片。	ヘラミガキ		砂粒 ◎		

●表31　ＳＫ５上面出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
38	鉢	口径 11.4 器高 5.3	丸底でやや広い底部。口縁部はゆるやかに外反。端部は丸い。	口—ヨコナデ 胴—ナデ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	密 ◎		
39	高坏	口径(21.4)	坏屈曲部は指頭痕が残りわずかに段をもつ。口縁部は外反。⅙の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎		
40	高坏	残高 4.0	坏屈曲部は丸みある段。坏底部は丸みあり。⅙の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒(1～2) 金 ○		
41	高坏	残高 2.9	坏屈曲部はわずかに段をもつ。大型品の小片。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	砂粒 ○		
42	高坏	残高 4.4	指し込み技法。充塡。	ハケ	ナデ	石・長(1～2) ◎		
43	高坏	底径(11.2)	裾部は長く、内湾する。柱外面上部に放射状の刻目あり。	磨滅の為不明	柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	密 ◎		47
44	高坏	底径 10.1	短く、やや内湾し、厚めの裾部。柱天井部に径３㎜の焼成前小円孔１ヶ。	磨滅の為不明	柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	石・長(1～4) ○		47
45	高坏	底径 9.8	短く、やや内湾し、厚めの裾部。	ナデ	柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	石・長(1～2) 金 ○		
46	高坏	底径(13.6)	太く、大きく内湾する柱部。短く、内湾し、やや厚い裾部。⅛の残存。	ハケ→ナデ	柱—ヘラケズリ 裾—ヨコナデ	石・長(1～2) ◎		47

●表32　ＳＫ５出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
47	甕	口径(17.8)	内湾する口縁部。端部は内傾する。41と同一個体の可能性あり	㊐—ヨコナデ ㊐—ハケ(7本/1cm)	㊐—ヨコナデ ㊐—ハケ(7本/1cm)	石・長(1～2) 金 ○		48
48	壺	口径 5.6 器高 7.6	扁平な体部。口縁部は長く外傾。端部は先細り。一部を欠く。	ハケ(7本/1cm)	ナデ	砂粒 金 ◎		48
49	高坏	口径(14.6)	坏屈曲部はわずかに段となる。外反する口縁端部は丸く細る。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) ◎		
50	高坏	口径(15.3)	坏屈曲部は坏底部側が凹んで段となる。口縁は外反し、丸く細い。⅛残。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) 金 ◎		
51	高坏	底径(12.2)	長く外反する裾部。柱—裾部境の内面に弱い稜あり。小片。	ナデ	㊍—ハケ→ナデ	石・長(1～2) ○		
52	高坏	残高 6.5	直立ぎみの柱部。短く内湾する厚い裾部。	磨滅の為不明	ヘラケズリ	密 ○		

●表33　ＳＫ５埋土出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
53	甕	口径(18.4)	内湾する口縁部。端部は内傾する。内面は指頭痕顕著。	㊐—ヨコナデ ㊐—ナデ	㊐—ヨコナデ ㊐—ナデ	石・長(1～3) 金 ○		48
54	甕	口径(17.8)	内湾する口縁部。端部は内傾する。頸部に稜をもたない。⅙の残存。	㊐—ヨコナデ ㊐—ハケ	㊐—ヨコナデ ㊐—ハケ	石・長(1～2) 黒ウンモ ○		
55	甕	口径(16.2)	磨滅著しい。外反する口縁部。端部わずかに外方に突出する。⅛残存。	磨滅の為不明	㊐—ナデ ㊐—ヘラケズリ	石・長(1～4) ◎	黒斑	48
56	甕	口径 12.4	外反する口縁部。端部丸く一部平坦部分あり。内面接合痕あり。	㊐—ヨコナデ ㊐—ハケ(5本/6mm)	㊐—ヨコナデ ㊐—ナデ ㊐—ヘラケズリ	石・長(1～3) 金 ○	黒斑	
57	甕	口径(17.8)	磨滅著しい。内湾する口縁部。端部はコ字状で、やや内傾。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ○		
58	壺	残高 6.0	肩部が強く張る。胴部削りの可能性もある。内面は接合痕が残る。	磨滅の為不明	ナデ	密 ◎	黒斑	
59	高坏	口径(22.4)	坏屈曲部は丸みのある段。深い坏部。端部ややうすく丸い。	ハケ—ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	密 ◎		
60	高坏	口径 15.1 器高 11.7 底径 10.2	坏屈曲部はわずかに段をなす。裾部はやや長く、内湾する。	㊍—ヨコナデ	㊍—ヨコナデ ㊍—ナデ	石・長(1～3) ◎	黒斑	48
61	高坏	残高 8.2	坏部はやや大きい底。脚部は三角錐状を呈す。器壁が厚い。	㊍—ヨコナデ ㊍—磨滅の為不明	㊍—ナデ ㊍—ヘラケズリ	密 ○		
62	高坏	底径 10.4	直立ぎみの柱部。やや長い裾部。組み合わせ式。	磨滅の為不明	㊍—ナデ上げ ㊍—ヨコナデ	石・長(1～2) ○	黒斑	

●表34　ＳＫ５関連出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
63	甕	口径(17.0)	やや内湾する口縁部。端部は内傾する。頸部に稜をもたない。1/6残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3) 金 ○		
64	高坏	口径(17.1)	坏下端に接合の際の擬口縁を看取。外反する口縁部。1/6の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～4) ◎		

●表35　ＳＫ７出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
65	壺	口径 10.0	肩部が張る。内湾する長い口縁部。端部先細り。	㊐―ヨコナデ ㊐―磨滅の為不明	㊐―ヨコナデ ㊐―ナデ上げ ㊐―ヘラケズリ	石・長(1～4) 金 ○		48
66	鉢	口径 10.7 器高 5.9	わずかに外反する口縁部。端部は先細り。丸底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～3) ◎		48
67	高坏	底径 9.6	直立ぎみの柱部。大きく長い裾部。柱下部に径1cm大の円孔3ヶ。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	密 ◎	黒斑	48

第 5 章

樽味四反地遺跡
タルミシタンジ

1. 調査の経過

(1)調査に至る経緯　1987（昭和62）年12月、川添政子氏より、松山市樽味４丁目204番１・204番４における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『81樽味遺物包含地』内にあり、これまでにも周辺の地域で調査が実施されており、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫　1989〕があり、弥生時代前期から中世までの集落関連遺構と遺物を確認している。

周辺には、弥生時代の石手川以北の拠点的集落である文京遺跡〔西田栄他　1976〕、弥生時代から古墳時代の小坂釜の口遺跡〔岸・長井・大山　1973〕、桑原遺物包含地、５Ｃ後半とされる前方後円墳の経石山古墳（第９章）〔森光晴　1986〕、同じく６Ｃ代の前方後円墳である三島神社古墳〔岸・森・長井　1972〕、６Ｃ代前半東野お茶屋台古墳群〔森光晴　1986〕などが知られている。

これ等のことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1987（昭和62）年12月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、土師器・須恵器を含む遺物包含層と落ち込みを検出し、当該地に古墳時代から中世に至る遺構・遺物の存在が明らかになった。

この結果を受け、文化教育課・川添政子・越智住宅産業株式会社三者は、遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は古墳時代から中世における当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、川添政子・越智住宅産業株式会社両者の協力のもと1988（昭和63）年４月１日に開始した。

(2)調査組織

調 査 地　松山市樽味４丁目204番１・204番４

遺 跡 名　樽味四反地遺跡

調査期間　野外調査　1988（昭和63）年４月１日～同年６月21日

調査面積　1,500㎡

調査委託　川添政子　調査協力　越智住宅産業株式会社

調査担当　調査員　　梅木　謙一

　　調査補助員　宮内　慎一、山之内志郎

作 業 員　川井　　正、高岡　三郎、田中　国広、玉井　光重、松岡　文一、三江　正則、山本　富明、古屋　明寿、吉田　智宏、谷久　広之、森田　利恵、松本美知子、越智美代子、渡部美代子、黒田　令子、山本　好枝

2．層位（第59図）

本調査地は、南北幅75ｍに及び、北辺の微高地端部から南へ向け緩やかに傾斜している。

基本層位は、地表から順に、第Ⅰ層が水田耕作土層、第Ⅱ層が水田床土層である。第Ⅲ層が黒褐色シルト層で、第Ⅲ層上面が遺構面となる。第Ⅳ層が黄褐色シルト層、第Ⅴ層が砂礫層である。第Ⅳ層より下位の層は、土層図に示す通りである。第Ⅰ層・第Ⅱ層は、約40cmの厚さを測り、第Ⅲ層が約20～30cmの遺物包含層であった。第Ⅲ層は、弥生時代以前に形成されており、少なくとも弥生時代から中世まで存続した遺構面であると推定される。第Ⅳ層以下は無遺物層で、土層堆積は安定しておらず、正確な時期は判断しにくいが、弥生時代以前に堆積したものと推定される。また、(1)地理的環境で前述した通り、調査区北西隅においてＡＴ火山灰土を検出した。検出地点は、調査区北西隅の土層観察用に深掘りした地点である。層位的には、第Ⅳ層と第７層及び第９・10層の間の、地表から80～90cm、90～110cmの二層にわたって確認した。それ以外の地点では確認していないことから、樽味遺跡と同様に安定した堆積ではないと考えられる。

3．調査の概要（遺構と遺物）

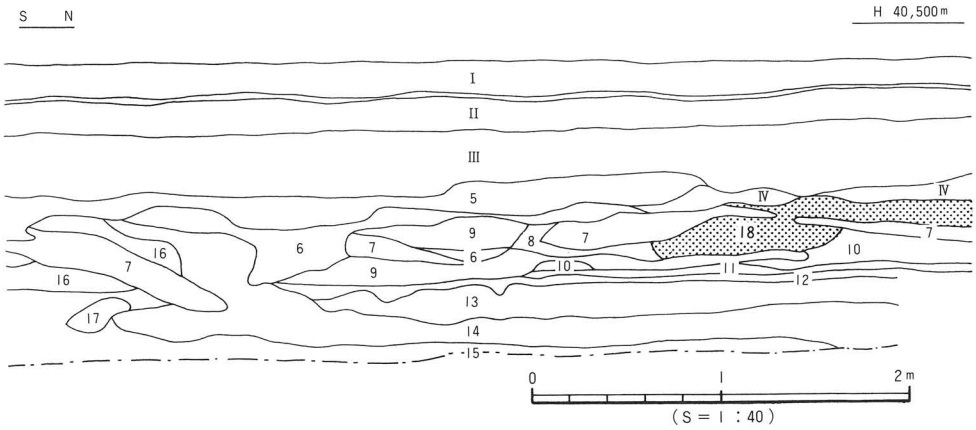
主要な遺構は、落ち込み、旧河川、溝状遺構３条、土壙１基、ピット74基などがあげられる。全て第Ⅲ層から掘り込まれ、第Ⅳ層に及んでいる。

(1)落ちこみ（第60図）

落ち込みは調査区北端で検出され、検出された部分だけでも東西方向に16ｍを越えるものである。当初は南肩のみを検出していたが、調査区北西隅を拡張することによって、幅約２ｍを測ることが明らかになった。ほぼ東西方向を主軸にもち、淡黄色粘土が堆積していた。本遺構からは須恵器片が小量出土している。

(2)旧河川（第60図）

この遺構は、一時的な氾濫というよりは、数次の氾濫によって堆積した河川の跡であると推定している。底面はほぼ平坦であるが、中央部付近はやや深くなる。堆積土層は、粗砂を含む砂礫層と黒褐色粘質土の互層で形成されている。東西方向へ流れるこの旧河川からは、主に土師器・須恵器の流入がみられた（第63図４～10）。須恵器の種類には、坏蓋・無蓋高坏・瓿・高坏脚部・高台付坏身・甕口頸部などがあり、これらの陶邑編年Ⅱ～Ⅲ型式段階に併行する須恵器が広い時期幅をもって堆積している様子がうかがえた。



I 耕作土　II 床土（ミンチ状の土器を含む）　III 濃黒褐色シルト（炭・鉄分含む）　IV 淡黄色シルト
5 灰色砂　6 濃黄色シルト＋砂レキ土　7 黄灰色砂　8 淡黄色砂質土　9 淡茶褐色砂質土（微砂）
10 淡黄灰色シルト　11 灰色砂　12 淡黄灰色砂　13 淡茶褐色粘土（鉄分含む）　14 明黄灰色砂
15 黄灰色砂（5～10cm大の礫多し）　16 黄灰色砂　17 淡黒褐色砂　18 AT火山灰

第59図　西壁土層図（東より）

(3)溝状遺構

ＳＤ－１（第61図・図版52）

溝ＳＤ－１は、調査区やや南寄りに検出した溝である。ほぼ東西に主軸をもち、長さ4.3m、幅1.3m、深さ0.35mを測り、断面形は凹レンズ状を呈している。溝の東端は検出されているが、西端は調査区範囲外まで伸びている。溝の東端から約５m西のところで一段浅くなり、また西へ向かってゆるやかに深くなる。溝内の堆積は単層で、微砂を含む暗茶褐色粘質土で埋没している。土層の堆積状況から、ほぼ一時期の堆積であると思われる。

遺物は、土師器片が溝のやや上層から一点出土したのみで、それ以外の出土遺物は認められなかった。このため、この溝の時期は、土器が示す時期と同一であると考えられ、10世紀代に位置づけられる。

第61図１は、口径13.2cm、器高4.3cmを測るほぼ完形品である。形態は、底部より直線的に立ち上がり口縁部に至るもので、口縁端部を丸く仕上げる。成形手法は、ロクロ成形し、底部は回転ヘラ切りによる。内面は、回転ナデ調整が施され、内面口縁直下に凸面がみられる。口縁部外面は回転ヘラ削り調整される。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。

ＳＤ－３（第62図・図版54）

調査区最南端の溝ＳＤ－３は、規模確認に努めたが、両端共に調査区外である。この溝は、わずかに円弧を描くように南側を内側にして曲がり、東から南西へ曲がるに連れてやがて幅に広がりを持っている。東北東から西南西方向に主軸をとり、長さ11.5m、幅2.8m、深さ0.

25ｍを測る。溝の幅に対して深さは浅く、その底部はなだらかにレンズ状を呈しているが、西へ向かいやや深くなる。溝は第Ⅳ層を掘削しており、灰色粗砂を主体とした薄い層が、黒褐色粘質土層の底部付近に堆積している状況が確認された。調査区南西隅の床面には、握り拳大～人頭大の円礫の累積がみられた。これらの状況から判断して、ほぼ一時期の堆積による旧河川ともとれ、埋土は河川堆積層と考えられる。

遺物は、土師器・須恵器などが溝のやや上層から出土している。これらの中で実測可能な種類として、土師器坏と土師器皿とがあげられる（第62図２・３）。２は土師器の坏である。口径13.0cm、器高4.0cmを測る。形態は底部より外方へ向かって広がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸く仕上げられる。全体の約３分の１を欠失している。成形手法は、ロクロにより成形し、底部は回転ヘラ切りによって切り離されたのち、ヨコナデ調整が施されている。また内外面共にヨコナデによる調整が施され、内面口縁部直下にはススが付着している。底部外面には粘土巻き上げ痕跡がみられる。色調は、内面が明褐色、外面が淡黄褐色をしている。胎土は密で、焼成は良好である。

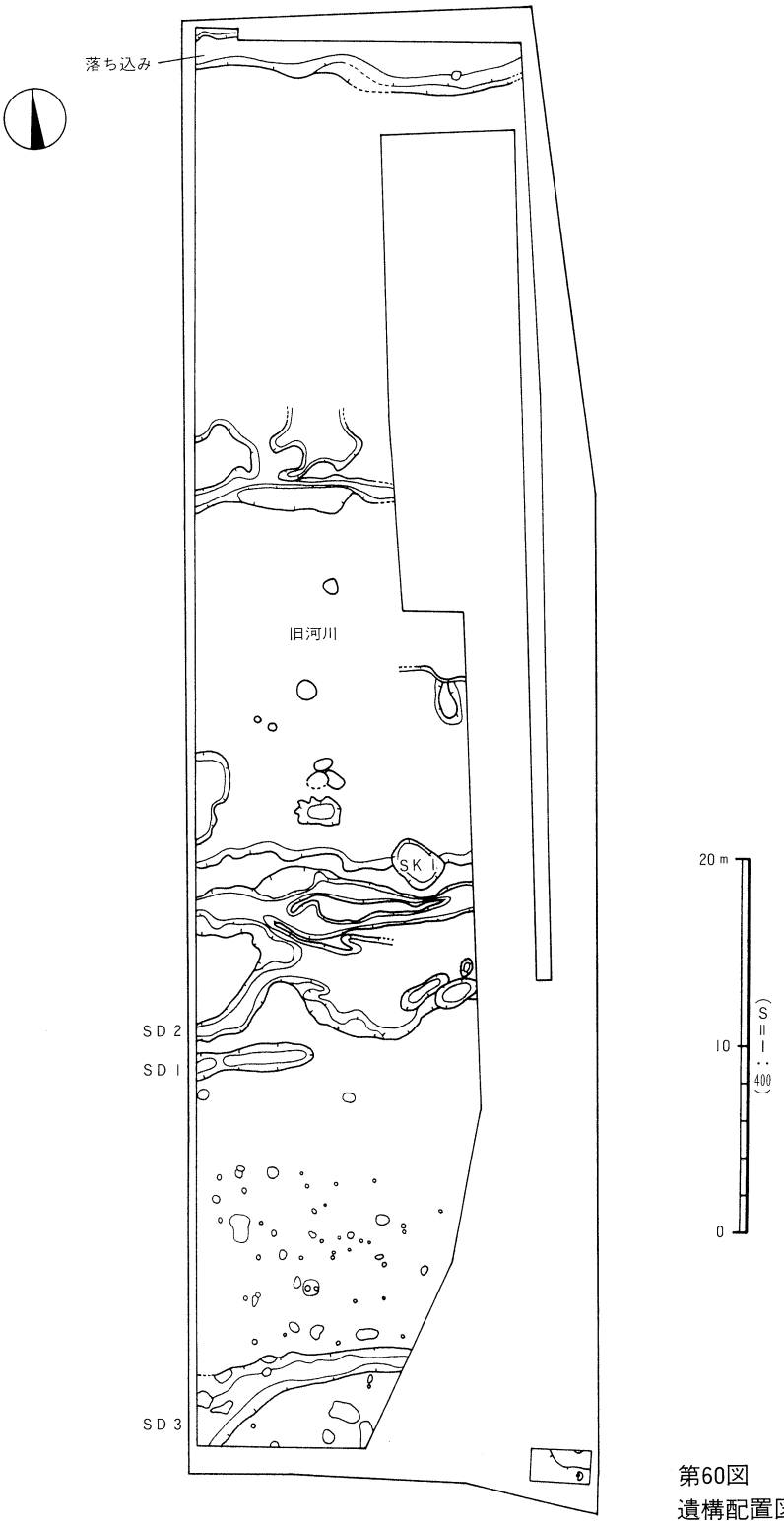
３は土師器の皿である。口径12.6cm、器高2.0cmを測る。形態は、器高に比して径の大きな底部から、浅く斜め外方へ開く体部を呈する。口縁端部は丸く仕上げられる。全体の約半分を欠失している。成形手法は、ロクロにより成形した後、底部に回転ヘラ削りを行った後、ヨコナデ調整が施されている。また内外面共に、ヨコナデによる丁寧な調整が施されている。色調は淡黄色、胎土は密で、焼成は良好である。

上述した２点の土師器以外にも、同様の皿や坏が出土している。しかし県内における、中世土器の時期差による形態や法量の確定化が不十分であるため、同一時期の資料として取り扱ってよいものかどうかは不明である。愛媛県の中世土器研究を積極的に行っている中野良一氏の研究では、愛媛県では、11世紀後半代の土師器椀に、(底部)糸切りが一部採用されていることを確認していることより、本遺跡出土品が、11世紀後半以前に製作されたことが判る。ただ土師器坏の形態のみでいえば、石井幼稚園遺跡と同時期の10世紀代に比定してよいものと思われる〔中野　1988〕。

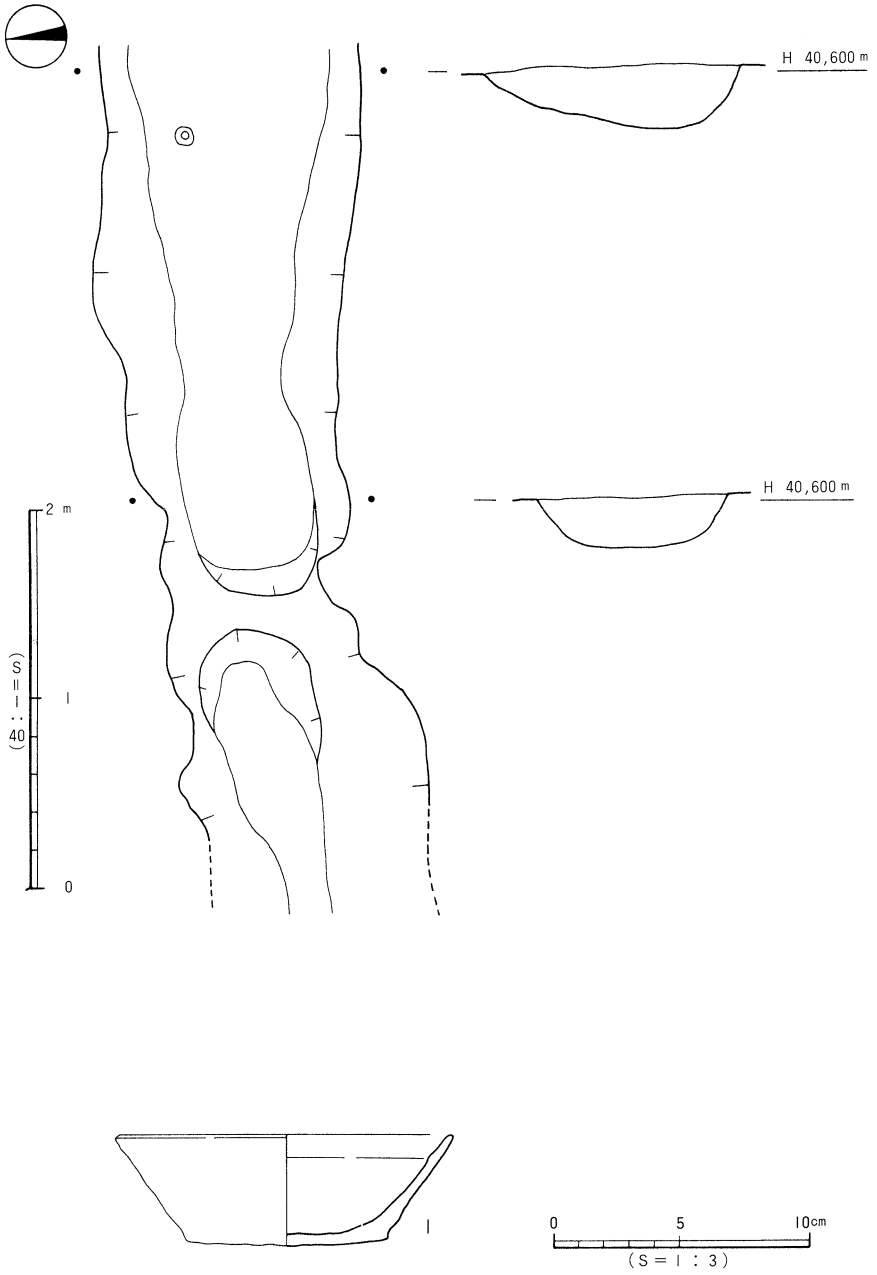
(4)包含層出土遺物

遺構に伴わない包含層出土の遺物のうち、特筆すべきものとして、有孔円板・銭貨・緑釉陶器他がある。

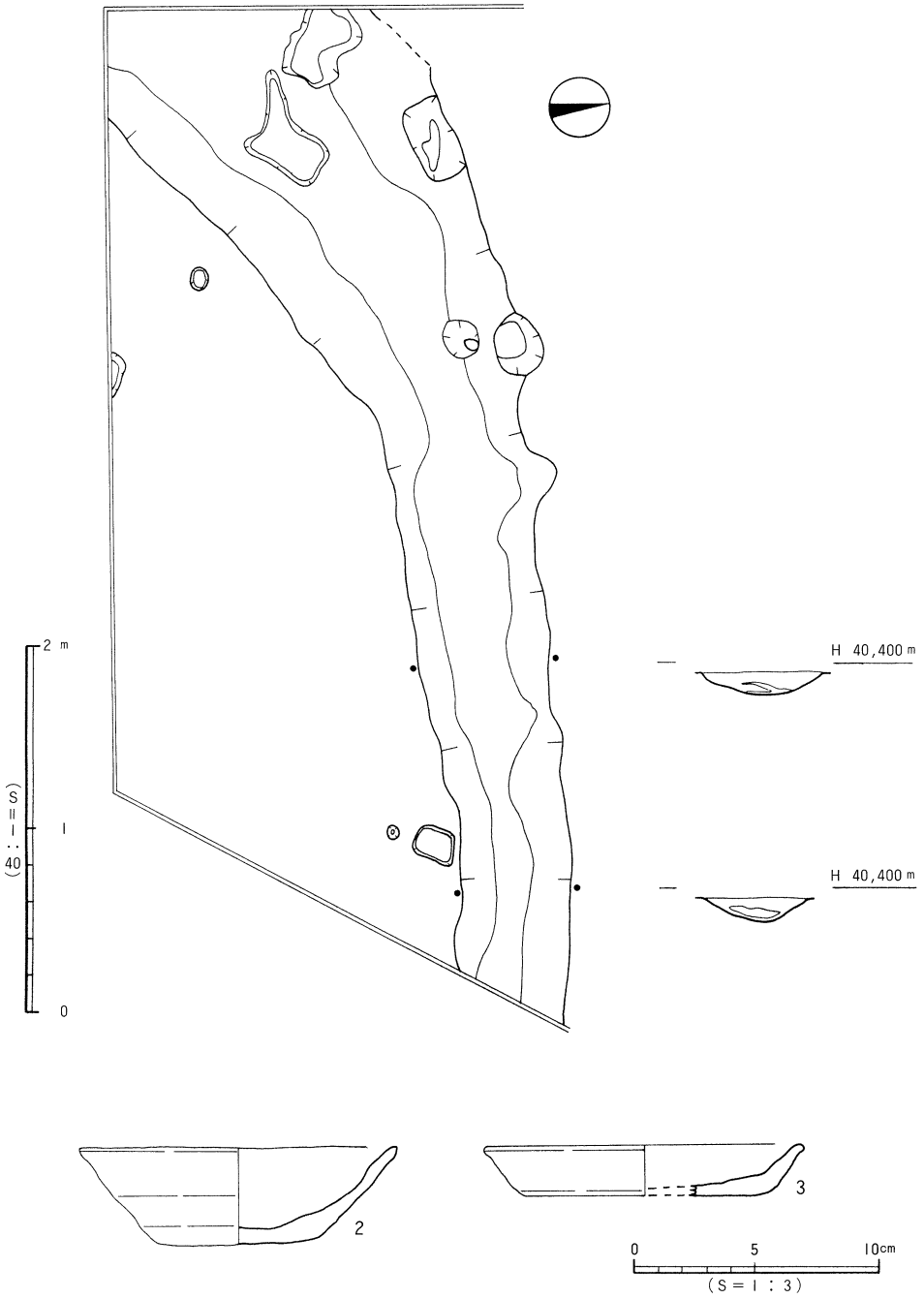
有孔円板（16）　3.0×2.8cmの楕円形で、厚みは0.3cmを計る。円孔は、径0.1～0.2cmの小孔を約1.2cmの間隔をあけて２ヶ所に穿っている。なお、表面を丁寧に研磨し、側面を面取りした痕跡がみられる。重さは6.6ｇで、石材は滑石である。調査区の落ち込み下層から出土した。



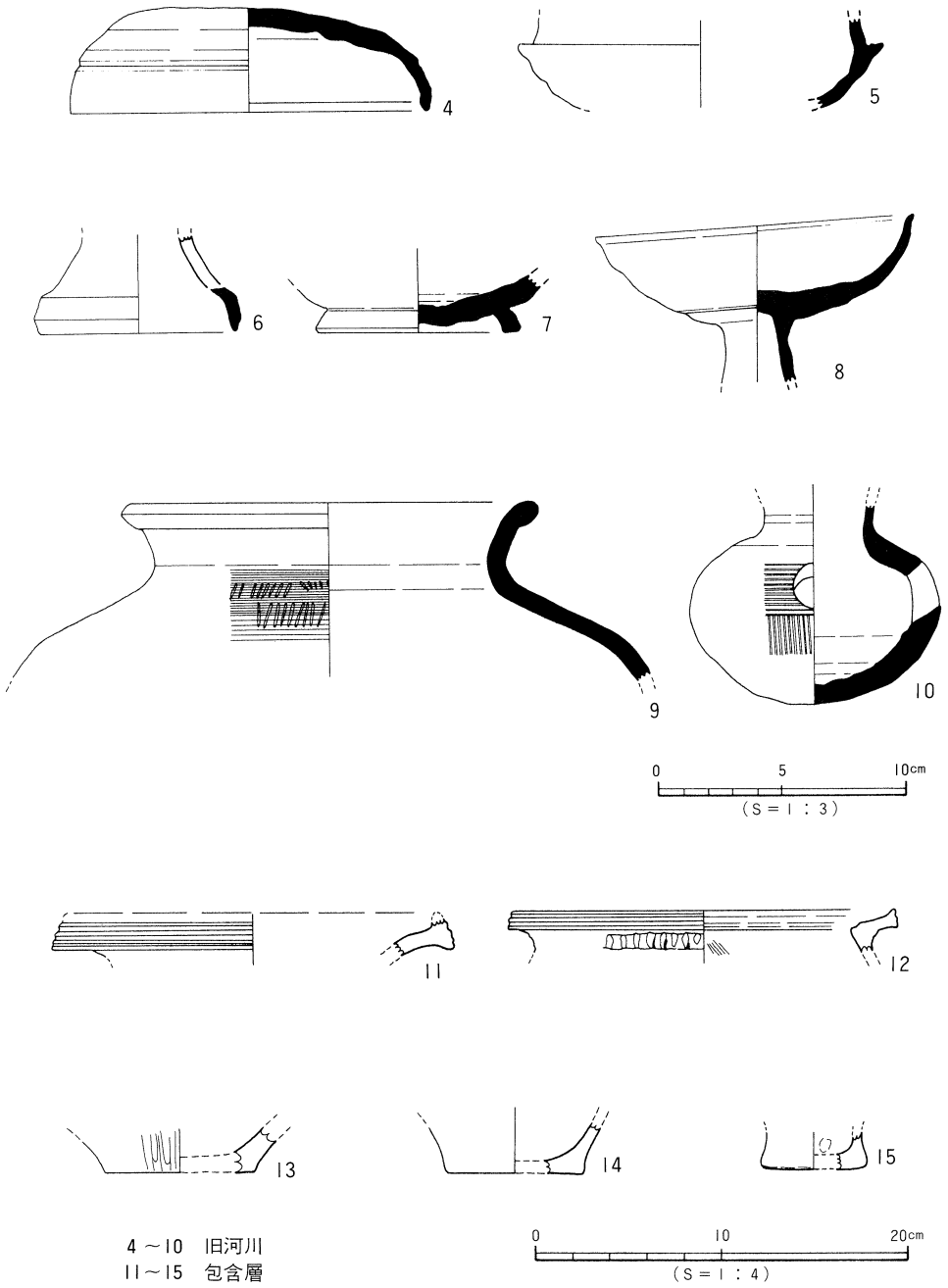
第60図
遺構配置図



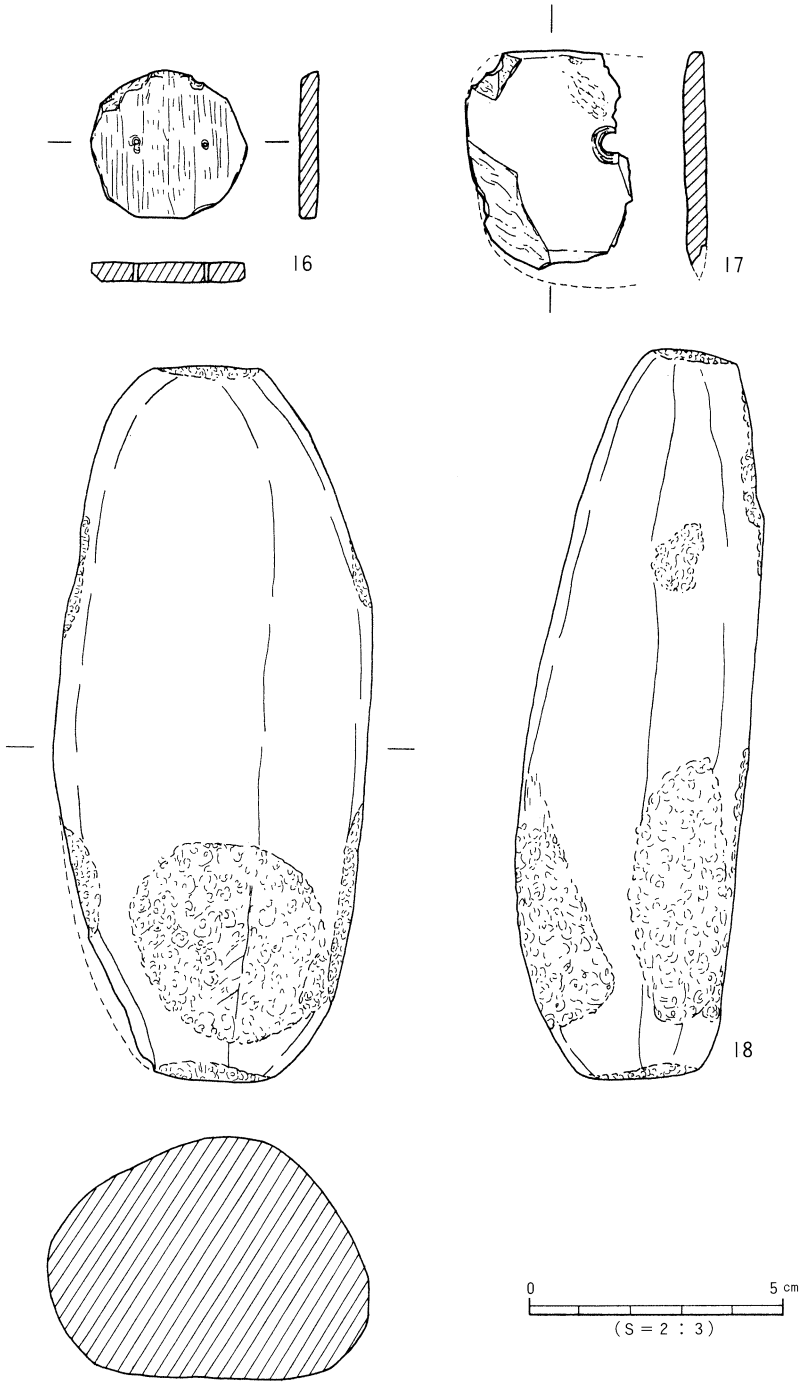
第61図　SD1 測量図・出土遺物実測図



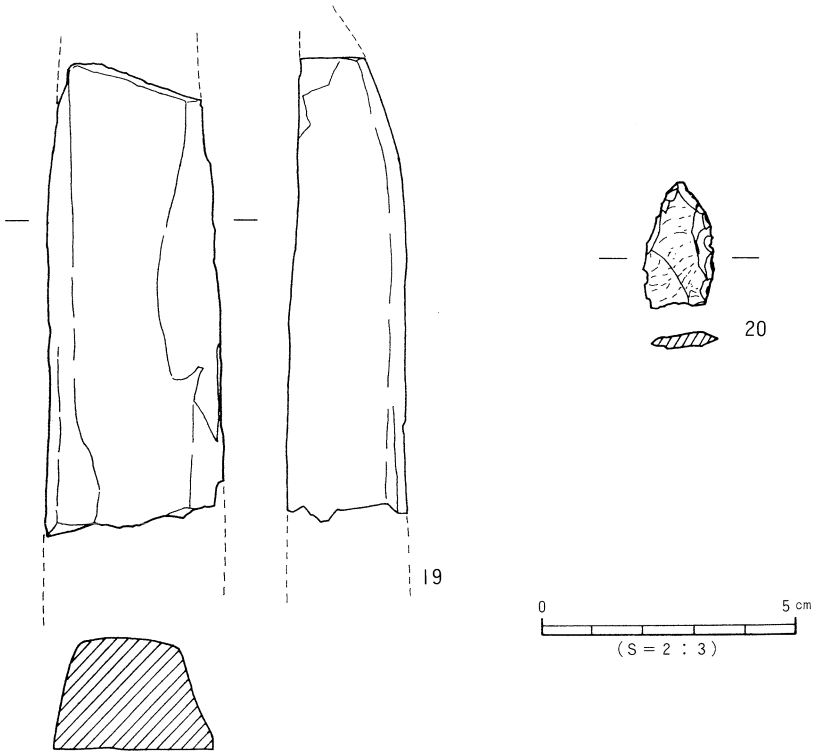
第62図　ＳＤ３測量図・出土遺物実測図



第63図　旧河川・包含層 出土遺物実測図



第64図　第Ⅲ層・落ち込み出土遺物実測図



第65図　第Ⅲ層出土遺物実測図

銭貨（図版56）Ｂ11区の第Ⅳ層上面より、３枚の銭貨が重なった状態で出土した。そのうち種類が判別できるのは、開元通寳１枚と熙寧元寳１枚の合計２枚である。初鋳年代は、唐時代の開元元（713）年、北宋時代の熙寧元（1068）年である。前者の径が2.3cm、内方形一辺0.7cm、厚みが0.1cm、後者は2.3cm、0.6cm、0.1cmを計る。

緑釉陶器（図版56）ＢＯ区第Ⅲ層下層より出土した緑釉陶器片は、底径約9.2cm、残存器高3.5cmを計り、鉢の形状をもつものと推定される。底部は張りつけによる輪状高台である。その形態から、平安時代に製作されたものと推定される。

石庖丁（17）　包含層である第Ⅲ層出土品である。４分の１の残存である。石材は緑泥片岩である。刃部を磨きだしている部分がわずかに残る。

敲打具（18）　包含層である第Ⅲ層出土品である。ほぼ完存している。上下端部は平坦で、側面に敲打痕を残す。長さ14.1cmで、重さ625ｇを計る。

石斧（19）　包含層である第Ⅲ層出土品である。刃部と基部を欠く。柱状片刃石斧であろう。石材は緑色片岩である。

石鏃（20）　包含層である第Ⅲ層出土品である。わずかに基部を欠く。

4．小結

本調査では、(1)古墳時代～中世の遺構と遺物、(2)ＡＴ火山灰を確認した。

(1)調査区中央を東から西に流れる自然流路の検出は、当地が古墳時代において未だ安定した土地でなかったことを示す資料となる。また、北及び南で検出した溝状遺構も古墳時代以降のものであり、当地が古墳時代において水理に深く関係した土地であったことが知れる。これ等は、竪穴住居址を含め人工的構築跡の検出が少ないことと呼応するもので、当地が集落の生産地ないし集落の境界地域であることを想定させる資料ではないだろうか。

この他、注目される遺物には、包含層出土の双孔円板と緑釉陶器片の出土があげられる。双孔円板は松山平野では５例（当遺跡出土品を含む）と少なく、貴重な資料といえる〔相田則美　1991〕。緑釉陶器片は底部の小片であるが、平野内での出土例が少なく、双孔円板と同様貴重な資料である。

(2)第Ⅳ層下で検出した火山灰は、分析の結果ＡＴ火山灰であることを確認した。ＡＴ火山灰は調査地の北端部に検出が限られ、かつ小角礫や砂粒が混合された状況であることより２次堆積のものであることが知れる。また、この検出状況は樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）のものと同様であり〔宮本一夫　1990〕、今後、周辺地域の調査が進めば検出事例は増加するものと考えられる。

〔文献〕

松山市教育委員会　1989『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

岸郁　男・森　光晴・長井数秋他　1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

岸郁　男・長井数秋・大山正風　1973『釜ノ口遺跡発掘調査報告書』松山市教育委員会他

相田則美　1991「道後平野における古墳時代の集落内祭祀」『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会

西田栄他　1976『文京遺跡』松山市教育委員会

宮本一夫　1990『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

森　光晴　1986「経石山古墳」・「東野お茶屋台古墳群」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂委員会

遺構・遺物一覧（遺構一覧：宮内慎一、遺物観察表：梅木謙一・山之内志郎）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。　例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表36　溝 一 覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	A10・B10	凹レンズ状	4.30×1.30×0.35	暗茶褐色シルト	土 師		10 世 紀
2	A 9・A10	皿　状	6.10×1.30×0.30	黒褐色シルト	土師・須恵		不　明
3	A・B・C14	レンズ状	11.50×2.80×0.25	黒褐色シルト	土師・須恵		10 世 紀

●表37　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	A 3～C 8	レンズ状	22.0×15.0×0.30	砂礫＋黒褐色土	土師・須恵		古墳以降

●表38　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	C 9	楕円形	皿　状	2.0×1.8×0.22	黒褐色シルト			不　明

●表39　旧河川、包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	坏	口径(13.2) 器高 4.3 底径 7.8	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	口—ヨコナデ 底—回転ヘラ削り	ナデ	砂粒(1～2) ◎	SD-1	56
2	坏	口径(13.0) 器高 4.0 底径 6.8	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	口—ヨコナデ 底—回転ヘラ切り→ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	SD-3 煤	56
3	皿	口径(12.6) 器高 2.0 底径 (9.4)	ロクロ成形。 回転ヘラ削り。	口—ヨコナデ 底—回転ヘラ削り→ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	SD-3	56
4	坏蓋	口径 14.1 器高 4.2	口縁部は内湾し垂下する。 口縁端部は丸く、内側に厚い。	口—ヨコナデ 天—回転ヘラ削り	口—ヨコナデ 天——部タタキ痕	密 ◎	旧河川	56
5	坏身	残高 3.5	内傾するたちあがり。	ヨコナデ 底—回転ヘラ削り	ヨコナデ	密 ◎	旧河川	
6	高坏	底径 (7.7) 残高 3.9	脚端部は、長くたちあがる。透し孔を1ヶ看取。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	旧河川	
7	坏	底径 (8.0) 残高 2.3	ヘラ切りの後、高台を貼り付ける。高台は八字状を呈する。	底—ヘラ切り→脚貼付	ナデ	密 ◎	旧河川	
8	高坏	口径(12.7) 残高 6.4	内湾してたちあがる口縁部は、端部がわずかに外反する。	口—ヨコナデ 底—ヘラ削り 脚—ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	旧河川	
9	甕	口径(16.6) 残高 7.0	口縁端部は、肥厚し、丸みのある方形を呈す。	口—ヨコナデ 肩—平行タタキ→回転カキ目	口—ヨコナデ 肩—円弧タタキ	密 ◎	旧河川	56
10	甕	残高 8.0	底部はヘラ削り後ナデ調整。円孔は直径1.6cm。	肩—ヨコナデ 胴—回転カキ目(縦・横方向) 底—ナデ	ヨコナデ	密 ◎	旧河川	56
11	壺	口径(19.4)	口縁端部に3条以上の凹線文。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	旧河川	
12	甕	口径(20.3)	口縁端面に2条の凹線文。 頸部に指頭押圧しナデられた凸帯文。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	旧河川	
13	壺	底径 (8.0)	平底。	胴—ヘラミガキ 底—ナデ	磨滅の為不明	砂粒 ◎	旧河川	
14	甕	底径 (7.2)	わずかに立ち上がる平底。	磨滅の為不明	ナデ	密 ◎	旧河川	
15	甕	底径 (5.5)	厚みのある、くびれた平底。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	砂粒 ○	旧河川	

●表40　Ⅲ層・落ち込み出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
16	双孔円板	ほぼ完形	滑石	3.0	2.9	0.35	6.60	落ち込み	56
17	石庖丁	¼	緑泥片岩	3.2	4.3	0.4	11.75	Ⅲ中層	
18	敲打具	ほぼ完形		14.1	6.2	4.8	652.15	Ⅲ下層	
19	石斧	½	緑泥片岩	9.1	3.3	2.2	139.50	Ⅲ下層	
20	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.4	1.3	0.3	1.18	Ⅲ中層	

第 6 章

桑原西稲葉遺跡
（クワバラニシイナバ）

― 1 次調査 ―

1．調査の経過

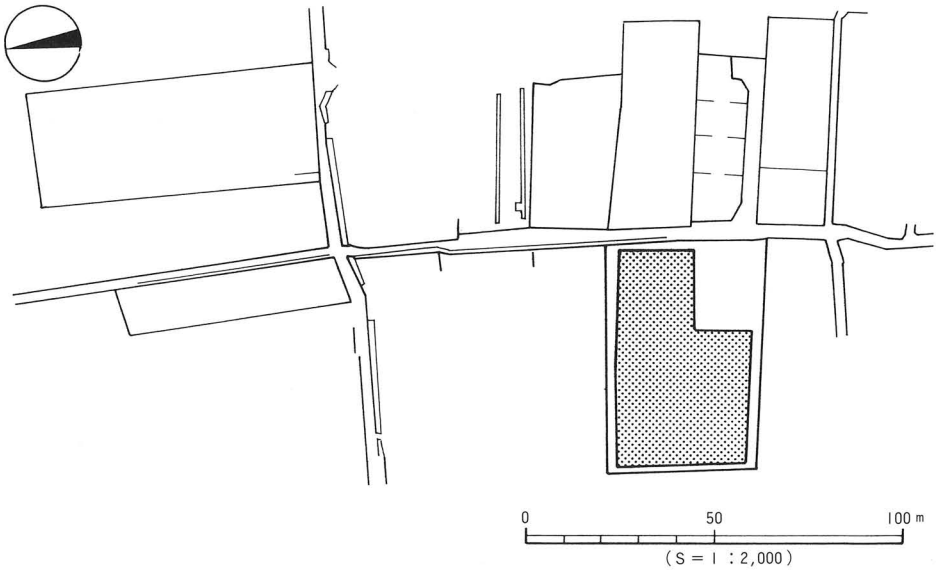
(1)調査に至る経緯

1989（平成元）年1月、松山土建株式会社より、松山市桑原1丁目981－1・2、982－1・2に東雲短期大学学生寮を建設するに当たり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の『81樽味遺物包含地』内にあたり、これまでにも周辺の地域で多くの調査が実施され、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、弥生時代から古墳時代の複合遺跡である樽味四反地遺跡・樽味立添遺跡・樽味高木遺跡〔梅木謙一　1989〕、弥生時代から中世までの生活関連遺構を検出している樽味遺跡(愛媛大学農学部構内)〔宮本一夫　1989〕などがある。周辺には東～南東部の丘陵地に経石山古墳（前方後円墳)、三島神社古墳〔岸・森・長井　1972〕、東野お茶屋台古墳群〔森光晴　1986〕、畑寺竹ケ谷古墳群がある。このほか、近年の調査により桑原・樽味地域において弥生時代から中世までの集落関連遺構を多数確認している。

これらのことなどから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1989（平成元）年3月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、土師器・須恵器を含む古墳時代の遺物包含層と土壙4基、溝状遺構2条、柱穴5基を検出し、当該地の古墳時代の集落関連遺構の存在が明かになった。

この結果を受け、文化教育課・松山土建株式会社二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、学生寮建設によって失われる遺構について、記録保存のため発掘調査を実施することとなっ



第66図　調査地位置図

た。発掘調査は、古墳時代を主とする当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、松山土建株式会社の協力のもと、1989（平成元）年４月25日に開始した。

(2)調査組織

調 査 地　松山市桑原１丁目981－１・２、982－１・２

遺 跡 名　桑原西稲葉遺跡１次調査

調査期間　野外調査　1989（平成元）年４月25日～同年９月30日

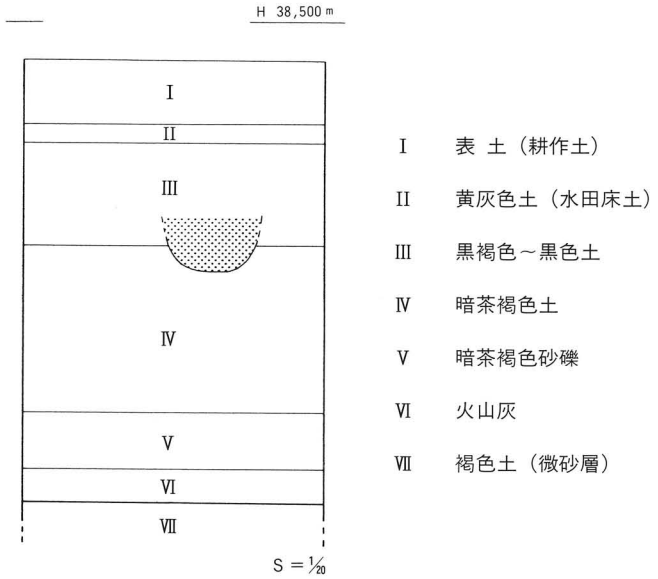
調査面積　2,300.96㎡

調査委託　松山土建株式会社　　田之内　隆

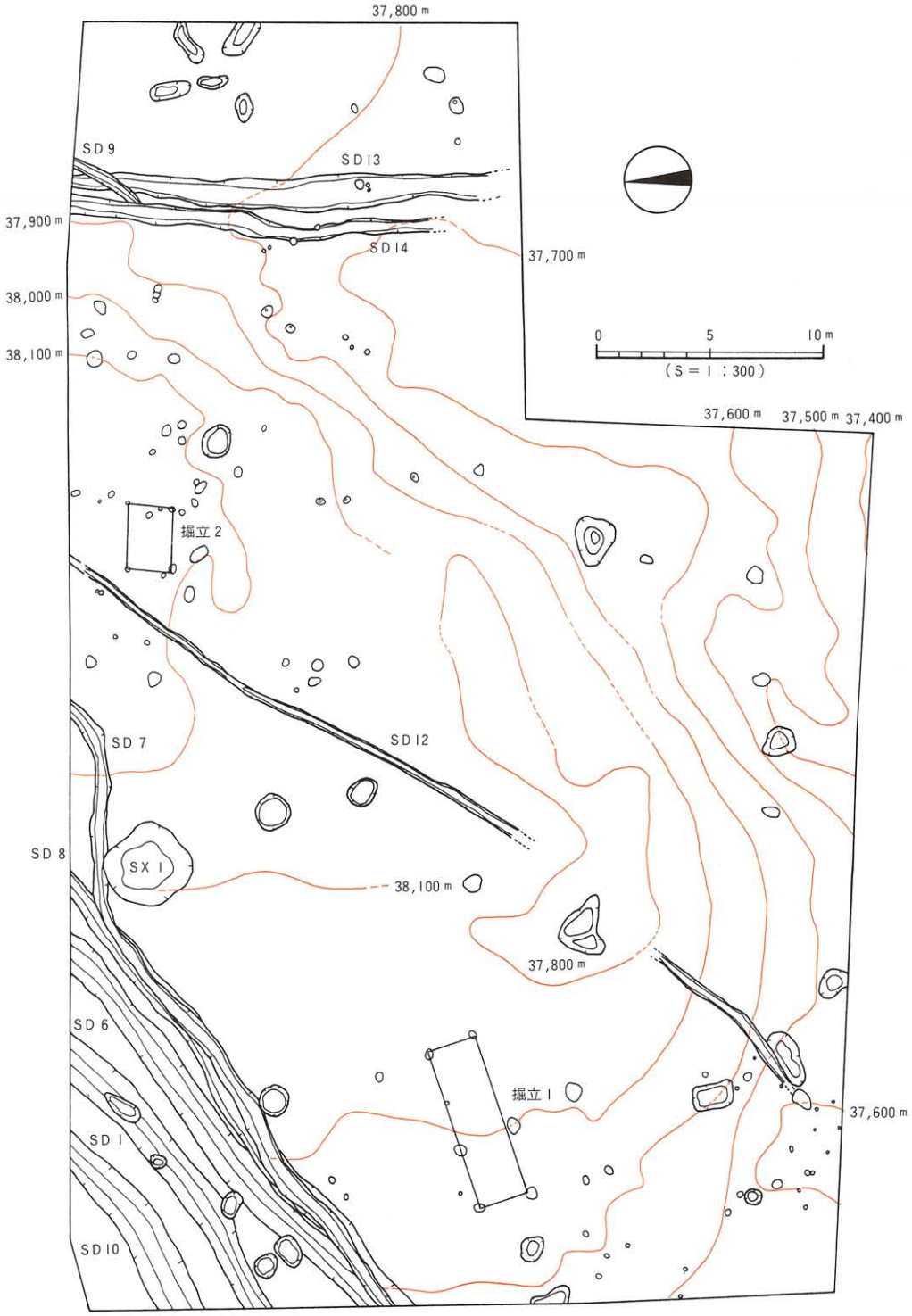
調査担当　松山市教育委員会文化教育課　　調査員　梅木　謙一

調査補助員　木下公一・谷久広之・宮内慎一

作 業 員　工藤　賢稔、扶川　　博、吉田　智広、古屋　明寿、亀山　健一、亀山　泰昌、森永　純司、宮脇　和人、志賀　夏行、原田　英則、鎌田　譲二、梅本　正則、提中　健仁、山本　　圭、藤村　英樹、笠井　啓一、横山　　茂、佐藤　健二、高橋　　恒、仙波　豊子、福山　暁子、河本美代子、今井セツ子、向井　一成、渡辺　竜二、森田　利恵、松本美知子、越智美代子、黒田　令子、水口あをい、山本　好枝、立木　佳代、西野　貴子、森田　晶子、栗林　千恵、藤沢　真美、中川　寛也、田村　雅愛、田坂　嘉則、松岡　忠仁、中野　　剛、渡部孝二郎、岸　　武弘、森田　真司、濱田　哲夫、岡田　浩明、安永　浩二、上岡　光彦



第67図　基本層位図


37,800 m
SD 9
SD 13
37,900 m
SD 14
37,700 m
38,000 m
38,100 m
0
5
10 m
(S = 1 : 300)
37,600 m
37,500 m
37,400 m
掘立 2
SD 7
SD 12
SD 8
SX 1
38,100 m
37,800 m
SD 6
掘立 1
37,600 m
SD 1
SD 10

第68図　遺構配置図

２．層位

本遺跡は、石手川左岸の沖積世扇状地上の標高38ｍに立地する。

基本層位は（第67図）、第１層表土（耕作土）、第Ⅱ層黄灰色土（水田床土）、第Ⅲ層黒褐色～黒色土、第Ⅳ層暗茶褐色土、第Ⅴ層暗茶褐色砂礫層である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～25cmの厚さを測る。第Ⅱ層中には小量ではあるが、土師器片・須恵器片が含まれる。第Ⅲ層黒褐色～黒色土は調査区全域でみられ、厚さ25～30cmの堆積で、弥生土器（中期・後期）、土師器（古墳時代・古代・中世）、須恵器（古墳時代・古代）を包含する。第Ⅳ層暗茶褐色土は無遺物層で地山と呼ばれるものである。第Ⅳ層上面での地形測量では、調査区中央部が高く、南東、北西に緩傾斜をもっている。さらには、調査区西半部において、第Ⅴ層と第Ⅲ層の間に火山灰の堆積がみられた。厚さ約25cmであり、火山灰及び火山灰の上下層からの遺物の出土はない。

遺構は第Ⅳ層上面での検出である。古墳時代から中世までの遺構を確認した。掘立柱建物２棟、柵列１列、溝状遺構14条（自然流路９条を含む）、土壙27基、柱穴114基（掘立柱建物柱穴を含む）他である。遺構はいずれも近現代の造成により遺構上部は削平されており、各遺構の現存状況は深さ10cmに満たないものが大半である。また、遺構からは、遺物がほとんど出土しないために遺構の時期や性格の特定は難しい。

本調査区の中で北西隅は、第Ⅳ層暗茶褐色土堆積以前に、すでに北西に向けて緩傾斜をなしている。このため同地点の第Ⅲ層黒褐色～黒色土、及び第Ⅳ層は他の地点よりも厚い堆積となっている。この地点が傾斜地でなくなったのは、第Ⅲ層堆積以降であり、かつ現在のような平坦地を形成するようになるのは近現代の耕地整備時以降であると考えられる。この地点は第Ⅲ層堆積中及び堆積以後、自然流路６条、溝状遺構６条が形成されている。このうち最古の流路ＳＤ５からは５世紀末～６世紀前半の須恵器が溝底より出土している。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。

３．調査の概要（遺構と遺物）

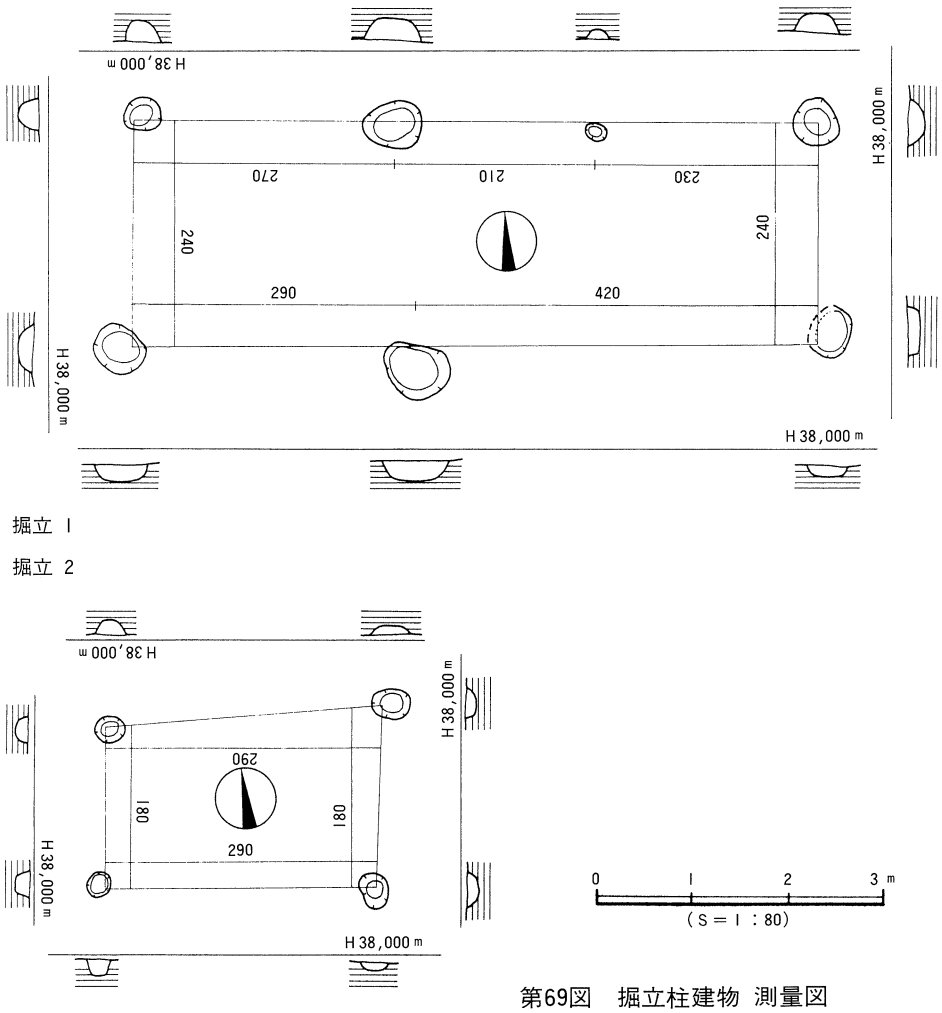
(1)掘立柱建物址

１号建物址（第69図）

調査区南側中央に位置する。規模は３×１間で、桁行7.23ｍ、梁間2.40ｍを測る。出土遺物はない。時期不明。

２号建物址（第69図）

調査区北側中央に位置する。規模は１×１間で、桁行2.90ｍ、梁間1.80ｍを測る。出土遺物はない。時期不明。



掘立 1

掘立 2

第69図　掘立柱建物 測量図

(2)溝状遺構（第70・71図）

溝状遺構は自然流路を含め14条を検出した。調査地北西隅は、北西方向に傾斜をもち(小谷)、自然流路が流れていたことを確認した。流路は当初は幅８ｍであったものが、沖積作用の後、小河川が北西部ないし南東部を流れるようになったことを確認した。北西部では少なくとも３回（ＳＤ６・10・11)、南東部では６回（ＳＤ１～５・８）の流れを確認した。ＳＤ７・12・13・14は断面形や埋土、流路位置より人工的な溝の可能性が高い。各溝からの遺物は少なく、時期決定に有効な資料ではない。

ＳＤ４出土品（12・25）　12は複合口縁壺片である。複合部が欠落し、一部に擬口縁を看取する。弥生時代後期後半。25は坏身片である。口縁端部は段をもち、受部は水平に近い。６Ｃ前葉。

ＳＤ５出土品（15・23・27）　15は二重口縁壺である。二重口縁部は外傾し、口縁端部は内傾する。５世紀。23は坏蓋で１／３の残存である。ヘラ削りの痕が顕著。口縁部は外方に小さく突出する。６Ｃ。27は坏身で、小片である。内傾し、直立するたちあがりをもつ。６Ｃ後半。

ＳＤ７出土品（26・29・32・33）　26は坏身片である。たちあがりは強く内傾し長い。６Ｃ。29は短頸壺でほぼ完形品である。口縁部は丸くおさめ、体下半部はヘラ削り痕を残す。６Ｃ後半。32は台付長頸壺である。肩部は屈折し、櫛描きの「ノ」字状文を施す。７世紀。33は長頸壺の体部である。扁平な体部は、肩部が丸い。７世紀。

ＳＤ13出土品（９）　９は高坏形土器の坏部片である。口縁外面に凹線文を３条施す。弥生時代中期後葉。

ＳＤ14出土品（30）　30は高台付の坏片である。高台は「ハ」字状を呈し、端面は水平となる。８世紀。

(3)土壙（第70図）

27基の土壙を検出した。ＳＫ１・５・６・８・10には埋土中に土師器片が検出されたが、時期決定に有効な資料ではない。他の遺構は、無遺物ないし細片が小量出土したにすぎず、時期決定はできなかった。ただし、調査地北西隅のＳＫ１・２・５・６・７は流路が埋没した後に掘削されたものである。本調査地検出の土壙は、いずれもその性格は不明である。

ＳＫ６出土品（５）　５は壺形土器の口縁部分である。口縁端部は上下拡張され、端面に凹線文を３条施す。弥生時代後期中葉。

ＳＫ８出土品（17）　17は手捏品である。口縁部は指によりひねりだされる。内面に指頭痕著しい。古墳時代か。

(4)その他の遺構と遺物

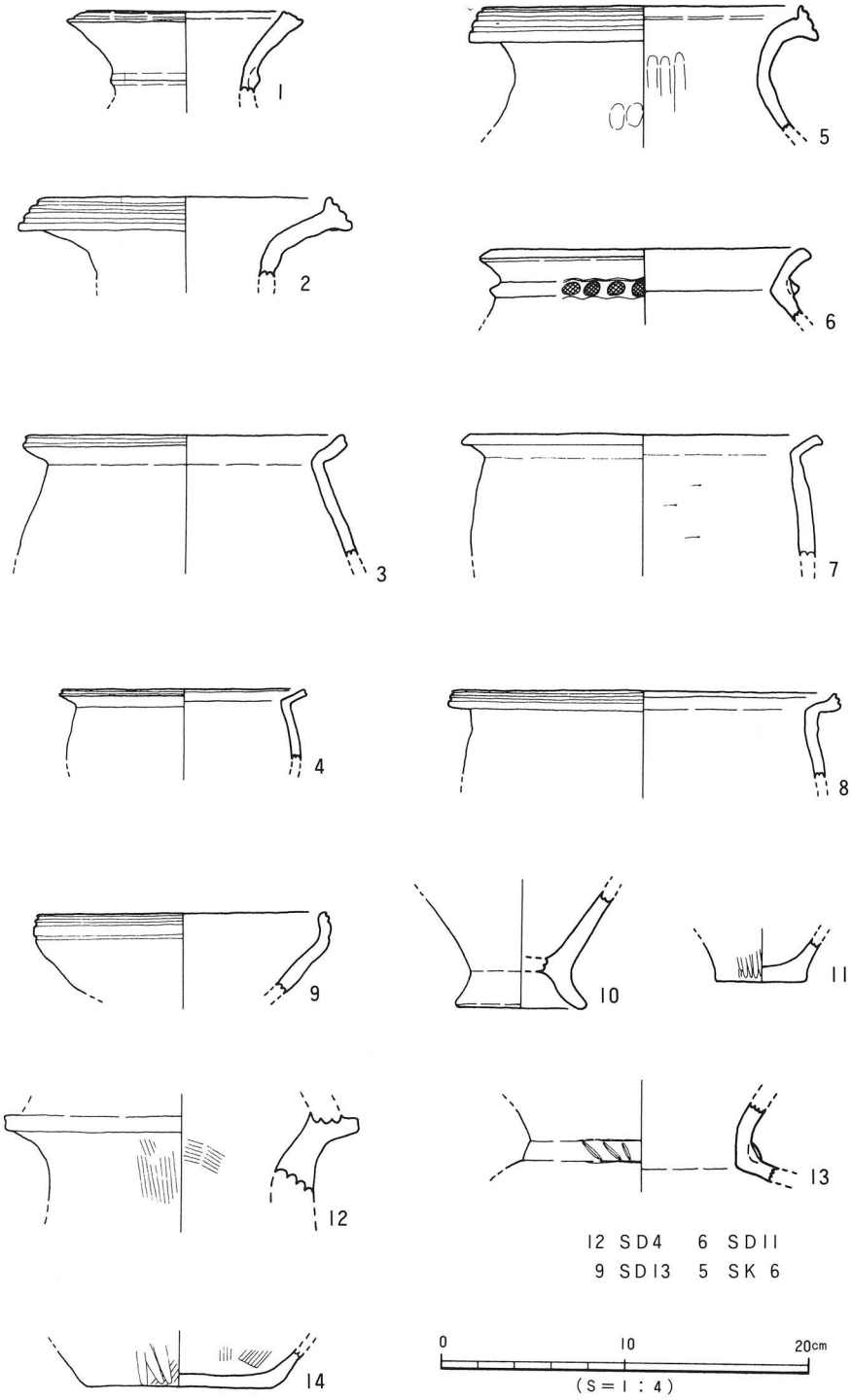
包含層出土品（第70・71図）

包含層（第Ⅲ層）からは、弥生時代～古代までの遺物が出土した。

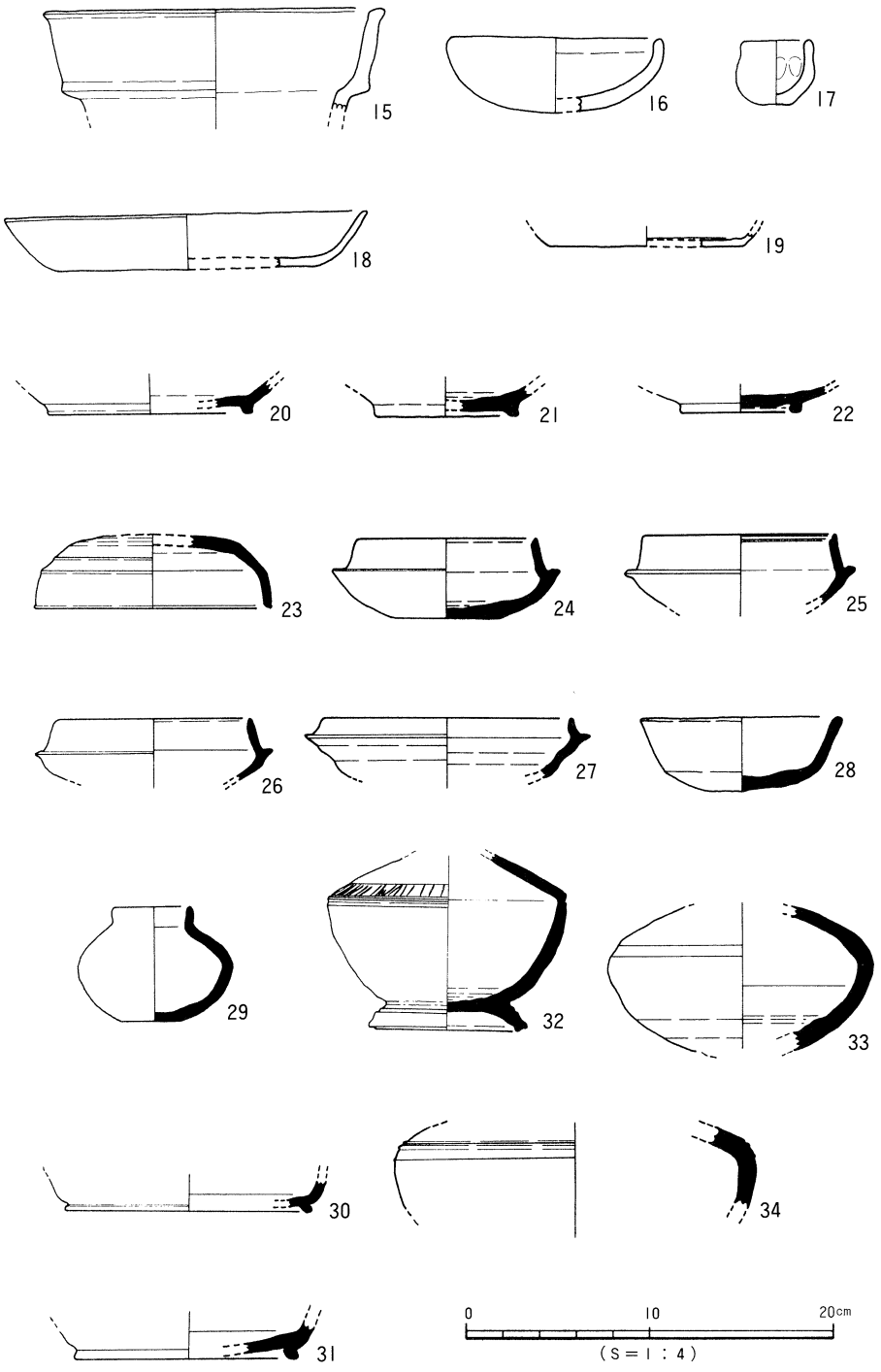
弥生時代（１～４・７・８・10・11・13・14）　13・14は弥生時代後期で、他は中期後葉のものである。

古墳時代（16・24）　16は土師器の椀で、口縁部が内湾ぎみにたちあがる。５世紀。

飛鳥・奈良（20～22・28・30・31・34）　高台付の坏身片が多く出土している（20～22・30・31）。脚端面が水平のもの（20～22）とわずかに外傾するもの（30・31）がある。28は底部にヘラ記号が施される（図版63）。34は長頸壺片で、肩部は丸みをもち、沈線が２条施される。



第70図　出土遺物実測図 (1)



第71図　出土遺物実測図 (2)

４．小結

本調査では、古墳時代以降の生活関連遺構と弥生時代中期～中世の遺物、ＡＴ火山灰を検出、確認した。

⑴遺構は、近現代の耕地整備のため全てその上部は削平されていた。このため、現状は深さ10㎝に満たないものが多く、よって完全に削平されたものも多数あると思われる。

調査地北西隅で検出した緩傾斜地と流路は、時期特定はできなかったものの、当地の集落経営、特に水田経営に関連する可能性は高く、調査区北側地は注意を要する地域となるであろう。さらに、調査地北東700ｍの樽味四反地遺跡でも古墳時代の流路が検出されており、当地域は古墳時代においては充分に安定した土地ではなかったことが知れる。

⑵第Ⅲ層より弥生時代～中世の土製品が出土した。石器・鉄器の出土はきわめて少ない。遺物の出土量は少なく、これは単に包含層及び遺構が削平されていることによるものでなく、北西隅に流路が存在することより集落経営に要因がある可能性も考えている。出土品はいずれも小片で磨滅が著しい。

⑶第Ⅳ層上面の地形測量では、調査地は北東から南西に向けて尾根状の微高地が走ることを確認した。この微高地は、北東30ｍの調査地点でも確認されており、当地域の旧地形復元の一資料になるものである。

⑷第Ⅵ層はＡＴ火山灰であることを確認した。ＡＴ火山灰は、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内)、樽味四反地遺跡等、近年、当地域で検出例が増加している。いずれも、砂粒を含む二次堆積層で、ＡＴ層中及び上下層に遺物を含まないことを共通とする。

以上、本調査では、時期や性格を特定する遺構が希少であったが、当地域の集落経営を考える上では一つの資料となるものである。本調査では確認できなかったが当地を含め周辺地は水田経営に適した土地であるため、今後、周辺の調査では古墳時代の水田跡が検出される可能性は高く、慎重な調査が望まれる。

〔文献〕

梅木謙一　1989「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

梅木謙一・宮内慎一　1991「道後今市６次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会

岸　郁男・森　光晴・長井数秋　1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

西尾幸則　1986「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂委員会

宮本一夫　1989『樽味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室

森　光晴　1986「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂委員会

●表41　溝 一 覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	備　考
1	A3～A12	舟底状	14.5×0.8×0.15	灰色砂	土師・須恵		
2	A3～A12	舟底状	14.5×1.3×0.30	暗灰色砂	土師・須恵		
3	A3～A12	舟底状	14.5×1.0×0.10	暗褐色土			
4	A3～A12	舟底状	14.5×1.3×0.25	黄灰色粗砂	弥生・土師・須恵		古墳以降
5	A3～A12	舟底状	14.5×1.1×0.30	暗灰色細砂	土師・須恵		古墳後期
6	A5～A21	逆台形状	10.5×1.4×0.60	暗褐色土	弥生・土師・須恵		
7	A5～B6	舟底状	21.5×0.8×0.15	暗灰色砂	土師・須恵		古墳後期
8	A5～B1	擂鉢状	24.0×0.6×0.40	暗褐色土	弥生・土師・須恵		
9	C11～C12	レンズ状	3.2×0.4×0.20	暗褐色土		SD14を切る	弥生中期以降
10	A2～A11	逆台形状	9.8×1.3×0.50	灰色砂＋黒色砂	土師		
11	A2～A11	レンズ状	9.8×0.7×0.10	暗灰色粘質砂	土師・須恵		
12	A～B	レンズ状	40.0×0.2×0.15	暗褐色土			
13	C11～C14	舟底状	16.2×0.8×0.15	暗灰色砂	土師・須恵		弥生中期後葉
14	C11～C15	舟底状	18.2×1.0×0.15	暗灰色砂	土師・須恵	SD9に切られる	古墳以降

●表42　土壙一覧

土壙(SK)	地区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	A3	円形	皿状	6.0×0.8×0.15	黒色土	土師		古墳以降
2	A8	楕円形	逆台形状	1.1×0.6×0.15	黒褐色土			
3	D1	不定形	皿状	1.8×1.0×0.05	黒色土			
4	D12	円形	擂鉢状	1.1×1.0×0.40	黒褐色土			
5	A13	円形	逆台形状	1.3×1.3×0.45	黒色土	土師		古墳以降
6	A12	楕円形	皿状	2.0×0.7×0.15	暗灰色粗砂	土師		古墳以降
7	A8	楕円形	舟底状	1.3×0.9×0.18	黒褐色土			
8	B3	円形	舟底状	1.6×1.6×0.20	黒色土	土師		古墳以降
9	B9	楕円形	レンズ状	1.4×1.2×0.10	黒色土			
10	A12	円形	レンズ状	1.3×1.0×0.10	黒褐色土	弥生・土師		古墳以降
11	C17	楕円形	皿状	1.6×0.8×0.10	暗茶褐色土			
12	C22	楕円形	皿状	1.8×0.6×0.10	黒色土			
13	C23	楕円形	逆台形状	2.0×1.0×0.40	黒色土			
14	C18	楕円形	皿状	1.3×0.6×0.05	暗茶褐色土			
15	C18	楕円形	皿状	1.3×0.9×0.10	暗茶褐色土			
16	B23	楕円形	逆台形状	1.5×1.2×0.20	黒色土			
17	D18	三角形	擂鉢状	2.0×1.3×0.32	黒褐色土			
18	D37	円形	擂鉢状	1.3×1.1×0.50	黒褐色土			
19	D44	円形	擂鉢状	1.3×1.2×0.52	黒褐色土			
20	D34	楕円形	舟底状	2.5×1.2×0.25	暗茶褐色土			
21	D23	長方形	舟底状	1.8×1.2×0.10	暗茶褐色土			
22	D34	円形	皿状	0.8×0.8×0.20	黒色土			
23	D15	三角形	皿状	1.5×1.5×0.20	黒褐色土			

●表43　掘立柱建物址一覧

建物番号	規模(間)	桁行		梁行		床面積(m²)	時　期
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)		
1	3×1	723(24.1)	7.7・7・9.4	240(8)	8	17.35	不明
2	1×1	290 (9.7)	9.7	180(6)	6	5.22	不明

●表44　出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	口径(10.5)	頸部に三角凸帯を貼りつける。口縁端面に2条の擬凹線文。頸部木口刻み	口端—ヨコナデ→施文 頸—ヨコナデ	口—ヨコナデ 頸—ナデ	石・長(1～4) ◎	Ⅲ2層	
2	壺	口径(15.6)	口縁端部は上下拡張。端面に2条の凹線文。小片。	口端—ヨコナデ→施文 頸—ヨコナデ	口—ヨコナデ	砂粒 (石・長1～2) ◎	Ⅲ2層	61
3	甕	口径(17.0)	口縁端部はナデにより上方に拡張。器壁厚い。⅛の残存。	口端—ヨコナデ	磨滅の為不明	砂粒 ◎	Ⅲ2層	
4	甕	口径(13.1)	口縁端部はナデにより上方に拡張。小片。	口端—ヨコナデ→施文 口—ヨコナデ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	密 ◎	Ⅲ2層	
5	壺	口径(17.0)	口縁端部は上下に拡張。端面に凹線文3条。¼の残存。	口端—ヨコナデ→施文	口端—ヨコナデ 頸—ナデ上げ	石・長(1～3) ◎	SD6	61
6	壺	口径(16.8)	く字状口縁。ナデにより口縁端やや拡張。頸部に指頭圧痕をもつ凸帯。	口—ヨコナデ	口—ヨコハケ→ヨコナデ 胴—ヨコナデ	密(石・長1) ◎	SD11	
7	甕	口径(17.5)	く字状口縁。口縁端はナデにより面を取る。小片。	口—ヨコナデ 胴—磨滅	口—ヨコナデ 胴—ケズリ	砂粒 ◎	Ⅲ2層	
8	甕	口径(15.5)	口縁端は上方に拡張。2条の凹線文。	口端—ヨコナデ→施文 頸—ヨコナデ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	密 ◎	Ⅲ2層	
9	高坏	口径(17.6)	口縁外面に凹線文3条。口縁端部は、丸みをもつコ字状。小片。	口—ヨコナデ→施文	ヨコナデ	密(石・長1) ◎	黒斑 SD13	
10	甕	底径 (6.6)	大きなくびれの上げ底。脚端面はコ字状で内傾する。⅓の残存。	胴—タテハケ 脚—ヨコナデ 脚底—ヨコナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～2) ◎	Ⅲ2層	61
11	甕	底径 5.0	平底。わずかにふんばりをもつ。器壁は薄い。½の残存。	胴—ヘラミガキ 底—ナデ	磨滅の為不明	密 ◎	Ⅲ3層	
12	壺		二重口縁。擬口縁を看取。⅛の残存。器壁厚い。	頸—タテハケ	頸—ハケ (7～8本/1cm)	石・長(1～3) ◎	SD4	
13	壺	頸径(12.8)	磨滅著しい。頸部に帯状の凸帯。凸帯上は、木口による斜格子文。⅙残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	石・長(1～5) ○	Ⅲ層	
14	壺	底径 10	大きい平底。内面に刷毛目痕顕著。	胴—ハケ→ヘラミガキ 底—ナデ	ハケ	石・長(1～7) ◎	Ⅲ2層	
15	壺	口径(18.2)	内湾する口縁部。端部は外方に突出する。端面は内傾する。小片。	口—ヨコナデ 頸—ヨコナデ	口—ヨコナデ 頸—ヨコナデ	密 ◎	SD5	61
16	鉢	口径(11.4)	内湾する口縁部。端部は丸い。器壁は厚い。¼の残存。	口—ヨコナデ 胴—ナデ	口—ヨコナデ 胴—ナデ	密 ◎	Ⅲ2層	61
17	ミニチュア	口径 3.5 器高 3.6	わずかにしまる頸部。口縁部は丸い。手捏ね。内面に指頭痕顕著。	ナデ	ナデ	石・長(1～2) ◎	黒斑 SK8	61

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
18	皿	口径(17.1) 器高 3.0 底径(12.2)	磨滅。外傾し外反する口縁部。口縁部は丸い。 ⅙の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 △	Ⅲ３層	
19	皿	底径(10.4)	小片。ヘラ切りか。	ヨコナデ (底)—未調整	ヨコナデ	密 ◎	Ⅲ 層	
20	坏身	底径(10.8)	輪高台付。脚端は外方にわずかに突出する。端面は水平。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	砂 層	
21	坏身	底径 (7.4)	高台付。脚端は面を取る部分と丸く仕上げる部分がある。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	砂 層	
22	坏身	底径 (6.4)	高台付。脚はやや内傾する。端面は水平。回転糸切りでナデ。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	Ⅲ２層	
23	坏蓋	口径(12.9) 器高 3.9	口縁部は外傾する。端面は平坦で、内傾する。 ⅙の残存。	(口)—ヨコナデ (天井)—⅔回転ヘラケズリ	ヨコナデ	密 ◎	ＳＤ５	
24	坏身	口径 9.6 器高 4.3 底径 5.5	内傾するたちあがり。端部はやや凹み内傾する。 ヘラ記号あり。	(口)—ヨコナデ (底)—⅔回転ヘラ切り	ヨコナデ		Ⅲ３層	62
25	坏身	口径(10.4)	内傾する口縁部。端部は凹み内傾。受部は上外方。 ⅙の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	密(長2) ◎	ＳＤ４	
26	坏身	口径(10.5)	内傾する口縁部。端部は丸い。受部は上外方。 ⅙の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	ＳＤ７	
27	坏身	口径(13.4)	内傾、外反する口縁部。 端部は丸い。 受部は三角形。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	ＳＤ５	
28	椀	口径(10.8) 器高 4.0 底径 5.0	底部にヘラケズリ痕顕著。 口縁端部は平坦。 底部にヘラ記号。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ○		62
29	小型壺	口径 (4.1) 器高 6.1 底径 2.7	直立ぎみに立つ口縁部。端部は丸い。端部下部はヘラケズリ。	(口)—ヨコナデ (底)—未調整 (胴上)—ヨコナデ (胴中)—ヘラ削り→ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	自然釉 ＳＤ７	62
30	坏身	底径(13.3)	高台付。脚部外傾。端面は逆く字。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 △	ＳＤ14	
31	坏身	底径(11.6)	高台付。脚部外傾。端面は内傾し、凹みをもつ。 小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	Ⅲ 層	
32	壺	底径 7.6	台付長頸部。屈曲部は稜をもつ。クシ歯のノ字状文。屈曲部下に凹線文。	(胴上)—ヨコナデ (底)—ヨコナデ (胴中)—ヨコナデ (胴下)—回転ヘラ削り→ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒 ◎	自然釉 ＳＤ７	62
33	壺	残高 7.8	屈曲部は稜がなく丸い。ヘラケズリは底部付近に残る。½の残存。	(胴上)—¾ヨコナデ (胴下)—¼回転ヘラ削り	ヨコナデ	砂粒 ◎	ＳＤ７	
34	壺	残高 4.5	屈曲部に稜をもつ。屈曲部上に太沈線文１条。屈曲部下に凹線１条。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎	Ⅲ 層	

第 7 章

桑原西稲葉遺跡

クワバラニシイナバ

―２次調査―

1．調査の経過

(1)調査に至る経緯　1989（平成元）年12月、松元幸利氏より、松山市桑原２丁目971番２号地内における宅地開発に当たって、当該地の埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市が指定している埋蔵文化財包蔵地『157桑原遺物包含地』内に位置し周辺地域には、弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である樽味遺跡・樽味四反地遺跡・樽味立添遺跡・樽味高木遺跡・桑原田中遺跡、また平成元年に行われた当地西側隣接地の西稲葉遺跡第１次調査地など多数の遺跡が散在しており、近年の宅地開発による発掘調査の事例により注目されてきた地域に存する。これらの遺跡からは、竪穴式住居址・土壙・溝などの集落に係わる遺構を多数検出している。また南には経石山古墳・三島神社古墳、東には東野お茶屋台古墳群・畑寺竹ケ谷古墳群などの遺跡が確認されている。

よって、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1990（平成２）年１月25日から27日までの間、文化教育課によって試掘調査を実施した。その結果、弥生土器・土師器・須恵器及び遺物包含層（２層）、溝状遺構１条などを検出し弥生時代から中世に至る遺跡があることを確認した。

この結果を受けて、文化教育課と松元幸利氏の二者は、宅地開発によって失われる遺跡の取り扱いについて協議を行い、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世にかけての周辺地域と当該地との集落構造の解明を主目的とし、文化教育課（松山市立埋蔵文化財センター）が主体となり、松元幸利氏・株式会社リビング椿の協力のもと1990（平成２）年７月14日に開始された。

(2)調査組織

調 査 地　松山市桑原２丁目971番２号

遺 跡 名　桑原西稲葉遺跡２次調査

調査期間　野外調査　1990（平成２）年７月14日～同年９月17日

　　室内整理　1990（平成２）年９月18日～同年10月24日

調査面積　1,143㎡

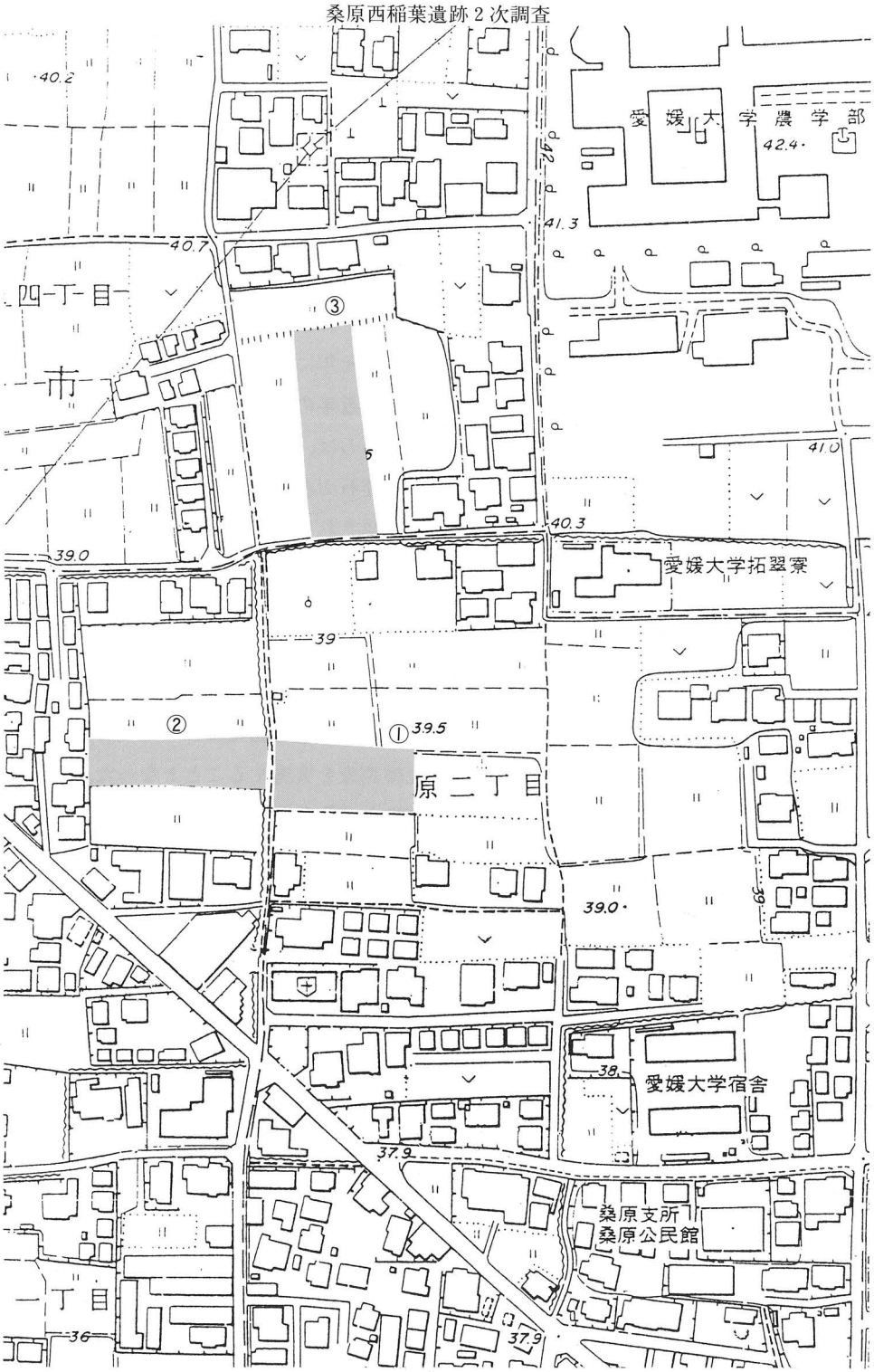
調査委託　松元　幸利　　調査協力者　松元幸利　株式会社リビング椿

調査主体　松山市教育委員会　教育長職務代行者　井上　量公

調査担当　調査員補　高尾　和長

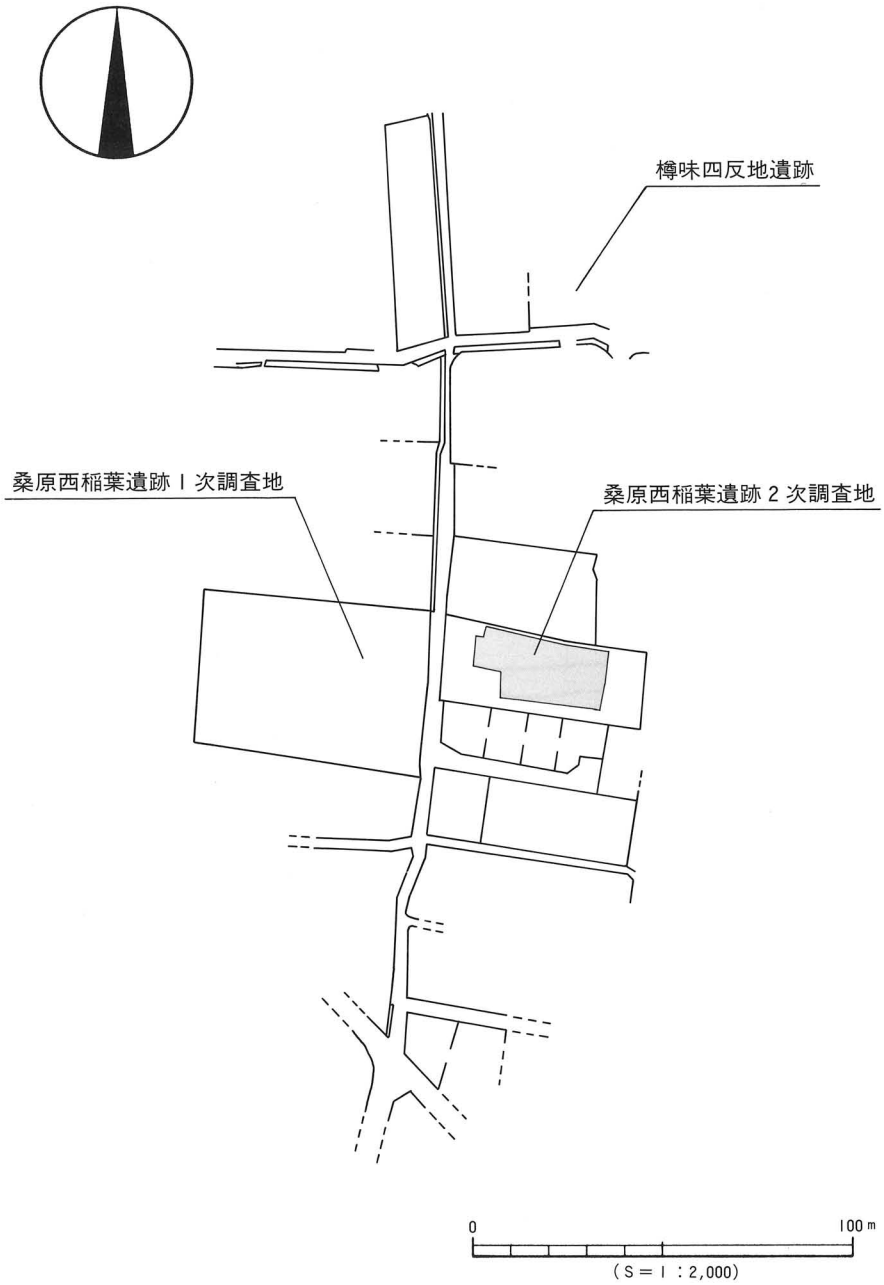
　　〃　　真木　　潔

作 業 員　高市　英治、山邊　進也、肌野　祐治、志賀　夏行、原田　英則、増元　　忍、仙波ミリ子、仙波　千秋、乃万富美子、池内カヨ子、白井あさ子、田頭　まき、金子　育代、高尾　久子、猪森しげ子



①桑原西稲葉２次　②桑原西稲葉１次
③樽味四反地

第72図　調査地位置図　（S＝1：2,500）



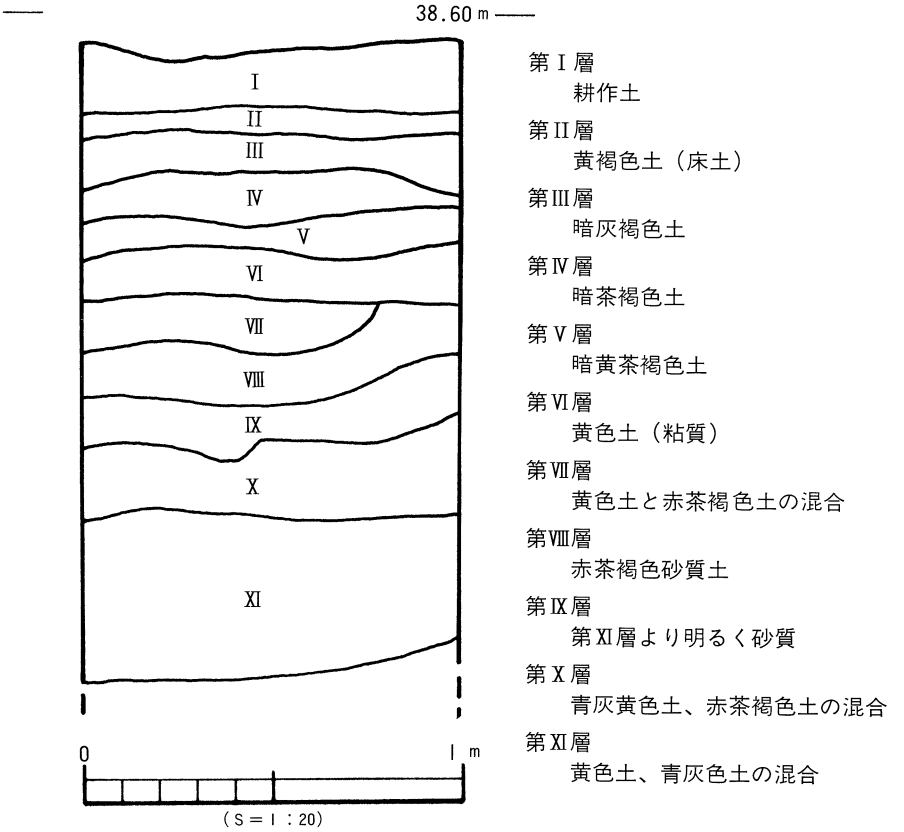
第73図　調査地測量図

２．層位（第74図）

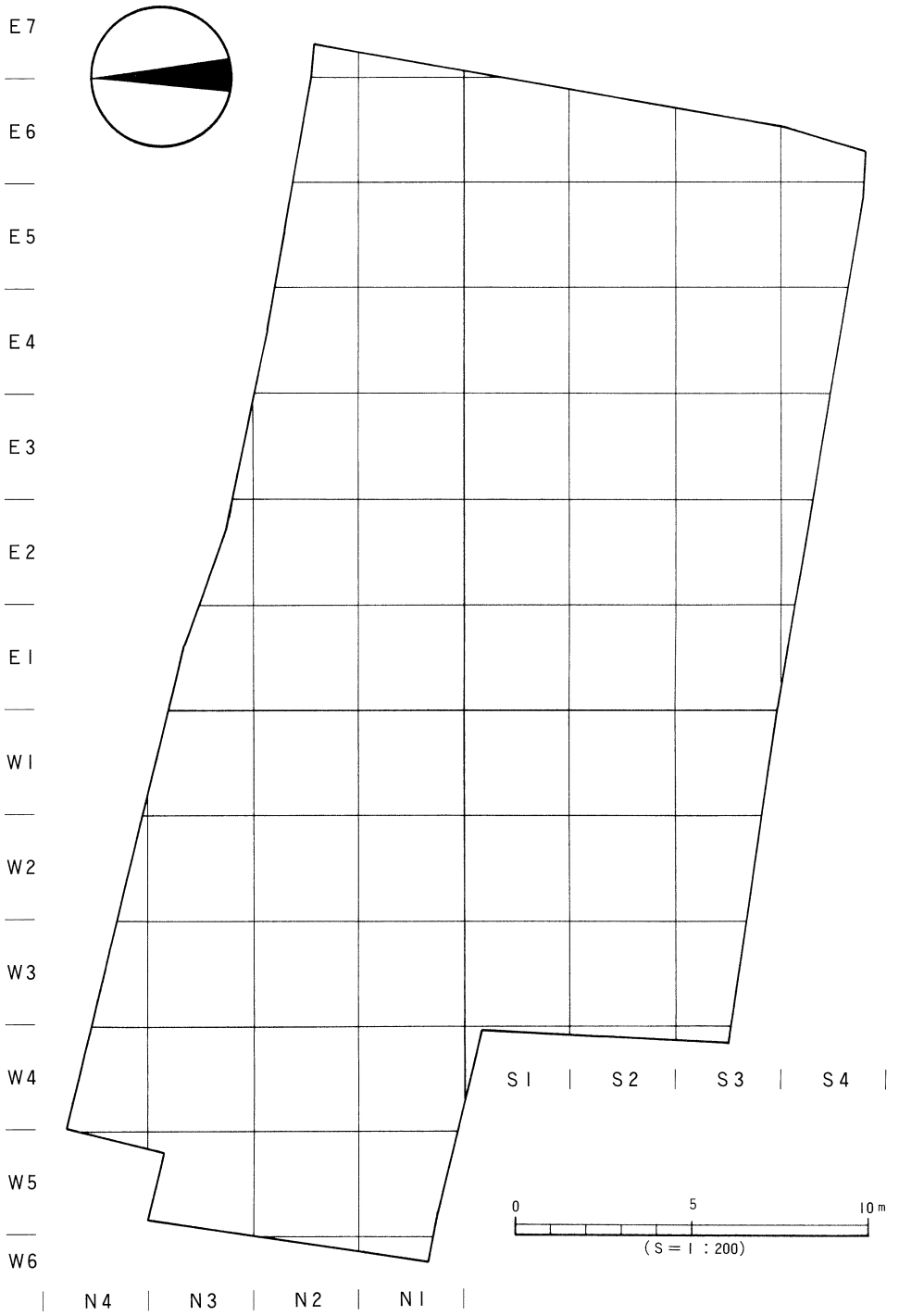
本遺跡は、松山平野を流れる石手川左岸の沖積扇状地上（38ｍ）に立地している。

基本層位は、第Ⅰ層表土(耕作土)、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層暗灰褐色土、第Ⅳ層暗茶褐色土、第Ⅴ層暗黄茶褐色土、第Ⅵ層黄色土(粘質)。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は地表下20cm～40cmまで開発が行われている。第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層は調査区の北西にしか確認されなかった。この第Ⅳ層、第Ⅴ層は包含層であり遺物は、弥生土器・土師器・須恵器を検出し厚さは、西側の厚い所で40cmである。第Ⅵ層～第Ⅺ層は無遺物層であり、第Ⅵ層は火山灰と思われ調査区の南東隅以外では全面に検出された。又、本調査区は南東部が１番高く北西部に向って緩傾斜をもつ調査区である。

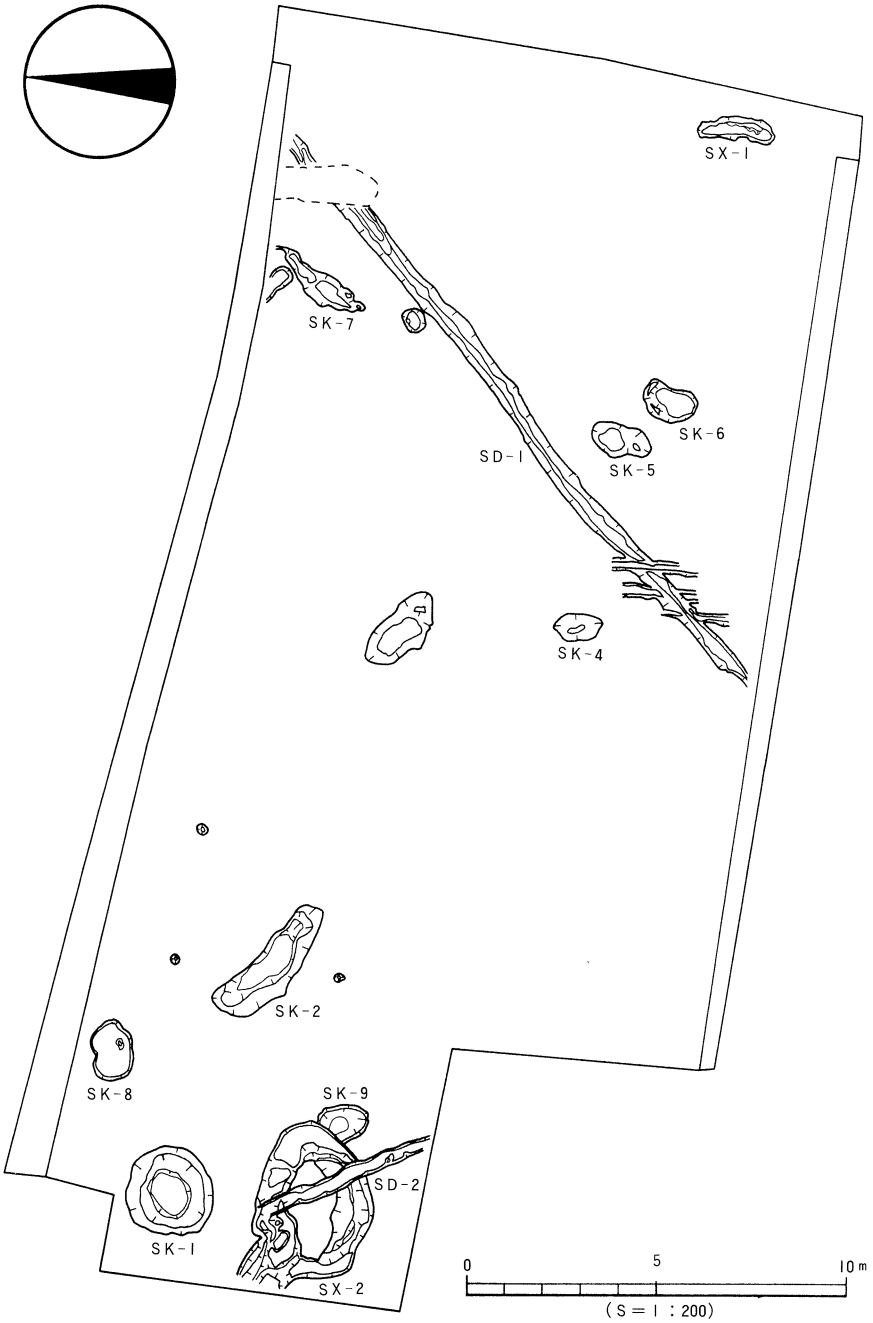
遺構は第Ⅵ層を切る形で検出した。土壙９基(弥生１基、時期不明８基)、溝状遺構２条(中世１基、時期不明１基)、円形特殊遺構１基（時期不明）他である。



第74図　基本層位図


E7
E6
E5
E4
E3
E2
E1
W1
W2
W3
W4
W5
W6
S1
S2
S3
S4
N4
N3
N2
N1
0
5
10m
(S＝1：200)

第75図　調査地区割図



第76図　遺構配置図

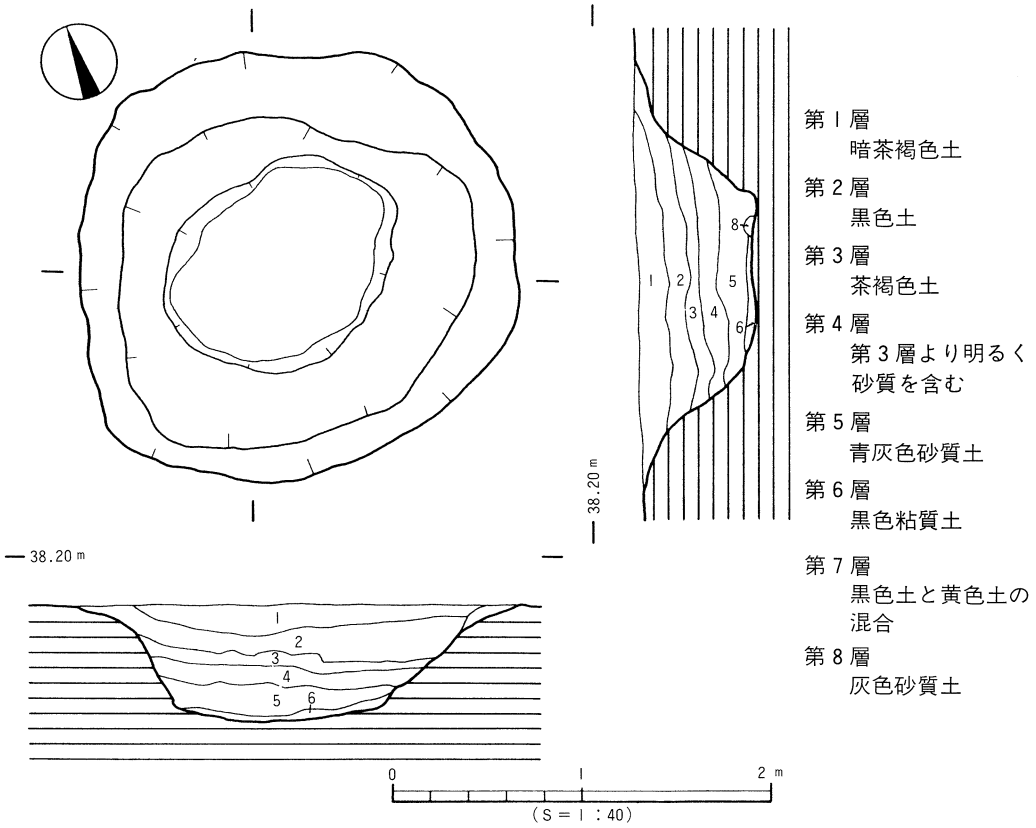
3．調査の概要（遺構と遺物）

本調査において、弥生時代、古墳時代、中世の遺物を検出した。ほとんどの遺物は第Ⅳ層第Ⅴ層の中からの出土である。遺構としては弥生時代の遺構（ＳＫ－１）を検出している。また中世の遺構では溝状遺構１条を検出した。

(1)土壙

土壙ＳＫ－１（第77・78図）

土壙（ＳＫ－１）は、調査区内の最も低い北西隅（Ｎ３Ｗ５）に位置する。規模は、最も広い所で240cmで狭い所で230cmあり、西側が直線的にはなっているがほぼ円形に近い平面形である。断面形は深さ60cmの舟底状である。覆土は１層は暗茶褐色土、２層黒色土、３層茶褐色土、４層は３層より明るい砂質土、５層黄灰色砂質土、６層黒色粘質土であり、１層、２層より遺物を検出している。



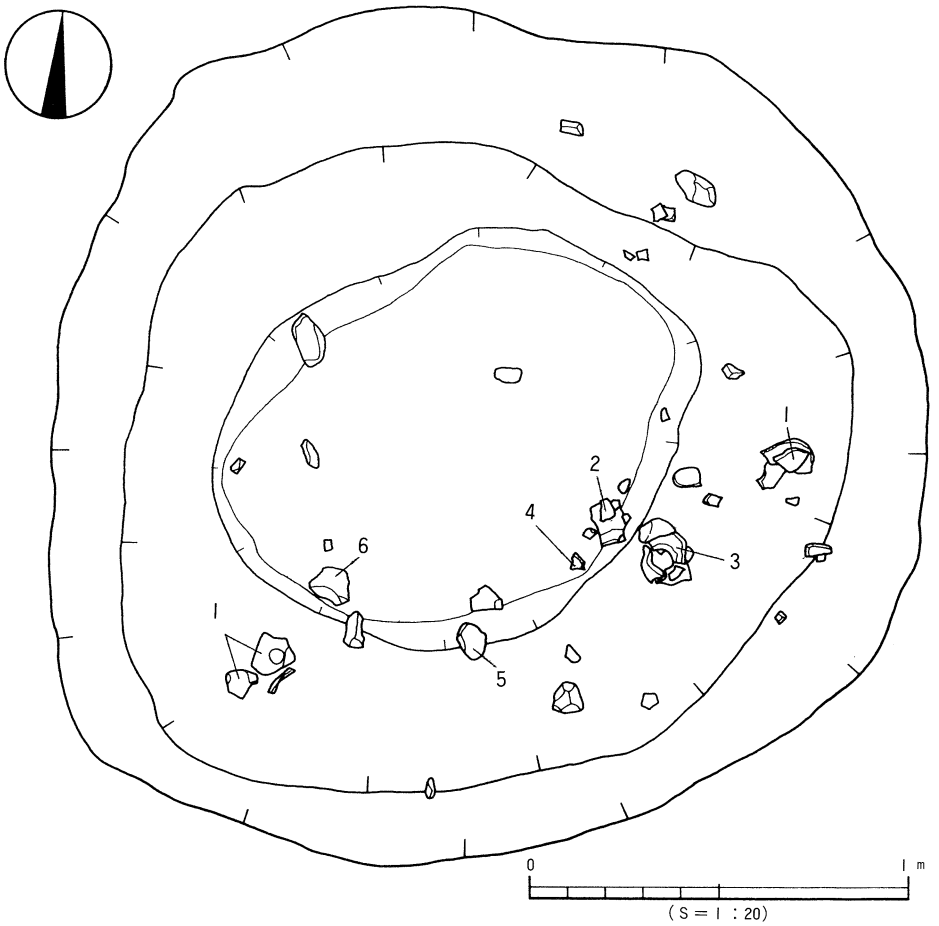
第77図　ＳＫ－１　測量図

(2)出土遺物

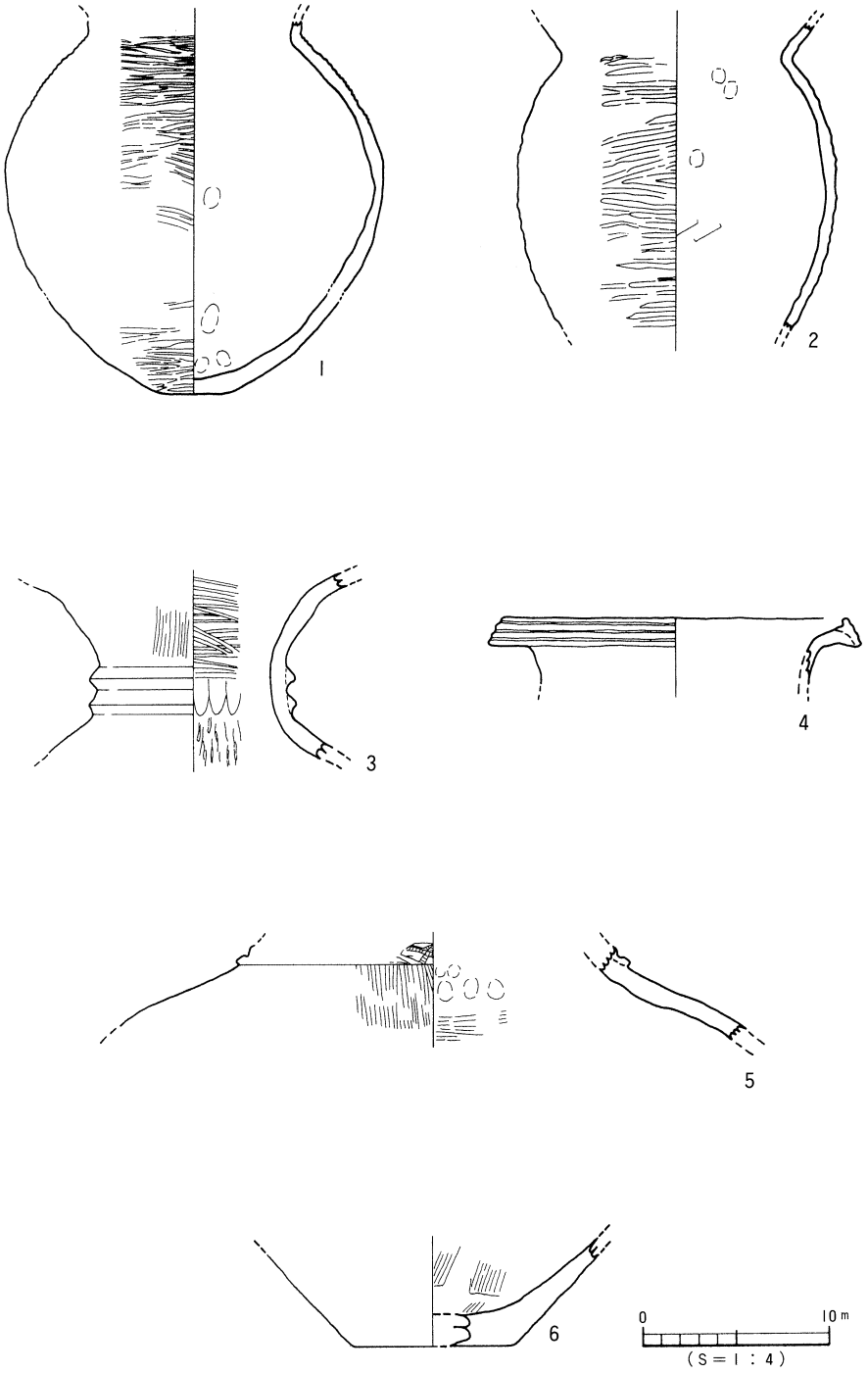
土壙（ＳＫ－１）出土遺物 (第79図)

甕形土器（１・２）　１は頸部径11.2cm、胴部径20.0cm、底部はコイン大の平底であり胴部は球形状である。口縁端部は欠損している。外面口頸部と底部にヨコナデが見られそれ以外の外面にはタタキ痕が顕著に残っている。内面に指頭圧痕が見られナデ仕上げである。２は口頸部から胴部にかけての破片である。頸部径は12.2cmである。外面口頸部にヨコナデが見られる以外はタタキ痕が全面に残っている。内面に指頭圧痕が見られ口縁部にヨコナデ、胴上にナデ、胴下に板ナデが見られる。

壺形土器（３・４・５・６）　３は口縁端部を欠損している頸部片である。頸部径が11cmで頸部に断面三角状凸帯を２条施している。外面上部と頸部にヨコナデ、口縁部にヘラミガキ、内面口縁にヘラミガキ、頸部にナデ、しぼり痕が見られる。４は口縁部片である。口縁



第78図　ＳＫ-１ 遺物出土測量図



第79図　SK－1 出土遺物実測図

部は粘土紐を貼り付け上方に拡張し、擬凹線を３本施している。内外面ともヨコナデである。５は頸部片である。頸部に凸帯を貼り付け器面調整用の木口で斜格子紋を１条施す。内外面ともナデ・ハケの仕上げである。６は底部片である。底部に手の上で調整を行ったと思われる３ヶ所の凹みが見られる。内面はハケである。

他の出土遺物（第80図）

甕形土器（７～９・11～13）　７・８・９は口縁部片である。口縁部を「Ｌ」字状に折り曲げて端部をわずかに拡張している。頸部に指頭圧痕を施した突帯を１条持つ。９は口縁端部の拡張部に凹線紋を２条施している。内外面ともにヨコナデ仕上げである。11は底部であり、底径6.2cm、残高3.4cmでありゆるやかに内湾し上げ底である。内面に指頭圧痕が見られる。12は底部であり１／２の残存で端部が欠損している。やや内側にくびれ浅い上げ底である。内面に指頭圧痕が見られ外面に黒斑があり、胎土は、石英・長石を多く含み焼成も不良である。13は底径5.8cm、残高5.8cmの底部片で１／２の残存である。形態はくびれて上げ底であり外面くびれ部に指頭圧痕が見られ底部にナデ仕上げが見られる。

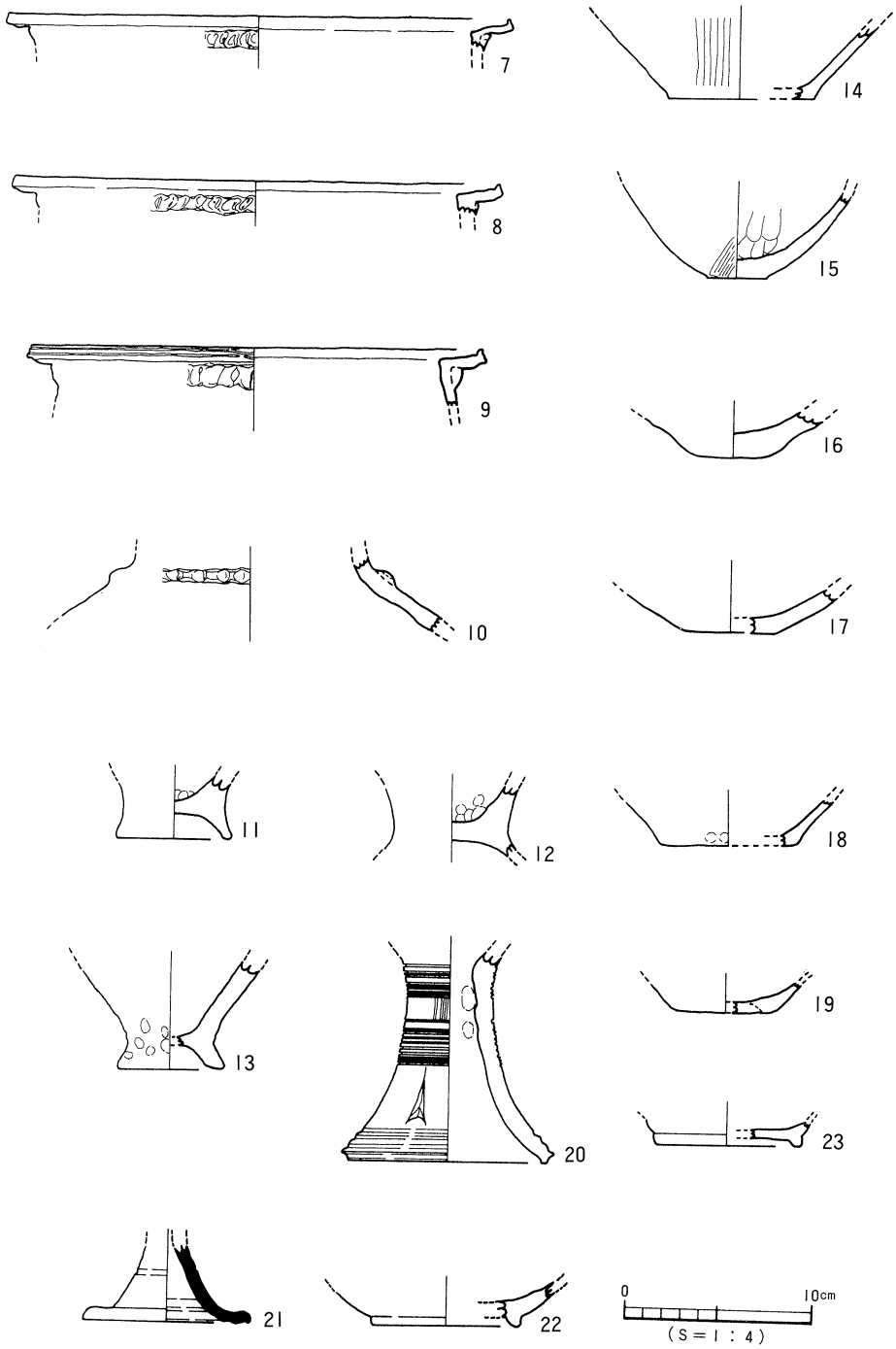
壺形土器（10・14～18）　10は頸部片である。頸部に貼り付け凸帯の押圧紋を１条施している。内面は指ナデである。14は底部片であり底径7.8cm(推定）であり平底より外に立ち上がる。外面はヘラミガキである。15は底径3.2cm、残高5.0cmである。底部が少しつぶれた平底より、内湾しながらゆるやかに立ち上がる。内面に指頭圧痕と指ナデが見られ外面はハケ調整である。16は底部片である。少し丸みをおびた底部を持ちゆるやかに立ち上がる。17は底部片である。18も底部片であり底径は7.4cm(推定）である。内面と外面上部、底部にナデ仕上げが見られ、外面下部は指ナデである。

高坏形土器（20）　20は脚部である。脚柱部外面の施文は３区画されており１／２の所に10本の沈線上部に７本の沈線を施し、その間に縦描の沈線３本を７方行に施している。裾部に３条の凹線紋があり、その間に矢羽根状の透かしを６方行に切り取られているが貫通はしていない。裾部端面にも１条の凹線紋が見られ、裾部はすこし内側に肥厚している。内側に指頭圧痕、しぼり痕が見られ、内外面の調整はナデ仕上げによるものである。

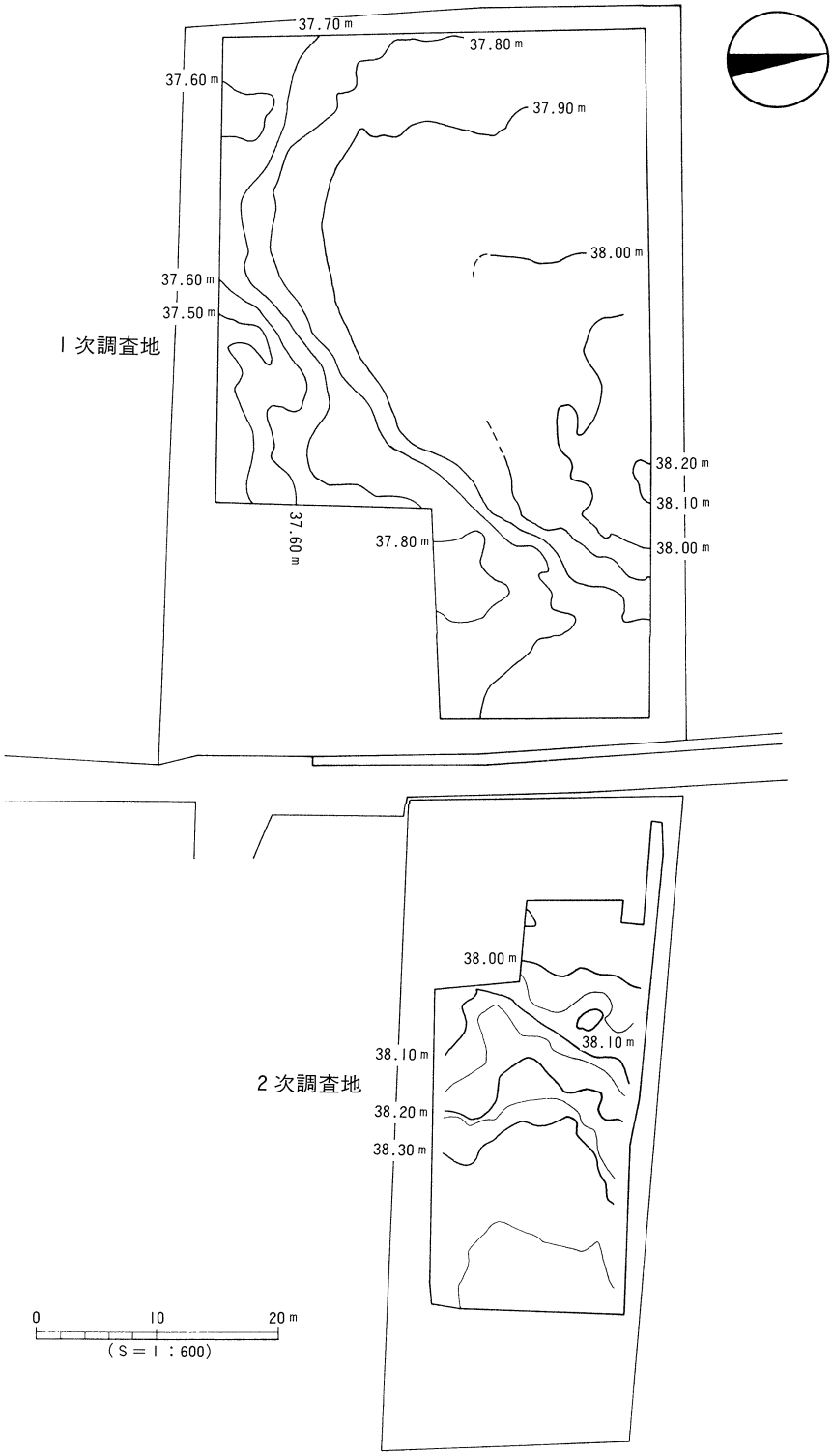
21は高坏形土器の須恵器の脚部である。底径9.2cm、残高4.0cmであり脚端内面に凹面がみとめられ脚端部がひずんでおり少し外反している。内外面ともにナデ調整が行われている。轆轤回転は逆時計回りである。

坏（19）　19は土師器の坏片である。底径は5.0cm(推定）であり胎土・焼成ともに良好である。

高台付椀（22・23）　22・23は土師器の高台付椀の底部片である。22は内面に炭素を吸着させた黒色土器Ａ類の高台付椀である。



第80図　出土遺物実測図



第81図　１・２次調査地形測量図

4．小結

(1)層位

平成元年度に実施した本調査区西側に隣接する西稲葉遺跡第１次調査区は、古墳時代から中世に至る生活関連遺構と弥生時代以降の遺物が存在し、桑原地区のほぼ中央に位置する。その一次調査区の第Ⅲ層に対応する２次調査区の層位が、第Ⅳ層の遺物包含層と考えられる。また、本調査区の第Ⅵ層から確認された火山灰は、樽味遺跡、樽味四反地遺跡、桑原遺跡、そして桑原西稲葉遺跡第１次調査区などに認められるものと同様の火山灰と思われ、松山平野における火山灰の分布形態、堆積状態などを知る上で好資料になるものと確信する。なお土壌分析による詳細な考案は、今後の課題としたい。

(2)遺構と遺物

今回の調査において、土壙９基、溝状遺構２条、ピット状遺構４基、円型特殊遺構１基ほかを検出した。土壙９基のうち１基（ＳＫ－１）のみが弥生時代と時期設定が推測できるに止まり、他の土壙については遺物が全く存しておらず時期や性格などは不明である。ただＳＫ－１にしても遺物が遺構上層部での検出であり、さらに遺物も弥生中期～弥生後期末と時期差が広範囲に及ぶため、時期設定は非常に困難な遺構である。調査区東部にあり北東から南西へと注ぐ溝状遺構（ＳＤ－１）については、土層・出土遺物から中世のものと考えられるが、もうひとつの溝については、土壙と同様に遺物が全く検出されておらず、詳細は不明である。またＳＫ－１の南側より検出された円型特殊遺構（ＳＸ－２）は、幅50～200cmの溝が直径400cmのドーナツ状に回っており、こうした遺構は今までに類例がなく、時代を確定する遺物も含まれないことなどから、周辺遺跡との係わりのなかで、今後、解明していきたい。遺構全般については、第81図のコンタ図からも明らかなように、本調査区は西方向に、１次調査区は東方向になだらかに落ち込みを形成しており、両調査区の間に溝状遺構が存在する可能性もあるが、現状が道路のため確認できない。これが水路ということになれば、土壌分折の結果を待たなければはっきりとしたことは言えないが、水田遺構ということも考えられる。

検出された遺物は、ほとんどがＳＸ－２周辺の低地に集中しているが、下層部、即ち床面直上からの出土遺物は発見できず、遺構に直接関係した遺物とは考えにくく、自然の流込みにより堆積した土器溜りを形成したものと思われる。

また、調査区Ｓ３Ｅ３グリット（第75図参照）の第Ⅵ層上面において、旧石器を１点検出したことは、今回の調査に於て特筆すべき事柄として付記しておく。

遺構・遺物一覧（遺構、遺物一覧：高尾和長・真木潔）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。　例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表45　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	S3-E1～N2-E5	皿　状	18.00×0.55×0.10	暗灰砂質土	弥　生		奈良以降
2	N1-W4～N2-W5	皿　状	6.50×0.50×0.05	黒　色　土	弥　生	ＳＸ２を切る	不　明

●表46　土壙一覧

土壙(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	N3-W4～W5	円　形	舟底状	2.30×2.30×0.60	暗茶褐色土	弥　生		弥生中期後葉以前
2	N2-W2～W3	不定形	舟底状	2.55×1.15×0.75	暗茶褐色土			不　明
3	Ｎ１－Ｅ１	不定形	舟底状	2.60×1.30×0.60	黒　色　土			不　明
4	Ｓ２－Ｅ１	不定形	皿　状	1.25×0.70×0.10	灰　色　土			不　明
5	Ｓ２－Ｅ３	不定形	皿　状	1.60×0.40×0.10	灰褐色土			不　明
6	S2～S3-E3	不定形	皿　状	1.50×0.85×0.20	暗灰粘質土			不　明
7	N1～N2-E4	不定形	皿　状	2.50×0.80×0.20	黒　色　土			不　明
8	N3－W3･W4	円　形	皿　状	1.50×1.05×0.10	黒　色　土			不　明
9	N1 －W４	円　形	皿　状	1.00×0.90×0.16	暗茶褐色土		ＳＸ－２に切られる	不　明

●表47　ＳＸ 一覧

土壙(SX)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	Ｓ３－Ｅ６	不定形	皿　状	2.10×0.60×0.25	灰　色　土	弥生・須恵		不　明
2	Ｎ１－Ｗ５	円　形	舟底状	3.50×3.00×0.40	暗茶褐色土	弥生・須恵	ＳＤ１に切られる	不　明

●表48　ＳＫ１出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	器高 19.8	胴部が球形	タタキ(5cm－16本) 底部－ナデ	ナデ	石・長(1～5) ◎	黒斑	67
2	甕	残高 16.5	口頸部がくの字で口縁部は胴部よりは外反しない	タタキ(5cm－９本)	口縁 ヨコナデ 胴部 ナデ	石・長(1～4) 銀ウンモ ◎		67
3	壺	頸部径(11.0)	断面三角状凸帯紋を二本施している。	ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラケズリ 指ナデ しぼり痕	石・長(1～2) ◎		67
4	壺	口径(18.1)	口縁部に３本(条)の沈線を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		67
5	壺	頸部径(20.8)	凸帯紋を一条施す。	ハケナデ(1cm－7本)	ナデ 指圧痕 ハケ (1cm－9本)	石(1～3) 長(1～4) 金ウンモ ◎		67
6	壺	底部 (8.4)	手の上で調整をしたと思われる。指の痕（３カ所の窪み）有り。	ヘラミガキ	磨滅のため不明	石・長(1～2) 多量に含む	黒斑	

●表49　包含層出土遺物観察表 土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
7	甕	口径(26.5)	口縁部を「L」字状におり曲げ口端を拡張している。頸部に押圧紋。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) ◎		68
8	甕	口径(25.8)	口縁部をＬ字状におり曲げ頸部に押圧紋を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 砂粒 石(2) ◎		68
9	甕	口径(23.8)	口縁部に２本の凹線。口頸部に押圧紋。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 砂粒 長(2) ◎		68
10	壺	残高 4.0	口頸部に押圧紋。	磨滅のため不明	指ナデ	石・長(1～4) ◎		68
11	甕	底径 (6.2)	上げ底	磨滅のため不明	指圧痕が見られる	石・長(1～6)	黒斑	68
12	甕	残高 3.8	上げ底	磨滅のため不明	指圧痕が見られる	石・長(1～5)	黒斑	68
13	甕	底径 (5.8)	上げ底	ナデ 指圧痕が見られる	磨滅のため不明	石・長(1～4)		68
14	壺	底径 (7.8)	平底	ヘラミガキ	磨滅のため不明	石・長(1～5) ◎		68
15	壺	底径 (3.2)	底部が少しつぶれる。	磨滅のため不明	指圧痕が見られる	石・長(1～3) 雲母を含む ◎	黒斑	67

包含層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器量	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼土	備考	図版
16	壺	残高 2.0	丸 底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長(1～3) 銀 ◎	黒斑	68
17	壺	底径 (4.7)	平 底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長(3～5) 金雲母含む ◎	内面に黒 斑	67
18	壺	底径 (7.4)	平 底	指ナデ	ナ デ	密・石 長(2) 砂粒 ◎		68
19	坏	底径 (5.0)	平 底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	密(砂粒)		68
20	高坏	器高 11.3 底径(10.8)	７本の沈線とヘラによる10本の沈線。矢羽根スカシ、凹線紋。	ナ デ	ナ デ 指圧痕、しぼり痕	細砂 ◎	黒斑	68
21	高坏	器高 4.0 底径 (9.2)	端部が少し外反する。轆轤回転左回り。	ナ デ	ナ デ	長(1～2) ◎		68
22	椀	底径 (8.0)	高台付	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石(1) ◎		68
23	椀	底径 (7.7)	高台付	磨滅のため不明	磨滅のため不明	◎		68

第 8 章

桑原田中遺跡
（クワバラタナカ）

1．調査の経過

〔1〕調査に至る経過

昭和63年3月、松山市桑原5丁目1－10、木村正則氏が所有する桑原6丁目499－1に、共同住宅建設の申請が出された。当地域は、松山市が指定する『83枝松遺物包含地』内にあたり、昭和51年度以来数々の調査が行われている地域である。これまで弥生時代後期を中心に、中世に至るまでの主要な遺跡が周知されている。

松山市教育委員会は、昭和63年3月22日に申請に基づいてトレンチ調査を行った。その結果、東西4条の試掘溝の内、南端部より2条目の試掘溝より多量の土器が検出された。52年度に松山市教育委員会が調査した桑原高井・桑原小石原・東本の各遺跡は、当該地より半径500m内に位置しており、ベッド状を備える住居址・河川遺構・祭祀的濃厚な集合的遺構などが確認されており、様々な形態の変化がみられる地域性の主要性から、歴史的解明や資料収集を図ることの重要から、本調査を実施することとなった。

〔2〕調査組織

調査期間　昭和63（1988）年9月19日～同年11月12日

調査面積　409.71㎡

調査委託　株式会社ディック不動産部

調査協力　一条工務店松山支店

調査担当　調査員　池田　学
　　松村　淳
　　調査補助員　大森　一成
　　福田　宏志
　　山本　健一
　　作業員　松友　利夫
　　松岡　欣弘
　　松本　正義
　　近藤　茂
　　藤家　厚美
　　高岡　義綱
　　森　隆
　　西田　竜一
　　兼久　一郎
　　佐川　正行

〔2〕遺跡の概要

(1)遺跡の立地と歴史的環境

桑原田中遺跡は、松山城の南を流れる石手川の上流岩堰から、南西一帯に広がる西傾斜した緩斜面に位置している。緩斜面は、四国山地の石鎚山より分岐した山系端部にあって、分岐山系は、観音山・杉立山の各峰をすぎ起伏を減じながら芝ヶ峠・淡路峠へと下り、東野お茶屋台地へと続き、洪積台地の山麓地帯を形成している。台地より更に南へ延びる丘陵は、南端部で東西に分岐し、東の分岐丘陵の微高地には、6世紀前葉の三島神社古墳が知られ、さらに西の丘陵先端の舌状台地には、5世紀中葉の前方後円墳経石山古墳が存在している。

東野台地丘陵部には、東野古墳群、溝辺古墳群、東野お茶屋台古墳群がある。丘陵部の南西方向に開いた南に緩傾斜の地形をなす扇状地には、樽味遺跡群、中村遺跡群、桑原遺跡群、束本遺跡、小坂釜ノ口遺跡、枝松・松末の遺跡群などが知られる。このように当地域は、聖域、墓域、集落域に分けられる政治色の強い地域性がうかがえる。扇状地に立地する多くの遺跡のうち桑原田中遺跡より北へ1.5km、石手川左岸の樽味遺跡群内には昭和62年10月、愛媛大学埋蔵文化財調査室が調査を行った愛媛大学農学部構内、さらには、62～63年度に松山市教育委員会（松山市立埋蔵文化財センター）が調査を行った、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡などがある。また桑原遺跡群に含まれる田中遺跡の周辺部は、桑原高井遺跡、桑原小石原遺跡、束本Ⅰ・Ⅱ遺跡などが昭和50年以降現在まで松山市教育委員会の調査によって確認されている。

これらの扇状地に立地する集落は、当地域が古くより集落を形成するにあたって、自然的立地条件が作り出されていた背景がうかがえる。弥生時代中期から中世に至るまでの生活址が営まれた地域社会の中に、桑原田中遺跡は存在している。さらに南西に緩傾斜する山麓部に広がる洪積台地は南端部で、川付川によって境がつくられ、両岸部には、広く集落の存続がみられる。中でも釜ノ口遺跡は、松山平野の南東部における主要な位置にあり、弥生時代後期を主体とする遺跡群である。このような状況に囲まれた東部のやや高い位置に、桑原田中遺跡は立地している。

(2)調査の経緯

調査地は、住宅街にあって、南面する東西道路には、小売店の並ぶいわゆる町はずれの商店街の一画の角地に位置している、従って道路に面する東西、南北線は調査地を控える結果となった。トレンチ調査によって、ある程度の廃土容量の計測や、立地条件との兼ね合いもあって、廃土置場を広く確保する結果となり、調査面積も400㎡余となった。

発掘調査日誌抄

昭和63年9月19日、本日より重機により表土削除を行う。　21日、削除終了後平均地なら

しをし、基準点などのポイントを設置する。　22～24日、土層観察用畦を残し、第Ⅲ層灰褐土の削土をする。　26～30日、続いて第Ⅳ層黄褐土の掘り下げを行う。遺物出土し始める。

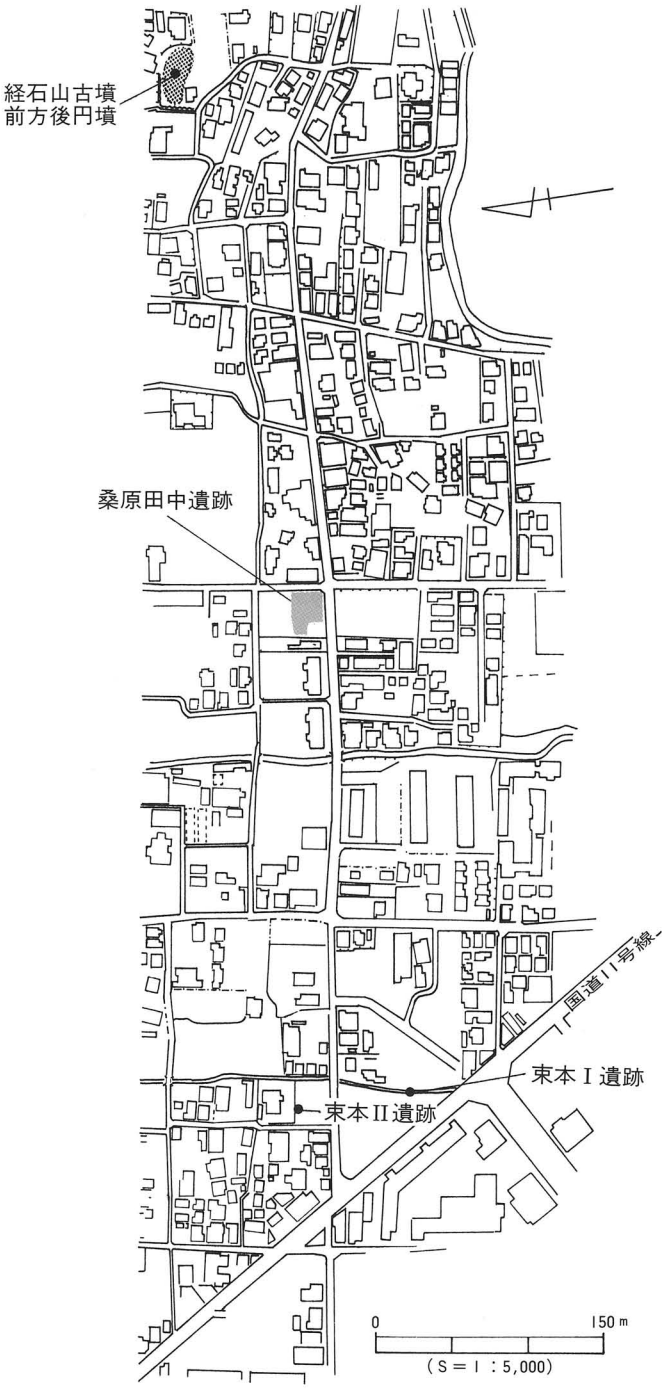
10月１～５日、Ｓ１～Ｅ１区、Ｓ１～Ｗ１区に溝状遺構（ＳＤ１・２・３）を検出、上層面に出土の遺物実測及び溝の検出面の平板測量をする。Ｓ１～Ｗ１区のグリット北位置に遺物の小片の堆積を検出。　５日、雨天により表採土器の洗浄をする。　６～11日、出土遺物の測量ＳＩ／20、Ｓ１～Ｗ１に、溝状ＳＤ－２の延長部を検出。　12日、Ｎ２～Ｅ１区に土壙状検出ＳＫ－１とし掘り下げる。　13～15日、Ｎ１～Ｅ１に浅い溝状遺構（ＳＤ－４）掘り下げ、周辺部に小柱穴群を検出。Ｎ２～Ｅ１に更に溝状検出（ＳＤ－６）とする。Ｎ２～Ｗ１に小溝を検出(ＳＤ－７)とする。Ｎ２～Ｗ２・３の掘り下げを行い北東方向の溝状（ＳＤ－９）及び、土壙状（ＳＫ－２）を検出。更にＷ３区で、ＳＤ－９と合流する東西溝（ＳＤ－８）を検出。　21～25日、各遺構の掘り下げ、及び出土遺物の測量をする。〔池田〕

10月26日当日より、調査地は松村が担当する。ＳＤ－２・５・７・８の掘り下げをする。27日～31日、Ｓ１～Ｅ１区のＳＤ－２とＳＤ－３の合流する地点に、ＳＫ状を検出ＳＫ－３として掘り下げる。ＳＫ－１及びＳＤ－７・８の出土遺物の測量、ＳＫ－１の遺物取り上げ（弥生後期の二重口縁壺、高坏など）Ｓ１～Ｗ１とＮ１～Ｗ１区にかかるＳＤ－２とＳＤ－５の接点に遺物の堆積が著しい。Ｄ列、Ｅ列の南北土層畦の断面層序の計測を始める。

11月１日～５日、ＳＤ－５とＳＤ－６の間に有段を検出、ＳＤ－５の２とする。各土層の掘り下げ、出土遺物の測量、断面層序の計測、土層観察畦の撤去。　４日、Ｄベルトにて土製紡錘車出土。Ｎ１～Ｗ２区にて、ＳＤ－５～２は消滅し段落ちとなる。これらの溝の端末周辺に柱穴群を検出。一部の柱穴内より獣歯出土。　６日～10日、Ｎ１～Ｗ２の落ち込みの掘り下げ、出土遺物の測量。Ｎ２～Ｗ２のＳＤ－７・９の切り合い部の測量、南壁断面の計測、ともにＳ１／20。全面測量開始Ｓ１／50、西壁断面の計測Ｓ１／20。出土遺物整理をし搬出に備える。　11日、晴。各遺構の補定測量、出土遺物及び、発掘諸材料を搬出し、当遺跡調査を完了した。

当調査区の地区割は第83図に示すように東端部より西へ６ｍ隔てた南北軸と南端部より北方向に６ｍ隔てた東西軸の両主軸線が交わる点を基準点とした。基準点より放射状の東西南北区をさらに、６ｍ×６ｍのグリットに小区分し数字を付し、方位は磁北を採用した。また土層観察用の畦をＥ１列とＷ１列の西側に、最長径が計測できる２条を残した。

調査区の南面及び東面は、当地域における主要枝線であり、したがって調査区域を北と西方向にせばめる形となった。さらに調査地の北部は廃土置場に使用したため確認はされていない一画である。　〔松村〕



第82図　桑原田中遺跡周辺の主要遺跡分布図

N3W3
N3W2
N3W1
N2W3
N2W2
N2W1
N2E1
N1W2
N1W1
N1E1
S1W2
S1W1
S1E1
0
10m
(S＝1：200)

第83図　調査地区割図

2．層位

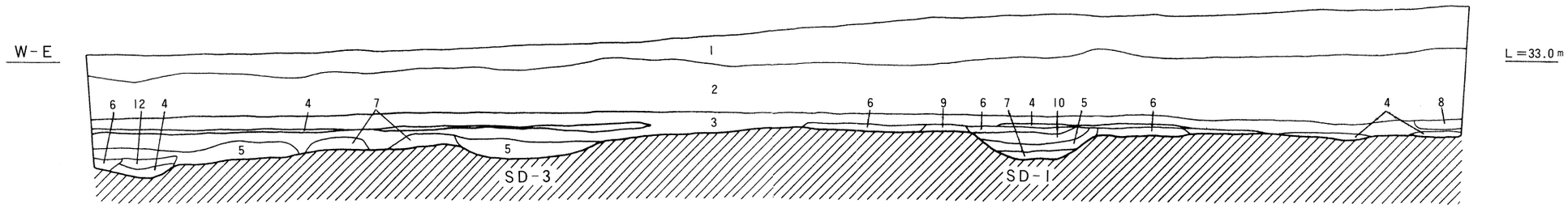
調査地の地形は、図84・図85に示すように、東から西へ緩傾斜し、また南から北へも緩傾斜の傾向がみられる。従って調査区の南東部から北西部に向かい緩傾斜する台地の微高地が考えられる。層位は、上から、第1層造成土、第2層耕作土、第3層灰褐色土、第4層黄色土、第5層暗褐色土、第6層地山の順に堆積している。第1層の造成土は厚さ50cmが測られ、数次に且る造成がみられる。第2層の耕作土には、上面の耕作土、下面における床土の分層が困難で、攪乱がみられ厚さ70cmが測られる。発掘調査例から観案すると、耕作土20cm、床土5～10cm、残厚40cmが表土と推定される。第3層の灰褐色土は粘質で厚さ20cmが測られるが調査区南西部では、下層第4層の黄色土下面にもみられ氾濫がみられる層である。従って第3層は、A・Bの2層に分けられ、A層は無遺物層、B層は遺物包含層とするのが妥当と考えるが、包含遺物は僅少である。第4層の黄色土は薄く厚さ5～10cmで若干の遺物が含まれている。第5層の暗褐色土は調査区中央よりにみられ、扇状に北西へ拡がり北西端部で20cmが測られる。遺構の内部、または南東隅にもみられる遺物包含層である。基盤面となる地山も、東から西へさらには南から北への緩傾斜を呈しており、遺構は地山面に掘りこまれたもので、洪積台地に被覆された沖積層の下部に検出されている。

遺構内部の堆積土は、

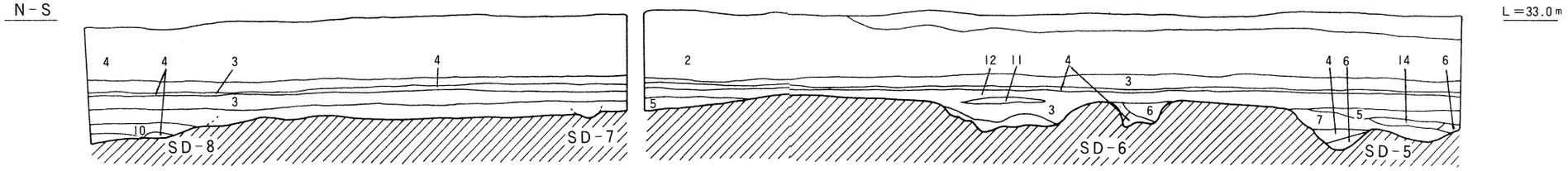
南側の3溝（SD－1～3）　暗灰色、青灰色、灰褐色の砂質土の堆積がみられる。
中央の3溝（SD－4～5の2）　暗褐色、黒色、暗褐色の砂質土。
北側の4溝（SD－6～9）　暗褐色土が多い。

というように簡略されるが、氾濫の様相が随所にみられるものが多い。この様相が最も顕著にみられる溝に、SD－5がある。検出された溝状のうち最大のもので、全長24m、幅1.6mが検出され東端部の落ち込み部（N3E1）より端を発している。このSD－5の堆積土の中位に前述の南側の3溝にみられる灰褐色のしかも粗砂混じり土がみとめられる。またSD－1の北壁、図84にみる南壁の南端部、図85にみるSD－5の北壁や、SD－8の周辺の基底面における黄色土は、反転がみられる。

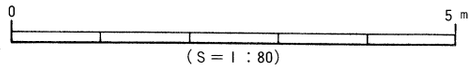
これらから察すると、あきらかにこの調査地は、氾濫による攪乱をうけた地域が考えられる。



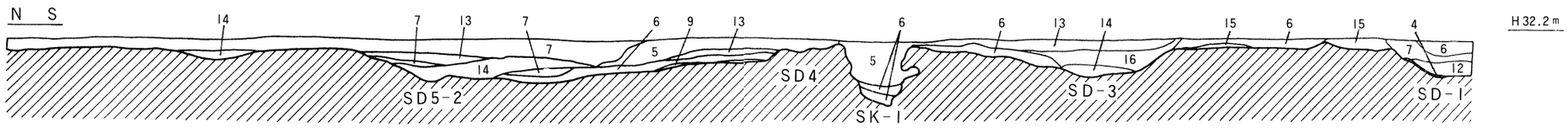
第84図　西壁（N－S）層位図



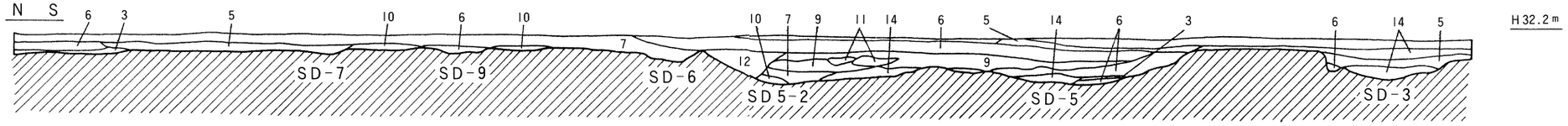
1 造成土　2 耕作土　3 灰褐色粘性土　4 黄色粘性土　5 暗褐色粘性土　6 黒色土
7 灰褐色砂質土　8 青灰色粘性土　9 暗灰色土　10 暗黄灰色微砂　11 灰色粗砂　12 黄褐色ブロック粗砂
14 暗褐色砂



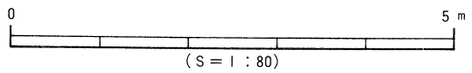
第85図　南壁（W－E）層位図



第86図　D列（N－S）層位図



3 灰褐色粘性土　4 黄色粘性土　5 暗褐色粘性土　6 黒色土　7 灰褐色砂質土
9 暗灰色土　10 暗黄灰色微砂　11 灰色粗砂　12 黄褐色ブロック粗砂　13 褐色土
14 暗褐色砂　15 茶褐色粘性土　16 黒色＋黄色ブロック粘性土



第87図　E列（N－S）層位図〔計測点は第89図に示す〕

3．遺構と遺物

〔1〕遺構

本調査で検出された遺構は、図88に示すように、土壙ＳＫ３基、溝ＳＤ10条、掘立柱建物址ＳＢ２棟、柵列ＳＡ２条、落ち込みＳＸ２基が検出された。

⑴土壙：ＳＫ（第88・89・92・93図）

ＳＫ１はＮ１Ｅ１にあって、南をＳＤ３、北をＳＤ４に囲まれた位置で検出された。祭祀的要素のみられる弥生後期後半に比定される土器が、一括出土した貯蔵穴である。堆積土は３層からなり、上層は遺物を包含する暗褐色土、中層は黒色無遺物土、最下層の３層は黒色と黄色のブロック層の底上げ土となる。壁体中位に有段の掘り込み（図11）がつくられている。類例には松山市教育委員会が調査した、釜ノ口遺跡第４次調査にみられるが、この土壙からは、有段下に杭穴痕跡や植物遺体の検出が報告されているが、ＳＫ１には検出されず差異がみられる。

ＳＫ２は、第88・89・94図のように、Ｎ２Ｗ２のＳＤ９に接して検出されたもので、立地条件や共伴遺物の観点から、自然掘り込みが考えられる土壙である。ＳＫ３もＳＫ２同様の性格がみられるＳ１Ｅ１に検出されたものである。溝ＳＤ１とＳＤ３に接した北下りの傾斜面に位置している。図95に示すように不整形の床面２段で構成される掘り込みである。

⑵溝状：ＳＤ（第88・90・96～98図）

溝状は調査地全域にみられ、図のように、南・西走向する10条が検出された（ＳＤ５－２を加算して）。ＳＤ１はＳＤ２と切り合い、ＳＤ２はＳＤ３と切り合いが示される。三者の内ＳＤ２が先行するが、ＳＤ１と３との先行形態は不明である。ＳＤ４はＳＫ１の北部に位置するＴ字形の溝である。両端部は削平による不明の、深さ６㎝の浅いものである。周辺には柵列状の小穴群がみられる。ＳＤ５はＳＤ２を吸収する大溝である。随所に水流によるえぐりがみられる。

ＳＤ５－２は、ＳＤ５と伴走するもので、ＳＤ５に伴う氾濫原が考えられる溝である。西端は削平され自然消滅する傾向がみられる。ＳＤ６は東の延長部も考えられ、西端部は落ち込みによって削平される溝である。調査地を南北に区分する様相がみられる。調査地北部のＳＤ７－９は図97に示すように小振りの溝である。ともに浅く自然流路が考えられ、東部からの搬入土器が混在出土している。

(3)掘立柱建物址 ：ＳＢ(第91・99・100図)

建物址はＮＩＷ２区の氾濫原に位置する。SB1は桁行２間、梁行1間で、柱間2.8m～1.3m×2.8mが測られる主軸北北東の長方プラン、SB2は桁行１間、梁行１間の柱間3.8m×2.8mの主軸東北東の方形である。第91図に示す柱穴Ｐ２は併用がみられ建て替えも考えられる。立地点やプランの不整形さ等の観点から、建物址とするには疑問が残る遺構である。遺物はＰ３の東に位置する横列２基の柱穴から、草食動物の歯牙が検出されたのみである。

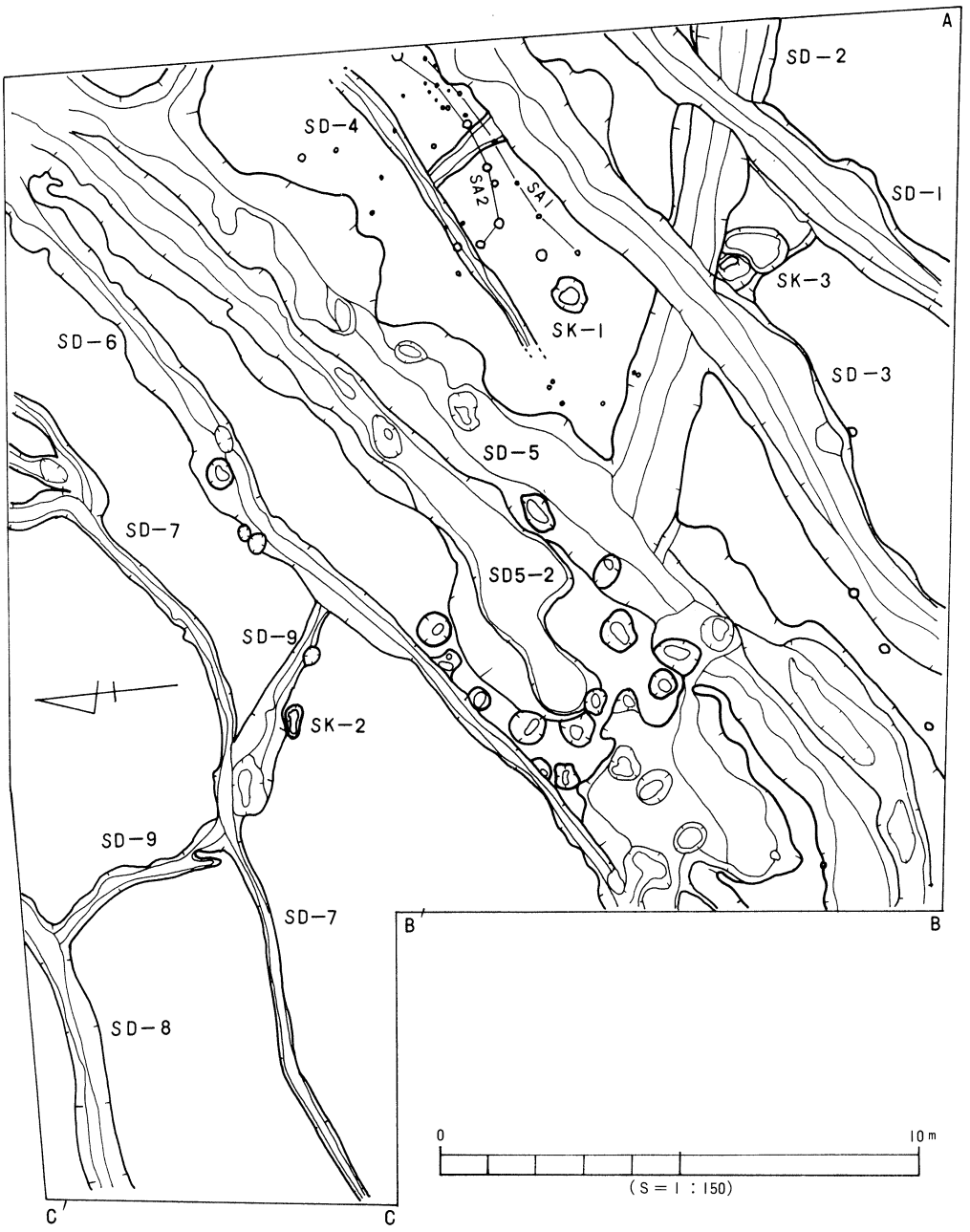
(4)棚状：ＳＡ(第88図)

柵状はN1E1区の平坦面、ＳＫ１の周辺部の径20cmから５cmまでの小穴群である。ＳＡ１はＳＤ３の北縁から僅か離れた位置の直線状のもの、ＳＡ２は「Ｊ」字状に弧を描くものの２条である。ＳＡ１は土留めが推定されるが、ＳＡ２は不明である。小穴群における径・深さなどの点から、線引きをこころみた。

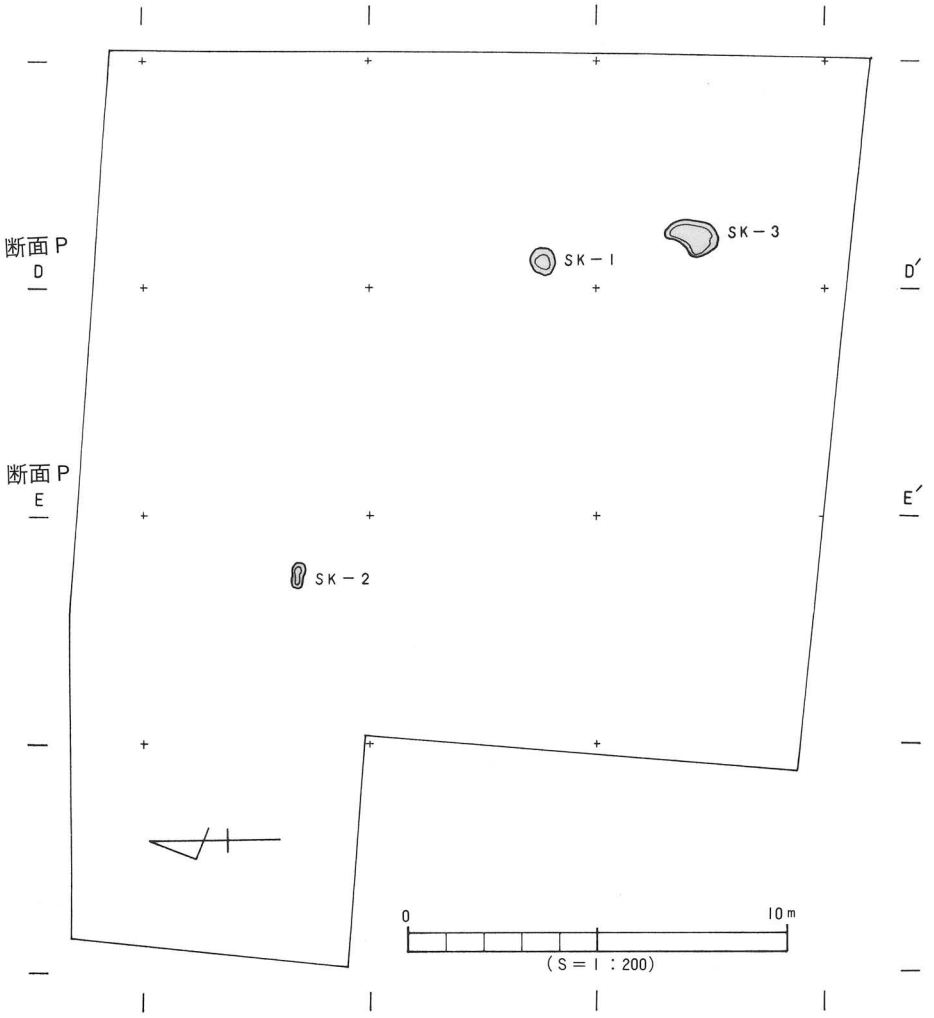
(5)落ち込み：ＳＸ(第88・90図)

ＳＸ１(第88図)は調査区北東隅に、ＳＸ２(第90図)はＳ１Ｗ２とＮ１Ｗ２区にまたがって検出された。ＳＸ１の全容は解明されていないもので、土器類は検出されていない。ＳＤ５及びＳＤ５－２はこの地点より派生している。ＳＤ６の延長部が北肩部に若干みられる。ＳＸ２は調査地西端に位置する氾濫壕である。ＳＤ５、ＳＤ６を寸断削平し東部は緩く下降を示し、西部に高い土堤がつくられる。

各遺構出土の土器には、ＳＫ１の複合口縁壺、甕、高坏、支脚などの一括遺物、ＳＸ２、３では壺口縁、底部、須恵坏などの細片がある。ＳＫ１の土器は、弥生後期後半に比定される。ＳＤ１の土器は少なくＳＤ２には土器の堆積があり(第96図)、複合口縁、大型器台、支脚が出土している。ＳＤ３からは、複合口縁、沈線４条２段施文の壺頸部、竹管文、刺突文併用の高坏屈曲部、舌状突起付支脚などがある。ＳＤ２を吸収し合流するＳＤ５からは、須恵器樽形瓲の出土があり特色される。他に石斧などが出土しており、ＳＤ２と差異が認められる。また大型器台の出土が少ない点にも異なりがみられる。ＳＤ５－２からは樽形瓲の細片が出土しており、ＳＤ５と共存関係の氾濫原と解釈される。ＳＤ６には鉢形、長頸壺、支脚がみられる。ＳＤ７には複合口縁、ＳＤ８には複合口縁、高坏、鉢底部、支脚、器台の細片が、ＳＤ９はＳＤ８と類似し、他に甑底部の底面に、×印記号がみられるものがある。ＳＤ７～９に出土する土器には、搬入物も混在するが、溝底面の土器に限定し図に示した。

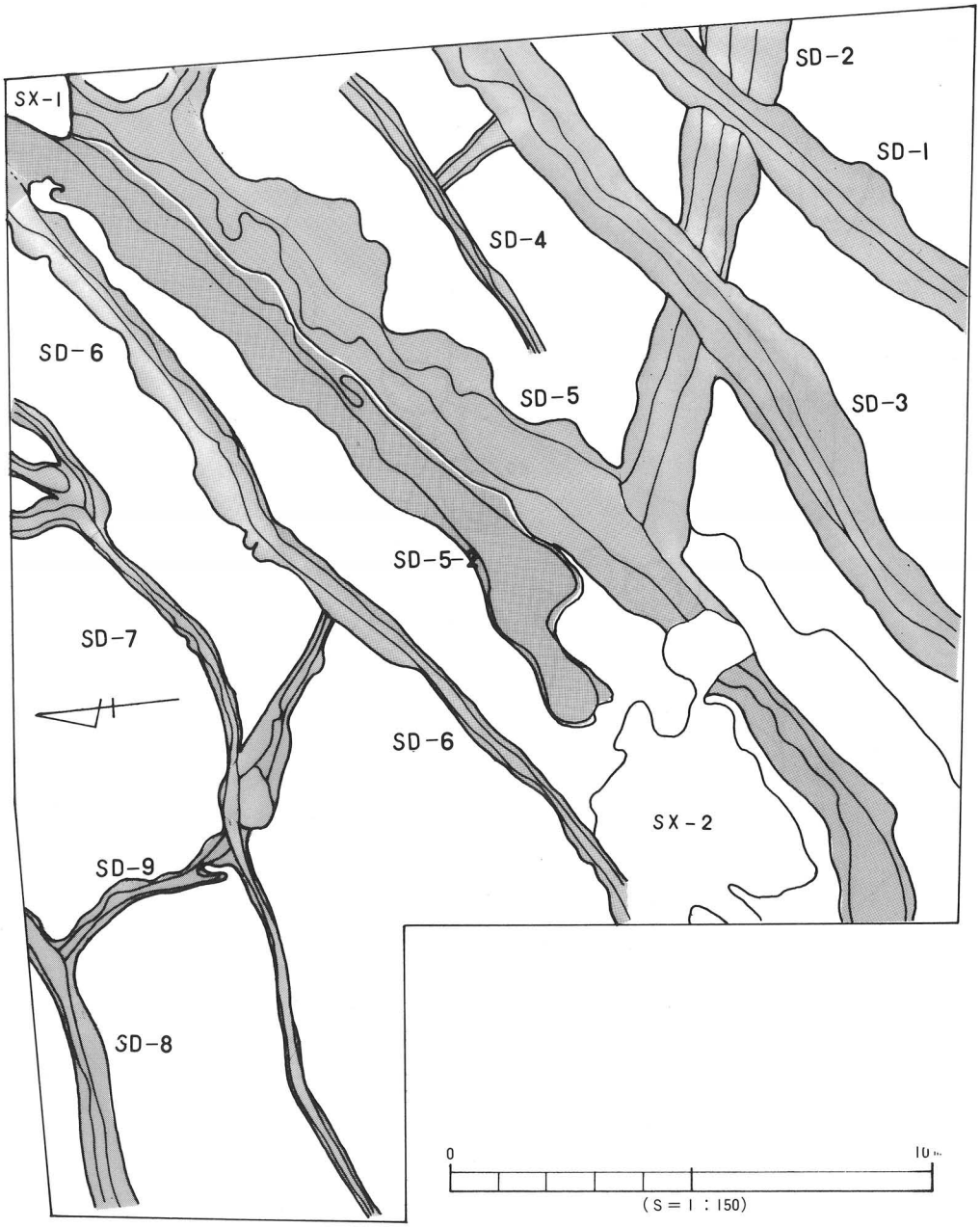

A
SD－2
SD－1
SD－4
SA2
SA1
SK－3
SK－1
SD－6
SD－3
SD－5
SD－7
SD5－2
SD－9
SK－2
SD－9
SD－7
SD－8
B′
B
C′
C
0
10m
(S＝1：150)

第88図　遺構配置図

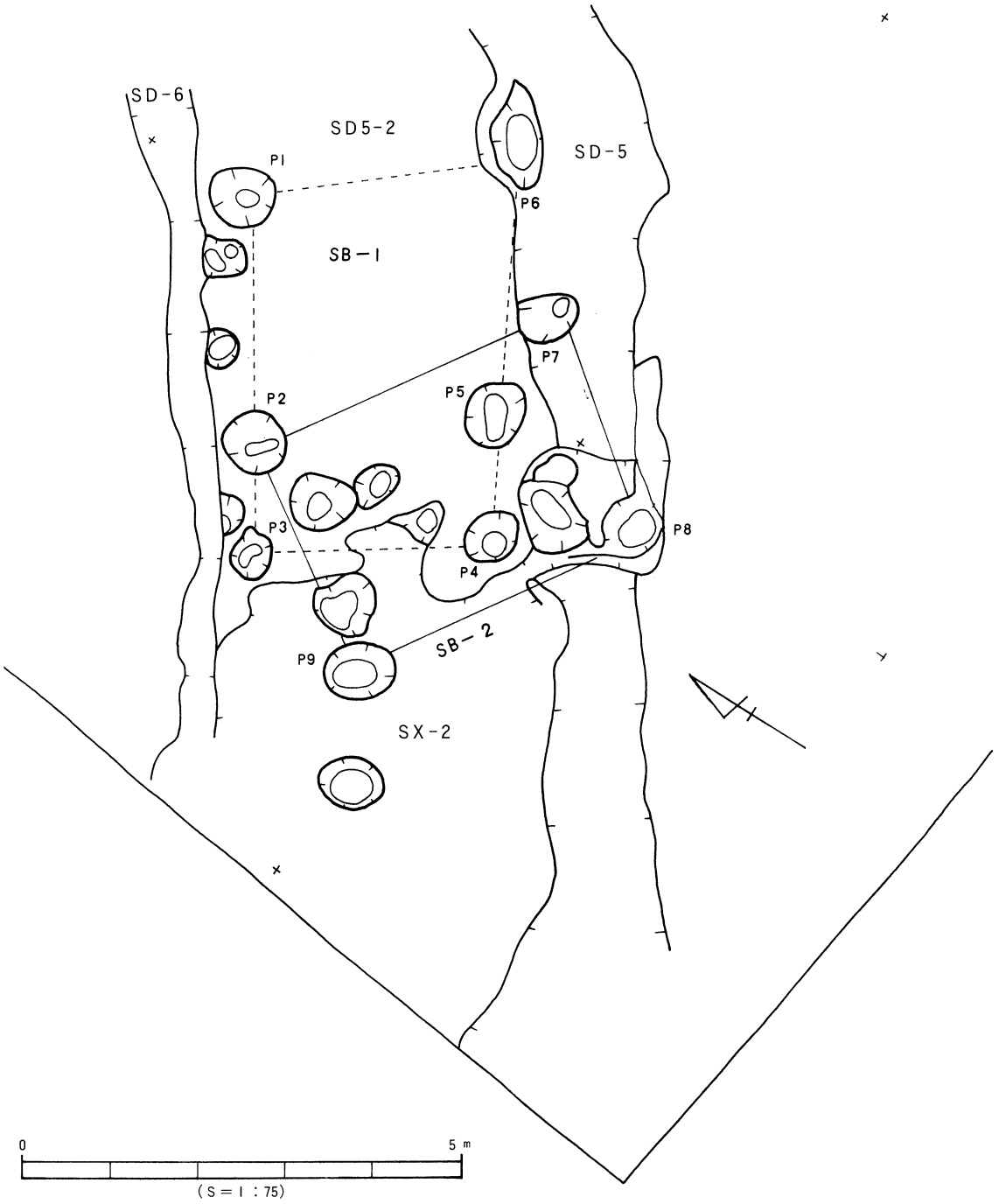


第89図　土壙配置図

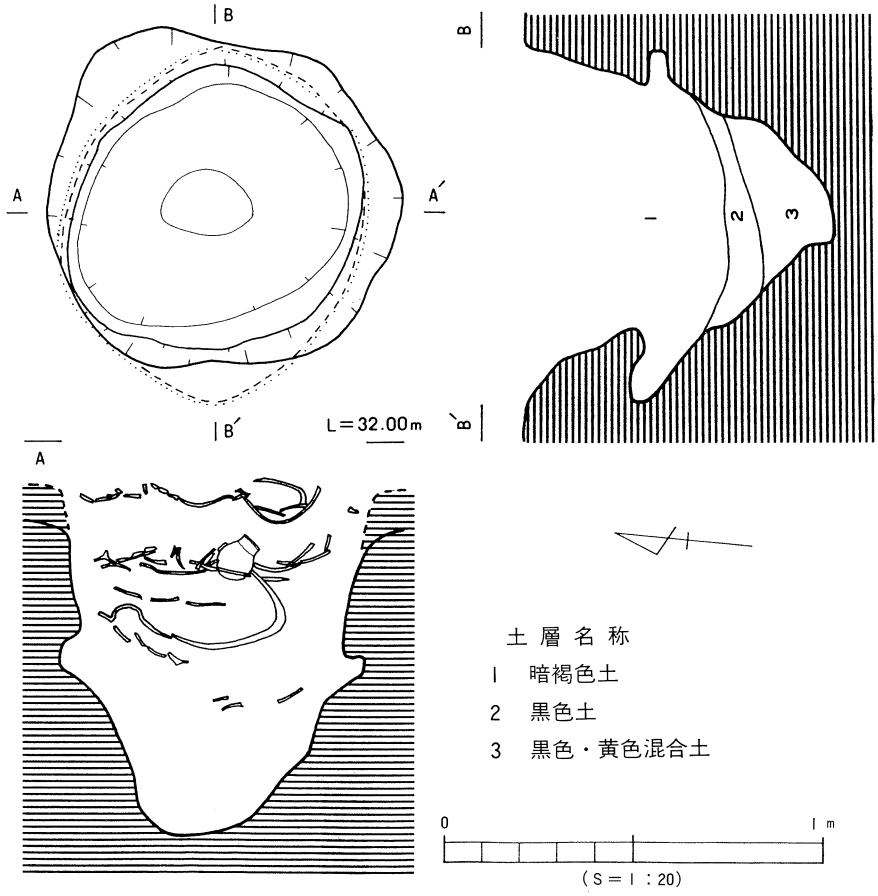
各溝における堆積土を分類すると、1，灰褐色砂質土のＳＤ１～３、２，暗褐色、黒色粘性土のＳＤ６～９、３，暗褐色砂質土のＳＤ４、ＳＤ５－２とＳＤ５の上層部、４，黒色砂質土のＳＤ５下層部の４種に大別される。従って１を弥生時代後期末～古墳時代、２を弥生時代後期後半、３を後期後半、４を後期後葉～古墳時代中期と推定する。遺構・遺物の総合的感知から、弥生時代後期後半～中世13世紀頃までの氾濫遺構とするものである。



第90図　溝状遺構配置図



第91図　掘立柱建物配置図

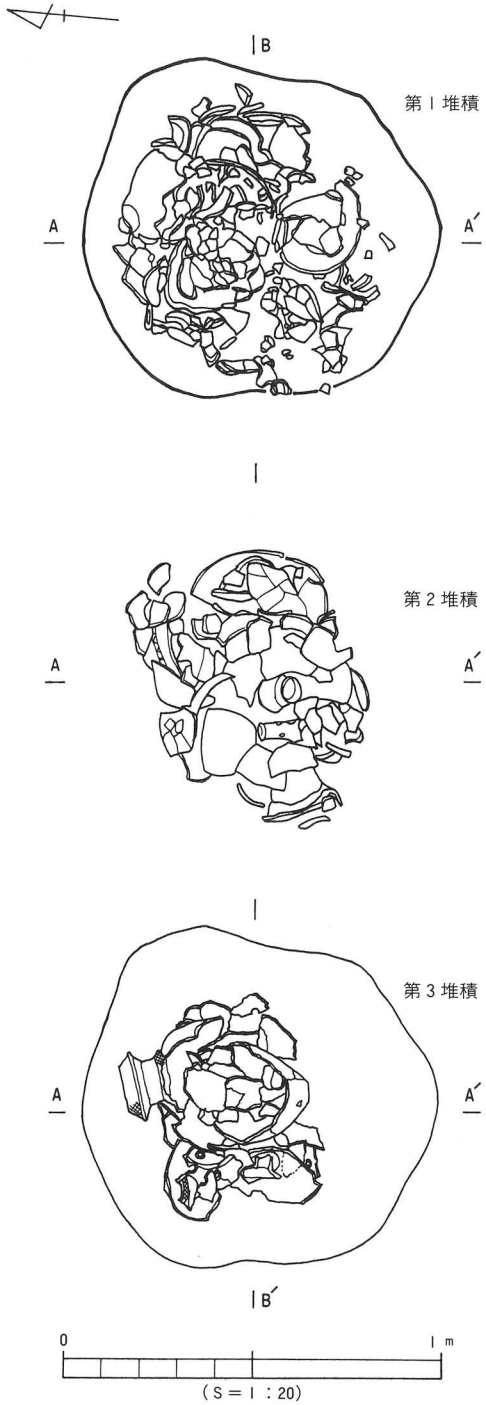


第92図　ＳＫ１ 測 量 図

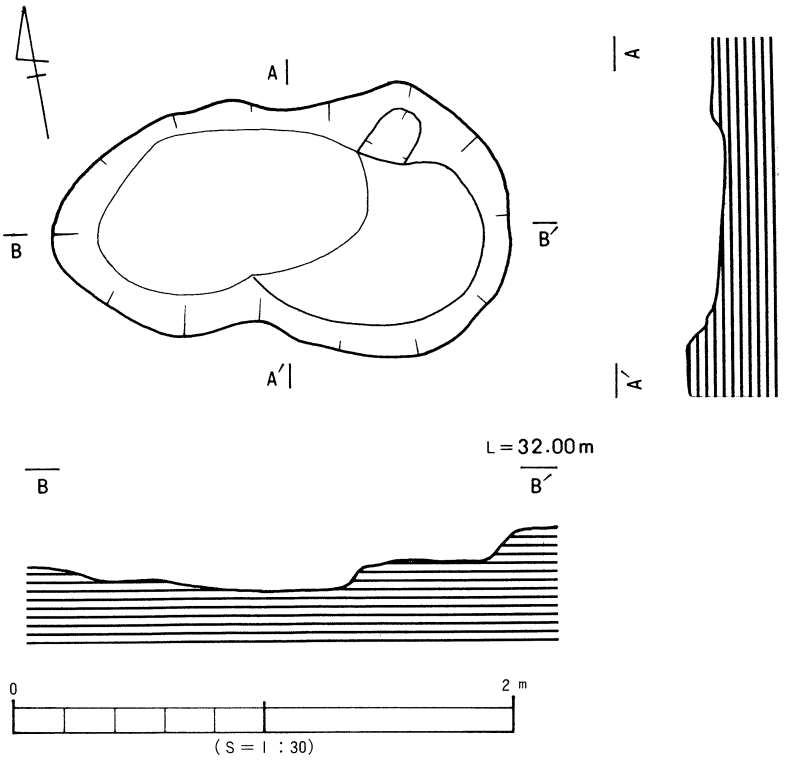
第92図はＳＫ１の平断面図、第93図は堆積する土器の平面図を明示した。

遺構は、平面図でみる限りフラスコ状にみれるが、尖底丸く逆台形を示す。南北95cm、東西が中絞りの85cmのほぼ円形の土壙である。深さ90cmが測られるが、20cmの底あげがされている。壁部中位における有段は、性格不明で再検討が考えられる掘り込み部である。

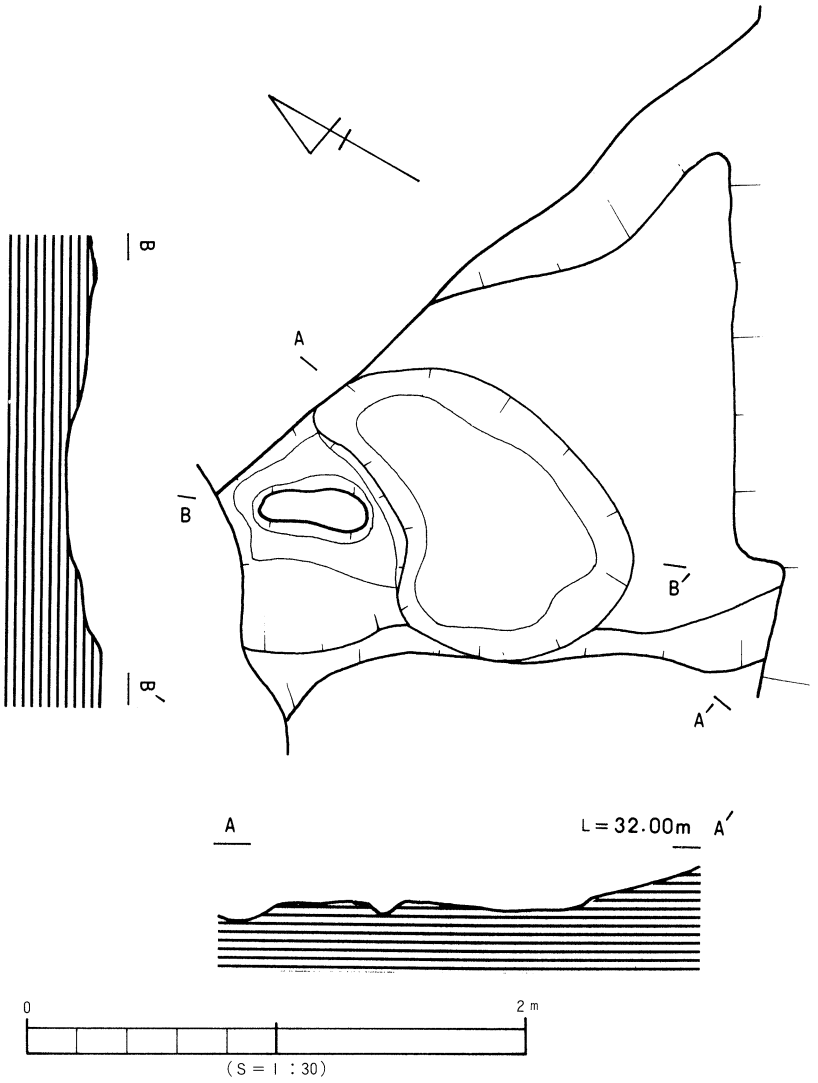
内部の堆積する密度の濃い土器は、第93図に示した。この平面図は出土土器の全てではない間引き図である。出土遺物は第101～109図のものである。図示の断面図上位に破線部分が記入されているが、当初掘り込み面の検出が、遅れた理由によるものである。破線は遺物出土面に相対して記入した。



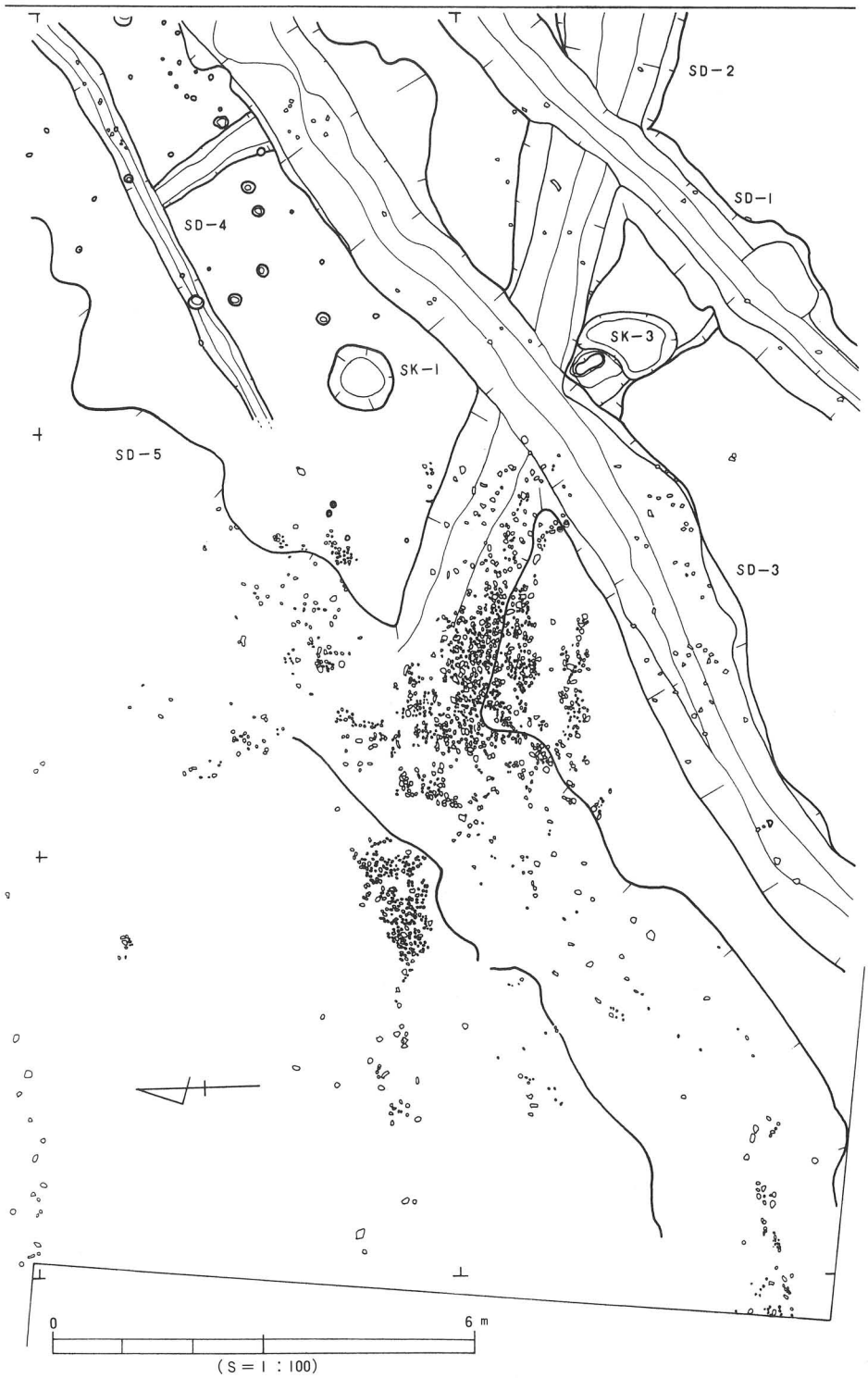
第93図　ＳＫＩ 遺物出土測量図



第94図　ＳＫ２ 測 量 図



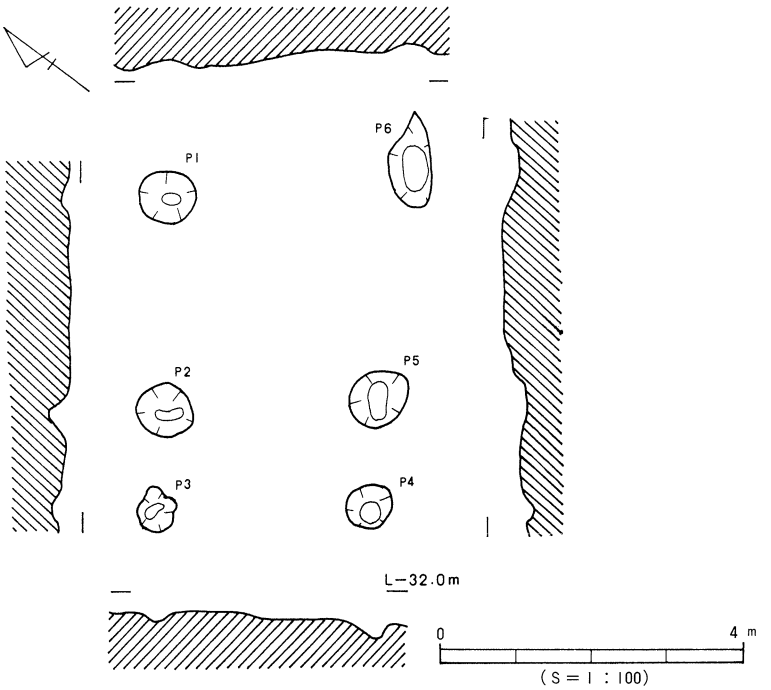
第95図　ＳＫ３ 測 量 図



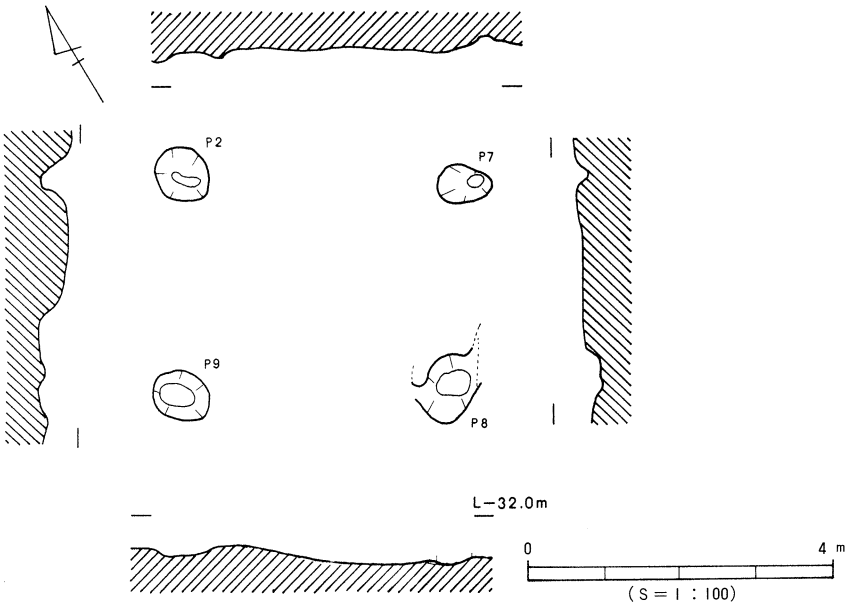
第96図　SD1～4 測量図

第97図　SD7～9 測量図

第98図　ＳＤ５・６ 柱穴群測量図



第99図　SB1 測 量 図



第100図　SB2 測量図

〔2〕遺　物

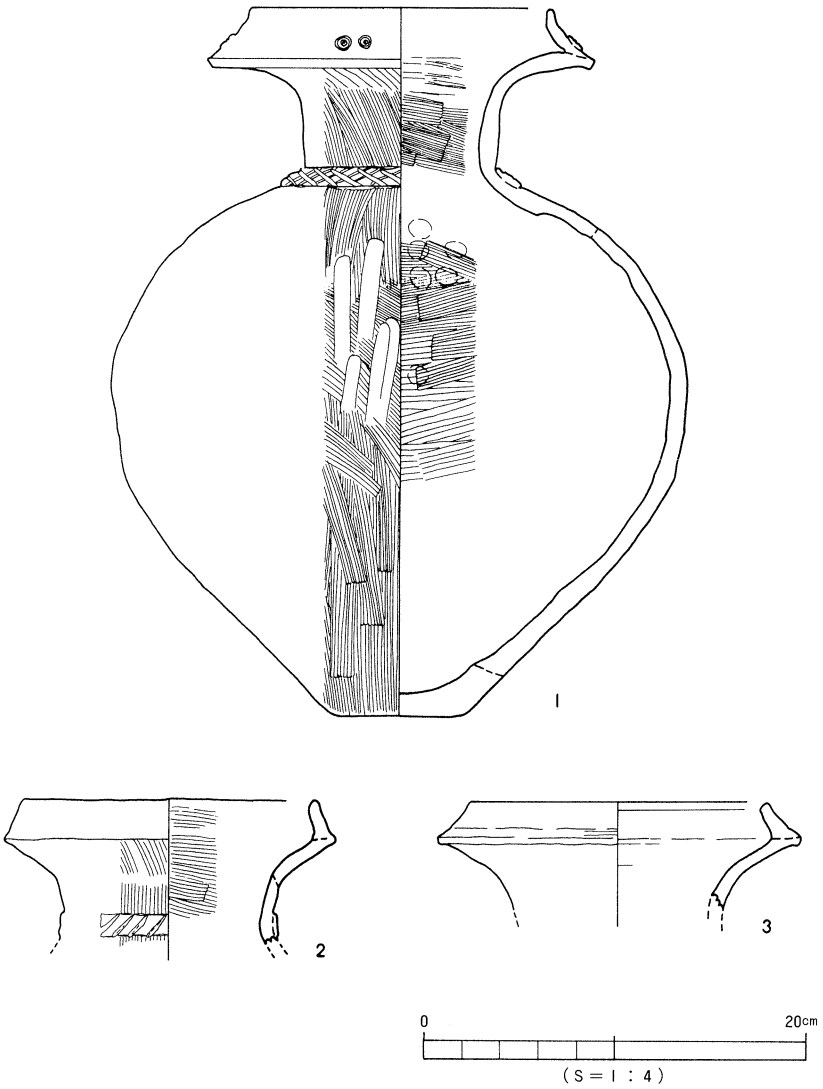
(1)ＳＫ１出土遺物（１～32)

１～３は複合口縁壺である。口縁部の接合は輪積手法によるもので、接合後指撫でが施されている。口唇端部は直立し丸くおさめられている。口辺部には円形浮文を貼り付け、頸部には凸帯が貼り付けられる。凸帯上面には篦押圧による格子目文が刻まれる。内面は横方向、外面は縦方向のあらい刷毛目が施される。一部に篦削り痕が残る。体部は球形でやや締る下面の底面は平底を呈す。２は短形の口縁部が内傾し立ち上がる。接合部は内外面とも粗雑で、特に外面にも指圧痕がみられる。頸部に断面台形の凸帯を付し、斜行文が刻まれている。内外面異方向の刷毛が施される。３と８と同一個体である。口唇端部は内傾し丸く、接合部は肉厚である。接合部外面にはつまみが施される。４は胴長で他の複合口縁壺とは体型を異にする。口唇端部は平たく内外面に凹線がみられ、内面には稜状を作り出している。接合は輪積で接合部内面は、縦方向の指圧痕が明瞭に深くくい込み一巡している。頸部には断面カマボコ型の凸帯を付し、斜格子文が刻まれる。５は長頸化がみられ、口唇部はつまみが施され突出する。内面は横方向に、外面には２㎜巾と４㎜巾の刷毛撫で痕が顕著にみとれる。６は接合部に押圧痕が強くみられ、凹みを呈する。内外面には幅広の刷毛目が施され撫で消しがみられる。７は１より更に球形で、口唇端はにぶく丸みを呈し、内面は鋭角な面をもつ。内傾する口縁部の接合部は丁寧な撫でが施され、入念に仕上がる。頸部凸帯には、篦による斜格子文が刻まれる。内外面とも縦・横・斜めの三方向の刷毛が施されている。球形の器表面は剝離が多くみられ、砂粒が露出し凸凹である。８は前述の３と同一個体で、頸部凸帯が一段と低くみられ削り出し状にみえる。凸帯上面の斜格子目文にも細い櫛目跡がみられる。他の施文と異なりを見せる凸帯である。内面には指押圧痕がみられ、両面共に異走行の刷毛目が施される。器表面は７に似て凹凸面を呈する。

９～11は長頸壺、小型壺である。９はＳＫ１出土品の内、唯一の長頸壺である。口唇面は丸く内傾させ稜をつくる。頸部内面は、外方向に膨らませ胴部との境には指圧調整が施される。口唇端には撫で消しが行われ、器表面１／２上は粗く下は細かく刷毛撫でが施される。色調はやや赤味を帯びる。10は小型壺で直立ぎみの頸部を呈し、口縁端部は外反し広がりをみせる。頸部と胴部の境には４条の沈線を施している。内面下部には篦削りが施され、上部は刷毛撫でが施される。器表面は縦方向の篦磨きが見られる。11は土壙の堆積遺物のうち、最下位で検出した小型壺で１／４の残量である。頸部に３条の沈線が巡る。内面には、指圧痕がみられ、外面肩部より上位は丁寧な撫でが施されている。内面下部は灰白色を呈し、外面は赤褐色を呈する焼成の甘さがみられる壺である。

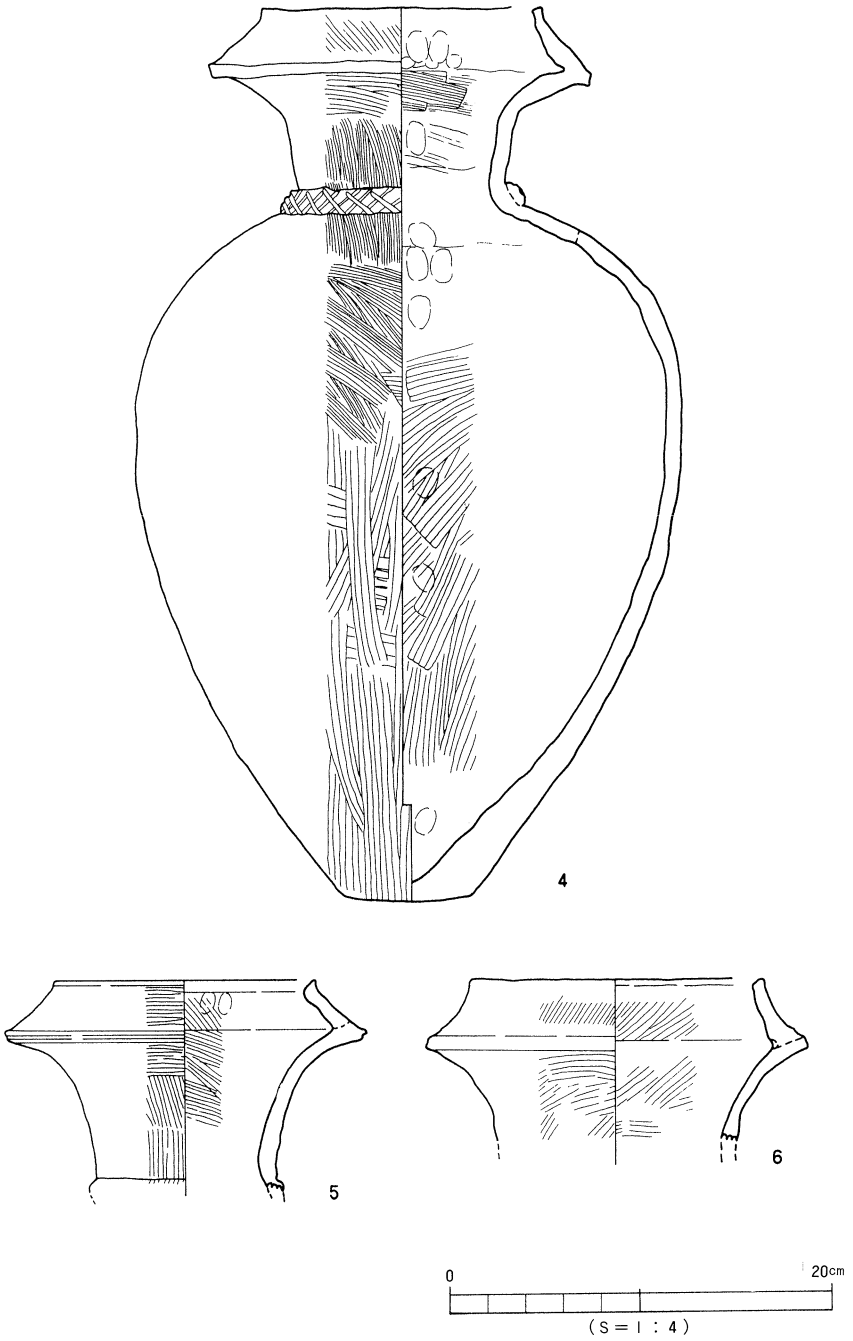
12～16は甕形土器である。14は形態が鉢形にも似る甕形土器である。

12は頸部は直立ぎみに立ち上がり、中位より緩く外反する。口唇端部につまみがみられ、外面に僅かに凹状がみえる。口縁内部はシャープで撫でが施される。外面には一部叩き痕が

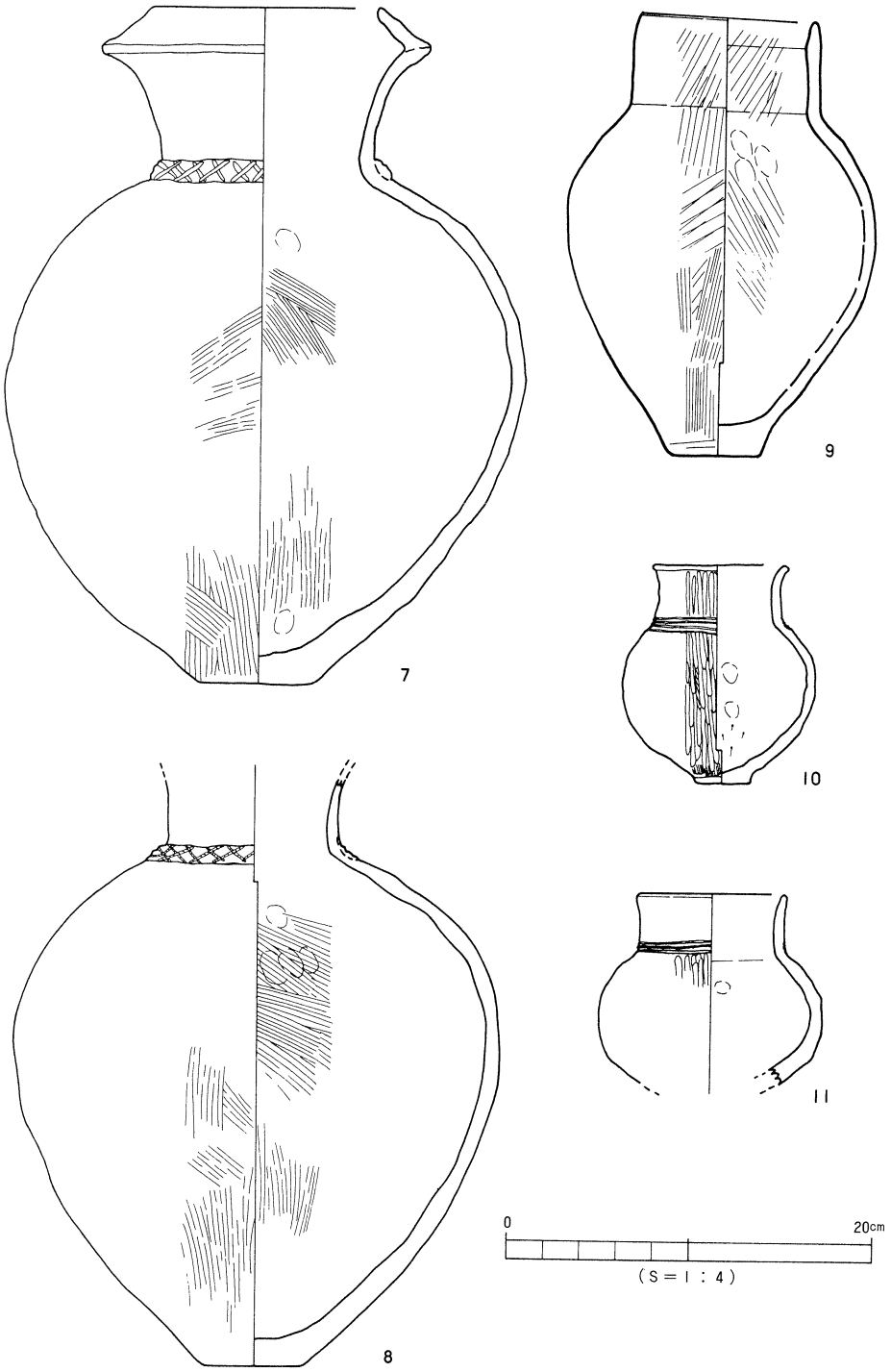


第101図　SK1 出土遺物実測図 (1)

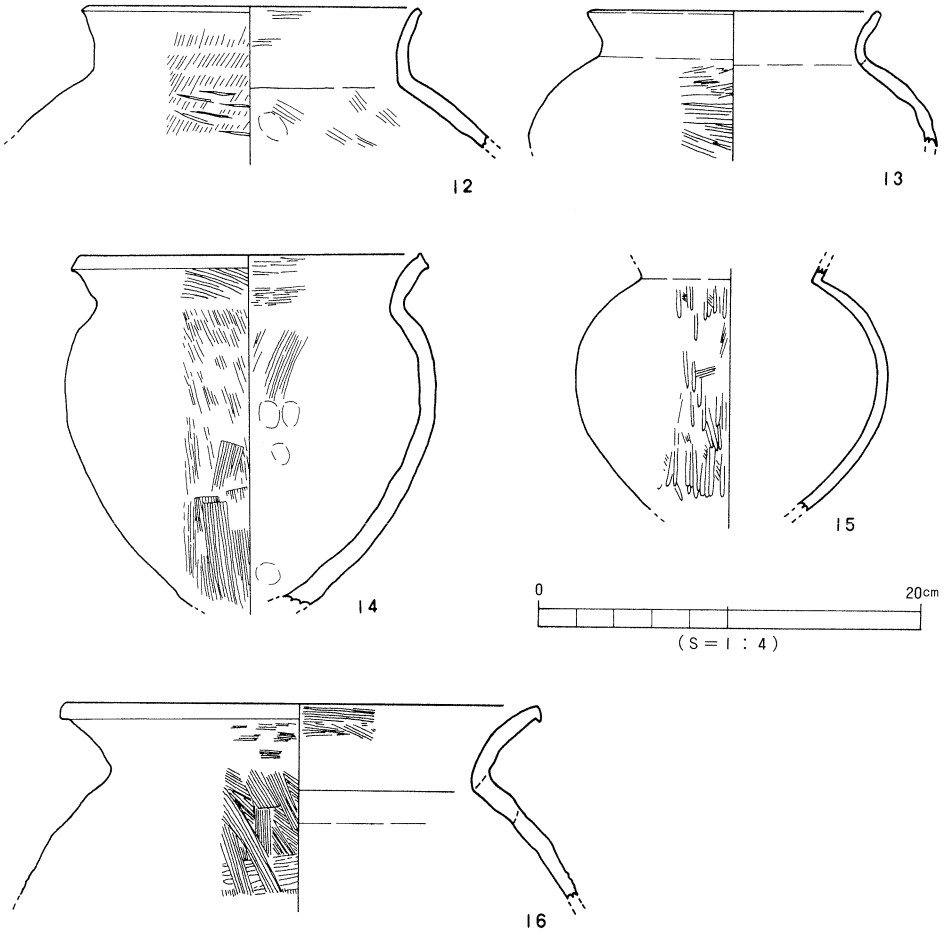
僅かに残る。13は焼成黒斑が多くみられ灰色を呈する。内面には指圧調整痕がみとられ、外面は横方向の刷毛撫でが施される。焼成の甘い口縁である。14は口縁部中位が肥厚し、口唇面両端部につまみが施される。内面は口縁部を横方向に、下部は縦方向に指押圧され、あと刷毛撫でが施される。外面には上から下に向けて撫でが施される。鉢形土器の可能性もある。



第102図　SK1 出土遺物実測図 (2)



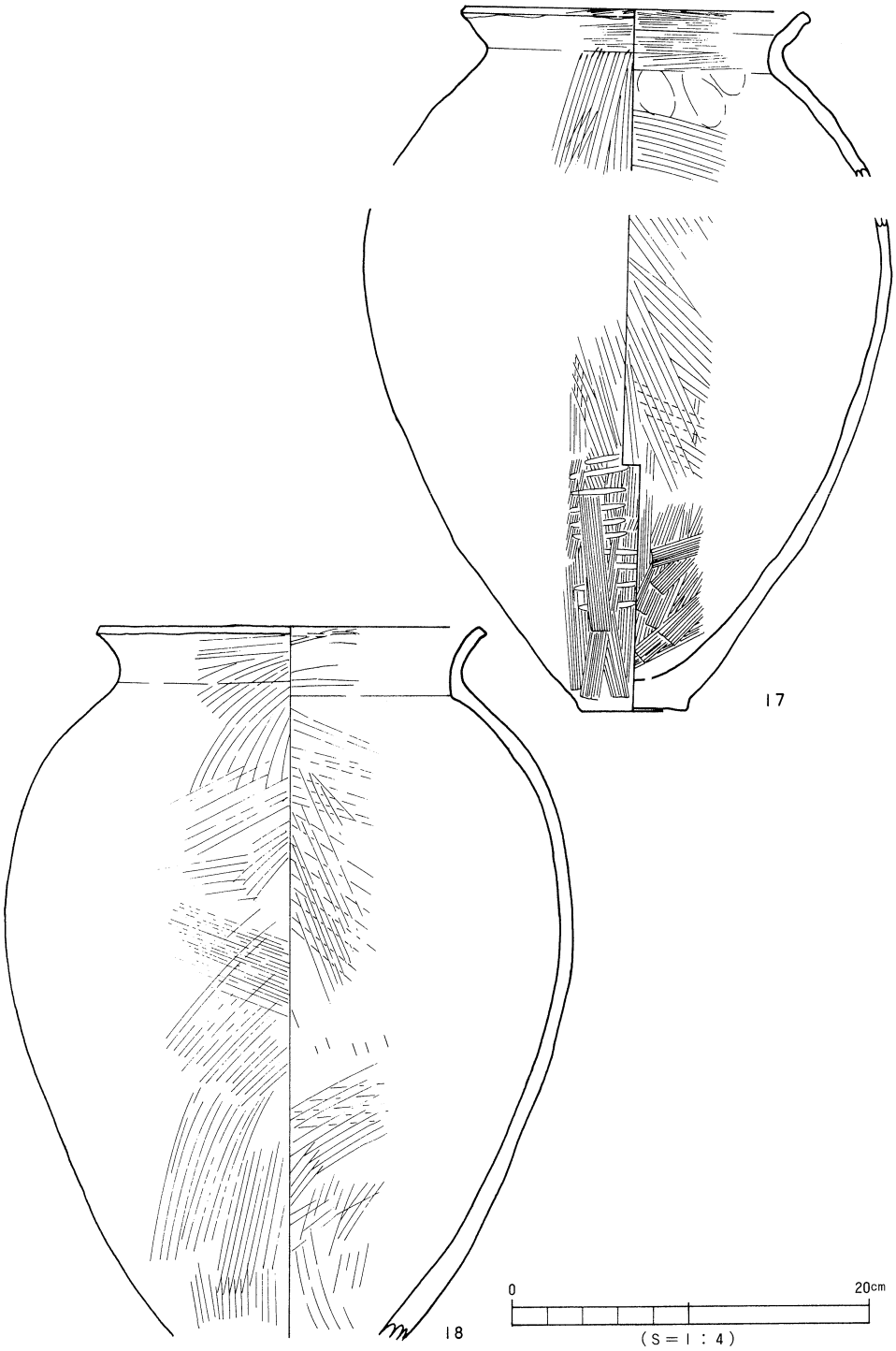
第103図　SKI 出土遺物実測図 (3)



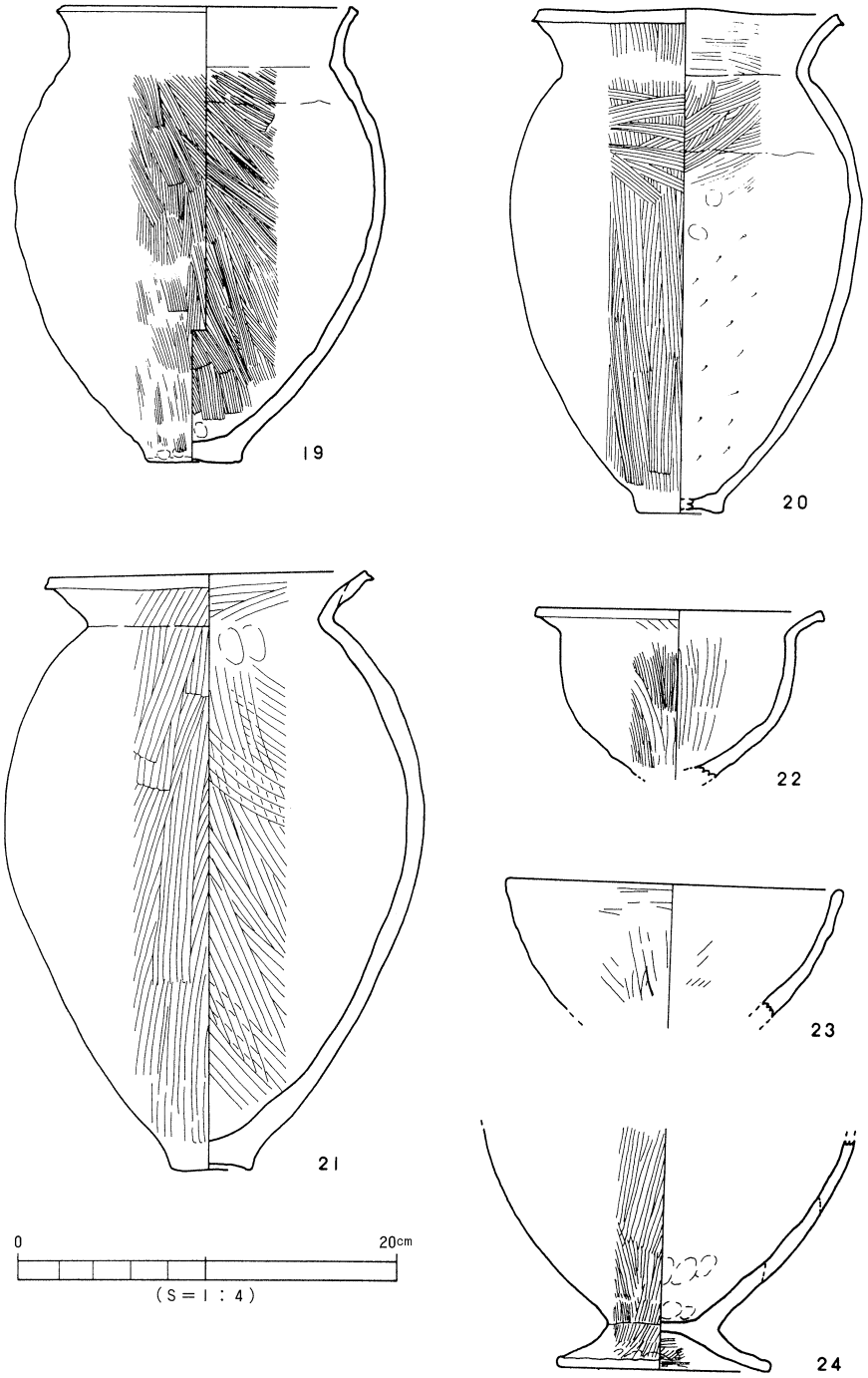
第104図　SK1 出土遺物実測図 (4)

15は口縁部、底部が欠損するもので、器厚は平均し丁寧さがみられる。内面は調整痕がみれず撫で消しが考える。外面は磨きが施され焼成黒斑がみられ、祭祀的要素のみえるものであり壺形土器の可能性も考えられる。16は外反する「く」の字状口縁を呈し、口唇端部を垂下させる。肩部内面には粘土帯の接合部が残り、凹凸面がみられる。粗雑である。

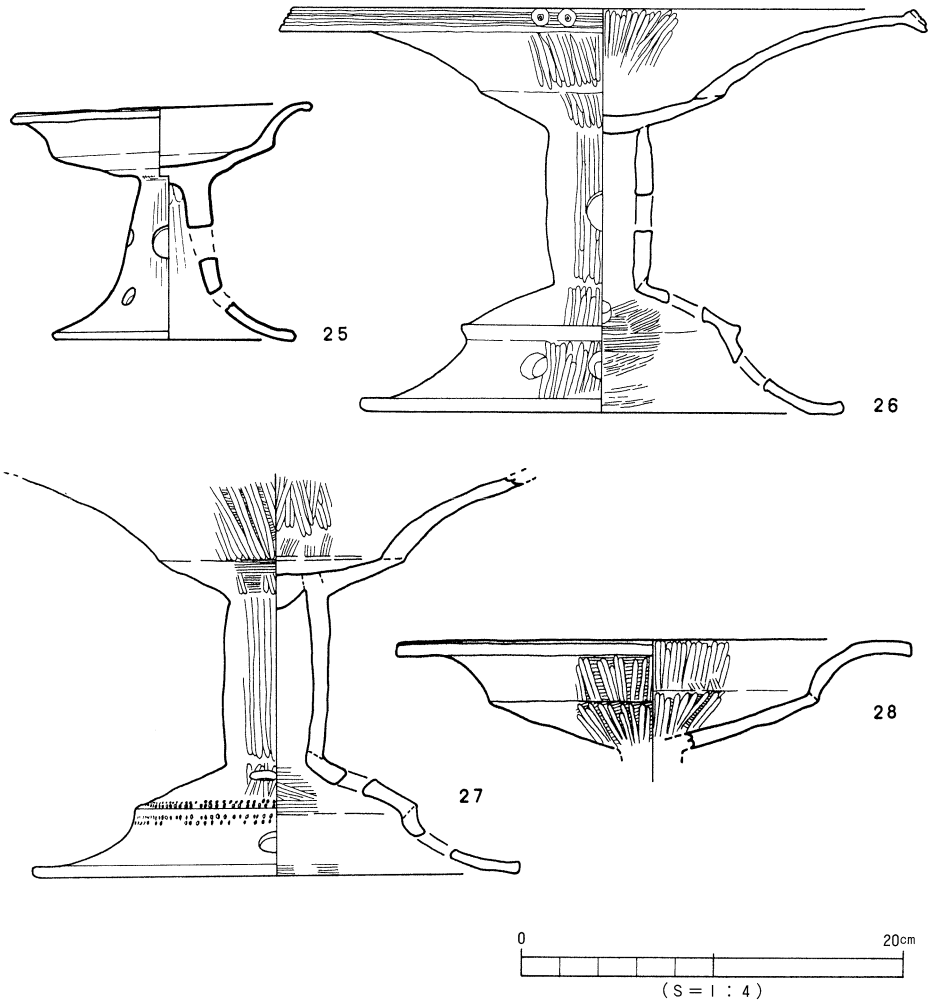
17、18は甕形土器である。最大径が器高の中位に下る傾向がみられる。よって口径が小さく感じられる。右図17の甕は、中間位が接合されないが同一個体である。「く」の字状を呈する口縁部は、肥厚し先端部を垂下させている。内面には異方向の撫でが施され、中間部は撫で消しがみられる。外面底部上には叩き目痕が残る。18は更に胴に膨らみがみられ、器高にも差異がみられる胴長である。両者の器高は40cmと43cmが推定される。18の内外面には撫で消しが施されている。



第105図　SK1 出土遺物実測図 (5)



第106図　SK1 出土遺物実測図 (6)



第107図　SKI 出土遺物実測図 (7)

19・20の甕形土器は、17、18に比して小型といえる。器高も20～30cm以内に納まる。最大径は口径を凌ぎ、20、21の口唇端には、垂下がみられる。19にはツマミ上げがみられる。19、20の内面には、粘土帯の接合に粗雑さがみられ、つなぎ目が稜を呈している。19・20の内面は掻き上げ状に、21は粗く刷毛が施される。20の内面には砂粒がみられ整形の方向が窺える。丸底の底部には上げ底の形骸化がみられる。

22は鉢形土器、23は椀形土器、24は鉢形土器が推定される。22は口唇端面が垂下する。底部は台付も考えられるが、定かでない。23は椀形である。底部は丸底が推定される。24は形態が不明であるが、内傾した直立ぎみの口縁が考えられる。

22の内面には粗い刷毛が施され、外面は刷毛後撫でがみられる。内外面は、下位に焼成黒斑が広くみられる。23は内外面に撫で消しが施されている。24は裾部内面に横方向の刷毛が施され撫で消しがみられる。色調は内面全体に黒色である。外面は縦方向に刷毛撫でが施されている。

25～30は高坏形土器である。形態により分類すると円柱をもたないもの25をＡ類、円柱をもつもの26、27をＢ類に分けられる。28は接合部の状況からＡ類が推定される。25(Ａ)は小型で、口唇端面は粗雑な指撫でがみられる。脚部には２段に径の異なる円孔を穿つ、上段には大小の円孔が交互に５穴が穿たれ同数でない。下段には５穴の小孔が穿たれる。脚部内面上位に絞り痕がみとれるが、全体に粗雑さが目立つ。Ｂ類26は、口唇面に３連の篦描き沈線を巡らし、上面に円形浮文が貼り付けられる。円柱部には円孔を穿ち、屈曲する裾部が接合される。裾部中位に有段状の屈曲部がみられ、屈曲部の上下段面にも円孔が施される。細く外反する口縁部先端には膨らみがみられる。内外面とも篦磨きが施される。Ｂ類27が同形の26と異なる点は、円柱部の穿孔、屈曲部に竹管文による装飾性の２点に差異がみられる。更には屈曲部の形態にも異なりがみられる。28はＡ類が考えられる坏受部の破片である。口縁端部は水平面状を呈し、水平の内端面に稜がみられる。内外面ともに篦磨きが施される。29・30は受部欠損の脚部で、29の脚部には３段に同径の円孔が、上段より３・４・４の比率で穿たれる。脚内面には絞りがみられ、外面には篦磨きが施される。30にも同径の円孔が２段に、上段３、下段４の比率で穿孔される。内面に絞り痕と刷毛目痕がみられ撫でが施される。外面は篦磨きが施される。裾端部に29と差異がみられる脚部である。

31・32は支脚である。鼓形を呈する円筒形で、32は上部を欠損するが31と同形が考えられる。31の完形品の上下端部はつまみが施され、内面両端面には刷毛が施される。中空の内面中位は平滑に撫でられ、絞り痕がみとれない。32は31に比して肉厚で、内面は指撫でが施される。両者の外面には指押圧痕が、斜めに絞り状に顕著にみとれる。

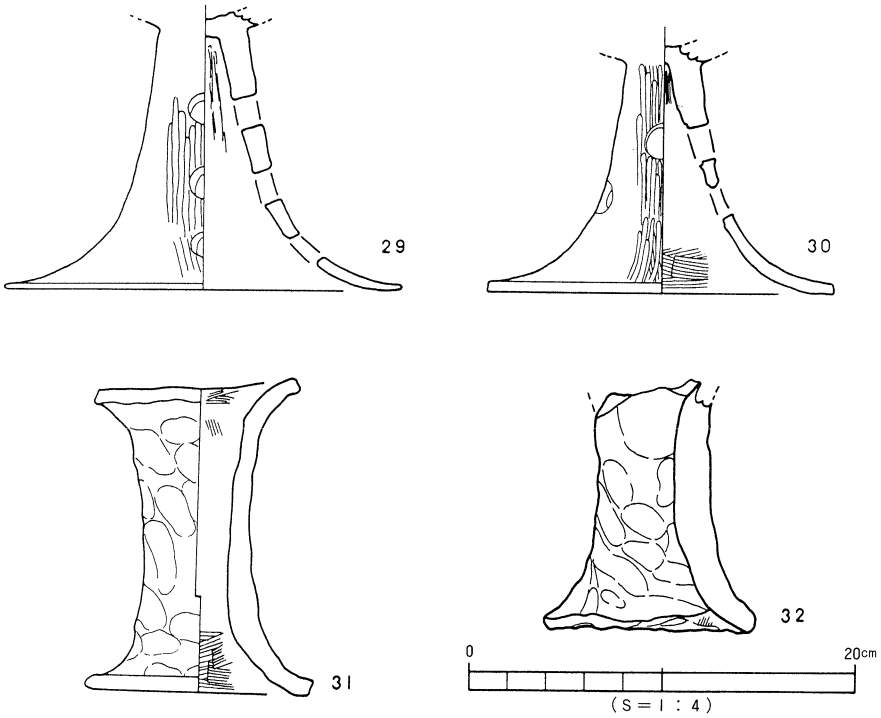
以上32点がＳＫ１における一括遺物で、図示されない破片も出土している。これらの土器には、複合口縁壺の長胴化（４）、鉢形土器に類形する甕形土器(14)、胴張長胴の甕形土器(17・18) 形態の差異がみられる。

複合口縁壺の盛行期、高坏形土器の円柱部の多用化等は、弥生時代後期の特徴が示され、当貯蔵穴の廃棄・埋没時期は弥生第Ⅴ様式第４型式段階（後期中葉から後半）と考えられる。

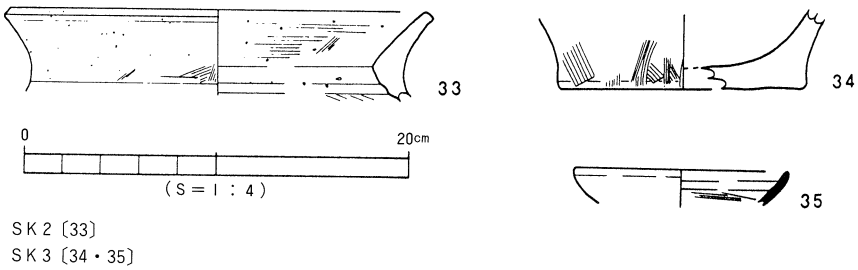
(2)その他のＳＫ出土遺物（33～35）

33～35は、33がＳＫ２、34・35がＳＫ３の図示できる破片である。

33は赤色を呈する壺口縁である。剝離摩耗が著しく調整痕はみとれない。内外面ともに砂粒の露出が著しく、焼成の甘いものである。34は大型の壺底部で内面は刷毛撫でが施される。



第108図　SK1 出土遺物実測図 (8)



第109図　SK2-3 出土遺物実測図

底部平面はシャープさがみられる平底である。外面には縦上向に掻き上げ成形がみられる。

35は灰色を帯びた須恵坏である。

(3)ＳＤ・その他の出土遺物（36～108）

36～108は、ＳＤ・その他の出土である。

36・37・43・45はＳＤ３、38・39・41・46はＳＤ５、40・42はＳＤ２、44はＳ１Ｗ３区の出土の複合口縁壺の破片である。36は肥厚した口縁部に５条の篦描沈線を施し波状文が刻まれる。更に縦２列の棒状浮文が貼られ、浮文上面に指頭圧痕が施される。この棒状浮文は、当平野に出土する楕円形の胴張りの長頸壺の胴部にもみられる。

37～39は口辺部に円形浮文のみられる一群である。37は口唇面はシャープに内面のやや下がった位置に稜がみられる。38の接合部内面には、強い押圧がみとれる。39は広い口径をもち、口縁部内面が肥厚される。40は頸部である。１本の凸帯が２条に分けられる特色がみられる。２条の凸帯には、篦描斜行文が施される。41～44は施文形態を図示した。41・42・44は波状文、43は粗雑な山形文である。波状文は平均して深く刻まれている。41は口径9.5cmの小型である。42は器厚で方形につくられる。43の接合部は垂下させ上面には、凹線１条が巡る。44は接合部がみとれない位入念に仕上げられる。45の頸部凸帯の斜格子文の刻み目には、櫛状の条痕がみられる。46は幅広の凸帯で、刻目も大きく施されている。

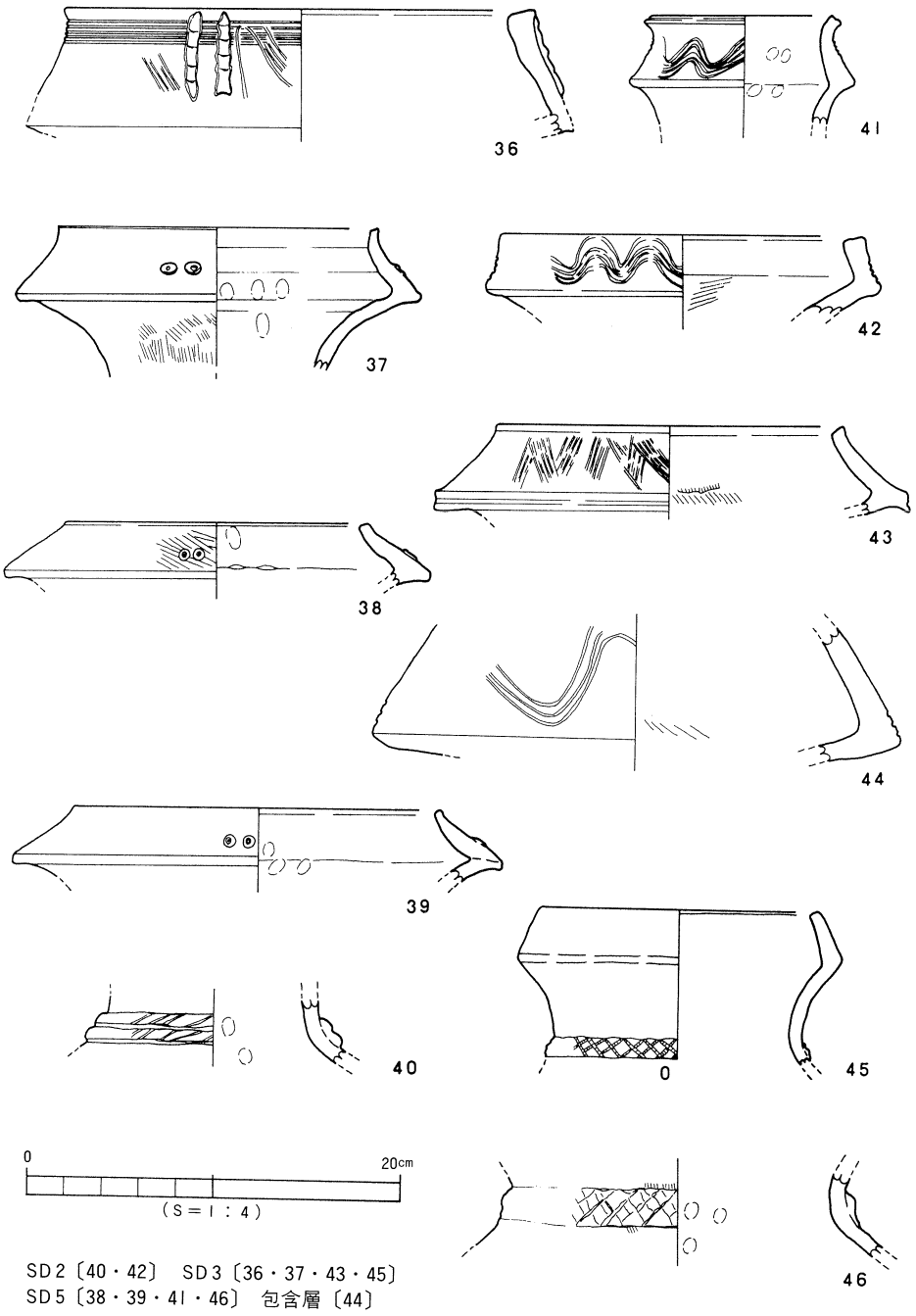
図111は、61をのぞき、壺形土器の、甕形土器の底部である。47～51は壺、57～60は甕である。47は黒斑がみられる。48は中心位に指圧による凹みがみられる。内面にヘラ刺突痕がみられ、横方向に撫でが施される。49の内外面には顕著に指頭痕が残される。50の底面に籾痕状の痕跡が残存する。51の内外面には撫で消しが施され、外面に黒斑がみられる。

52は内外面とも撫で消しが施され、調整痕はみとれないものである。53～55は底部面に、それぞれ異なる篦記号が施されるさらに、53には焼成前の穿孔がみられる甑の底部である。

56は内外面に粗い刷毛目がみられ、底部貼付接合が考えられる器厚の底部である。57～60はあげ底、その形骸化がみられる甕底部である。59は先行形態を示す弥生中期後葉段階が考えられる底部である。61は手ずくね土器で、外面下位には板状工具による叩き痕がみられる。内外面には指押圧後、撫でが施される。

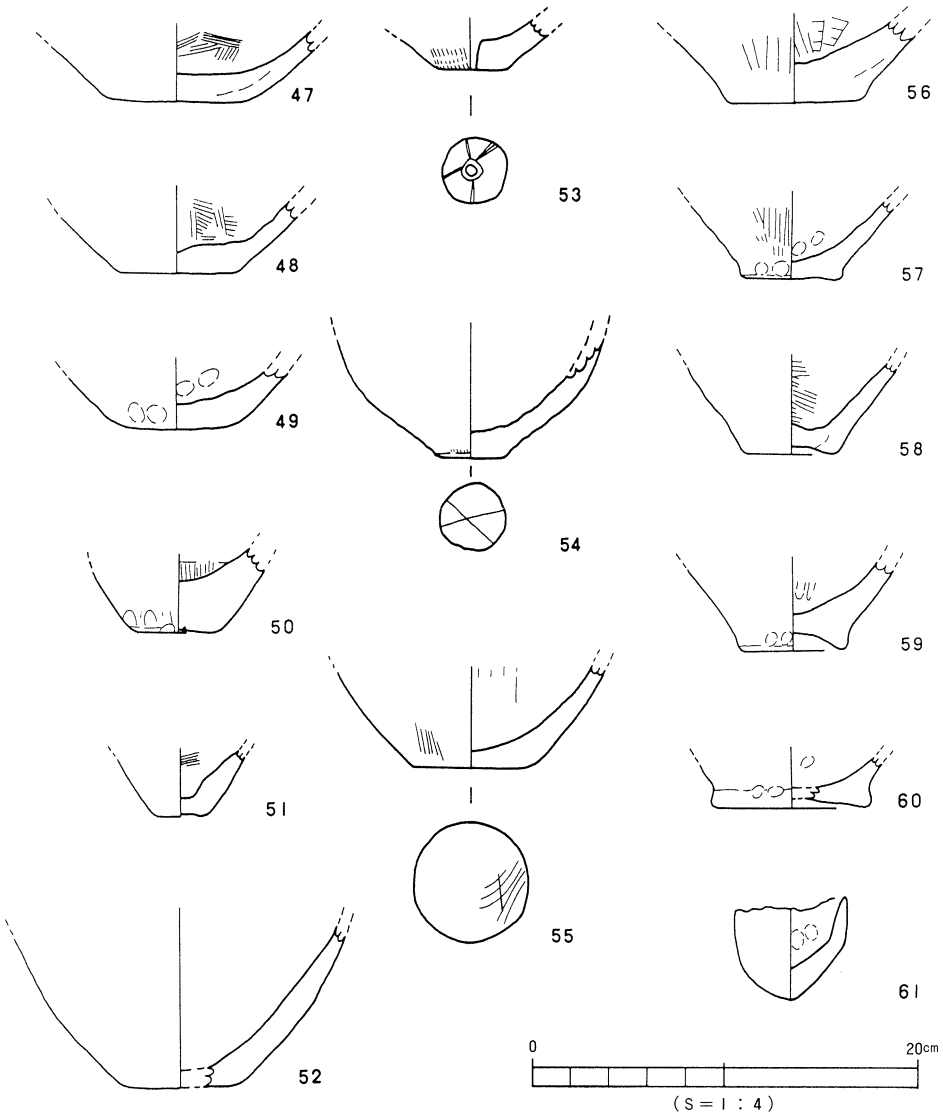
壺形・甕形・椀形・高坏形土器（62～69）

62はＳＤ２、63はＳＤ３、64・68はＳＤ９、65はＳＤ６、66はＳ１Ｗ１区、67・69はＳＤ５の出土である。62は「く」の字口縁をなす甕である。口唇部に凹線が巡り有段状を呈す。63は壺口縁である。口唇部に篦描き沈線を１条、頸部には４条の沈線を２段に施す。色調は茶褐色で、焼成があまい。64は鉢形土器である。口唇にはつまみがみられ、口唇面には２条の凹線を巡らし稜状がつくられる。内面は横方向の撫でが施される。１部には指頭圧痕が残る。65は口唇面に２連の凹線が施される。凹線は不整列で口唇部も粗雑さがみえる鉢口縁である。66は鉢形土器で口唇に稜がみられる。内外面は篦磨きが施される。67は高坏が考えられる。坏部の充塡が顕著にみとれるが粗雑である。篦状による撫でがみられるものである。外面の１部に赤色顔料様が残存する。



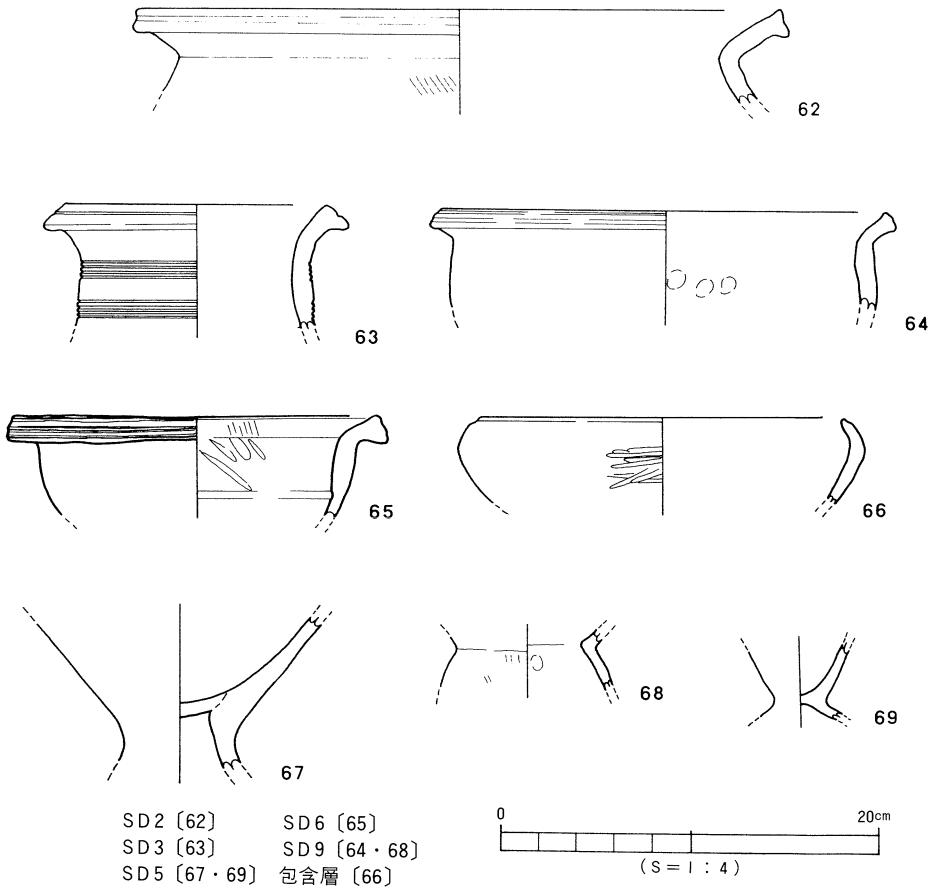
SD2〔40・42〕 SD3〔36・37・43・45〕
SD5〔38・39・41・46〕 包含層〔44〕

第110図　SD2・3・5・包含層 出土遺物実測図



SD2〔47・48・49・54・55・61〕　SD6〔51〕
SD5〔50・52・57・58・60〕　SD7〔56〕
SD9〔53・59〕

第111図　SD2・5・6・7・9 出土遺物実測図

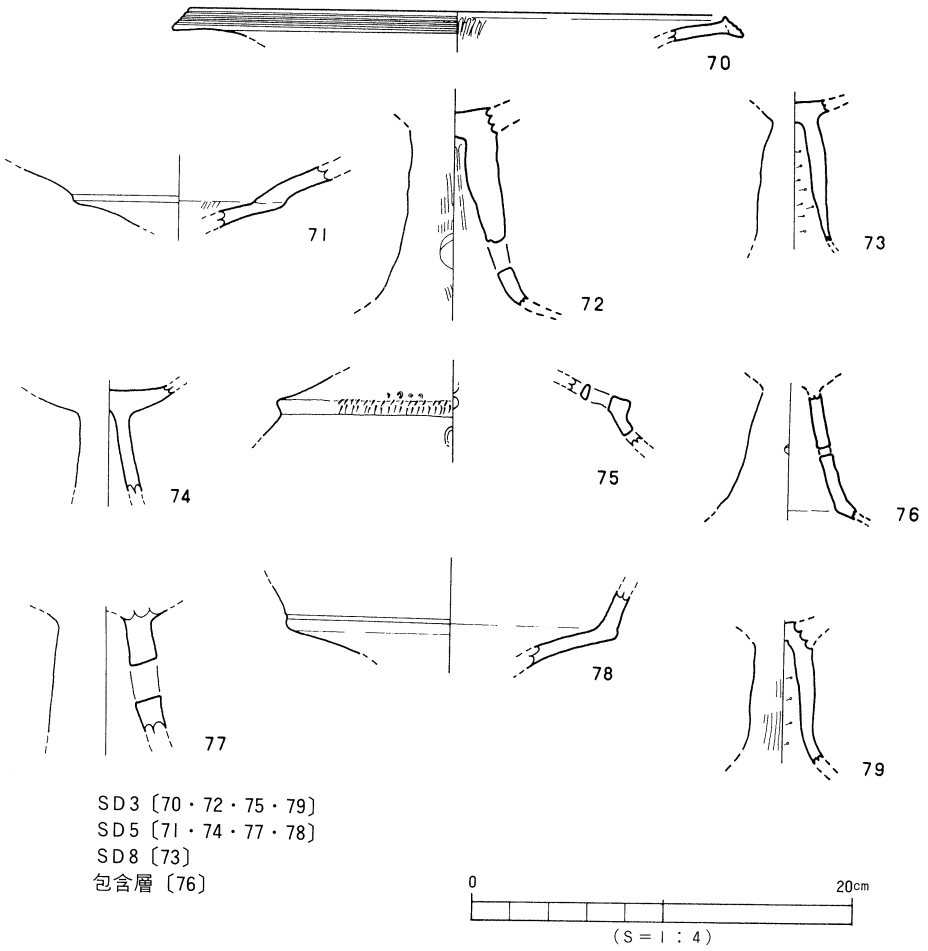


第112図　SD2・3・5・6・9・包含層 出土遺物実測図

68は小型品で、残存量１／４の破片である。内面は指頭撫でがみられる。外面縦方向の刷毛撫でが僅かにみとれる。69は台付小型鉢が考えられる。「ハ」の字に広がる裾部外面には、撫でがみられる。摩耗のため、調整痕などは不明である。

70～79は高坏形土器片である。

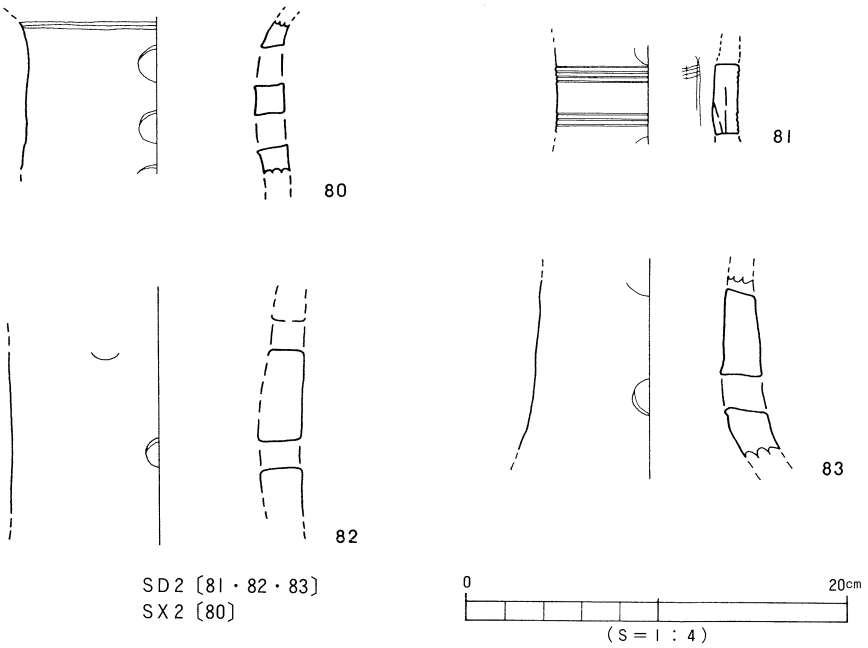
70・72・75・79はＳＤ３、71・74・77・78はＳＤ５、73はＳＤ８、76はＮ１Ｅ１区の出土遺物である。70はＳＫ１出土の26の坏口縁に類似するが、円形浮文がみられないもので、口唇部には４条の沈線がみられる。内面には縦方向に篦磨きが施される。71は坏部の破片である。摩耗によって調整痕などは不明である。72の脚部には中位の下部に４円孔が穿たれる。内面の上部に絞り痕が顕著にみられ、下部には刷毛目が施される。刷毛目は外面にもみとれる。73の脚部は接合部より裾端部に向け、極端に器厚がうすくつくられる。内面には砂粒が



第113図　ＳＤ３・５・８包含層出土遺物実測図

多くみられ、横方向に篦削り痕がみられる。74は赤橙色を呈し、内外面は刷毛撫でが施される。75はＳＫ１出土の27の屈曲部に類似し、篦先による刺突文が２段に、さらに上位には竹管文が刻まれ、円孔もみられるものである。

高坏76の脚部の中位には、口径４㎜の小円孔が２穴巡る。中空の内面には篦削りが施され、外面には刷毛撫でがみられる。77は肥厚する脚部に口径２㎝の円孔が穿たれる。円孔は２段が推定される破片である。内面には指頭撫でがみられる。外面は篦磨き、刷毛撫でがみられる。78は坏部である。口縁接合外面に１連の凹線が巡る。内外面に横走向の刷毛撫でがみられる。79の脚部は中空の内面先端部が極端に狭まる。横走向の篦削り後撫でが施される。外面は刷毛撫でがみられる。



第114図　SD2・SX2 出土遺物実測図

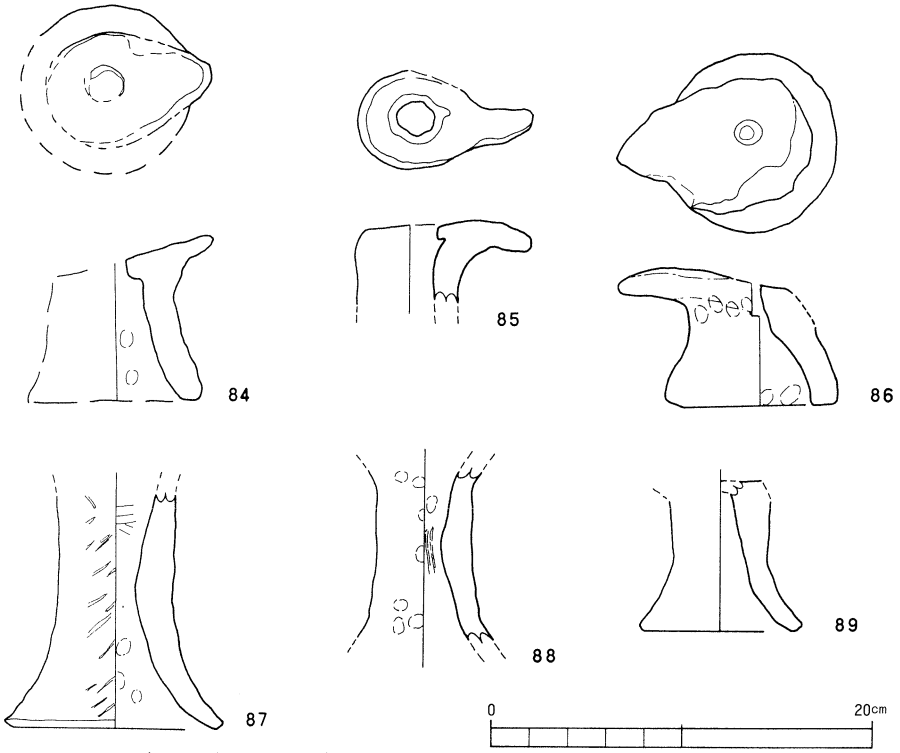
大型器台（80～83）

80は落ち込みＳＸ２、81～83はＳＤ２の出土である。それぞれ破片で上下端部及び器高は不明である。体部に沈線が施される80は、篦磨きが施され仕上げは丁寧である。81～83は胎土も異なり、ザラつきがみられる。赤褐色を呈する器面は磨滅がみられる。

支脚（84～89），土製品（90・91），石製参考品（92）

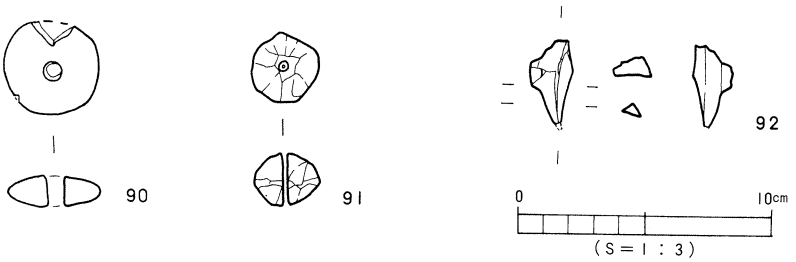
84，89はＳＤ３、85はＮ１Ｗ２区、86はＮ２Ｗ１区、87・88はＳＤ２の出土遺物である。

支脚には台形状と、円筒形がみられ、台形状のものに84～86，89があり，円筒形に87・88がある。台形の上面は平滑につくられ、傾斜角度をもつものもみられる。上面には円孔が中空部に向かい穿たれる。さらに端面より突起する舌状の支え手がつく。85は裾部、89は上面が欠損しているが同形と考える。87，88は円筒で、87の外面には斜行の叩き目痕がみられ、裾端部にはつまみが施される。88には中空内面に絞り痕がみられ、外面に指頭圧痕がみられる。90はＮ２Ｗ２区出土の土製紡錘車である。端面の剝離は後出の完形品である。法量、直径3.3cm、厚み1.3cm、重さ16.9ｇである。黒色を呈する器面中央に、径６㎜の焼成前一方向の円孔が穿たれる。一部に篦削り痕がみとれる。91はＮ１Ｗ１区出土の土玉である。断面形は算盤球状で法量、直径2.6cm、厚み２cm、重さ13.4ｇである。指圧痕がみられ、器表面は凹凸がみられる。92はＮ１Ｅ１区より出土したもので、参考品として図示した。石質はチャートで先端部を欠くが、石錐状を呈する。

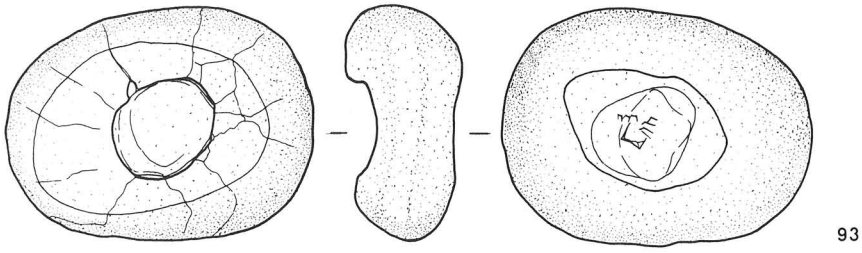


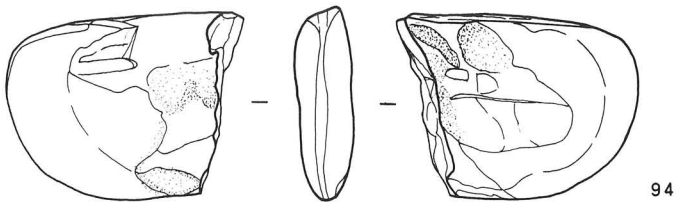
SD2〔87・88〕 包含層〔85・86〕
SD3〔84・89〕

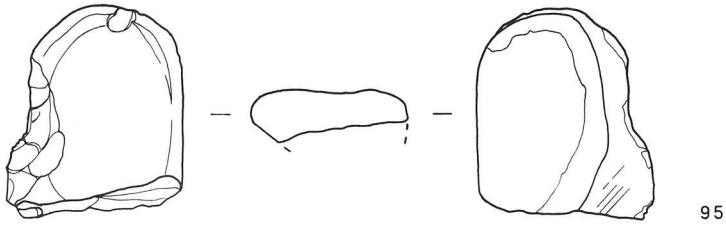
第115図　SD2・3・包含層出土遺物実測図

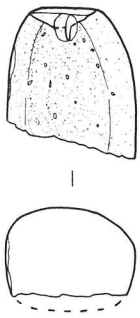


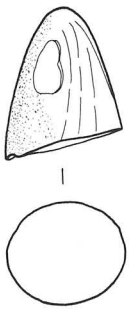
第116図　包含層出土遺物実測図

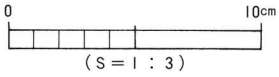












SD5〔94・95〕
包含層〔93・96・97〕

第117図　SD5・包含層 出土遺物実測図

石製品（93～97）

93はＮ１Ｅ１、94，95はＳＤ５、96はＮ２Ｗ２、97はＮ２Ｗ１の出土遺物である。

93は両面使用のもので、表面は擂り鉢用に、裏面は叩き用に使用されたと考えられる。表面中央部には径3.7㎝、深さ１㎝の凹みがみられ、すりつぶし用のものと推定される。凹み周辺部には、楕円に広く研磨されている。裏面はレンズ状の凹みがみられ、使用痕がみられる。石質は凝灰砂岩で亀裂は、打撃によるものと考えられる石器である。94は石斧の折損品である。直線の背部端から、弧を描く外湾部に刃部をもつ。刃部は両面研磨され、刃部先端には傷痕が僅かにみとられる。石質は粘板岩が考えられ暗緑色を呈する。95は砥石である。石質は流紋岩とみられ、使用面は山形が推定され使用面には条痕が残存している。96，97は石斧の折損品で、石質は斑岩質の硬質で両者とも研磨仕上げがみられる。

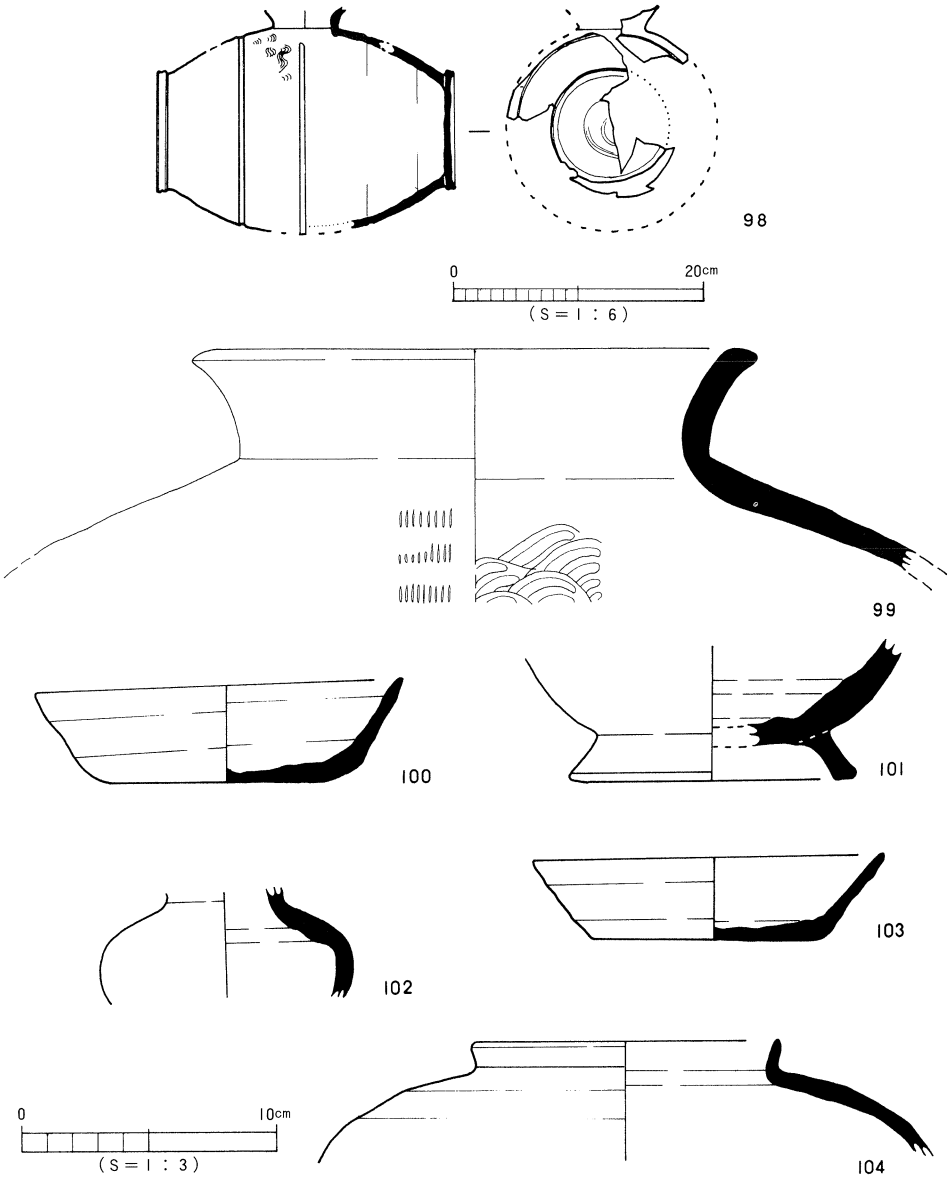
須恵器（98～103），施釉陶磁（104）

98は主にSD５出土の細片と、周辺部出土のものを合わせ復元した。99はSX２、100，103・104はＳＤ５、101はＮＷ区、102はＳＤ３の出土遺物である。98は俵壺とも云われる樽形瓶である。復元範囲において推定計を出し図示した。口縁部は欠除するが、瓶の口縁部が考えられる。体部と頸部の接合は破片により、「Ｌ」の字状にみとれる。体部には、縦方向に３条の凹帯を施し、中央凹帯の左右に櫛描き波状文を縦に帯状に巡らす。文様は左右１条の凹帯に限定される。円孔注口部の破片もあるが、接合困難である。当地域における検出例も少なく、陶邑窯址ＴＫ208出土を類例とした。時期は古墳時代前期５世紀末と考えられる。99は甕口縁の破片である。全体にスリムさが感じられる。内面には同心円文がみられる。外面に平行叩きしめ痕が１部残る。100，103は坏である。口唇端面は丸く細く、真下に稜がみとれる。101は台付椀が考えられる。輪高台の裾端面は丸く、接地面に水平がみられる。102は瓶の破片である。注口部、口縁部、底部が欠損する。内面には粘土帯接合がみられ、６世紀末が考えられる。104は短頸壺である。施釉陶器が考えられ、外面頸部、体部を限界とし体部一面に釉がみられる。

土師器（105～108）

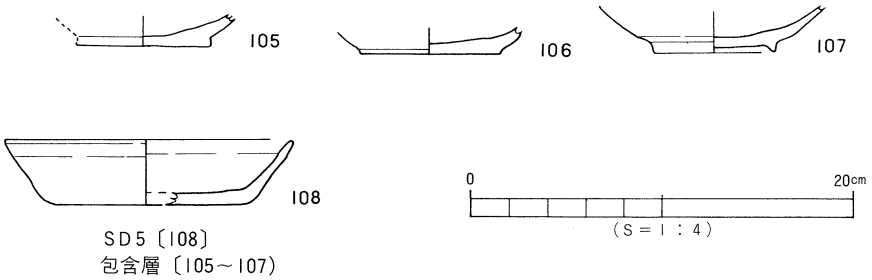
105，107はＳ１Ｗ２区、106はＳ１Ｗ１区、108はＳＤ５の出土遺物である。

105，106，108は坏、107は高台付椀が考えられる。105の底平面には、回転糸切り痕がみられる。他は磨滅が著しく調整痕などはみとれない。糸切り痕のみられるところから、12世紀代のものと考える。



SD3〔102〕 SD5〔98・100・103・104〕 SX2〔99〕 包含層〔101〕

第118図　SD3・5・SX2・包含層 出土遺物実測図



第119図　SD5・包含層 出土遺物実測図

4．小結

今回の調査によって、扇状地における河川氾濫遺構が確認された。更に集落形成に適しない一画があることも判明した。北東扇頂部周辺の樽味遺跡から南西下する扇状地形に呼応するように、各自の集落が北に古く、南に新しく連綿と存続している。南西面に位置するところの桑原遺跡群には弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址の存在が知られ、東本遺跡における祭祀址などは重要性がみられる。この祭祀址の共伴遺物は非常に少ないと報告されている点も特色である。当遺跡における遺物の出土量に示される祭祀的な遺物の検知から、これにまつわる遺構が、近辺のさほど遠くない位置に存在することも裏付けられた。

また当遺跡と近接する桑原小石原遺跡の相対距離や同じ性格のみられる河川遺構の観点からすると、集落形成に不適合な地点、いわゆる度々繰り返される氾濫の流路にあたっていると推測される。つまり谷筋の周辺部に位置していると推定される。然しながら縁辺部における水田址やそれに伴う遺物も今回は検出されていない。これらから当地形の自然的条件の悪さが挙げられる。また当地域における遺跡が示すように、聖域、墓域、集落の政治行政的区画があるとするならば、大溝であるＳＤ５はそれにあてはまる境界的な意味あいをもつものかも知れない。

松山平野（道後平野）は、重信川と石手川の二大河川によって形成された沖積平野であり両河川は度々氾濫を繰り返す荒川とされる。現在の石手川は下流において、天井川と化している。この状況からも氾濫の発生が多くみとられる。

永禄年間（1558年～70年）に灌漑用の堰や流路が、東野、桑原、畑寺（経石山古墳の東にあたる地域）に構築されたと地誌に記述されるところから、少なくともこの時代には利水に苦しんだことがうかがえる。当遺跡の出土遺物の中にも、13世紀前半代の瓦器片もみられるところから、それ以前にも洪水があったことが立証される。洪水被害に直面した桑原田中遺跡は、弥生時代後期から中世に至る氾濫河川遺跡とされる。

小　　結

以上まとまりのない文章に終わったが、筆者の浅学の為であり反省を感じています。多くの問題点の指摘をいただく事を、喜びと致します。今後とも御教示、御指導を厚くお願いする次第であります。終わりに指針をいただいた梅木謙一君に感謝申します。

〔文献〕

愛媛大学埋蔵文化財調査室　1989　『鷹子・樽味遺跡の調査』

古代学協会四国支部　1990　『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』第4回シンポジューム資料

愛媛大学埋蔵文化財調査室　1991　『文京遺跡第10次調査』

平安学園考古学クラブ　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』研究論集第10号

愛媛県史編纂委員会　1982　『愛媛県史　原始古代Ⅰ』

中　野　良　一　1988　「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会

松山市資料集編集委員会　1986　『松山市資料集考古編Ⅱ』

松山市教育委員会　1987　『松山市埋蔵文化財年報Ⅰ』

松山市教育委員会　1989　『松山市埋蔵文化財年報Ⅱ』

松山市教育委員会　1980　『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ－Ⅲ・桑原高井遺跡』

松山市埋蔵文化財センター　1991　『松山大学構内遺跡－第2次調査－』

遺構・遺物一覧　（遺構・遺物一覧：松村 淳）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例）縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表50　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	N1E1－S1E1	舟底状	9.5×1.30×0.35	暗灰色砂質土	弥　生	SD2を切る	弥生後期以降
2	N1E1－N1E1	舟底状	11.4×1.60×0.3～4	青灰色砂	弥　生	SD1・3に切られる	弥生後期
3	N1E1－S1W1	舟底状	17.0×1.50×0.45	灰褐色砂質土	弥生、土師、須恵	SD2を切る	弥生後期以降
4	N1E1－N1W1	皿　状	7.0×0.40×0.06	褐色砂質土		T字形	不明
5	N3E1－N1W2	舟底状	24.0×1.60×0.45	黒色砂質土	弥生、土師、須恵	SD2を吸収	弥生後期
5-2	N3E1－N1W2	レンズ状	17.0×1.20×0.40	暗褐色砂質土	弥生、須恵	SD5と併走	弥生後期
6	N3E1－N1W2	舟底状	19.2×0.60×0.15	黒色土	弥　生	SD9を吸収	弥生後期以降
7	N3W1－N2W3	皿　状	18.5×0.35×0.35	褐色＋黒色土	弥生、土師	SD2を切る	吉墳時代
8	N3W2－N2W3	レンズ状	6.0×0.70×0.13	暗褐色土	弥　生	SD9と合流	弥生後期以降
9	N3W2－N2W1	舟底状	9.0×0.60×0.60	暗褐色＋黄色土	弥生、土師	SD7に切られる	古墳時代

●表51　土壙一覧

土壙(SK)	地　区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	備　考	時　期
1	N1E1	円　形	U字形	0.95×0.85×0.8	暗褐色土	弥生		弥生後期
2	N2W2	楕円形	皿　状	1.85×0.85×0.07	褐色砂質土	弥生	SD9に接する	弥生後期以降
3	S1E1	楕円形	皿　状	1.40×1.20×0.13	褐　色　土	弥生、須恵	SD1～3に囲まれる	弥生後期以降

●表52　ＳＫ１出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	口径(16.0) 器高 37.3 底径 (6.3)	複合口縁。貼付凸帯。 (口)貼付円形浮文。(頸) 断面三角凸帯、斜格子文 平底。	(接合部)粗いハケ (胴下)ハケナデ(丁寧) 上下ハケ指ナデ	(頸)ヨコハケ (肩)指圧痕 板状工具ナデ→指ナデ	石・長(1～3) 良好	黒斑	74
2	壺	口径(15.1) 残高 7.6	複合口縁。 (頸)貼付凸帯、斜行文。	(接合部下)ハケナデ(斜め) (頸)タテハケ	(口)ヨコナデ(立上り)ヨコナデ (接合部)ヨコナデ (接合部下)ヨコナデ	石・長(1～3) 金 良好		
3	壺	口径(15.4) 残高 5.8	複合口縁。 一部上りに、施文状残 るが不明。	磨滅のため不明	(口)ヨコナデ (頸)ヨコナデ	石・長(1～6) 金 良好		
4	壺	口径 14.5 器高 46.5 底径 6.5	複合口縁。 (頸)貼付凸帯、斜格子文。 丸底。	(口)ヨコナデ (頸)ヨコハケ、タテハケ (胴下)叩き→粗いハケ	(口)ヨコナデ (口上)ハケナデ(口中)指圧 (頸)ナデ上げ (頸下)ナデ	石・長(1～3) 良好	黒斑	74
5	壺	口径(13.5) 残高 11.0	複合口縁、貼付凸帯僅残。 接合部凹線１条。 口唇部ツマミ。	(口)ヨコナデ (頸上)ヨコハケ(頸中)斜ハケ (頸下)タテハケ(4本/1cm)	(口唇)ヨコナデ、ハケ (立上り)斜ナデ、指圧痕ハケ (接合部下)斜ハケ(6本/1cm)	石・長(1～2) 良好		
6	壺	口径(15.5) 残高 8.4	複合口縁。 口唇部内傾。	(口)斜ハケ、ヨコナデ (6本/1cm) (頸)ハケ(3本/1cm)	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ(3本/1cm)	石(1～3) 長(1～2) 良	黒斑	
7	壺	口径(12.3) 器高 36.8 底径 6.1	複合口縁。 頸部貼付凸帯、斜格子文。 口唇端部内傾。平底。	(口)磨滅で不明 (胴中)斜ハケ、僅かに残存 (胴下)粗いタテハケ	(口)ヨコナデ (胴中)細かい斜ハケ (胴下)粗いタテハケ	石・長(1～4) 金、多 良好		74
8	壺	底径 5.4 残高 32.0	口唇端部内傾。平底。	磨滅著しい 縦ハケ目残存	(口)ナデ(肩)ハケナデ上げ (胴中)斜ハケ (胴下)タテハケナデ	石・長(1～4) 多 良好	黒斑	74
9	壺 長頸	口径 (9.5) 器高 23.7 底径 5.0	頸部沈線４条。直立、外反。 突出平底。	(口)ナデ消し (胴)粗い斜ハケナデ (底)タテハケナデ	指圧痕 (胴)粗いハケナデ (底)ナデ	石(1～3) 良		75
10	壺 小型	口径 7.2 器高 12.0 底径 2.9	丸底。 頸部 沈線３条。	(立上り)タテナデ→ヘラミガキ (肩下) タテハケ→ヘラミガキ	(立上り)ヨコナデ (肩中)ナデ (肩下)ヘラ削り、指頭圧	石・長(1～3) 良好	黒斑	75
11	壺 小型	口径 (8.0) 残高 10.4	丸底。 頸部 沈線３条。	(頸)３条沈線(ハケ目) 磨滅(ヘラ磨きの様相有)	磨滅 (ナデ仕上げか？)	石・長(1～3) 良好		
12	甕	口径(16.9) 残高 7.2	頸部下位にタタキ目残。 ハケナデ	(口)ナデ (頸)叩き→斜めハケ(6本/1cm)	(口)ヨコナデ (肩)斜ハケナデ	石・長(1～2) 良好	胴部下 欠損	
13	甕	口径(15.1) 残高 7.0	球形。	(立上り)磨滅 (肩)指圧ヨコナデ	磨滅のため不明 指圧痕残	石(1～2) 良	胴部下 欠損	
14	甕	口径(17.7) 残高 19.0	口唇上端突出。最大径が 口径を凌ぐ。	磨滅(立上り)若干斜(横強い) (10本～12本) (肩)若干斜、(肩下)タテ	(口端)ヨコナデ (口下端)ツマミ出し (肩)斜ハケナデ(肩下)ナデ	石・長(1～3) 良好	底部欠損	75
15	壺 (？)	残高 13.0	胴部球形。ヘラ削り。	ヨコナデ (胴)ハケ→磨き	ナデ	石(1～2) 良好	黒斑 口縁、底 部欠損	75
16	甕	口径(24.4) 残高 10.2	口唇端部垂下。「く」の字 状口縁。	(口)ヨコナデ→ヨコハケ(14本/1cm) (立上り)ハケ→ヨコナデ (肩)斜ハケ(肩下)叩き→斜ハケ	(立上り)外面と同じ。 (肩)ハケ→ナデ	砂・多 石・長(1～4) 良	胴部下 欠損	
17	甕	口径(18.6) 器高 40 底径 (6.3)	口唇端部垂下。最大径胴 部⅔位、ヘラ削り痕残。 平底、上部絞り。	(口)ハケナデ (胴)粗ハケ目 叩きしめ	(口)ヨコナデハケ (胴)斜ハケナデ 指圧痕残	石・長(1～3) 良	黒斑	

ＳＫ１出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
18	甕	口径(20.5) 器高 39.5	平底。 胴径が口径を凌ぐ。 最大径が½よりやや上。	⑪ヨコナデ 胴タテ、ヨコナデ 底タテカキ上げ	⑪ナデ消し (口辺)ナデ消し 胴～底タテ、ヨコ、斜、粗ハケ	石・長(1～3) 密 良好	黒斑外 底部欠損	75
19	甕	口径(15.2) 器高 24.2 底径 5.0	平底。上部絞り。肩部粘土巻上げ残。	底ハケ、ナデ	⑪ヨコナデ 立上り ヨコナデ、稜はっきりしている。	石・長(1～2) 良好	黒斑外 煤	76
20	甕	口径(15.6) 器高 26.6 底径 4.4	僅か上げ底状。肩部粘土巻上げ痕残。若干上げ底。上部絞り。	頸タテナデ 肩タテ、ヨコナデ 胴タテ、ハケナデ	⑪ヨコナデ 肩ハケ→ナデ 胴ヘラ削り	石・長(1～3) 金 良好	黒斑 煤	76
21	甕	口径(16.5) 器高 31.7 底径 (4.0)	「く」の字状口縁。若干上げ底、上部絞り。	⑪工具により描きとりハケヨコナデ 胴ハケ、タテナデ 底2cmハケヨコナデ	⑪ハケヨコナデ 肩ハケ、ナデ指圧 胴ハケ斜、タテ、混	石・長(1～3) 良好	煤	76
22	鉢	口径(15.0) 器高 9.0	口縁外反。口唇端ツマミ垂下。底部台付？	細いハケ→粗いハケ	⑪ヨコナデ	石・長(1～3) 良好	黒斑 底部欠損	76
23	椀	口径(17.3) 残高 6.6	器外面凸凹著しい。口唇端部丸みをもつ丸底？	ハケ→一部ナデ	ハケ→(斜め)ナデ	石・長(1～3) 密 良好	黒斑 底部欠損	
24	鉢	底径 11.4 残高 12.0	脚部「ハ」の字状。	タテハケ(4～5本/1cm) 上タテハケ(4～5本/1cm) 下指圧 端ヨコハケ	丁寧なナデ、下部指頭圧	石・粒(2～3) 良好	胴上部 欠損	
25	高坏	口径 15.6 器高 12.3 裾径 12.3	口縁外反。上下２段に径の異なる円孔脚部内面に絞り痕。	⑪ヨコナデ→ヨコ→斜 ⑪下 細かいハケ→ヘラ磨き	外面と同じヘラ磨き痕が多くみられる。	砂粒・金 密 良好		77
26	高坏	口径 32.4 器高 21.3 裾径(25.3)	口唇３条沈線、円形浮文貼付。円柱穿孔。裾部上下段円穿孔。	⑪ヨコナデ ヨコナデ ヘラ研き	立上り 磨滅、下ナデ 上ヘラ磨き	石・長(1～3) 良好		77
27	高坏	口径(32.0) 残高 21.0 裾径(25.6)	屈曲部竹管文、円柱無穴。裾部上下２段円孔。	⑪、裾稜、底 ツマミ出し、ヨコナデ 全体ヘラ磨き	ナデ、ヘラ磨き 口唇欠損	石・長(1～2) 砂粒 良		77
28	高坏 (坏部)	口径(26.8) 残高 5.6	口唇部肉厚、水平。 ラッパ状に開く脚部？	ヘラ磨き	ヘラ磨き	金・密 良好	脚部欠損	
29	高坏 (脚部)	裾径(20.5) 残高 14.1	３段に円孔。(径1.7×3 ×4 ×4) 脚部内面に絞り痕。	ヘラ磨き	絞り痕 タテナデ 裾ヨコナデ	砂(1～2) 良好	坏部欠損	77
30	高坏 (脚部)	裾径(17.9) 残高 13.0	円孔２段交互(径1.9×3 ×4) 脚部内面に絞り痕。	ヘラ磨き、タテ	絞りナデ ヨコナデ	石・長(1～3) 金 良好	坏部欠損	77
31	支脚	口径 10.5 器高 15.7 裾径 12.0	鼓形円筒形。上下端部開く。上下端部開口。下部肉厚。	右下り指圧絞り状 裾部ツマミ	上タテ絞り痕(ヨコナデ) 中タテナデ 下ヨコナデ	石・長(1～2) 金 良好		76
32	支脚	残高 12.7 裾径 10.9	鼓形円筒形。 平均肉厚。	右下り指圧絞り状 裾斜ハケナデ	ヨコナデ 上ハケ→ナデ 先端ヨコナデ	石・長(1～2) 金 良好・粗製	上部欠損	76

●表53　ＳＫ２出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
33	壺 (口縁)	口径(21.3) 口縁高2.8	口縁部、肉厚。 頸部内面、鋭角状。	一部に斜めナデ残る。	一部にハケヨコナデ、斜めナデ残る。	石 (1～3) 不良	口縁部 19×1.0 粘土混る	

●表54　ＳＫ３出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
34	壺 (底部)	底径(12.6) 残高 4.4	平底シャープ	ハケ目	剥離のため不明	石・長(1～2) 良好		77
35	坏	口径(11.4) 残高 1.8	口縁端丸くつくられる。	ザラつき	ヘラ痕 ハケナデ	密 良好	須恵質 底部欠損	

●表55　ＳＤ2・3・5・包含層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
36	壺 (口縁)	口径(25.0) 残高 6.4	複合口縁、５条沈、波状文。棒状凸帯。縦列２条。口唇端部肉厚内傾(若干)。	剥離し、顕著でない。 ㊀磨滅	４段～５段の巾1～1.5のナデ痕	石・長(1～3) 良好	ＳＤ３	78
37	壺 (口縁)	口径(16.0) 残高 7.5	複合口縁、口唇部直立。円形貼付浮文(2ケ横列)	ヨコナデ	㊀ナデ (立上り)３段に分けてナデ	石・長(1～3) 金 良	ＳＤ５	78
38	壺 (口縁)	口径(15.9) 残高 3.3	複合口縁。円形貼付浮文(２ケ横列)	㊀ナデ (接合部)ヨコナデ	㊀ナデ (立上り)ナデ 一部指圧痕	石・長(1～3) 良好	ＳＤ５	78
39	壺 (口縁)	口径(19.5) 残高 3.8	複合口縁。口唇部細く丸い。円形貼付浮文(2ケ横列)。口唇端ツマミ。	(口唇)ヨコナデ (頸)ヨコナデ	㊀タテナデ	石・長(1～2) 良好	ＳＤ５ 頸、胴、底欠損	
40	壺 (頸部)	頸部径(13.0) 残高 3.3	複合口縁？貼付１条を２条に沈線で分離。凸帯斜行文。	ヨコナデ	指ナデ 一部指頸痕、残存。	長 (1～3) 石 (1～2) 良好	ＳＤ２ 頸、口、胴欠損	
41	壺 (口縁)	口径 (9.2) 残高 5.8	複合口縁。口径せまい。口唇部１条凹線稜をもつ波状文(５連)。	㊀ヨコナデ (他)ヨコナデ (口端)つまみ出し状	ナデ 一部に指圧	石・長(1～2) 金 良	口径小型 ＳＤ５	78
42	壺 (口縁)	口径 (9.2) 残高 3.5	複合口縁。４条波状文。口唇部肉厚方形状。	(接合部上)磨滅不明 (接合部下)ヨコナデ	㊀ヨコナデ (接合部上)ヨコナデ (接合部下)ヨコナデ	石・長(1～2) 良好	ＳＤ２	
43	壺 (口縁)	口径(18.5) 残高 4.7	複合口縁。不整山形文。接合部外面１条凹線下垂。口唇端ツマミ出し。	ナデ？	ハケナデアゲ	石・長(1～3) 良好	ＳＤ３ 口縁以外欠損	78
44	壺 (口縁)	口径(19.5) 残高 7.3	３条に大きく波状文が刻まれる。接合部は判別不明。入念仕上げ。口縁立上り内湾。	磨滅のため不明	一部に斜めハケ目残存。	石・長(1～3) 良好	S1W3	78
45	壺 (口縁)	口径(14.6) 残高 8.0	貼付凸帯文(斜格子文)、斜格子文刻み目にハケ目痕が残る。口縁立上接合部不明。口縁内傾直立状。	㊀ヨコナデ 磨滅著しく不明 一部にヨコナデ痕残存。	磨滅著しい 一部にヨコナデ痕残	石・長(4) 金 良	ＳＤ３	

●表56　ＳＤ2・5・6・7・9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土焼成	備考	図版
46	壺 (頸部)	頸巾径(19.0) 残高　4.0	複合口縁 幅広の貼付凸帯（斜格子文）	凸帯貼付後タテナデ	指ナデ 一部指頭痕	石(1～4) 長(1～5) 良	ＳＤ5	
47	壺 (底部)	底径 (6.8) 残高　3.6	平底 ゆるく外反し立上る。 内面、外面に充塡がみられる。	ナデ	底面ハケボデ斜め ㊤ハケ(7本/1cm) ヨコナデ	石・長(1～3) 金 良好	底部 黒斑 ＳＤ2	
48	壺 (底部)	底径 (5.8) 残高　3.6	平底、体部立上り器薄 着地部は、ナデ仕上げ 中央部外に向い傾斜	ナデ	ハケ(5本/1cm) タテ、ヨコ	石・長(1～2) 良好	底部 ＳＤ2	
49	壺 (底部)	底径 (4.9) 残高　2.6	丸底、底端部が丸く仕上がる。	㊣指ナデ (立上り) 1cmまで指圧痕 ㊞磨滅のため不明	指ナデ 一部に指圧痕残	石・長(1～2) 良	底部 ＳＤ2	
50	壺 (底部)	底径　4.0 底厚　2.6 残高　4.5	平底、肉厚若干上げ底状 底部平面に籾痕状		粗ハケ	良	底部 ＳＤ5	
51	小型 壺 (底部)	底径 (2.4) 残高　3.6	小型丸底	磨滅のため不明	ナデ上げ 一部にヨコナデ痕 指圧痕	石・長(1～3) 良好	底部 黒斑 ＳＤ6	
52	壺 (底部)	底径 (5.4) 残高　8.3	平底	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石(1～3) 長・金(1～6) 良好	鉢形 ＳＤ５	
53	甑 ?	底径　3.4 残高　2.6	平底、底面×字ヘラ記号 底部中央に円孔 焼成後穿孔	裾立上り斜めハケ	ナデ	石・長(1～3) 良好	穿孔は 焼成後 黒斑 ＳＤ９	78
54	椀 (底部)	底径　3.5 残高　5.8	平底、底面×字ヘラ記号 底端面上部絞り	磨滅のため不明 一部にハケ痕	磨滅のため不明 凹凸大	石・長(1～3) 良好	鉢形 ＳＤ２	78
55	壺 (底部)	底径　6.0 残高　5.2	平底の底面に直線のヘラ記号	タテナデ	ナデ 一部ハケ目残	石(1～5) 良	黒斑 ＳＤ2	
56	壺 (底部)	底径 (7.0) 残高　3.8	平底 大型の壺が推定される。 内、外部充塡状	(底立上り) 1cm指ナデ ㊤タテハケ(2本/1cm)	ハケタテヨコナデ (4本/1.4cm)	長(1～4) 石(1～3) 良	ＳＤ7	
57	甕 (底部)	底径 (5.2) 残高　3.9	平底、上部絞り	㊣ナデ(立上り) 1cmまで指圧 ハケでヨコナデ、1cm上からタテハケ(4本/1cm)	板状と指ナデ併用 一部に指圧痕	石・長(1～3) 金 良好	底部 ＳＤ5	
58	甕 (底部)	底径 (5.0) 残高　4.8	若干上げ底状 底部内面中心部肉厚	磨滅のため不明	ハケヨコナデ	石・長(1～4) 良好	底部 ＳＤ5	
59	甕 (底部)	底径(5.25) 残高　4.5	上げ底、底端部突出	ツマミ出し→ヨコナデ	ナデ上げ、ヘラ痕一部残 指圧、ナデ	長(1～4) 石(1～7) 良好	底部 黒斑 ＳＤ9	
60	鉢 (底部)	底径 (7.6) 残高　2.4	若干上げ底	(立上り)ナデ 指圧痕残	剝離にて不明 一部指圧痕残	石・長(1～3) 良好	底部 ＳＤ5	
61	椀 テズクネ (完形)	器高　5.3 口径　6.6	尖底 板状工具によるタタキしめ口縁先端細く尖り状	指ナデ	ナデ、指圧痕残	密 良好	完形 黒斑 ＳＤ2	78
62	甕 (口縁)	口径(33.3) 残高　5.8	口唇面凹線１条 端面垂下	口上、下ツマミ出し ヨコナデ 粗いハケ	ヨコナデ ナデ	石・長(1～2) 良好	口縁部 ＳＤ2	

●表57　SD3・5・6・8・9・包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
63	壺 (口縁)	口径(18.6) 残高 6.5	口唇面1条凹線 頸部中段4条沈線 頸部下段4条沈線	口—ヨコナデ 磨滅のため不明	ナデ	石・長(1～4) 良好	SD3	78
64	鉢 (口縁)	口径(23.0) 残高 5.1	口唇面2条凹線 器肉均等がみられる。	口真下—ヨコナデ 口下—磨滅 口端—上下つまみ出し状	ヨコナデ、指ナデ 指ナデに凹凸有 一部指頭痕	石(1～5) 長(1～7) 良	口縁部 SD9	
65	鉢 (口縁)	口径(18.6) 残高 5.4	口唇面凹線2条 口縁肉厚外形段状		ハケ、ナデ、ヘラ	石・長(1) 良	口縁部 斑点 SD6	
66	鉢 (口縁)	口径(19.0) 残高 4.5	口唇端に稜をもち有段状	口外—稜 ヘラ磨き	ヨコナデ 口—ツマミ出し	石・長(1大) 密 良好	口縁部 S1W1	
67	高坏 (脚部)	残高 8.0	坏部の充填が顕著高台である。	磨滅のため不明	ナデ 底—ナデ 台と底部の接合あり	石・長(1～5) 金 良好	口縁底部 欠損 SD5	78
68	小型品	頸径 (7.1) 残高 4.5	小型壺	ハケヨコナデ (5本／1cm) 磨滅多し	上—ヨコナデ 一部指頭痕	長(1～2) 石(1～2) 良	小型、頸部口、胴、底 欠損 SD9	
69	台型鉢	残高 4.0	「ハ」の字高台	一部にナデ痕残	磨滅	石・長(1～2) 多 良好	口、底端 欠損 SD5	
70	高坏 (口縁)	口径(27.6)	口唇面貼付4条沈線ヘラ磨きが施される。	ヨコナデ 口上.下—ツマミ出し	一部にタテヘラ痕残	金・密 良好	口縁部 口唇以外 欠損 SD3	
71	高坏 (坏部)	残高 3.3	坏部屈曲部絞り器肉平均化。	磨滅のため不明	磨滅のため不明 接合部不明	石・長(1～2.5) 良好	受部 口縁、脚、底部欠損 SD5	
72	高坏 (脚部)	残高 10.2	円形穿孔1段ハの字開く裾部。	指圧痕あり→ハケ→ナデ	絞り痕ナデ(上)	石・長(1～3) 良好	脚部 SD3	79
73	高坏 (脚部)	残高 7.5	裾端部は非常に薄い。内面砂粒がみられる。(左回転)	接合部—ヨコナデ 下—ナデ	皿—ナデ 脚—ヘラ削り、回転	密 良好	脚部 SD8	79
74	高坏 (脚部)	残高 5.5	中空部先端尖り状	磨滅のため不明	脚—タテナデ 絞りみられない	石・長(1～3) 粒	坏、裾 欠損 SD5	
75	高坏 (屈曲部)	残高 3.0 屈曲部径(18.0)	屈曲部に3条の竹管文とヘラ刺突文が刻まれる。	磨滅のため不明 ヨコナデ一部に認められる。	稜より下→裾—粗いヨコナデ 上—ミガキ	石・長(2.5) 砂粒 良好	裾部 SD3	
76	高坏 (脚部)	残高 6.5	小円孔1段に2穴スリムに仕上がる。土師器への移行期？	ナデ	削り	石・長(1～9) 金 良好	脚部 坏、裾 欠損 N1E1	79
77	高坏 (脚部)	残高 6.4	円孔径2.0cm 円孔何段か不明	タテハケ目	ナデケシ	石・長(1～3) 良好	磨滅 受部、裾部欠損 SD5	79
78	高坏 (坏部)	残高 4.0	坏屈曲部外面1条凹線	ナデ 立上り～下—磨滅	立上り—ヨコナデ 下—ナデ	石・長(1～3) 良好	坏屈曲部以外欠損 SD5	
79	高坏 (脚部)	残高 7.4	脚上面中位に接合痕状残	ハケ(5本／1cm)→ナデ	削り→ナデ	石・長(2) 良	脚部 坏、裾 欠損 SD3	

●表58　ＳＤ2・3・ＳＸ2・包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
80	器台	残高 8.0	ヘラ描き沈線、条数不明。 円孔３段直列。	ミガキ 磨滅	ナデ上げ	石・長(1～2) 良好	片 ＳＸ2	82
81	器台	残高 5.0	上段４沈線、下段３沈線 沈線の上、下に円孔。	磨滅のため不明	磨滅のため不明 一部にヘラ痕残	石・長(1～2) 金 良	片 ＳＤ2	
82	器台	残高 8.6	円形穿孔(1.5径) 交互直列。	磨滅のため不明	剥離のため不明	密 良好	片 ＳＤ2	82
83	器台	残高 9.5	円孔 (1.8径) 直列穿孔。	磨滅のため不明	磨滅のため不明 一部ナデ残存	石・長(1～4) 良好	片 ＳＤ2	82
84	支脚 (台形)	底径 (8.8) 器高 8.6	台形、舌状支え手１本 中空部貫通孔(1.7径)	ナデ凸凹残	全面ナデ	石・長(1～5) 銀 良	黒斑 ＳＤ3	79
85	支脚 (台形)	残高 8.6	台形、舌状支え手１本 中空部貫通孔	指押圧	ナデ	石・長(1～2) 良好	N1W2	79
86	支脚 (台形)	器高 6.3 底径 9.0	台形、舌状支え手１本 中空部、貫通孔 中空部上面極細	ナデ	ナデ 指圧痕	石・長(1～8) 良	中空 ハの字状 N2W1	79
87	支脚 (円筒)	底径(10.5) 残高 12.5	円筒、上下端部開口 叩きしめ痕残	叩き→ナデ、凸凹著しい ㊙—ツマミ出しヨコナデ	下より、指圧痕 ナデ上げ ヨコハケ	長(1～2.5) 石(1～3) 金 良好	上部欠損 ＳＤ2	79
88	支脚 (円筒)	残高 9.0	円筒、上下端部開口	指頭圧痕	ナデ上げ 一部に絞り痕	長(1～2) 石(1～3) 金 良好	黒斑 上部、下部 欠損 ＳＤ2	
89	支脚 (台形)	底径 (8.0) 残高 8.0	バチ形を呈す。 舌状突起 (欠損)	凸凹著しい ナデ、一部に指頭痕	ナデ 一部に指頭痕	石・長(1～5) 銀 良好	ＳＤ3	

●表59　包含層出土遺物観察表 土製品

番号	品種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
90	紡錘車	直径 3.7 厚さ 1.2 重さ 16.9ｇ	円孔１穴 円盤状	ナデ	ナデ	石・長(1大) 良好	N2W2	80
91	土玉	直径 2.6 厚さ 2.1 重さ 13.4ｇ	円孔、ソロバン玉状 表面全体に指圧がみられる。	手ずくね 一部板状叩きしめ	ナデ	石・長(1～2) 良好	N1W1	80

●表60　ＳＤ5・包含層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
92	不明	9/10	チャート	3.2	1.5	0.35～0.20	2.7	N1E1	
93	叩き石	10/10	凝灰岩	12.1	9.2	4.3～4.5	734.5	N1E1	80
94	石斧	1/2	粘板岩	7.2	9.2	2.3	284.4	ＳＤ5	80
95	砥石	1/3	流紋岩	8.0	6.9	2.0	157.0	ＳＤ5	
96	石斧	1/6	斑岩質	5.8	円形	5.0	181.1	N2W2	
97	石斧	1/6	斑岩質	6.0	楕円形	4.6	122.5	N2W1	80

●表61　ＳＤ3・5・ＳＸ2・包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面			
98	大型甕	口径 (8.0) 体径 (23) 高さ(21.0)	俵壺と呼ばれる。中央部と左右に凹帯。櫛描き波状文を縦方向帯状に施す。	注口部 側部貼付け	粘土帯による凸凹顕著にみれる。 ナデ	良好	須恵器 ＳＤ5	81
99	甕	口径(22.0) 残高 11.0	平行叩き目痕の消しがみれる。 磨滅がみられる。	タタキ目後ケシ	ヨコナデ 同心円文	甘い 良	須恵器 ＳＸ2	
100	坏	口径 14.2 器高 3.9 底径 8.3	粘土紐の接合明瞭 内外面稜が多い。	ヨコナデ（一部） ㊥磨滅	ヨコナデ（一部）	石(1～3) 不良	須恵器 ＳＤ5	82
101	台付椀	高台径(15.0) 残高 5.5	貼付高台 坏Ｂ、高台厚く外方へ開く。	ヘラ削り ヨコナデ	ヨコナデ	石(1) 良好	須恵器 ＮＷ2	
102	甕	残高 4.45	粘土紐状残	ナデ	ヨコナデ	密 良好	須恵器 口、底欠損 ＳＤ3	
103	坏	口径 13.6 器高 3.3 底径 8.6	稜２条がみられる。	ヨコナデ 磨滅	ヨコナデ	石(1～2) 良	須恵器 ＳＤ5	82
104	短頭壺	口径(11.9) 残高 4.65	頭部以外施釉	施釉口唇残してナデ	ヨコナデ	砂粒(1～2) 良好	ＳＤ5	
105	土師坏	底径 (6.8) 残高 1.6	底面、回転糸切り	磨滅のため不明	磨滅のため不明	密 不良	S1W2	82
106	土師坏	底径 (7.1) 残高 1.2	平底	磨滅	磨滅	密 不良	S1W1	82
107	土師椀	台径 (6.4) 残高 2.4	高台	磨滅	磨滅	密 不良	S1W2	82
108	土師坏	口径(15.0) 器高 3.4 底径(10.0)	平底 口縁部　肥厚	磨滅	磨滅	密 不良	ＳＤ5	82

第９章

経石山古墳（キョウセキザン）

1．調査の経過

(1)調査に至る経緯

1990（平成２）年５月、株式会社ホテル茶春（代表取締役川本栄次）より、松山市桑原４丁目410－１におけるマンション建設に当たって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

本調査地は松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地『84経石山古墳』内にあたり、周知の遺跡として知られている。この経石山古墳は、北東方向から延びる東野洪積台地の先端部（海抜40ｍ）に位置し、周辺には、畑寺竹ヶ谷古墳〔西尾幸則　1986〕、東野お茶屋台古墳〔森光晴1986〕や本墳とほぼ同時期の三島神社古墳〔岸・森・長井　1972〕などが存在する。また、前述の如く、近年宅地開発による遺跡発掘調査は桑原地区においても激増しているが、その中でも殊に当該地は、経石山古墳後円部北東裾に当たっているため、本墳との関連する遺構・遺物の確認が期待できた。

これらのことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1990（平成２）年６月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、土師器・須恵器を含む遺物包含層と経石山古墳の周溝と思われる溝状遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と㈱ホテル茶春の両者は、発掘調査についての協議を行った。発掘調査は、南西方向に隣接する経石山古墳の周溝（または空濠）の確認をとおして、本墳の規模と構造の解明を主目的とし、松山市埋蔵文化財センターが主体となって、㈱ホテル茶春の協力のもと、1990（平成２）年10月17日に開始した。

(2)調査組織

調 査 地　松山市桑原４丁目410－１

遺 跡 名　経石山古墳１次調査

調査期間　野外調査　1990（平成２）年10月17日～同年12月19日

調査面積　567㎡

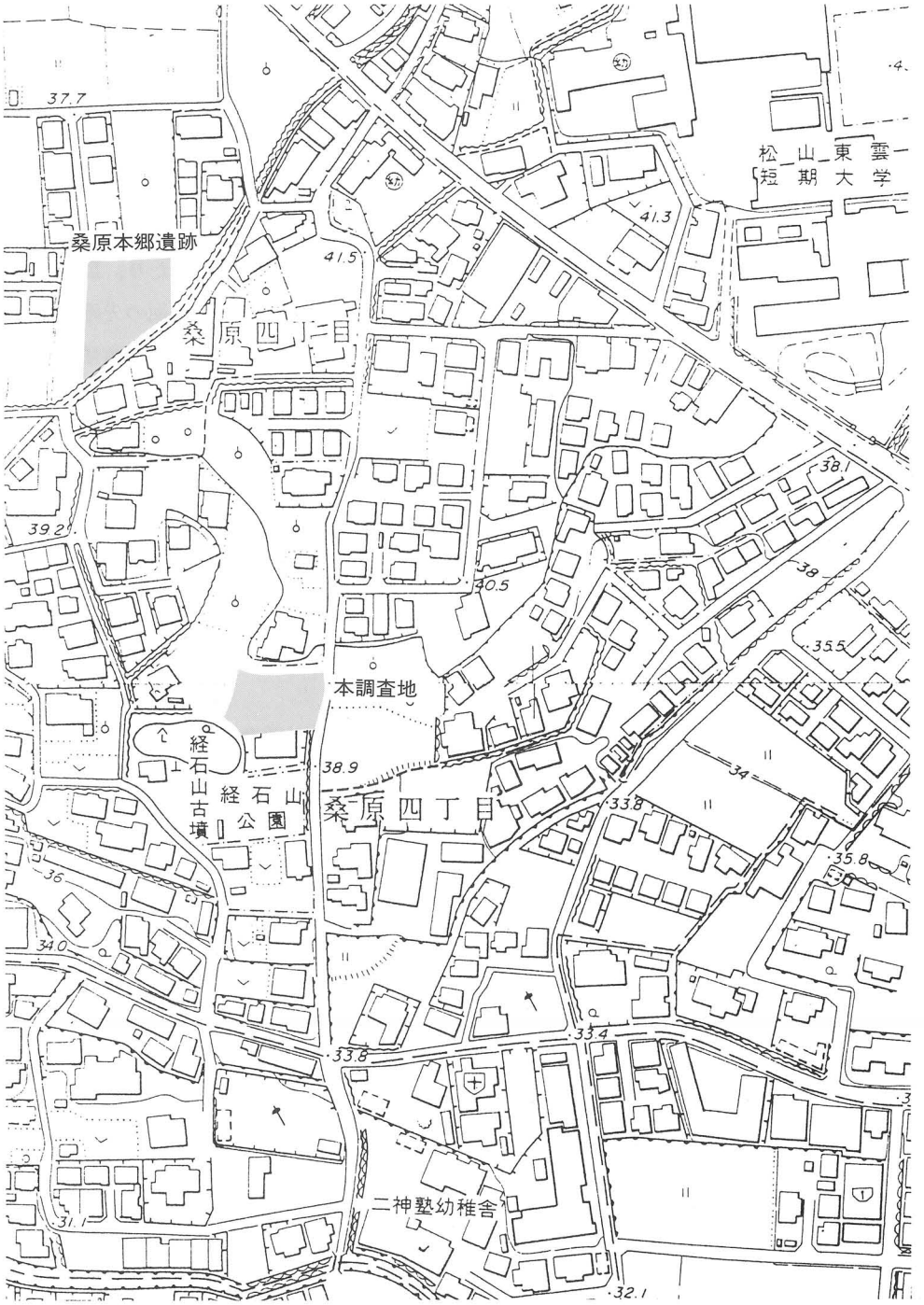
調査委託　株式会社ホテル茶春　代表取締役　川本栄次

調査担当　調査係　主任　田城　武志

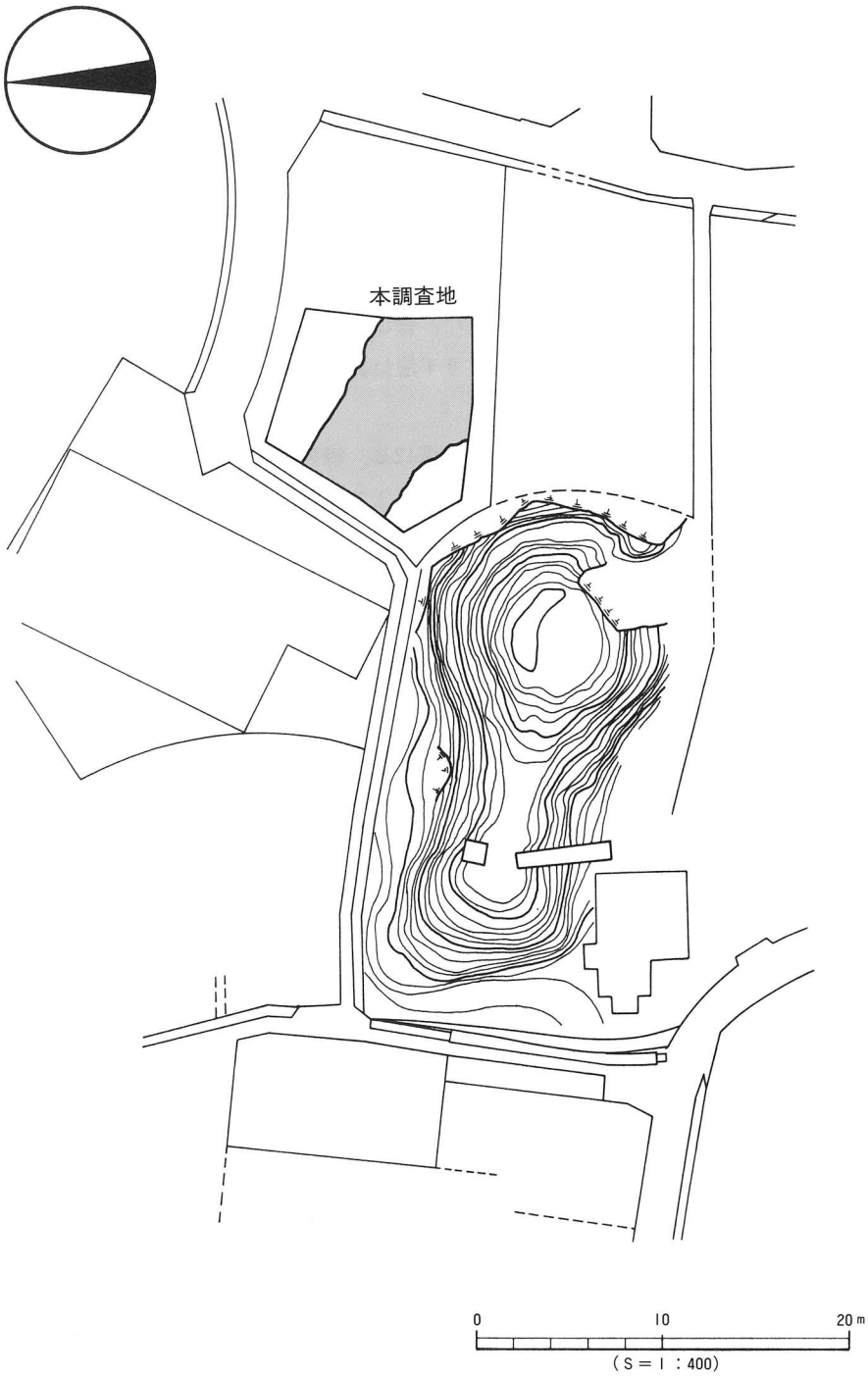
　　調査員補　高尾　和長

　　〃　　大森　一成

作 業 員　高市　英治、山邊　進也、福田　宏志、仙波ミリ子、乃万富美子、仙波　千秋、高尾　久子、金子　育代、猪森しげ子、池内カヨ子、白井あさ子、田頭　まき



第120図　調査地位置図（1）　（S＝1：2,500）



第121図　調査地位置図 (2)

2．層位

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層黄灰色土、第Ⅲ層黒色土、第Ⅳ層暗褐色土、第Ⅴ層茶褐色土、第Ⅵ層明灰茶褐色土である。第Ⅰ層は、宅地造成による真砂土と造成以前の耕作時における灰色土で地表下30～40cmを測る。第Ⅱ層は、厚さ３～10cmの堆積層である。第Ⅲ層～第Ⅵ層は、周溝内埋土となり厚さ40～50cmで各層ともに弥生土器(後期)、須恵器(６～７世紀)、土師器、瓦器片（12～13世紀）を包含しており、墳丘からの流れ込みあるいは墳丘削平時に攪乱されたものと推測される。ただ、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は周溝内側裾部より約１ｍに渡って黒色傾向が見受けられ、特にⅤ層より下層は比較的安定した層であるが、遺物を伴っていないのが残念である。

第Ⅵ層下層より土壙状遺構２基、ピット状遺構42基、柵列状遺構１条（第125図）の遺構を検出している。殊にピット状遺構は、埋土の相違により３つに分類できる。

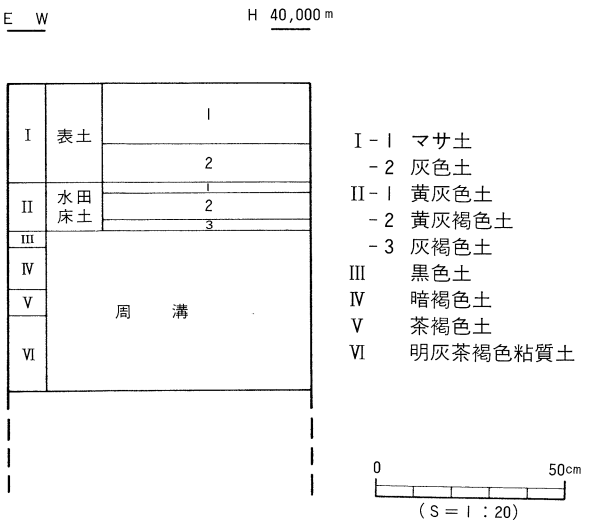
①周溝内部裾部周辺から検出されたピット状遺構――黒色傾向の茶褐色土（第Ⅴ層）

②周溝中央部で検出されたピット状遺構　　――暗褐色土（第Ⅳ層）

③周溝内北東部の柵列状遺構　　――明灰茶褐色土（第Ⅵ層）

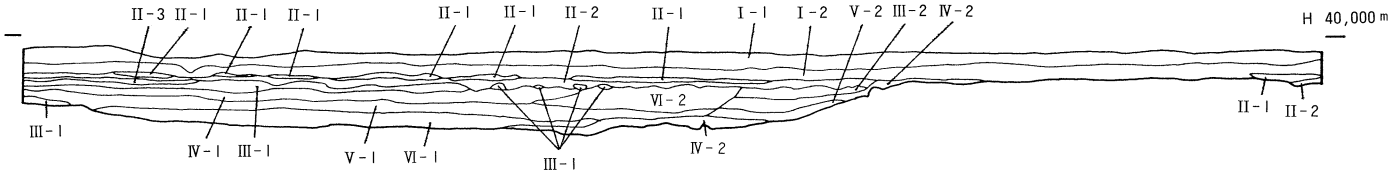
各層位より検出された遺物は、いずれも時期的に大きな広がりがあり、各かくの層位の時期設定は困難であった。

なお、調査に至って調査区中央部に基準杭を施し、３ｍ四方のグリットに分割した。

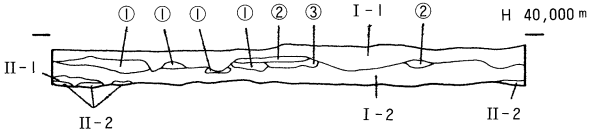


第122図　基本層位図

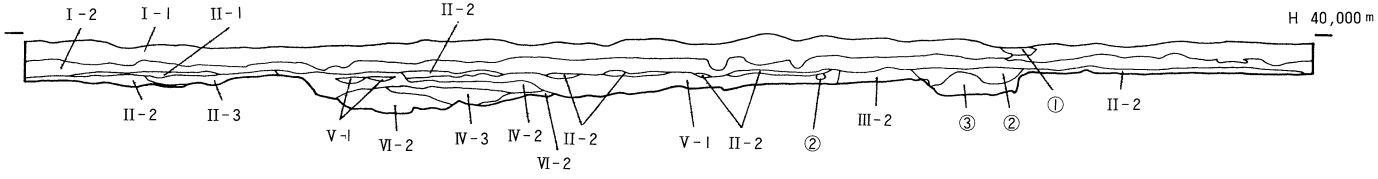
南壁土層図

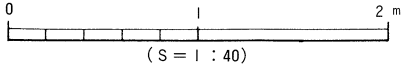


南西壁土層図



西壁土層図





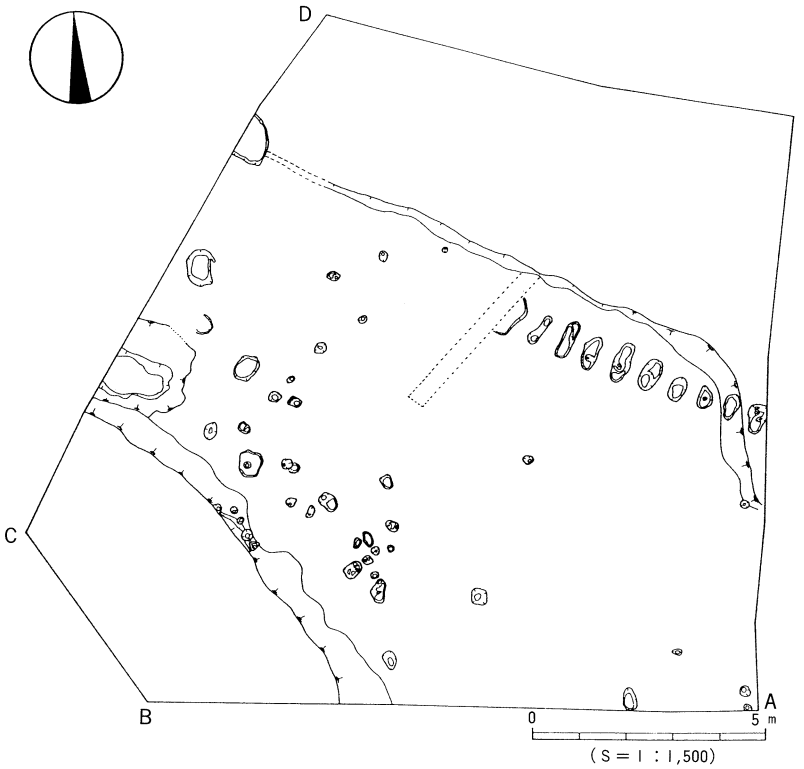
I-1　真砂土（造成土）
　-2　灰色土（耕作土）
II-1　黄灰色土
　-2　黄灰褐色土
　-3　灰褐色土
III-1　黒色土
　-2　褐色土（黒色傾向）
IV-1　暗褐色土
　-2　暗褐色土（黒色粒混り）
　-3　暗茶褐色土（黒色傾向）
V-1　茶褐色土
　-2　灰茶褐色土
VI-1　明灰茶褐色粘質土
　-2　灰茶褐色粘質土

①暗黄褐色土
②黄褐色土
③青灰色土（黄色粒混り）

3．調査の概要（遺構と遺物）

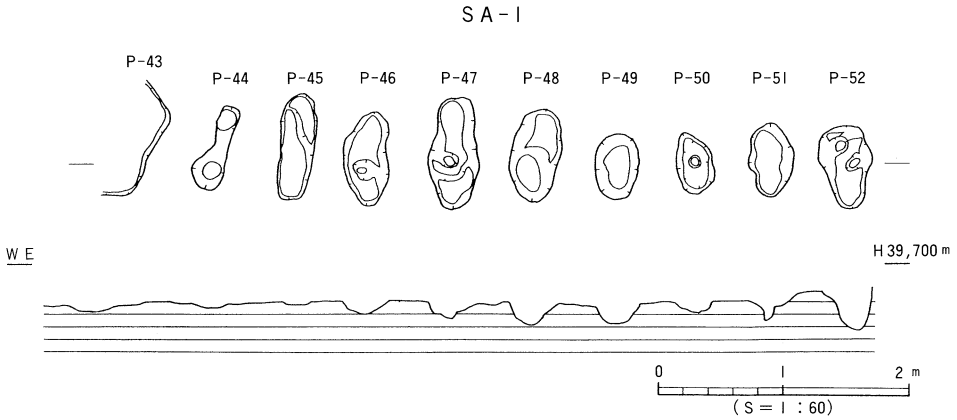
(1)検出遺構

本調査において、経石山古墳の周溝、周溝床面から土壙状遺構２基・ピット状遺構42基・柵列状遺構10基を検出した。周溝の規模は、上端部は調査区西壁において南北に幅７ｍ、南東壁は東西に幅11ｍと西から東へ向けて広がりを見せ、基底面も東方向へ緩傾斜している。しかし、上端部の幅については、調査区南西部の墳丘が近・現代の耕作時にカットされており、先に述べた数値は、あくまでも現状のものであり、正確な規模とはいえない。因に、下端部最大幅6.5ｍ、最深部0.5ｍであった。周溝内埋土は暗褐色土が主体であるが、周溝内郭裾部は茶褐色系の黒色傾向にあり、これは墳丘版築からの流れ込みによるものと思われる。また、柵列状遺構を周溝北東部に東西に走る形で一条検出した。平面的には、長軸0.7ｍ、短軸0.4ｍの楕円形を呈し、0.3ｍおきに計10基、全長６ｍにわたっていた。これは第124図に見られるように周溝を切る形で検出されていることから、周溝との関連性は薄いと思われる。ピット状遺構についても、土師器片が含まれていたものの、掘立柱建物に結びつくプランも呈していないことから自然の凹地と考えられ、具体的な時期設定をするための有効な手がか

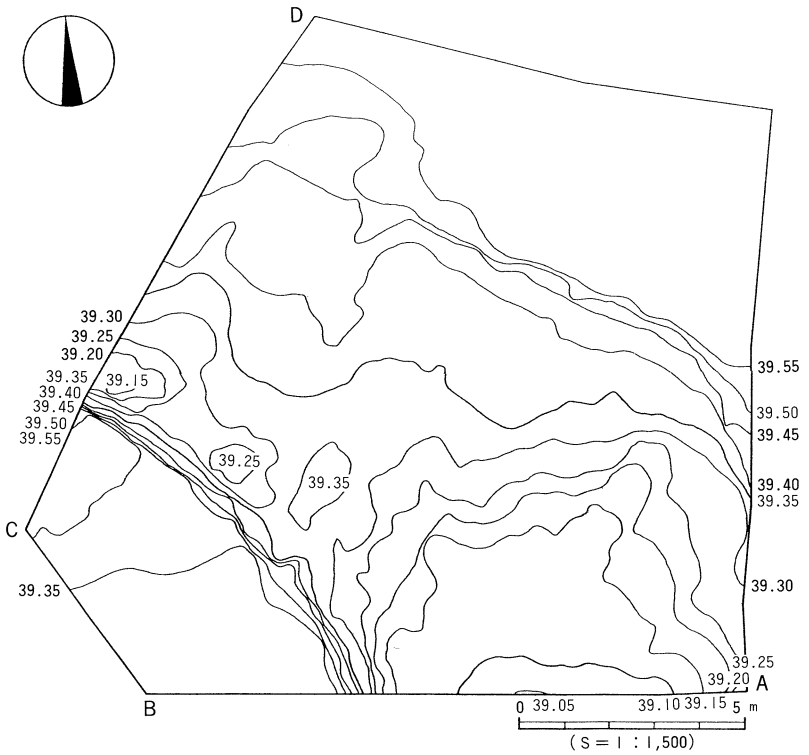


第124図　遺構配置図

りには成り得なかった。



第125図　SA-1 測　量　図



第126図　地形測量図

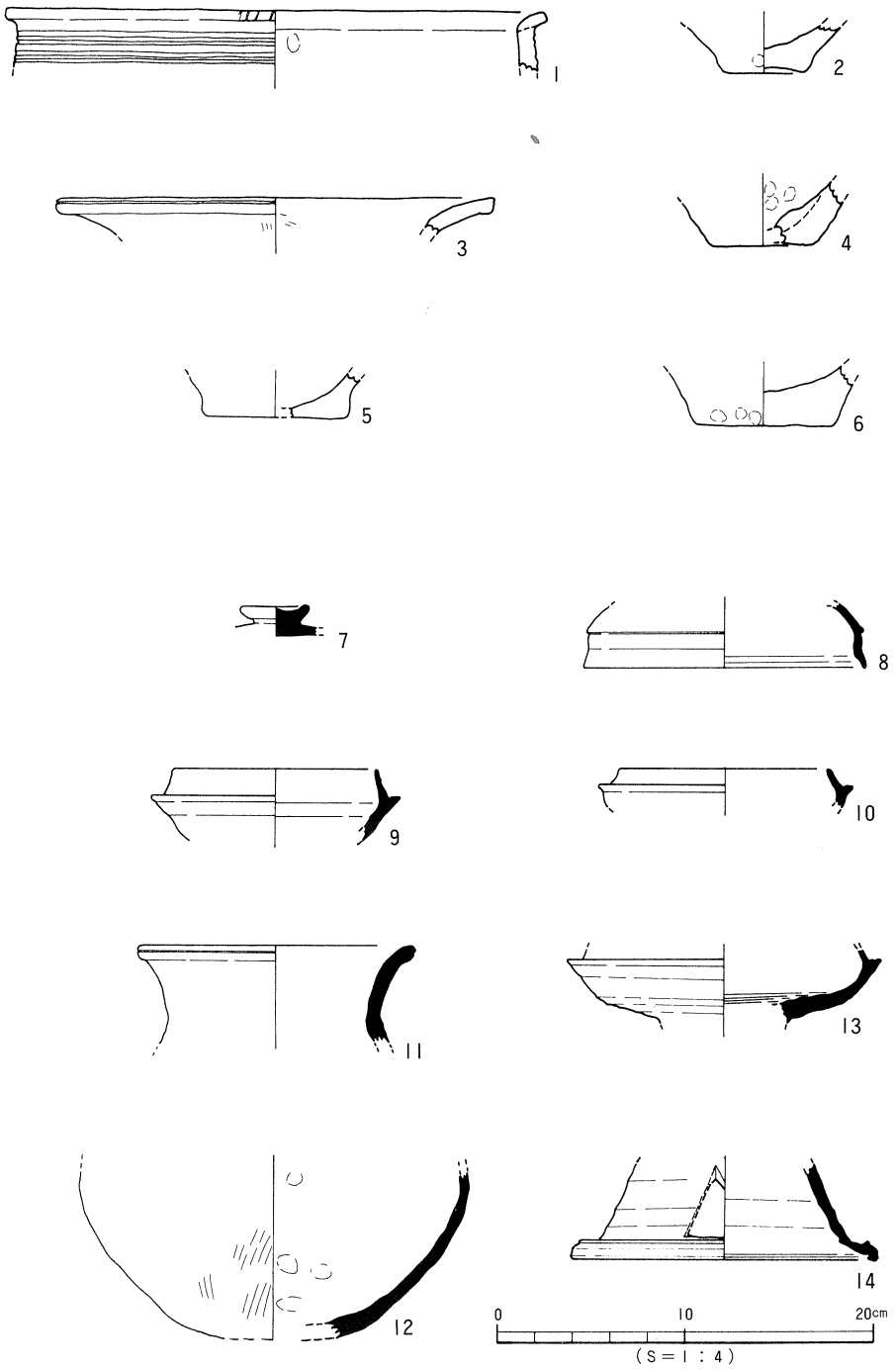
(2)出土土器

弥生　1は弥生の甕形土器の口縁部片で、口縁端部に刻目、口縁下部に沈線を施す。2は甕の底部片である。やや上げ底で少しくびれて立ち上がる。器表面は内外面ともマメツの為調整は不明である。3は壺の口縁部の小片で、口縁端部は丸く仕上げられ、沈線が一条施されている。4～6は底部片で、いずれも平底である。尚、4は甕、5・6は壺のものである。

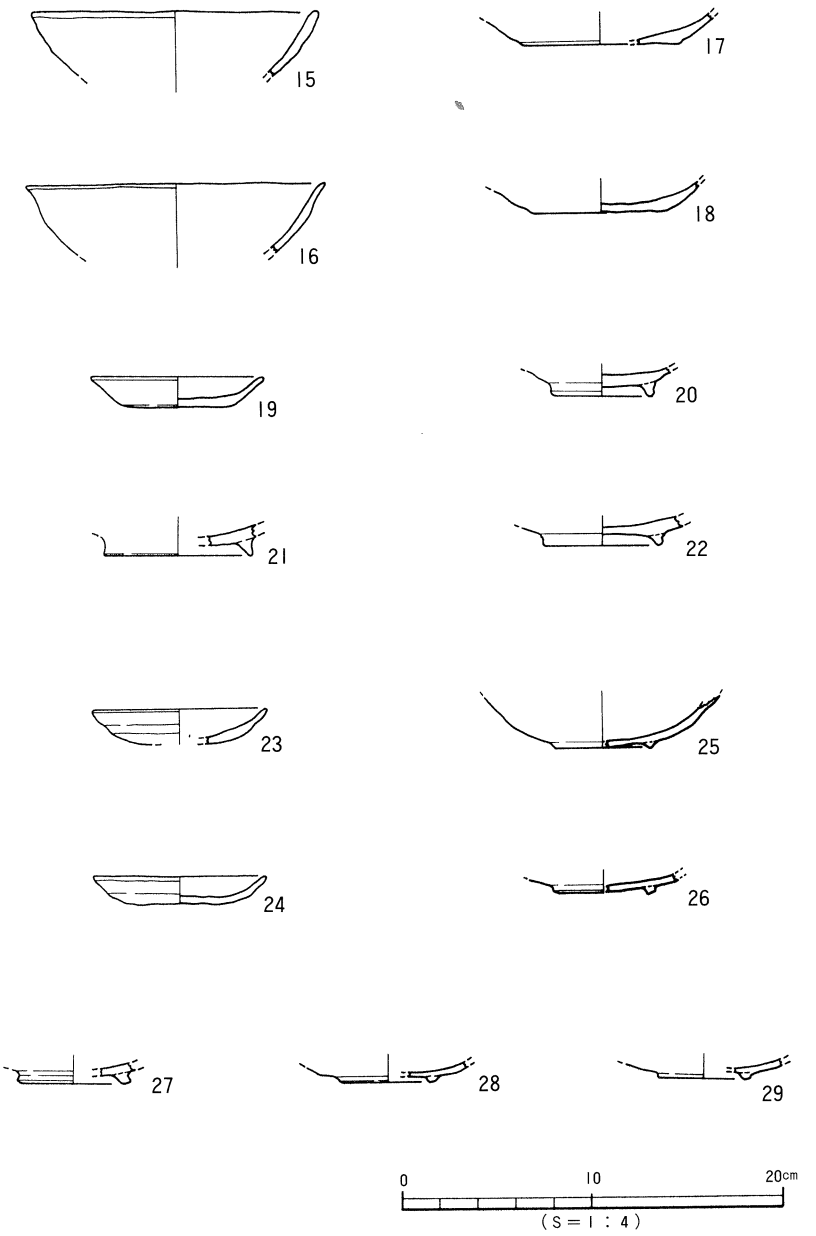
須恵器　7は坏蓋の宝珠つまみの部分を残しあとは欠損している。つまみ中央部はくぼみ、中央部分が尖っている。8は口縁部片である。口縁は外下し、端部は丸く仕上げており、口縁部と体部の境界には粘土による継ぎ目が見られた。器厚は口縁端部のみ肉薄である。9・10は坏身の口縁端部から体部にかけての残存部である。立ち上がりは長く、やや内傾し、先端は先細りし、丸く仕上げている。受部は外上方にのび丸くおさめる。10は9に比べ立ち上がりが非常に短く、受部は水平ぎみである。体部と底部の屈曲部は鈍い稜が見られた。11・12は広口壺片である。11は口端部から口頸部が残存しており、口頸部から外上に緩やかに外反する。口縁端部には沈線を一条施す。12は体部から底部の残存片で、底部はやや扁平になると考えられる。11・12は、双方の出土位置・胎土・焼成の具合いから、同一個体と思われる。13・14は高坏片である。13は受部上面に凹線を二条施している。口縁立ち上がりは内傾し、坏部にはヘラ調整がみられた。14は脚部片で三角透かしを施す。脚部全体は内外面ともヨコナデしている。

土師器　15・16は椀である。15は口縁部片で、端部は丸くおさめ、内外面ともヨコナデしている。16も口縁部片で、体部から口縁部にかけてやや屈曲後、外反する。端部は尖りぎみである。17～19は土師皿の底部である。17の底部はやや上げ底である。18は平底で、底部の中央部が肉薄になる。19の底部は平底で、口縁端部は丸くおさめられ、外面はマメツの為判別できないが、内面はヨコナデしていた。20～22は高台付椀である。いずれもやや丸底。高台は断面三角形で21はやや外方向にふんばる。

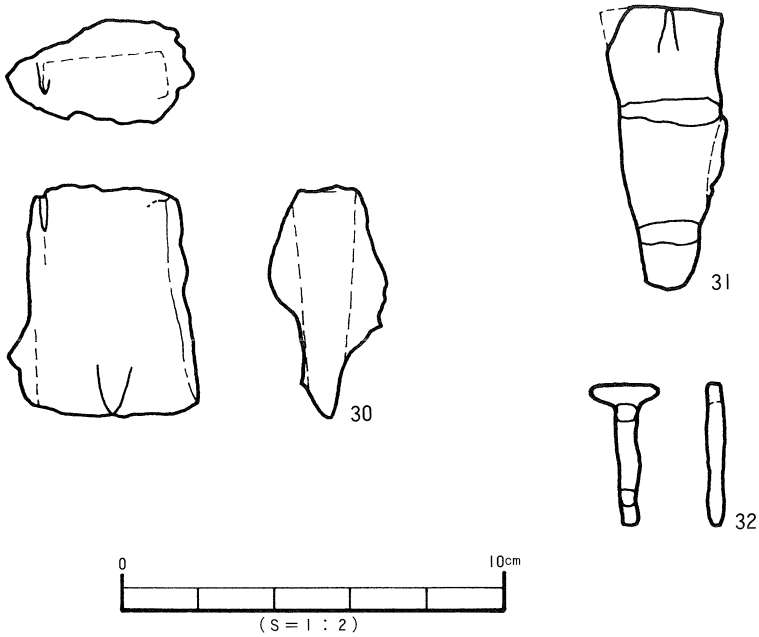
瓦器　23・24は皿である。23は体部は肉厚だが口縁部に向かい肉薄になり再び厚くなる。端部は丸くおさめる。24は、やや丸底気味の底部から屈曲し、口縁部がやや外上方へ開く。25～29は高台付の椀の底部片である。25はやや丸底。高台は断面三角形。口縁部外面には指押えが見られる。26・28の高台は逆台形である。27は高台の内側が内傾し外方向へふんばる。29も内側が内傾するか27のような外方向への伸びはみられない。



第127図　出土遺物実測図 (1)



第128図　出土遺物実測図 (2)



第129図　出土遺物実測図 (3)

4．小結

松山平野東部松山市桑原４丁目（字名　桑原西新開）に位置する経石山古墳は、周囲を三島神社古墳や溝辺古墳等の古墳群および弥生期の集落に囲まれ、古来松山平野で数少ない前方後円墳として県指定有形文化財となり知られるところである。墳丘は、三島神社古墳同様全面盛り土によって築造されてはいるが、未調査のため全貌は明らかにされていない。但し、墳丘部の測量については、位置的に不明瞭な点もあるが1972年に発行された報告書『三島神社古墳』に収録された実測図があり、今回の調査では、それを参考にした。

因に、現在まで本墳の規模について、調査した過去のデータを紹介しておくことにする。

1968年発行の正岡睦夫著『愛媛県前期古墳集成』によれば、「全長40ｍ、後円部径22ｍ、同高5.5ｍ、前方部幅16ｍ、同高3.5ｍ、（主軸）方位は前方部を西より20度位北に向けている」とし、また1980年発行の『松山市史料集 第１巻 考古編』によると、「墳丘全長約49ｍ、前方部長さ20ｍ、同高３ｍ、後円高さ５ｍ、（中略）主軸方向はW0.2Nとなっているようにほぼ西向き」と記している。

本調査地は、経石山古墳後円部の北東裾部に当たることから、正岡氏による後円部径22ｍを基準に後円部のみの調査報告とする。

調査区南西部より、当古墳の周溝と思われる溝状遺構を検出、規模は幅７～11ｍで西壁より南東壁に向かって広がりを見せており、深さ20～50cm、南東に緩傾斜している。周溝の内側肩部より墳丘裾部までの距離約７ｍを確認した。ただ、元来墳丘と思われる黄色シルト面のすぐ上層が耕作土となっているため、本墳後円部東部は、近・現代において削平されたものと推測され、周溝幅の正確な復元は困難である。

このことから、本墳後円部の直径はおよそ29ｍ、全長は少なくとも56ｍあることが確認された。経石山古墳の規模が、一部分ではあるが確かなものとなったことは、今回の調査成果である。

その他の遺構としては、不整形のプランで自然の凹地と思われる土壙状遺構、掘立柱建造物等に関連性の薄いピット状遺構がある中で、特筆すべき柵列状遺構を検出した。周溝内北東部より東西に延び、長軸70cm、短軸40cmと南北に長い楕円形をなし、各ピット間隔約30cmである。同様の遺構が、平成元年度に調査した福音小学校構内遺跡〔武正良浩　1991〕より確認されていることを付記しておく。周溝と柵列については、明確な回答が得られず今後の課題とする。

出土遺物は、各層ともに時期的なまとまりが見られず、また定説とされている本墳築造時期５世紀末～６世紀初を裏付けるものは確認できなかった。よって周溝内出土土器より本墳の時代設定は困難ではあるが、一方では鉄斧などの鉄器類を検出し本墳との直接関連を伺わせるものも出土しているので、今後、主体部の調査の機会に明確なものとしたい。

〔文献〕

岸　郁男・森　光晴・長井数秋　1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

武正良浩　1991「福音小学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会

西尾幸則　1986「畑寺竹ノ谷古墳群」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂委員会

森　光晴　1986「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂室

遺物観察表　（作成 大森一成）

(1)　遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表62　出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(28.5)	沈線 口縁部にキザミ目。	ヨコナデ（口縁部）	指頭圧痕 ヨコナデ（口縁部）	石・(1～3) ○		88
2	甕	底径　4.5	やや上げ底。	ナデ	磨滅のため不明 指頭圧痕	石・長(1～4) ◎		88
3	壺	口径(22.6)	口縁端部に沈線を一条めぐらす。	ヨコナデ（口縁部）	ヨコナデ(口縁端部～口縁部) ハケ（口縁部）	石・長(1～4) 金 ○		88
4	甕	底径　5.3	平底。	ナデ	指頭圧痕	石・長(1～4) ○	黒斑	88
5	壺	底径（7.2）	平底。	磨滅の為調整不明	ナデ	石・長(3) ○		
6	壺	底径　7.35	平底。	磨滅の為調整不明	磨滅の為調整不明 指頭圧痕	石・長(1～4) ○	黒斑	88
7	坏蓋 (つまみ)	径　3.5	つまみ中央部分はくぼみ中心は尖っている。	指ナデ ヘラ削り調整		石・長 ◎		88
8	坏蓋	口径（13）	口縁部は外反し、口縁端部にて肉薄。	口縁端部は丸くナデ仕上げ ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1) ◎		88
9	坏身	口径(10.8)	口縁部内は内湾し先細りする。	口縁端部丸くナデ(内外面) 口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1) ◎		88
10	坏身	口径（11）	受部上面に釉かと思われるものが付着。	口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1.5) ◎		
11	壺	口径(14.8)	口縁端部に沈線を一条施す。	口縁部～口縁端部にヨコナデ（内外面）		密(長1～2) △		88
12	壺	残高　9.0	坏部¼残存。	ハケ（4本／1cm） ナデ	指頭圧痕顕著	密(長1～2) △		88
13	高坏	残高　4.7	受部、上面に凹線2条。	口縁部ヨコナデ ヘラ後ナデ		石・長(1) ◎		
14	高坏	底径（16）	三角透かし。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1) 金 ◎		
15	椀	口径（15）	口縁部⅙残存。	口縁端部はヨコナデ 口縁部～体部は縦方向のナデ	口縁端部はヨコナデ 口縁部～体部は縦方向のナデ	密 ◎		
16	椀	口径(15.8)	口縁部⅙残存。	磨滅の為不明	ナデ	石・長 密 ○		88
17	皿	底径（8）	底部¼残存。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長 密 ○		88

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
18	皿	底径 6.9		磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長 金 ○		88
19	皿	口径 9	回転による糸切り	磨滅のため不明	口縁部ヨコナデ	密 ◎		88
20	皿	底径 5.2	高台 断面三角形	ナデ	磨滅のため不明	石・長(1) 金 ○		88
21	皿	底径 (7.6)	高台 断面三角形	高台 ヨコナデ	ナデ	密 ◎		
22	皿	底径 6	高台 断面逆台形	高台 丸くナデ仕上げ	磨滅のため不明	石・長(1) 金 ○		
23	皿	口径 (9)	口縁部¼残存	ナデ	ナデ	密 ◎		
24	皿	口径 9.1 器高 1.4	口縁部½残存	ナデ	ナデ	密 ○		
25	皿	底径 5	高台 断面三角形	ナデ	ナデ	石・長 金 ○		88
26	皿	底径 (4.6)	高台 断面逆台形	指ナデ	ナデ	石・長(2) 金 ○		
27	皿	底径 (5.4)	高台 断面菱形	高台 ヨコナデ	ナデ	石・長(1) ◎		88
28	皿	底径 (4.8)	高台 断面逆台形	高台 つまんでナデ	ナデ	密 ◎		88
29	皿	底径 (4.6)	高台 断面逆台形	高台 ヨコナデ	ナデ	石・長(1) ○		88

●表63 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
30	斧		鉄製	6.0	4.0	2.6	107.1		88
31	平根鏃		鉄製	7.5	2.6	0.6	24.1		88
32	釘		鉄製	3.7		0.4	3.7		88

第 10 章

枝松（エダマツ）遺跡

―３次調査―

1．調査の経過

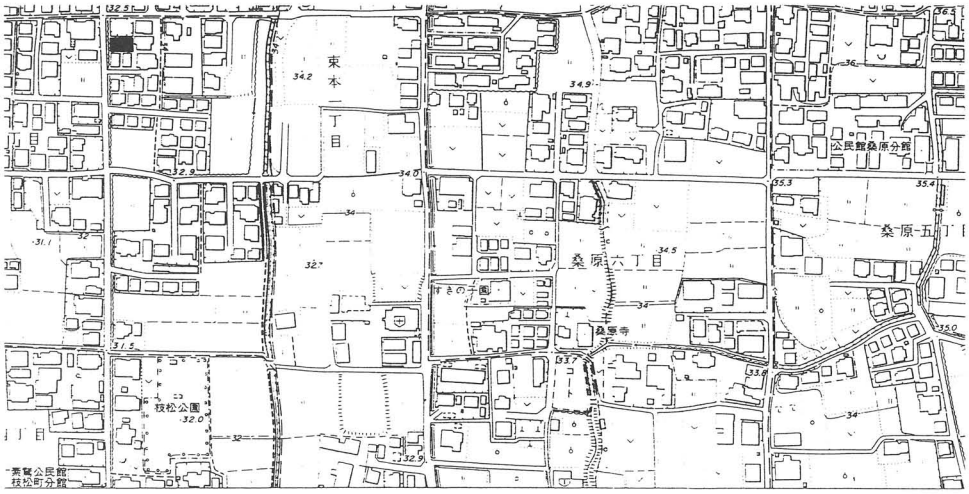
(1)調査に至る経緯

1989（平成元）年６月、株式会社エス・アイ・ピー(柳原敏宣)より松山市枝松３丁目310-１地内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『83枝松遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包含地内ではこれまでに、弥生時代後期の集落関連遺構と遺物を検出している東本遺跡がある。周辺地域には、本調査地北東約１kmの地点に、弥生時代前期から中世までの集落関連遺構を検出している樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫 1989〕や、弥生時代後期から古墳時代の複合遺跡である樽味立添遺跡・樽味高木遺跡〔梅木謙一　1989〕などがある。東接する丘陵地には、本調査地東南東約１kmの地点に経石山古墳（前方後円墳）〔森光晴　1986〕や三島神社古墳〔岸・森・長井　1972〕などがある。また本調査地南西部には釜ノ口遺跡〔岸・長井・大山　1973〕など弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡がある。

1989（平成元）年８月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器を含む遺物包含層と遺構（柱穴３基・落込み１基）を確認した。

この結果を受け、文化教育課・株式会社エス・アイ・ピー二者は遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代から古墳時代の当地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、株式会社エス・アイ・ピーの協力のもと1989（平成元）年10月５日に開始した。



第130図　調査地位置図　（S＝1：5,000）

(2)調査組織

調 査 地　松山市枝松３丁目310－１

遺 跡 名　枝松遺跡３次調査

調査期間　野外調査　1989（平成元）年10月５日～同年10月28日

調査面積　348㎡

調査委託　株式会社エス・アイ・ピー　柳原敏宣

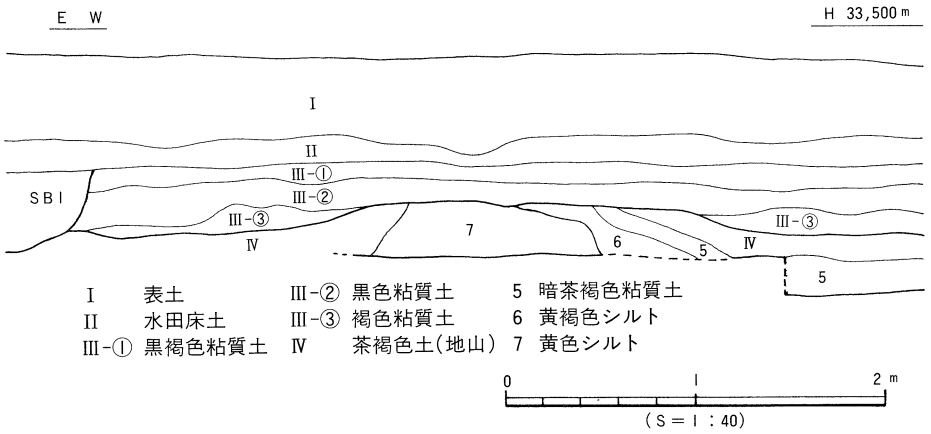
調査担当　調査員　　梅木　謙一

　　調査員補　宮内　慎一

作 業 員　宮脇　和人、古屋　明寿、梅本　正則、岸　　武弘、藤村　英樹、高橋　　恒、山本　　圭、原田　英則、安永　浩二、志賀　夏行、吉田　智広、山本　好枝、松本美知子

２．層位

本遺跡は石手川扇状地上の標高33.5ｍに立地している。調査区は調査以前は耕地整備された水田であった。基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層黒褐色～黒色粘質土、第Ⅳ層茶褐色土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は近現代の造成工事により地表下50～60cmまで開発が行われている。第Ⅲ層は遺物包含層であり、調査区ほぼ全域でみられる。北から南へ向けて緩傾斜をなし、厚さ50～60cmの堆積で弥生土器・土師器を包含する。第Ⅳ層は無遺物層であり地山と呼ばれるものである。第Ⅳ層上面の地形測量では調査区北側が高く漸次南側に向けて緩傾斜をなしている。他に、調査区南西隅にて第Ⅳ層下に火山灰の堆積がみられた。

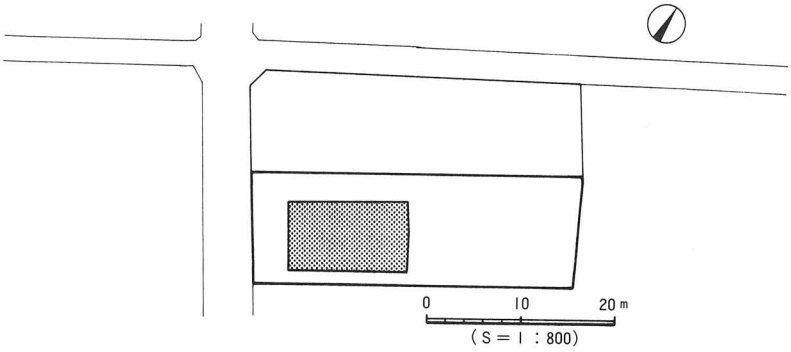


第131図　南壁土層図

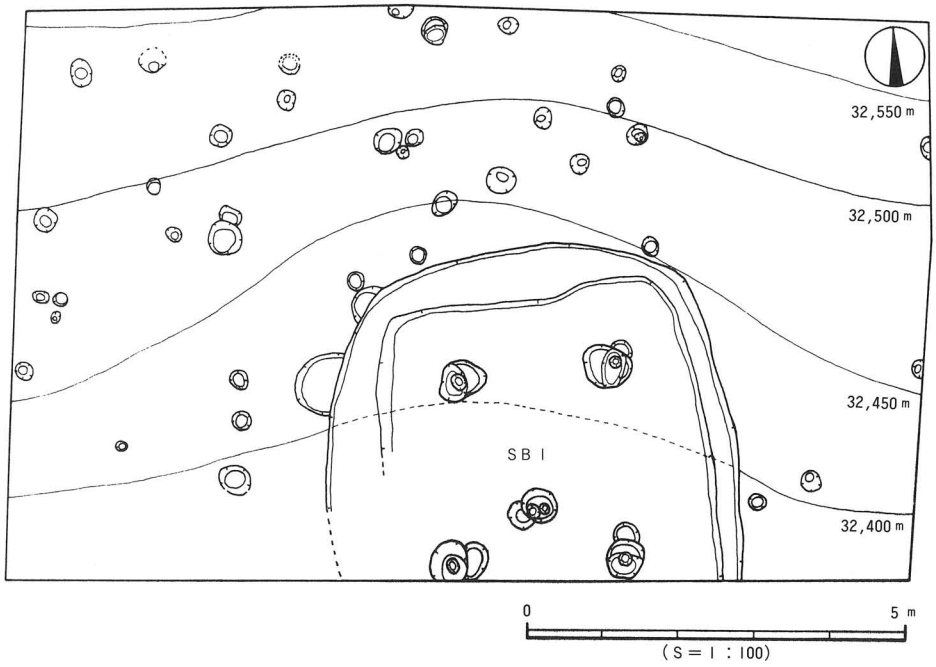
3．調査の概要（遺構と遺物）

遺構は第Ⅲ層中及び第Ⅳ層上面での検出である。第Ⅲ層中にて竪穴式住居址(ベット付設)1棟、第Ⅳ層上面にて柱穴49基（住居址内9基を含む）を確認した。

遺物は遺構及び第Ⅲ層包含層からの出土であり、第Ⅲ層内からは弥生土器・土師器が混在して出土した。住居址内からは弥生土器のほか石器類として石庖丁が出土したが、各柱穴内からは遺物の出土はほとんどみられなかった。



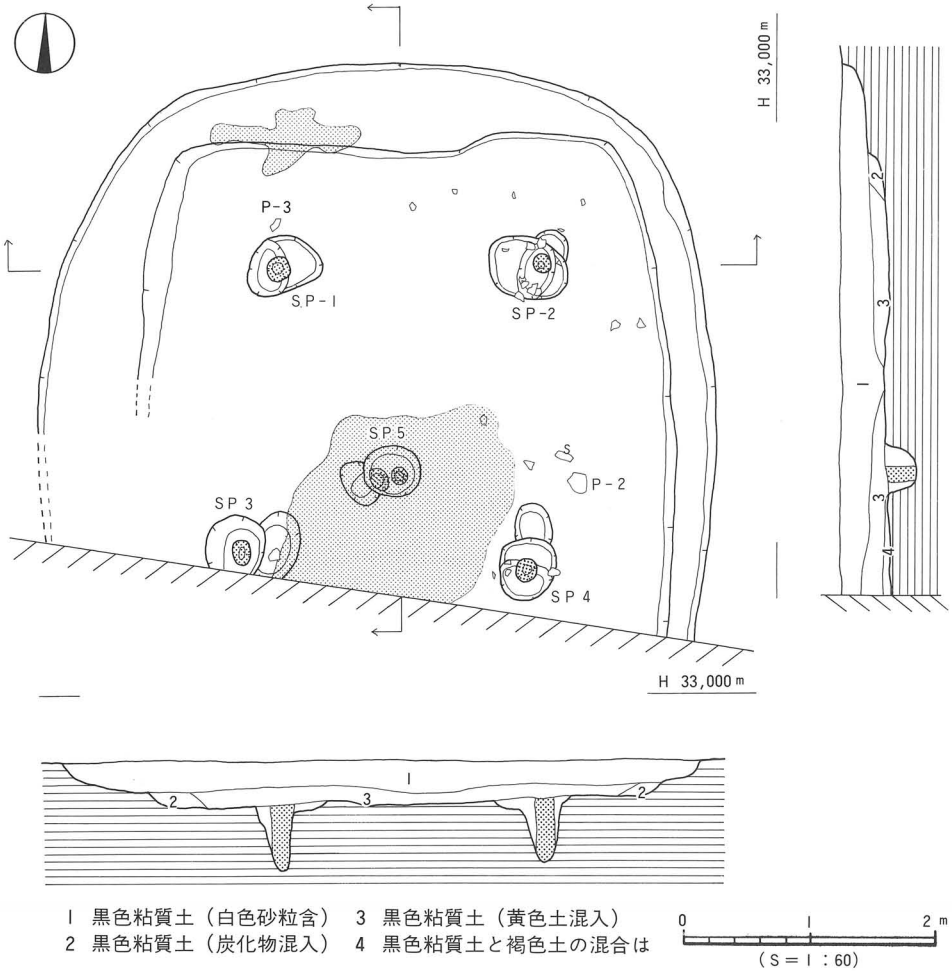
第132図　調査地測量図



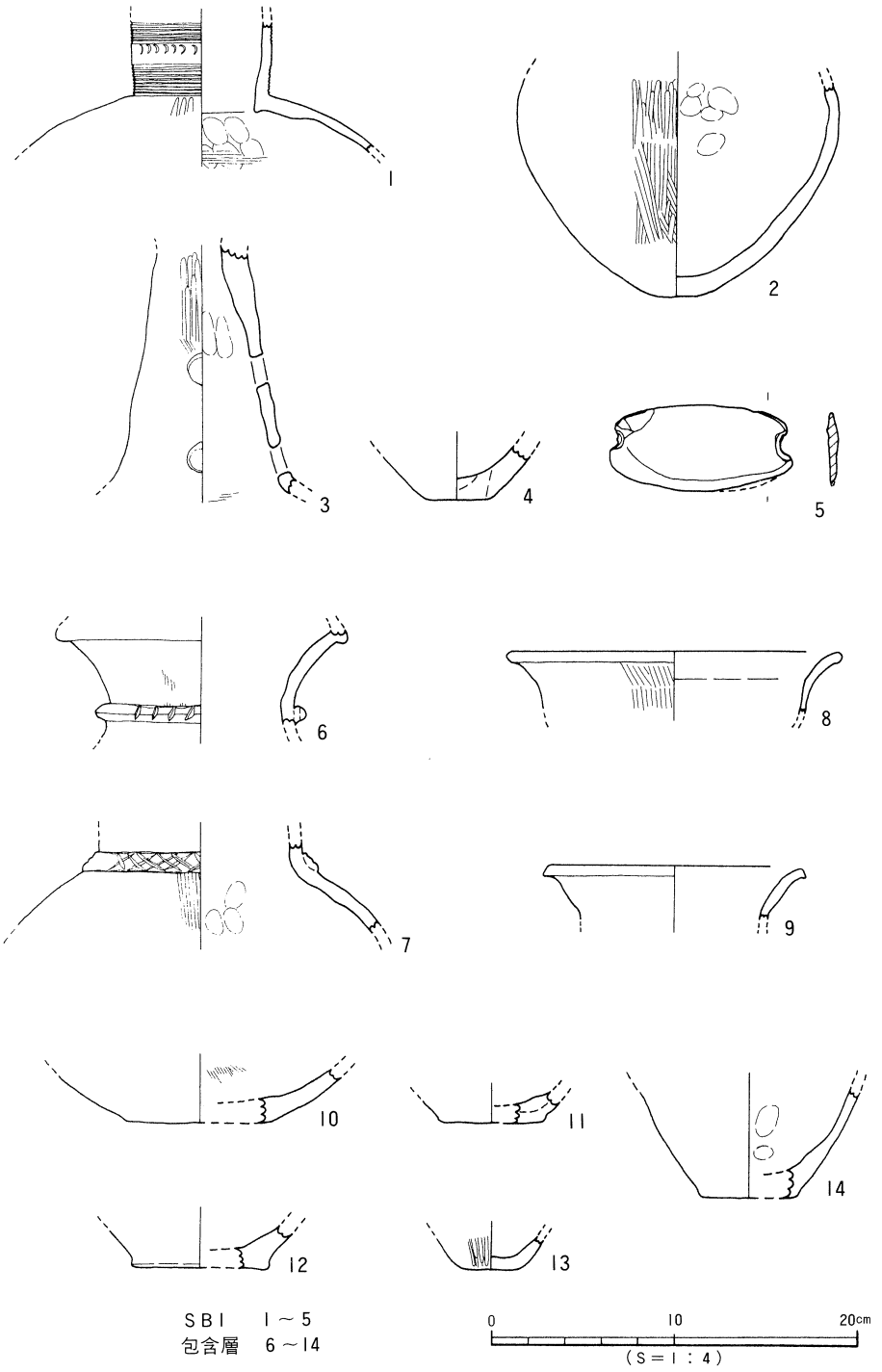
第133図　遺構配置図

ＳＢＩ号住居址（第134図）

調査区南側中央部に位置し、住居址南半部は調査区外へ続く。平面形は検出面から想定すると隅丸方形を呈すると考えられ、規模は現存東西幅5.4ｍ、南北幅4.2ｍ、壁高は検出面から約30cmを測る。床面は平坦で比較的硬質である。覆土は黒色粘質土であるが、床面付近にて一部黄色土の混入がみられる地点がある。主柱穴はＳＰ１・２・３・４の４本を確認したが、住居址内に同規模の柱穴ＳＰ５があり、５本柱の可能性も考えられる。各主柱穴は円～楕円形で径40～70cm、深さ40～50cm、柱穴間は220～230cmを測り、柱痕径は12～15cmを測る。また各主柱穴とも深さ５～７cm程度の円～楕円形の柱穴を伴っている。内部施設としては、周壁に沿って幅65～70cm、厚さ15cm程度の貼り付け（一部削り出し）のベット状施設を付設している。掘り込みの炉は未検出ではあるが、住居址南側柱穴間の中央部床面付近にて、径



第134図　ＳＢＩ 測量図



第135図　出土遺物実測図

150cmの範囲に炭化物の集中がみられた。

遺物は床面付近及び覆土中からの出土であり、床面にて壺の底部（Ｐ２）や、円孔のある高坏の脚部片（Ｐ３）を、覆土中より弥生土器片と石庖丁１点を検出した。出土遺物等から本住居址は弥生時代後期後葉に位置づけられるものである。

第135図の１～５はＳＢ１号住居址、６～14は第Ⅲ層包含層からの出土遺物である。

４．小結

今回の調査において弥生時代後期の竪穴住居址１棟、柱穴49基、他に弥生土器・土師器を含む遺物包含層と火山灰を確認することができた。ＳＢ１号住居址は、４本柱を持った１辺約４ｍの方形住居址にベット状の造り出しを設けた構造となっている。本調査区周辺においては、桑原高井遺跡や東本遺跡で検出された住居址に、時期や規模・規格等で関連性が強く、当地及び周辺地域の弥生時代後期における集落の広がりや、同集落の継続性を裏付けする好資料であるといえるだろう。

また、当地周辺において火山灰は、樽味四反地遺跡や桑原西稲葉遺跡１次調査〔梅木謙一1989〕で確認されており、本調査検出の火山灰は、その出土状況や色調より同様のＡＴ火山灰であると考えられる。石手川扇状地左岸には、このＡＴ火山灰が広く分布しているようである。

〔文献〕

梅木謙一　1989「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

岸　郁男・森　光晴・長井数秋　1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

岸　郁男・長井数秋・大山正風　1973『釜ノ口遺跡』松山市教育委員会

宮本一夫　1989『樽味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室

森　光晴　1986「経石山古墳」『愛媛県史　資料編』愛媛県史編纂室

遺物観察表　（作成：水口あをい）

(1)　遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。　例）口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例）砂・長（１～４）多→「１～４㎜大の砂粒・長石を多く含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

●表64　ＳＢ1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
1	壺	頸径 (7.5)	頸部に櫛描沈線文を6条以上と9条施しその間に半裁竹管文を一列施す。	頸—施文 胴—ヘラミガキ	頸—ナデ 胴上—ナデ 胴中—ハケ	密(石・長1~2) ◎	黒斑	91
2	壺	底径 2.3	胴部の最大径は上部にあり、底部は不安定なものである。	胴—ハケ→ヘラミガキ 底—未調整	ナデ	石・長(1~3) 金 ◎	黒斑	91
3	高坏	残高 13.6	中空の脚柱部で 1.6cm大の円孔を2段看取。	ハケ→ヘラミガキ	柱—ナデ 裾—ハケ	密 ◎		91
4	甕	底径 (3.0)	不安定な平底。	ナデ	ナデ	石・長(1~3) ◎		

●表65　ＳＢ1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
5	石庖丁	ほぼ完形	緑泥片岩	9.8	4.7	0.6	47.1		91

●表66　包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土 焼成	備考	図版
6	壺	頸径(10)	頸部に断面三角形の凸帯を貼付け刻目を施す。	頸—タテハケ	磨滅のため不明	石・長(1~2) ◎		
7	壺	頸径(11.8)	頸部に台形状の凸帯を貼付け斜格子文状に押圧文を施す。	頸—タテハケ→凸帯文 肩—タテハケ	ナデ	石・長(1~2) ◎		
8	鉢	口径(18)	頸部内面に稜をもち、口縁端部は丸く仕上げる。	口端—ヨコナデ 口—タテハケ (4本/1cm)	口端—ヨコナデ 口—ナデ	密・金 ◎		
9	甕	口径(13.7)	口縁端面はナデによりわずかに拡張され下方に張り出す。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~6) ◎		
10	壺	底径 (7.4)	安定した平底。体部へは大きく外反しながら立ち上がる。	磨滅のため不明	ハケ (9本/1cm)	石・長(1~3) ◎		
11	壺	底径 (5)	平底。外反して立ち上がる。	磨滅のため不明	ナデ	石・長(1~3) ◎		
12	甕	底径 (7.2)	やや上げ底状の底部。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	石・長(1~2) ◎		
13	甕	底径 (3.0)	不安定な平底。体部へは内湾ぎみに立ち上がる。	ヘラミガキ	ナデ	石・長(1~3) ◎	黒斑	
14	甕	底径 (5.2)	平底。体部へはやや内湾ぎみに斜上方へ上ち上がる。	磨滅のため不明	ナデ	石・長(1~3) ◎		

第11章　松山市桑原地区におけるテフラ分析調査

古環境研究所　早田　勉

1．分析の目的

松山市とその周辺では、ガラス質火山灰の堆積が認められる。ここでは、遺跡の発掘調査で認められた火山灰層について、テフラ検出分析を行ってその特徴を明らかにする。そして特徴から、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラとの対比を行い、テフラの起源を明らかにする。分析の対象とした資料は、樽味四反地遺跡、西稲葉遺跡１次調査、枝松遺跡３次調査(以上各１点)、釜ノ口遺跡７次調査(２点)で採取された合計５点の試料である。

2．分析方法

分析は、次の手順で行われた。

(1)　試料20ｇを秤量。

(2)　超音波清浄装置により、泥分を除去。

(3)　80℃で恒温乾燥。

(4)　実体顕微鏡下で、特徴を観察。

3．分析結果

(1)樽味四反地遺跡

火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.72㎜である。最大４㎜の岩片も、少量含まれる。さらにごく少量であるが、重鉱物として黒雲母が含まれている。

(2)桑原西稲葉遺跡１次調査

火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.62㎜である。さらにごく少量であるが、重鉱物として黒雲母が含まれている。

(3)枝松遺跡３次調査

火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.53㎜である。重鉱物として、

黒雲母や斜方輝石がごく少量含まれている。なお、ほかに最大径８㎜の岩片が認められる。

(4)釜ノ口遺跡７次調査〔高尾・真木 1991〕

11層には、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかったバブル型ガラスも認められる。また軽石型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.58㎜である。重鉱物として、黒雲母がごく少量含まれている。なお、ほかに最大径９㎜の岩片が認められる。

一方、13層にも火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状のバブル型ガラスに富む。また軽石型ガラスも認められる。ただし上位の11層に比較して、若干軽石型の占める割合が大きい。バブル型火山ガラスには、ごく少量であるが褐色がかったバブル型ガラスも認められる。含まれるガラスの最大径は、0.62㎜である。重鉱物として、黒雲母や角閃石がごく少量含まれている。

４．考　察

樽味四反地遺跡、桑原西稲葉遺跡１次調査、枝松遺跡３次調査、釜ノ口遺跡７次調査で採取された５試料には、いずれも透明のバブル型火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの色調および形態から、この火山ガラスは約2.1－2.2万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Ｔｎ火山灰〔ＡＴ町田・新井　1976〕に由来するものと考えられる。火山ガラスが多く含まれることから、特に樽味四反地遺跡、桑原西稲葉遺跡１次調査、枝松遺跡３次調査、釜ノ口遺跡７次調査11層の４試料はおそらくＡＴの純層と考えてよいと思われる。また、釜ノ口遺跡７次調査13層は、後述の大隅降下軽石層に対比される可能性がある。いずれの試料でも認められた黒雲母は、基盤岩からの混入物である可能性が示唆される。ただし斜方輝石や角閃石については、直接マグマに由来する「本質物質」かも知れない。

５．おわりに

さて、テフラが１次堆積か否か、また純層か否かの最終的な判断には、野外での観察結果が重要な資料となる。たとえばＡＴについては、南九州においてのＡＴの直下にＡＴに先行して噴出した大隅降下軽石〔Kobayashi et al. 1983〕の存在が知られている。この大隅降下軽石の噴火は非常に大規模で、その噴火で噴出したテフラは93㎥にも達する。この量は、これまで知られている日本列島における軽石噴火(プリニー式噴火)の中で、支笏第１軽石(Spfa-1）に次いで２番目の規模である〔Hayakawa,　1985〕。大隅降下軽石層と入り戸火砕流に伴うＡＴとの間には、数ヶ月以下のごく短期間の時間間隙が存在すると考えられている（たとえば、荒牧　1983)。しかし、両者の間に土壌などは認められず、時間指標として考えた場合、この時間間隙はほとんど考慮しないでもよいものと思われる。

大隅降下軽石の層厚は、姶良カルデラから約60km離れた宮崎市付近でも50cm程度あり、300kmほど離れた松山市付近でも肉眼で確認できる可能性が大きい。さらに四国地方から中国地方にかけての全域で、このテフラがＡＴの下位に認められる可能性も考えられる。このテフラがＡＴの下位に存在する場合には、大隅降下軽石およびその上位のＡＴが撹乱作用を受けていないと判断できる。これらの条件が整って初めて、１次堆積のテラフの純層と認めることができるのである。以上のことから、試料採取に先だって野外調査を行い、層序や層相について丁寧に記載しておく必要がある。

〔文献〕

荒牧重雄　1983　姶良カルデラと入戸火砕流。月刊地球 5, P.83－92

Hayakawa Y. 1985 Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthg. Res. Inst. 60. P.507－592.

Kobayashi T, Hayakawa Y. and Aramaki S. 1983 Thickness and grainsize distribution of the Osumi pumice fall deposit from the Aria caldera. Bull. volcanol. Soc. Japan, Sar.2 28,P.129－139.

町田　洋・新井房夫　1976　広域に分布する火山灰 －姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義－ 科学, 46,P.339－347.

高尾和長・真木　潔　1991　「釜ノ口遺跡７次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

第12章　石手川水系に於ける旧石器文化

重松　佳久

1．はじめに

石手川水系に於ける旧石器文化の研究は、現在皆無に等しく流域としての全体把握すら意味を持たない状況にあるかもしれない。

しかしながら、石手川水系は、幾枚かの洪積世河岸段丘をもち松山平野を貫流する主河川流域であることからも、文化層の存在は、全く否定されうるべきものではなく洪積台地端部、埋没段丘等に残る旧石器文化の痕跡の確認作業をあらゆる手段を用い進めて行くことに問題解決の方向性が内在されるものと考える。

瀬戸内の旧石器文化研究は、喜田貞吉によって国府遺跡の砂礫層下から検出されるとした大型粗石器論争によって始まり、岩宿遺跡発見以後の日本列島各地での旧石器時代遺跡の発見とあいまって、全国的風潮の中での鎌木・高橋両氏による石器群の編年的確立がなされた。〔鎌木・高橋 1965〕しかしながら、以後の調査面積の拡大とともに遺跡群の構造的理解の段階に至っては、内在される矛盾が松藤氏らの二上山山麓遺跡群の精力的は調査によって示唆されるに至り、量的保証を持つ原産地遺跡と周辺遺跡群の理解等をはじめ遺跡相互の構造的研究へと展開されつつある。

このような瀬戸内の旧石器文化研究の動向の中で、当地の旧石器文化研究は散発的資料紹介の域にあり、当時の社会的背景を考える上でも遺跡分布を流域として再考すべき状況にあるといっても過言ではない。あえて絶対的費料の希薄さの中で、平井氏の論功をかりて考察を加えてみたい。

2．石手川水系に於ける旧石器時代遺跡分布

現在、確認されている旧石器時代遺跡は、山地域から沖積低地に至る流域の高位・中位・低位の河岸段丘沿いに検出されている(表67)。こうした遺物群の検出例は、後世の遺構・遺物群中にわずかに混在するといった認識で処理されている状況にあり、遺跡群としての問題意識には至っていない。しかしながら、現在詳細に資料整備を行うに至っていない状況ではあるが、石手川水系左岸の小野川との接点において旧石器時代遺跡群の安定した集中をみることができる。

このように集中する遺跡の成立過程を復元すると形式的時間差を持つと考えられる遺物も含まれてはいるが、これらの集中は、単に検出例のみに起因するものではなくこの地域が、安定的な遺跡立地の環境にあったものと推定される。このような松山平野に於ける旧石器時代遺跡群の集中を仮に水系を軸とした人間集団の行動の起点的立地としてとらえ、同水系上流域に位置する山間部の惣部遺跡に見られる遺跡立地を季節移動に伴う移動的拠点もしくは、

捕獲遺跡として位置づけることも可能と考えられる。

また、同一遺跡において形式的・時間的差異をもつ遺物群の検出は、当遺跡の立地環境が時間を越えて、当時の水系、低地を背景とした人間行動の何等かの拠点として活用されたものと考える。

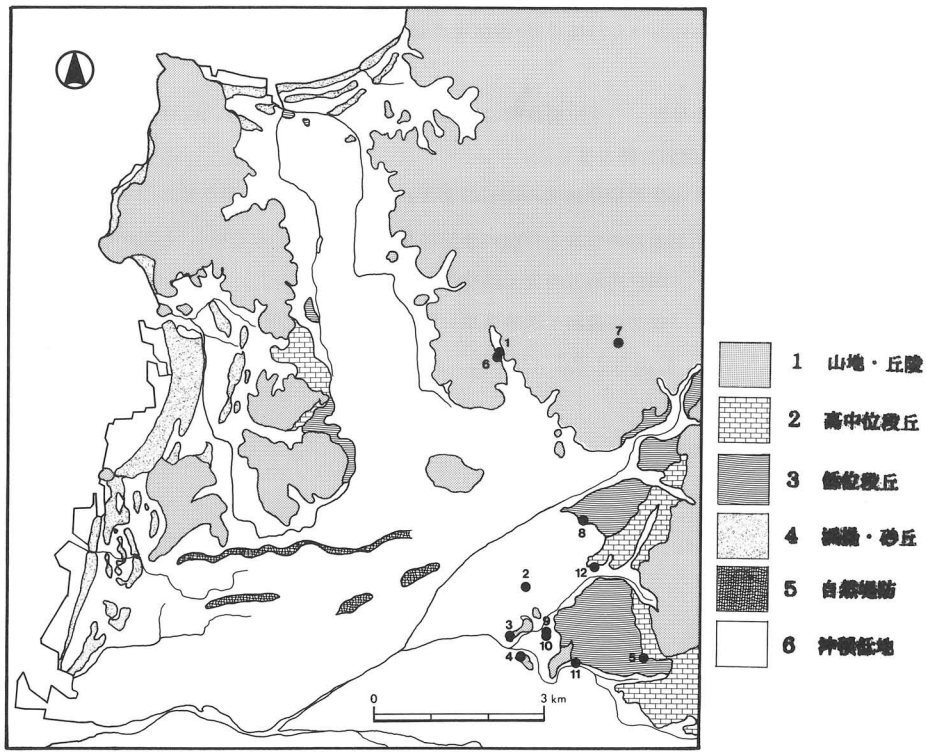
あえて詳細な遺跡・遺物群の検討の中で、処理されるべき内容を立地論のみで、提起することに、大きな問題を内在することになりつつも、こうした集団の把握と空間的生活間の設定は、遺跡立地環境に因るところが大きく先駆的には、稲田〔稲田孝司1990〕、大泰司（大泰司紀之1990〕の旧石器文化研究者らによって取り組まれ石材原産地と消費地関係等、集団の規模、定着度、分散移動の頻度、季節性などさまざまな問題提起がなされており、今後、早急に当地域における旧石器文化研究の視点として詳細な資料の蓄積と資料整備を踏まえ取り組まなければならない問題と考える。

3．まとめ

前述したように当地域の旧石器文化の把握は、現在の考古資料では、その社会を復元する事は困難な状況にあり、その方向性として考古学的資料群の実証が、量的な保証を得ていない現在、当地域に於ける地質・地理を踏まえた第四紀研究に大きな成果を見いだす事ができる。

現在、わが国の主要な沖積扇状地の形成時期は、沖積世（完新世）ではなく最終氷河期の最盛期または、それに至る低温期であったことが明らかになりつつあり〔井関弘太郎1988〕、また第四紀末期における日本の扇状地礫層の堆積期をおおまかに堆積頻度により概観すると約20,000年前、約9,000年前、約3,000年前の3期（斉藤1988）に大きく分かれることが指摘されている。こうした第四紀末期の沖積平野・沖積層の形成期における自然環境の把握は、当地域の遺跡環境を類推するうえで欠くことのできない研究作業であり、まさに平井氏の「松山平野、 石手川扇状地の地形と沖積層・追記」〔平井幸弘1990〕は、当地域における旧石器時代の自然環境のあり方を示唆する作業そのものと考えられる。さらに氏の広域テフラに対する視点は、安定した層位を持たないと考えられていた当地域の旧石器文化研究に、層位学的・形式学的同時性 の比較検討の可能性を導き出しているものと考えられ、今後、扇状地地形における基本層序、樽味遺跡、樽味四反地遺跡、桑原西稲葉遺跡、枝松遺跡3次調査地、釜ノ口遺跡7次調査地〔高尾・真木1990〕に見られるＡＴ火山灰検出等の多角的なデーターの蓄積が期待されるものである。

また、本稿の執筆にあたり小笠原善治氏（松山市立埋蔵文化財センター）の御協力を頂き記して感謝の意としたい。



第136図　石手川扇状地及び周辺の地形分類図と遺跡立地
〔海津(1982)を一部改変〕

●表67　石手川水系旧石器時代遺跡一覧

No.	遺　跡　名	所　在　地	標　高	出　土　遺　物
1	丸山遺跡	松山市祝谷町六丁目	90～120m	？細石核、細石刃、掻器、台形様石器、剥片・剥片屑
2	釜ノ口遺跡	松山市小坂四丁目	28m	ナイフ形石器、有舌尖頭器
3	天山天王ヶ森	松山市天山町	30m	ナイフ形石器
4	東山鳶ケ森	松山市東石井町東山	43m	ナイフ形石器（国府形）
5	五郎兵衛遺跡	松山市平井町	73m	ナイフ形石器、他
6	祝谷六丁場遺跡	松山市祝谷六丁目	60m	石核、他
7	伊台惣部遺跡	松山市下伊台町	140m	ナイフ形石器
8	樽味四反地遺跡	松山市樽味四丁目	39.5m	ＡＴ火山灰
9	筋違Ｆ遺跡	松山市福音寺	30m	ナイフ形石器（国府形）
10	筋違Ｈ遺跡	松山市福音寺	30m	ナイフ形石器(縦長剥片素材によるナイフ形石器)
11	久米高畑遺跡5次	松山市南久米町・来住町	35m	細石器
12	経石山古墳	松山市桑原四丁目	40m	細石器

（参考文献）

井関弘太郎他　1988　「日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究」

平井　幸弘　1990　「松山平野，石手川扇状地の地形と沖積層」『文京遺跡８，９，11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告書２

稲田　孝司　1990　「日本海南西沿岸地域の旧石器文化」『第四紀研究29巻第３号』

大泰司紀之　1990　「旧石器遺跡の位置と狩獣の季節移動ルートに関する考察」『第四紀研究29巻第３号』

鎌木義昌・高橋　護　1965　「瀬戸内地方の先土器時代」『日本の考古学　１』

高尾和長・真木　潔　1991　「釜ノ口遺跡７次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

第13章　桑原地区の成果と課題

昭和63年～平成元年度の２ヶ年間、松山市桑原地区内では８ヶ所の発掘調査が実施され、主として弥生時代～古墳時代の集落関連遺構を多数確認するに至った。

旧石器～縄文時代

本書掲載の８遺跡の調査中、４地点においてＡＴ火山灰を確認することができた〔第11章　早田勉〕。いずれの事例も、ＡＴ火山灰を包含する土層は、ＡＴ火山灰以外に砂粒や一部シルトを含んでいる。検出資料は２次堆積の可能性が極めて高いものである。火山灰層の上・下層には考古遺物が包含される事例はなく、ＡＴ火山灰層が桑原地区に堆積した年代を確定するに至らなかった。ただし、桑原地区内におけるＡＴ火山灰の堆積には、石手川が大きく作用していることは確かであり、石手川上流域にＡＴ火山灰の１次堆積層と確認できる可能性は高いと考えられる。

石手川中・下流域における旧石器遺物の出土は、現時点において希薄なれど、ＡＴ火山灰の確認事例は全く無視することはできず、石手川上流域の調査が充実すれば、良好な資料が確認されるものと考える〔第12章　重松佳久〕。

弥生時代

前期　樽味立添遺跡、樽味四反地遺跡の東方50～100ｍには前期前半の集落関連遺構が確認された樽味遺跡がある。樽味立添遺跡からは１点ではあるが、樽味遺跡出土品よりやや時期が下がる前期後半の遺物が出土した。樽味遺跡の集落が継続していたことを示す資料である。また、樽味立添遺跡、桑原田中遺跡より小片であるが各１点、縄文時代晩期末（～弥生時代前期前葉か）の凸帯文系の深鉢片が出土した。これは、桑原地区の遺物としては最古（旧石器文化遺物を除く）のものであり、同地区の集落経営の出現と樽味遺跡の集落系譜を示すものとして注目される。

中期　前葉～中葉の遺構は未検出である。遺物は、本書では未掲載となったが樽味高木遺跡より頸部に多重凸帯を施す壺形土器小片が１点出土している。周辺地に、中葉の遺物・遺構があるものと思われる。後葉になると、時期比定される遺構はないが、遺物の出土事例は分布・量ともやや増加し、桑原地区全域に散見される。この地域の中でも、樽味地域周辺はその分布が濃く、集落経営が行われていたことが想定可能な場所である。

後期　後葉以降の好資料が樽味立添遺跡ＳＸ２、桑原田中遺跡ＳＫ１で得られた。いずれも、一括性の高い遺物でありかつ日常レベルの祭祀行為が知れる資料である。特に、桑原田中遺跡ＳＫ１は、遺構平面は円形で、断面形が有段、基底部に小さな凹みがあり、貯蔵穴ないし井戸の可能性がある。遺物は、一括投棄であり下層に壺形土器が、上層に高坏形土器が検出される傾向にあり、識認された投棄行為が充分に考えられた。平野内の類似例は、祝谷

アイリ遺跡ＳＫ15（後期前半）があげられる。
れ枝松遺跡３次調査地では、貼り付けにより構築された高床部をもつ竪穴式住居址が検出さ前た。同建築枝法は、松山大学構内遺跡ＳＢ３（後期前半）、文京遺跡７次調査ＳＢ７（後期半）で確認されており、同構築技法認定の追加（認）資料となるものである。

終末～古墳初頭　樽味立添遺跡ＳＢ13は、松山平野でも数少ない一括資料を確認した竪穴式住居址となった。桑原地区では、これまでに南部の桑原高井遺跡、桑原稲葉遺跡、束本遺跡、枝松遺跡で集落址が確認されている。今回の樽味立添遺跡での事例は、桑原地区内において幾つかの小単位集落が存在することを示唆するものである。

小結　桑原地区の弥生時代は、今回までの調査において、北部域では前期～中期の集落が存在することが、南部では後期後半以降に集落が充実することが明かとなった。

ただし、桑原地内では住居址は検出されるが、墳墓が未検出であり、今後の調査の留意点と研究の課題を提示するものとなった。

古墳時代

前期　樽味立添遺跡ＳＢ４出土品は、器種構成・器形が知れる遺物であり、土器編年に使用可能な好資料である。松山平野では、この期の資料は宮前川遺跡、若草町遺跡に確認事例はあるものの土器様相が明確でなく、本資料は平野の土器研究にとって貴重な資料といえる。

中期　樽味立添遺跡、樽味高木遺跡で竪穴式住居址と土壙を確認した。同地点においては、５世紀～６世紀前半にかけて継続的に集落経営が行われていたことが裏付けられた。現在松山平野における須恵器の導入時期と土器様相（器種構成・器形等）は明らかでない。両遺跡の調査では土師器に限りその様相が一部ではあるが明らかとなったものと考えている。今後の同資料の充実を期待するものである。

後期　桑原田中遺跡、樽味立添遺跡を中心に、集落関連の遺構・遺物が確認された。桑原地区内には、前方後円墳である三島神社古墳、経石山古墳、群集墳である東野、畑寺の古墳群が存在する。これ等の古墳と生活址との関係については今回触れなかったが、生活址の資料が充実すると、一地域における集落構造が明らかにできる地域であり、今後の継続的な調査、研究は大いに注目されるものであるといえる。

小結　桑原地区での集落経営が充実していたことを裏付ける資料が得られたことは、北の道後城北地区、南の来住・久米地区の集落動態を考える上で重要な意味をもつと考える。この他、地域における前方後円墳と集落（生活址）の関係が知れる遺跡でもあると考える。

以上、昭和63年～平成元年の２ヶ年にわたる桑原地区における埋蔵文化財調査の報告を行った。今回の調査により、弥生～古墳時代の集落址が広域に展開されていることが明らかとなった。道後城北地区、来住・久米地区同様、注意を要する遺跡地域であるといえよう。

松山市文化財調査報告書　第26集

桑原地区の遺跡 —本文編—

平成４年３月31日　発行

編　集　財団法人 松山市生涯学習振興財団
発　行　埋蔵文化財センター
〒791　松山市南斎院町乙67番地６
TEL (0899) 23－6363
印　刷　原　印　刷　株　式　会　社
〒791 松山市山越４丁目８－15
TEL (0899) 24－8823